

オーバーロード・ワン

黒猫鉤尻尾

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

注意。オーバーロードの二次小説です。

よくあるモモンガ様の他にアインズ・ウール・ゴウンのメンバーと一緒に異世界へと舞い降りた話となっております。

作者の気分のノリ次第更新に変更しますです。はい！

以下、本作の登場人物の捏造。

名前？ エンシェント・ワン

種族？ 異形種（アンデッド）

異名？鮮血の王（鼻血の王）

役職？至高の四十一人。初期の九人の一人

住居？ナザリツク第九階層の一室

属性？中立〜悪。カルマ値―80

制作NPC？ルプスレギナ・ベータ

種族レベル

ヴァンパイア LV10

真祖 LV10

始祖 LV15

ザ・ワン LV05

職業レベル

戦士 LV10

バトルマスター LV10

ウエポンマスター LV10

シールドファイター LV05

e t c

種族レベル40

職業レベル60

合計100レベル

LV25

キャラの見た目はヒル人間。全身がヒルでできており、普通の人間には嫌悪感を齎している。

指一本一本までもヒルで作られ、短い触手にも見える。

右手だけ指が六本ある。

エンシエント・ワンのリアルでの仕事は世界的に有名な劇団の劇団員（脇役クラスだが）

とある事情により、リアル世界には全くの未練はなく。モモンガよりもこの世界に來られた事を喜んでいる。

武人建御雷と友人で建やん。ワンちゃんの相性で呼び合う仲である。

武人建御雷とは打倒たっち・みーのライバルであり、良き強敵である。

強さは五分五分と言われている。

武器は血ヲ啜り肉ヲ喰ウと身を隠せるほどの大盾を使用する。

【血ヲ啜り肉ヲ喰ウ】

その名が示すとおり、敵に与えたダメージを己の力に変える成長武器。

ゴツズアイテムで最盛期の成長率の威力は、建御雷曰く、非公式ワールドアイテムとまで言われた。

取り回しが効かないものの、一撃の威力は天井知らずに高い。

ただし、制限として一日に一定量の血肉（ダメージ量）を喰らわせないと、威力がどんどん落ちてゆく。

強制バトルジャンキー育成武器とたっち・みーの言。

ギルド内では廃人育成機や脳筋の素と散々な言われようだが、素の力は斬神刀皇より少しだけ威力が劣る程度。

打倒たっち・みーを掲げて、日々成長させていたが、リアルが叶って、イン時間がなくなり、泣く泣く引退した。

鎧は鮮血王鎧、全身が紅メタリックのゴツズアイテム。

アイギスの大盾。

レジエンドアイテム。特殊な効果は一度だけ即死攻撃の防ぐ。防具破壊を免れると
いう効果。ただし、戦闘終了後に五割の確率でチリとなる。

目次

一話。産声 | 1

二話。死の支配者と鮮血の王 | 9

三話。転がり始める勘違い。 | 15

四話。円形闘技場の双子 | 22

五話。ザ・ワンの呪い | 33

六話。逃げ出したい忠誠の儀 | 42

七話。転がり始めた勘違い | 51

八話。玉座の間。その後 | 62

九話。空の思い出 | 71

十話。人としての喜び | 90

十一話。ついカツとなつてやった。

107

十二話。村人転生 | 126

十三話。言葉の使い方。心の在り方

138

十四話。現実アニメじゃねえーんだよ

！ | 155

十五話。底の見えぬ深謀遠慮と慈悲深

さ。 | 171

十六話。変わり続ける精神 | 186

十七話。誰が為に己が為。 | 204

十八話。カルネ村での再会 | 219

十九話。厨二をクレマンティーン

231

二十話。死者は踊り、アンデッドは朽ち

る。 | 249

二十一話。激動の一夜 | 267

二十二話。狼と剣士と終わらぬ騒動。

280

二十三話。後の祭り。騒動は終わり平静

が戻る。 | 292

二十四話。知らぬ所で進む勘違いと既成

事実。 | 303

二十五話。旅立ち出会う者。それはDE

A T H ティニー? | 315

二十六話。それは知ってるようで知らな

い世界。 | 332

二十七話。王都での何気ない一日。

344

二十八話。在りし日の光景。泣けぬ主と

寄り添う獣。 | 358

二十九話。見えた脅威と抗えぬ不安。

373

三十話。宝物殿の最後の宝は希望。

387

三十一話。拠点と教育 | 402

三十二話。夜の闇を彷徨う蜘蛛とそれを

喰らう蝙蝠 | 416

三十三話。夜更けの蝙蝠と朝露の蜘蛛

434

三十四話。蒼の薔薇の計略 | 445

三十五話。笑顔の仮面 ————— 460

三十六話。美しき夜空と惨劇の村

473

三十七話。理不尽な強者 ————— 488

三十八話。剣に生き、剣を振るう事だけ

が人生ではない。 ————— 504

三十九話。武人と剣士 ————— 521

四十話。戦士長と黄金の姫 ————— 536

一話。産声

円卓の間にため息ですら響くような沈黙が支配する。

単なるエモーションで溜息のエモを使っただけなのだが、その発生源である骸骨の身であるモモンガはさつき迄の事を思い出していた。

『ナザリック地下大墳墓がまだ残ってたなんて思ってもいませんでしたよ』

悪意が全く無い純粋な感心の言葉だったのだろう。

だが、ゲームに……。ユグドラシルに。否、このアインズ・ウール・ゴウンに全てを掛けていたモモンガにとってはこれ以上ないほどの屈辱的な言葉だった。

「仕方ないんだよな。所詮ゲームなんだ。そんな事は解ってる。けども、俺にとってはこここそが居場所ですべてだったんだよ」

怒りに任せて円卓を殴った自分が恥ずかしくなってそんなことを口にしていた。

もう一度だけ、溜息のエモーションを表示させると、気分を切り替えるように、骨ばった手で自分の頬を叩いて立ち上がった。

「どうせ、もう誰も来ないだろうし……玉座の間に行くか。別に構わないですよ。最後ぐらいギルド長らしいわがままをやっても」

誰にともなく宙に眩いて、ギルドの証であるギルド武器の杖を保管場所から手に取る
と、ゆっくりとした足取りで玉座の間へと向かう。

廊下を進み、目当ての玉座の間に向かうモモンガの背後には執事であるセバスとプレ
アデスの戦闘メイドが付き従う。

「どうせなら階層守護者も集めたほうが見栄え良かったかもしれない。今更だけど」

玉座の間へと到着してそう思った時には、既に終了まで残り十分を切っている。

今更、階層を回って守護者達を集める時間などありはしない。

玉座の脇には、慈愛の笑みを浮かべる。腰に黒い翼を生やした淫魔の女NPCが嫺やかに立っていた。

その姿は正に理想の女性像と言えるであろう。

「アルベドだったよな。確かタブラさんが作った。設定は確か守護者統括でえつと……」

名前や守護者としての身分はなんとなく覚えてはいるが、詳しい設定などは見たことが無かった事を思い出した。

好奇心から設定閲覧を開いて、設定を見てみると目があったら飛び出すぐらいに驚いた。

「なっが！　そういえばタブラさん設定マニアだったからなあ」

骨ではなく肉のついた現実の顔ならば苦笑を浮かべていたであろう言葉を溜息の様に吐き出した。

せめて、最後の思い出に設定を読み始める。

読むと言つても、まともに読むとゲーム終了までに読み切れる分量ではない。飛ばし飛ばしで、ただ、文頭だけを目で追うように下へ下へと流してゆく。

そして、漸く最後に辿り着けた時に、信じられない言葉を見つけて絶句した。

——ちなみにビッチである。

「ビッチ……つて……。確かスラングだよなあ。そういえばタブラさんはギャップ萌だつたっけ？」

昔に男死会で男だけの色んなエロ話に喧々囂々と話した時の事を思い出した。

流石に守護者統括がビッチというのもあんまりな話だ。

しばらく考えた後で開き直るように小さく頷くと、スタッフオブアインズウールゴウの機能でテキストを削る。

「うーん。消したけど、空白はなんだかなあ。何か入れたほうがいいのか……」

しばらく設定を開かれているアルベドを見ながら考える。

そして思いついた文字を打ち込もうとした瞬間に無音の玉座の間に電子音が響いた。

“エンシエント・ワンがログインしました”

電子音の後で浮かんだテキストメツセージに、コンソールを弄る指が固まった。

『うーい！ 間に合ったっ！ ももんがさんいるかあ！』

ログインのテキストの直後に、メーセージの魔法が送られてきた。

『エンシエント・ワンさん！』

まるで歓喜が溢れている様に体を震わせて、答える。

『おるなー。ほないくわー！ なんつつてな。所で今どこよ？ 円卓にいないっぽい？』

気軽な感じでネタを入れながら話をする相手に、堪らない懐かしさが感じる。

『あの、えつと……今は玉座の間にあります』

『なるほどねえ！ 確かに最後を迎えるのにそこ以外はねえわな。すぐに行く』

そして、少しすると玉座の間の扉がゆっくりと開いてゆく。

威儀を出すためだけにゆっくりと開く扉の速度に、少しイラつきすら覚えた。

一人が入れるだけの隙間が空いた時、扉の前に立つ者の姿が露わになる。

見た目はグロテスクなヒル人間と言ふべき姿だ。人によっては見た目だけで嫌悪感を露わにするだろう。

だが、その姿を見たモモンガの身体には電気のような歓喜が全身を迸っていた。

頭に当たると巨大なヒルのギザギザとした牙が並ぶ口があり、人の形はしている

が、皮膚はテラテラ光る粘液を発する赤いブヨブヨとしたもので、指一本一本に至るまでヒルで出来ており、指先にも口が付いている。

そんな人物が、フリルの付いたシャツと黒いズボンを履き、肩には表は黒、裏地は真紅のマントを羽織っている。

曰く、ヴァンパイアの正式な衣装はこれしかないと言っていた。

エンシエント・ワンは革靴をこつりこつりと鳴らしながら玉座の間の赤絨毯を踏みしめて進む。

そんな人物が玉座の前まで歩いてくるも、マントをバサリと大きく翻す。すると、風に靡くように広がったマントからコウモリの群れが飛び立った。

無駄に凝ったエフェクトであるが、これは課金で買ったものではない。

エンシエント・ワンの種族特性である「ザ・ワン」というヴァンパイア最上位の種族特性だからだ。

「長きに渡り、この我らが地を離れた事をお許しください。死の支配者、我らがギルドの長。親愛なる友モモンガ」

「うむ。久しく思うぞ。鮮血の王。古の壺よ。我が親愛なる友エンシエント・ワン」

胸に手を当てて立ったままで頭を深々と下げる最高位のヴァンパイアに魔王としての威厳を持って玉座に座り、鷹揚に頷く死の支配者の姿があった。

「ああ、しかし。この世界の終末を止められなかった。力無き我が身をお許してください」
「よい……。よいのだ。古き我が友。この世界が滅びナザリツクが消滅しようとも、今ここに友がいる。友と迎えることが出来た。それだけで十分だ」

エンシエント・ワン。アインズ・ウール・ゴウンの前身であるクラン〔ナインズ・オウン・ゴール〕からいる古株も古株である。

古き壺と迎える最後のゼロも悪くないとモモンガは思った。

どちらからともなく吹き出して、お互いに笑い始めた。

お互いに可笑しかった。何年ぶりか解らない。

エンシエント・ワンは夢を叶えてゲームから去って行った一人だ。

モモンガは最終日だから来てもらえないかと、メッセージは一応送ったが、エンシエント・ワンはその中でも決して来ないだろうと確信して諦めていた。

エンシエント・ワンのリアルの職業は劇団員だからだ。

それも世界を股に掛けた劇団に所属する。超が付くほど有名で忙しい人間だ。だからこそ、最後とはいえ来る時間などありはしないと思っていた。

それなのに最後まで残ってくれたのは、そんな人である。

モモンガは満足した。十分だ。ギルドを維持して、守ってきた甲斐があったと思っ
た。

それでも時間は無情にも流れてゆく。

視界の端に映る時計が無情にも残り一分を切った。

「ギルド長。最後はあれを！」

「ええ、アインズ・ウール・ゴウンに栄光あれ！」

「我らがギルド長、親愛なるモモンガさん万歳！」

「えっ、ちよっ……」

自分が発した言葉に追随すると思っていたのに帰ってきた言葉に、モモンガは慌てるが、その姿にくつくつという含み笑いをする。

ゆつくりとだが、時計は確実に進む。

57

58

59

00

01

02

03

「んんん？」

どうなってるのか。怪訝な声が玉座の間に響く。

「えっ？ あれ？ もしかして延期ですか……」

「いや、流石に延期はないんじゃない？ とすると……」

「バグ……とか？」

「え……はは、いやいや、まさかそんな……あのクソ運営ならやりかねん！」

「とりあえずはGMコールをしてみま……あれ、コンソールが開かない？」

「えっ、まじですか?! 本当だ！ マジだ」

玉座の間でおたおたと慌てる二人の異形種だが、そんな二人とは違う動きをする人物がいた。

「あの……モモンガ様？ どうかなきいましたでしょうか？」

その鈴が転がるような綺麗な声色に、ピクリと体の動きを止めると、まるでシンクロしているように、ギギギという擬音が聞こえるような動きで、声の主を二人は見つめた。

その視線の先には今にも泣き出しそうに眉尻を下げた絶世の美女が、豊かな胸の前で祈りを捧げる様に手を組んで、やや上目遣いで見つめてきていた。

「……え、っ？」

二人同時に上げた声は、もしかしたらこの世界に来て、始めて上げる産声だったのかしれない。

二話。死の支配者と鮮血の王

「如何なさいましたでしょうか？ モモンガ様。エンシエント・ワン様？」

二人の目の前に男心を驚掴みにする仕草をした美女がいた。

その姿はまさに色気という言う物が具現化した美の女神とも言える。

モモンガはその色気と仕草に男心が暴走寸前まで追い詰められると、途端にストンと興奮が沈下した。

「いや、GMコールが出来ないんで……っ！ 出来んのだ」

「……お許しを。無知な私ではモモンガ様の問であられる、GMコールというものに関してお答えすることができません。ご期待にお答えできない私に、この失態を払拭する機会を頂けるのであれば、これに勝る喜びはございません。何卒何なりとご命令を！」

「あ……ああ。いや、うむ」

モモンガの頭はパニック寸前に陥っていた。

（会話してる!? 何だこれは！ まるで生きてる人間と会話しているような……）

そんなモモンガを冷静にさせるかのようなタイミングで、メッセージで言葉が脳内に

語りかけてきた。

『モモンガさん。これはどういうことなんですかね?』

その声は隣で、顎に手を当てて思案している様に見せているエンシエント・ワンの声であった。

『エンシエント・ワンさん！ 何なんですかね？ 新しいパッチが当てられた可能性は?』

『いえ、そりやねえでしょう。それなら過疎ったユグドラシルにするよりも新しいゲムに当てるはずですよ?』

『ですよねえ。どうするのがいいと思いますか?』

『うーん……。とりあえずはここにいるNPCを遠ざけません? どうなってるかの現状確認をしないと、これからの方針も決められませんし』

『そうしましょうか』

メッセージを切ると、モモンガはテキパキとNPCに対して指示を与えてゆく。

セバスとソリユシャンには外の偵察を、残りのプレアデスには九階層の警戒を厳重にさせて、アルベドには階層守護者の招集をさせる。

「畏まりました」

「あつと、アルベド。俺からの指示として二時間後にしてくれ。それと俺の事は他の守

護者には秘密にし……せよ！」

「は……はい。畏まりました！」

エンシエント・ワンの言葉に頬を朱に染めて、優雅に礼をすると、玉座の間から立ち去っていった。

これからのきつちり二時間は玉座の間には二人つきりに出来た。

話してる最中に、エンシエント・ワンは円形闘技場に集合を、玉座の間に変更してもらったりもしていた。

「これ……なんなんですかね」

「うーん。可能性としては、ゲーム内に俺達の精神が取り残された可能性？俺、もしくはモモンガさんの夢。可能性は低いが異世界転移なんて可能性も考えれる。最後は……嫌な事だが、金持ち共が最後の最後にデスゲームを仕掛けた。とかかな？」

「え、っ？ そんなことあり得るんですか？」

「あり得ないとは言えないし、技術的には可能だと思っただよ」

（まあ、可能性としては異世界転移よりも低いと思うけども）

心の中でエンシエント・ワンは付け加える。

敢えてその楽観的観測を口にしなかつたのは、危機感を持っているからだ。

先程から微妙に室内に匂いがある。それは微かに甘く。アルベドの残り香が残され

ていた。

それに舌が動く感触や身体に触れる空気の感触までもが感じたことのないほどに、鋭敏に感じ取れたのだ。

リアルな生身よりも、よりリアルに感じていた。

「夢の可能性をまず消そうか。とりあえずモモンガさん。俺を全力で殴ってくれない？」

「はっ？ いや、それは流石にね」

「大丈夫大丈夫。これでも前衛職だよ。フレンドリーファイアができるかどうかとか。ダメージも知りたいしさ」

「ええー……わかりました。取りあえずは殴りますよ」

モモンガは全力で拳を振り翳すと、エンシエント・ワンを紅く燃える瞳でキツと睨んだ気がした。

「あつ、やつぱ、ちよつと待つ……」

エンシエント・ワンは自分が装備を何もしていない事を忘れていた。

前衛職であるバトルマスターのエンシエント・ワンと、後衛職であるエクリップスのモモンガとは、物理的な防御力も攻撃力も違う。

しかしそれは多少なりとも装備をしているならばの話だ。

無装備のエンシエント・ワンとゴツズ装備をしたモモンガとは雲泥の差がある。

止める言葉を出す暇もなく、振り翳された拳は既に解き放たれていた。

攻撃された拳は止まるはずもなく、せめてもの救いはモモンガが、遠慮をして肩付近を殴った事だろう。

だが、思っていた衝撃は訪れる事は無かった。

寧ろ、結果を見ればモモンガの方が吹き飛ばされて床を転がり、エンシエント・ワンはその場に平然と立っている。

「あつ、パッシブの攻撃^{リフレクション}反射か！」

バトルマスターのパッシブスキルである自動反射を思い出した時には、モモンガは立ち上がり、恨めしげにエンシエント・ワンを見つめていた。

「……これで。わかったね！ この世界でもスキルは有効だよ！」

「ええ……、それとダメージが痛みとして感じたので、この世界が現実化した。もしくは異世界の線が濃くなりましたね。この世界が痛みがどういう物かわかったのは大きな収穫ですねー」

やや棒読み気味に言う辺り、結構痛かったのだろう。

バトルマスターの特色として、物理反射というスキルがある。

これは攻撃力が一定以下の攻撃には、半分しかダメージが通らずに、残り半分は相手

にダメージが入るといふものだ。

つまりはモモンガに半分の攻撃が反射されて、残り半分は素の防御力で防がれたということである。

「えつと……、本当すみませんでしたあ！」

玉座の間には死の支配者に綺麗な土下座を見せる。鮮血の王が居たとか。いなかつたとか……

三話。転がり始める勘違い。

階層間の通路を優雅さとは程遠い早足で歩く。

守護者統括として、他の守護者や戦闘メイド達と同じように慌ただしく歩いていたら、厳しく注意していたであろうが、今のアルベドにはその考えに至る余裕は無かった。

玉座の間でGMコールというもの知らないという無知を晒した事と、このナザリックをお捨てになったと思っていた至高の四十一人、エンシエント・ワンが帰還なされたからだ。

それにも関わらず、問いに対しては答えられないという失態をみせた。

もしも、これに失望をして再びナザリックより、至高の方が去られたら、己が死を持って責任を取ることなど出来はしない。

それに……

「まさか、至高の方々がナザリックをお捨てになられたのではなく、世界の終末を防ぐ為に戦っておられたとは思ひもしなかつた……。なんと情けないことかっ！」

強く握られた拳から赤い血がぼたりぼたりと床へと落ちていゝる事にも気付いていない。

（一時は恨みもした。なぜ、我らが創造主は至高のまとめ役であるモモンガを悲しませるのか？　そしてどうして私達をお捨てになられたのか。なんと、愚かな考えをつ！）自身の創造主であるタブラ・スマラグディナが、そのような事をするはずがないのだ。最後に見た時の事を思い出した。

あの時のタブラ様はどのような顔をなさっていたか？　なんと言われていたか。何か思い出そうとすると、はつきりと覚えているはずなのに、どこか霞がかったような感じがする。

『すまない。お前を置いて行くのは辛いよ。でも、お前の居場所はここ以外にないものな。せめてもの償いとして、これを渡して置く。どうかこれで……モモンガさん……』最後の言葉が思い出せない。それでもこれでお会いする事は出来なくなるのだとだけは、今だからこそわかった。

だが、当時の私はどうしたのか？　引き留めたか？　何故と問うたのか？　泣く事ができたか？

至宝のワールドアイテムであった。真なる無^{ギンヌンガガ}を賜われたのに感謝を口にしたのか？

否、口にしたはずだ。至宝を賜り、感謝せぬことなど許されぬ事である。

それこそ、己が己を許す事ができないだろう。

記憶は曖昧でもそれだけはわかる。

では、なぜ。引き留めなかったのか？

その答えを得た。

至高の方々は全て戦っておられたのだ。世界の維持をする事に、ナザリツクと世界の終末を防ぐ為に守護者もお連れにならずに戦っておられたのだ。

そう考えると全ての辻褄が合う。

世界を……。ナザリツクを守る為に戦いに赴く創造主様を誰が止められようか？

『ああ、しかし。この世界の終末を止められなかった。力無き我が身をお許しください』
『よい。よいのだ。古き我が友。この世界が滅びナザリツクが消滅しようとも、今ここに友がいる。友と迎えることが出来た。それだけで十分だ』

アルベドの脳裏に、帰って来られたエンシエント・ワンとモモンガのやり取りを思い出す。

神々しく絵画とすることすら、恐れ多いほどの光景であった。

その悲痛なエンシエント・ワンと、見た事がないほどに嬉しそうな顔を見せたモモンガを見て、アルベドの下腹部が熱くなるような気がした。

（ああ、いつ見ても後光が差すように美しいモモンガ様……。それになんとも淫靡で逞しいエンシエント・ワン様……）

先程の二人の姿を思い出して頬を朱に染める。

その口はだらしく開いて、涎が微かに垂れていた。無意識からか、くふーという声が漏れ出してすらいた。

「何を気持ち悪い笑みを浮かべているのでありんすかえ？」

不意に声が聞こえて、アルベドは意識を現実へと戻した。

「シャルティア。別になんでもないわ。所で貴女はここで何をしていたの？」

「私は見回りでありんす。そう言うアルベドこそあなたは どうして、ここに居るのかえ？ 主の持ち場は玉座の間と決まってありんすが？」

「そう、これはモモンガ様の勅命を受けたからよ。第一から第三階層守護者のシャルティア・ブラッドフォールン。至高の御方の命を伝えます」

「……っ！ はっ！」

アルベドの言葉に、まるで至高の御方を前にしたように、跪いて顔を伏せる。

ナザリツクに於いて、階級こそあれど立場に上下は基本的には存在しない。

立場に上下をつける事は即ち、その守護者を作った至高の御方の上下を勝手に定めるといふ不敬であるからだ。

しかし、例外も存在する。それは至高の御方の命を伝えられるのに使者の場合は、至高の御方の前と同列になる。

「階層守護者、シャルティア・ブラッドフォールンは守護階層に対しては異変の有無をど

んな微細なものであれ二時間以内に調査し、二時間後に玉座の間に集まるべし。これが至高の御方よりの命よ」

「はっ！ 階層守護者。このシャルティア・ブラッドフォールンが謹んで拜命賜りました」

「宜しいっ！ 次に私からの命令よ。シャルティア。配下の者を総動員して階層の警戒態勢を最大に引き上げなさい」

「それはっ！ わかったであります。あの時の二の舞はごめんでありますえ」

苦々しげに顔を歪めて、嘗ての大失態を思い出した。

アルベドもあの時とはいつを指しているのか思い至り、殺気すら漲らせて顔を歪めた。

15000人からなるプレイヤーのナザリック侵攻を思い出したのだ。

あの時は階層守護者の大半が殺されて八階層まで入られてしまったという忌々しい記憶だ。

当時は至高の方々が懸命に蘇生を施してくださいました。しかし、そのせいでレベルダウンやナザリックの財貨の消費という痛手を被っている。

あの後にナザリックを去られた方々もかなりいた。

ペロロンチーノも、その内の一人である。

シャルティアはそれを自分を助けるために犠牲に成られたと罪悪感を抱いてすらい
た。

創造主だけではない。あれ以降に來られなくなった方の中には今は戻ったエンシエ
ント・ワンの名前もあつたのだ。

(恐らくはあの大侵攻こそが、世界の終末を早める為に行われたことなのではないか?)
アルベドはそう考えないとおかしいと思うのだ。

世界の終末を迎えさせるために、世界を維持しようとしていたナザリツクの力を削ご
うとした悪意が感じられたのだ。

(事実、お戻りに成られたエンシエント・ワン様は防げなかったと嘆かれておられたでは
ないか)

あの時の悲痛なエンシエント・ワンの慟哭と 言葉を思い出すだけで、胸がギュツと
締め付けられる思いなのだ。

—— 今度こそっ！

「今度こそ、我々守護者として、あの下賤な輩共の好きにはさせないわよ！」

「そのとおりでありんす！ 我らが命、全ては至高の御方の御為に！」

お互いに見つめ合うと、力強く頷き合いどちらからともなく踵を返して、己の責務を
果たすためと至高の命を果たすために、互いに向かうべき場所へと向かった。

その胸には奇しくも今度こそという思いを二人共に抱えていた。

四話。円形闘技場の双子

モモンガとエンシエント・ワンの二人は今、ナザリック第六階層にある円形劇場アンファイテートルムへと来ていた。

「いやあ。装備を置いてくれたモモンガさんにマジ感謝だわー」

今のエンシエント・ワンは、フリルの付いたシャツと黒ズボン姿ではない。

ゴッズアイテムである鮮血の鎧を身に纏い、左手にはレジェンドアイテムの大盾を手に持つ。

そして、異様なのが両手持ちではないのかと思われる血を思わせる赤水晶の巨大な刀身を持つ斧であった。

銘を【血ヲ啜リ肉ヲ喰ウ】という凶悪無比の斧である。

持ち手と刀身部分を含めると、モモンガより頭一つ小さいエンシエント・ワンの身長にも迫る。

人間種の筋力では、まともに持ち上げる事もできないであろう重量があった。

しかし、その巨大凶悪無比の斧をまるで片手斧を振るうかの様に、軽々しく右手一本で振るう。

決して軽いわけではない。現に振るわれる度に起きる衝撃は空間を震わせるように重く、吹き荒れる風はモモンガのローブを竜巻の風で巻き上げるようにはためかせている。

ナザリックに置いて筋力はたっち・みーを凌ぎ、武人建御雷に次いでいる。

戦闘力に置いてても、武人建御雷と二番手を争うほどで、たっち・みーと武人建御雷とエンシエント・ワンの三前衛と呼ばれていたほどだ。

「流石ですね！　まるで風が魔法みたいに感じるほどですよ」

「いや、でも全盛期には程遠いですし……。この血ヲ啜り肉ヲ喰ウも初期値に戻ってしまっていましたよ」

【血ヲ啜り肉ヲ喰ウ】の全盛期と比べた多大な能力値の減少を寂しげに嘆く。

【血ヲ啜り肉ヲ喰ウ】は敵にダメージを与えると、そのダメージに応じて威力が強化される。

その名の通り敵の血ヲ啜り肉ヲ喰イ自身を成長させる生きている武器なのだ。

逆に制限として一日に一度は血肉を喰らわないと、威力が落ちてゆくという脳筋武器と呼ばれていた。

最盛期には建御雷八式を超える威力も誇っていた。

が、如何せん取り回しが難しい為に、攻撃速度が遅いために一撃の威力は最強の一言

に尽きるが、DPSでは建御雷八式に負けていた。

だが、これの最盛期の威力を見た武人建御雷は、二の太刀いらずを掲げている為に、本気で欲しがっていたりした。

(辞める時に建やんにやるっていったんだが、あいつは究極の一振りに拘こつてたからなあ)

「とあつー！」

不意に可愛らしい声と共に、観客席から小柄な人影が飛び上がると、円形闘技場内に飛び降りた。

「あれ？ あの子って確か……」

「ええ、ぶくぶく茶釜さんの子の一人、アウラですね」

「双子だったか？」

「よく覚えていますね。そうです。確か闇妖精の双子でもう一人がマーレだったはずですよ」

「ぶくぶく茶釜さんが散々双子を可愛がっていましたよね。懐かしいな」

軽く着地した直後に、猛然と土埃を上げながら走り寄ってくるアウラの姿に、昔を思い出してぱつと見にわからない程に小さく円な瞳を細めた。

「いらっしやいませ！ モモンガ様と……えっ？ エンシエント・ワン様っ!? よよよ

よようこそ私の守護、守護階層へ！」

「う、うむ。アウラよ少しお邪魔させてもらうぞ？」

「本気で動いてるなあ。よお、久しぶりだな。アウラ……アウラ・ベラ・フィオーラだよな？」

「は、はい！ このナザリックは至高の四十一人の方々を持ち物であれば、どこへ行かれようと、いつ帰ってこられようと邪魔に感じることなんてありません！ 本当にお久しぶりです。エンシエント・ワン様！ おかえりなさいませ！」

「はははっ。そうだな。ここが……ナザリックが我が家だ。遠慮なんてする方が失礼だな。ただいま。アウラ。長く留守にして済まなかつたな。それと今まで我が家を守ってくれて感謝する」

わたわたと両手を振りながら、嬉しいことを行ってくれるエルフの少女に、エンシエント・ワンは頭にヒルの手を乗せると、優しく髪を掻き回した。

「はわわわっ！ 至高の御方が謝られることなんて何一つないです！ 帰ってきて下さって嬉しいです！」

「そうかそうか。ありがとな。所で双子のもう一人はどうした？ マーレ……ベロ・フィオーレだったよな」

少し気恥ずかしげになるエンシエント・ワンは、話を変えるためにもう一人の守護者

の名前を上げた。

「マーレ！ 至高の方々が来られてるんだよ！ とつとと来なさいっ！ 失礼でしょ！」

アウラが声を張り上げる方向に、二人は視線を向けると、アウラと変わらぬ小さな影がびよこびよここと跳ねていた。

それは思い切って跳ぼうとして、怖くて跳べない子供のようだ。

「む……無理だよお。お姉ちゃん……」

「無理じゃなあーい！ あ……あの、あの子はちよつと臆病で……わざと失礼な態度をとっているわけではないんです」

「無論、了解しているともアウラ。私達はお前たちの忠義を疑ったことなぞ、一度も無い」

社会人としての当然の常識として、本音と建前の使い分けは重要だ。

嘘も方便とはこの事だろう。

「最高責任者であるモモンガ様と至高の四十一人であられる。エンシエント・ワン様が帰ってこられてるんだよっ！ すぐに階層守護者が出迎えられないなんて失礼にも程があるよっ！ 飛び降りる勇気がないなら……」

額に青筋を立てて、怒りを露わに叫ぶアウラを、エンシエント・ワンが手で制する。

「ここらこら、怖い時に余計に怖がらせちゃ悪いだろ？ アウラはお姉ちゃんなんだから、姉弟は大切にしないと？」

「でもお、エンシエント・ワン様もお帰りになられたのに……」

アウラの頭を掌でポンポンと優しく撫で叩いて、右手に持つ血ヲ啜り肉ヲ喰ウと大盾を宙に放り投げる。

「どおれ……」

アウラが宙に放られた装備品に一瞬だけ気が逸れて、視線を元に戻すと、エンシエント・ワンの姿がその場から掻き消えていた。

そして、観客席の方からマールレの「わっ！」という声が聞こえて、視線を向けた頃には、マールレの姿はどこにもなく。

再び視線を戻すと、そこにはマールレを左手で軽々と抱き上げて立つエンシエント・ワンの姿があつた。

「軽いな。もう少し飯を食えよ。大きくなれねえぞ……っとな」

優しい手付きでマールレをアウラの側に下ろすと、丁度落ちてきた装備を手を持っていった。

それはまさに刹那の出来事だ。

まるで瞬間移動の魔法を使ったようにも見えるが、エンシエント・ワンは完全戦士職

の前衛である。

「えっ……えっ？」

アウラとマールは二人して同じ表情でキョトンとしている。

「えっと、何をなさったのですか？」

アウラがおおずおおずといった感じで、尋ねてくるが、エンシエント・ワンは事も無げに行つて帰つてきただけだよと答えた。

その様子を見ていたモモンガは、可笑しかったのか含むような笑い声を上げる。

「その説明だと、誰にもわかりせんよ。エンシエント・ワンさん」

「そうか？　普通に行つて帰つてきたと言う他ないんだが……」

エンシエント・ワンは困つたように肩を竦める。

「えと、その……エンシエント・ワン様は……瞬間移動が……使えるのですか？」

おどおどとした嗜虐心を唆る怯えた態度を見せながら、マールが聞いてきた。

「それはな。マールよ。エンシエント・ワンさんの種族にある。エンシエント・ワンさんはヴァンパイアの中でも最上位に位置する『ザ・ワン』だからな。身体能力がずば抜けて優れているのだ」

「え……え……え…… エンシエント・ワン様は伝説のザ・ワンだったのですか？　あのオリ

ジンヴァンパイアの中でも更に上位のザ・ワンですか！」

「シャルティアよりも遙か上の種族ですよねー！」

「あ……あー。まあ、そうだな。うん」

キラキラとした尊敬の念を抱いた瞳で見つめる双子の視線から逃れるように、視線を逸らすと、視界の端に口を抑えて必死に笑いを堪える骨の姿があった。

（にやろー。あのポン骨がくそっ！）

心の中で心底から罵りの声をモモンガにエンシエント・ワンが浴びせる。

その理由は「ザ・ワン」という伝説の種族にある。

そう、ユグドラシルでも伝説の種族となっている。伝説のネタ種族としてだ。

確かに身体能力は始祖よりも優れて、筋力特化の半魔巨人《ネフィリム》に次ぐ。更には俊敏さも格段に上がり、アウラやマーレといった人間種は元よりプレイヤーの中でも、上位に食い込めるだけのスペックが得られる。

スペックだけを見ればチート級である。ならば何故に伝説のネタ種族と呼ばれているのか？

それは取得条件の難しさもあるが、何よりもその特性にある。

玉座の間で行われたように、ちよつとした動作によるエフェクトの強制発動である。

専用の特効エフェクトは見る者が見れば、飛んでもなく格好良く見えるだろう。

その見る者が見るとは、何を隠そう邪気眼系の中二病患者が見ればという類のもの

だ。

それ故に、時間を掛けてまで「ザ・ワン」を取るぐらいなら、ボスを狩るか。装備を作る事に、時間使った方がマシと言われる。

【ザ・ワン】を取る奴はマジ邪気眼という話を聞いた時には、エンシエント・ワンはその場で崩れ落ちて、ログアウトして三日ほどインしない日があったとかなかったとか。

とはいえ、能力はずば抜けているのだ。

『で……伝説……流石、伝説う……ブハッ。もうダメだあ』

『おいこら、そのボン骨野郎……出汗とってやるから、ちよつと厨房に来いやー!』

『す……すみません……ぶはっ! 中坊ですか? すみません……小卒ですみま……あははははっはっは……いや、本当に申し訳ありませんでした』

『そんなに可笑しいか?! 精神の沈静化が掛かる要素ありましたっ!』

『まあまあ、いいじゃないですか。先程の物理反射の貸し借りはこれでナシつてことですね?』

『明らかに……こつちの方がオーバーキルのような気がするが、それでいいってことにしとくよ。ちくせう!』

メッセージでとてでもないが階層守護者には見せられないやり取りを終えて、深いため息を吐いた。

「あの……何か気に触ることをしたでしょうか？」

溜息を聞き咎めたアウラが、尊敬の視線を引つ込めて、涙を浮かべそうなほど柳眉を下げて、恐る恐る声を掛けてきた。

「いや、なんでもないので。アウラとマールレの姿を見ると帰ってきたんだなあつてさ。染み染みと喜びを感じられてな」

「そうだ。アウラ。マールレよ。エンシエント・ワンさんは狭量ではないぞ」

しれつと言うモモンガに内心では、強かになりやがつてと嬉しいような腹が立つような気持ちを抑えて、装備を一度収納すると、二人の頭に手を置いて撫でる。

「ただいま。アウラ、マールレ。お前たちは俺にとつても子供も同然だ」

「えっ？ えっへへ。その、ありがとうございませふ……」

「ふえっ……ふえええ、ありがとうございますう。エンシエント・ワン様あ」

アウラは感動で顔を真っ赤にして、俯きながら感謝の言葉を口にする。その両目には光るものがあつた。

マールレに至つては、子供らしく大粒の涙をポロポロと零しながら、大声で泣きながら感謝を口にした。

そんな二人を見て、エンシエント・ワンの胸に温かい物が湧き上がってくる。

『わー。やまいこさん。ぶくぶく茶釜さーん。この人です！』

同時に腹の奥で怒りが湧き上がっても来ていた。主に骨に対してのみではあるが。

五話。ザ・ワンの呪い

二人は一通りの確認作業を終えると、玉座の間へと戻ってきていた。最後の確認を行うためである。

円形闘技場で行った確認作業は以下の通りだ。

- 一、召喚と魔法の確認。
 - 二、エンシエント・ワンの戦闘力の確認。
 - 三、守護者の意志の確認。これが最重要で第六階層を選んだ理由だ。
- 一はデスナイトをモモンガに召喚して貰う事で確認を行い、二はエンシエント・ワンのデスナイトと戦闘を行う。
- デスナイトにした理由は、盾役としてアンデッドの中でも優秀な部類に入るからだ。しかし、即死耐性があり防御力でも優れたデスナイトをほんの数秒で倒した事には流石のモモンガも驚き過ぎて、精神の沈静化を行った程だ。
- それを成し遂げたエンシエント・ワンも自身の身体能力とレスポンスの速さに驚愕した。

一流のユグドラシルプレイヤーで、前衛職だからわかるレスポンスの速さ。こう動くと思つた時には動き終わっている。

その辺りの仕様が優秀なユグドラシルでもあり得ないほどの反応速度に、当の本人ですら信じられないもののように感じた。

何よりも戦いという動き方も、何十年も戦いに明け暮れた戦士のように、自然と動き方がわかるのだ。

いくつかのアクティブスキルも使つて試してみたが、自分の内に意識を軽く向けるだけで、呼吸を無意識にしているように感じられた。

そして、肝心の三である。第六階層を選んだ理由は、アウラとマーレが戦闘ガチビルドではなく、失礼だが階層守護者の中でも強い部類ではないからだ。

NPCが至高の四十一人である自分達を慕つて、狂信に近い感覚を抱いてくれているのは、何となくわかつていたが、それでも意思ある生物として存在しているのだ。

例え守護者が反意を抱くとしても、それはいい。良くはないけれど、対処可能という事では問題はない。戦闘ガチビルドのシャルティアが相手でも、モモンガとエンシエント・ワンの前衛後衛バランスが取れた二人なら、余裕を持つて打ち倒すことなど造作もない。

だが、アルベドの末妹であるルベドはいけない。あれはたち・みーですら勝つ事が

難しい存在である。

何より八階層にいる「あれら」を相手にするには、ここにたっち・ミーとぶくぶく茶釜と贅沢を言えば、武人建御雷や式式炎雷、ヘロヘロとペロロンチーノ……、要はアイズ・ウール・ゴウンの半分は最低欲しい。いや、必要だ。

だからこそ、守護者の意識調査の一環として、弱い部類のアウラとマーレ姉弟を利用したのだ。

結果は良好。意思を持ったとしても、至高の四十一人に対しては絶対の忠誠を誓い、死すら厭わない覚悟を感じることができた。

そして最後の確認だが……

「えっと……どうですか？ モモンガさん」

「ぶっはっ！ なんですか！ マジで何なんですか!? そのマジ女の子が理想とするような超美形キャラはっ！」

そう、エンシエント・ワンはいま人化をしていた。

トウルーヴァンパイアであるシャルティアは、人間の見た目のアバターと本性の二種類あるが、基本的にはプレイヤーには適用されない。

だが、エンシエント・ワンだけは違った。これは「ザ・ワン」の種族特性である。かつこいいいフェクトを起こすという微妙な……。本当に微妙なフェクトの一つとして

形態変化をすることができるのだ。

エンシエント・ワンとしては、100レベルにまでなつて、今更人間種に怯えるのもどうかと思い、第二形態は魔王のように禍々しく凶悪な見た目にしたかったのだが、ギルドの他メンバーに猛反対を食らつたのだ。

ウルベルト曰く「ほう。俺を差し置いて真の魔王ロールしようなんて喧嘩を売つてるんだな？」

ぷにっと萌え曰く「それは良くない。寧ろ人間種にするべきだ。まさか、人間種になつているとは思わずに、攻めてきたらサラツと混じつて、集団の中で正体を表して、一気の中から殲滅しましょう！」

女性陣三人からは「人間種にするなら、是非にでもキャラの作成を手伝いたい。つか、人間種以外は認めん！」と強権（狂犬）まで発動されては、エンシエント・ワンとしてもどうしようもない。

斯くしてナザリック人間種作成チームが組まれ、見た目から何から討論に次ぐ討論で、最終的に決定したのが、この現実そんな人間いたらホログラムとしか思えんわと好評？の美形キャラの出来上がりだ。

見た目は鮮血の様に赤い髪は腰までと長く、後で一つに纏められていて、目の色はヴァンパイア特有の朱目ではなく、黄金に輝く瞳はセバスより鋭く。

身長はぐんと伸びて、モモンガと同じ高さとなり、体は細いがガツチリと鍛えられた野生の猫科を連想させるしなやかな筋肉が、ぴっちりとしたシャツを盛り上げている。結果を言えば、要は異形種縛りをしているみんな一度は人間種のキャラメイクをしてみたかったという趣味の一環でしかない。

ちなみに一番活躍したが、一番乗り気でなかったのは、当時イラストレーターだったホワイトブリムだったりする。

メイド服が着せられんキャラを書きたくないと強情だったが、女性陣三人がメイド服を着て迫る。異形種異形なメイド服で迫るといふ拷問を受けて、快くイラスト担当になつたとかならなかつたとか。

ちなみに本人は満更でもないというメイド服愛の深淵を覗き込んでしまったと後にへ口へ口が言ったという。

『で……伝説の美形キャラですね。わかりますん!』と言つたのは誰だつたか……。今は懐かしい殺意を思い出さざる得ない黒歴史だ。

とりあえずは人間の手を開いたり閉じたりしてみよう。

人間の手である自分の手を見るのは、昨日ぶりの筈なのに、エンシエント・ワンには遙か昔を懐かしむような感覚があつた。

更に首に巻かれたマントを、バサリと翻してその場で一回転してみる。

別にナルシストでこんな事をしていけるわけではない。

【ザ・ワン】の種族特徴であるエフェクトがこの姿でも発現するのかの確認だ。

もし、この世界に人間種がいる場合、即ちユグドラシルが現実化している場合だが、異形種の姿ではおちおち外も出歩けない。

故に人間種の中に溶け込み情報収集や物資の購入などと言ったことをする必要も出てくるかもしれないのだ。

一通り動作を確認してから、モモンガに視線を向ける。

「大丈夫そうですね？ 流石に第二形態にまではあの痛……かつこいいエフェクトがあると困りますからね」

「おーけー！ ポン骨！ フレンドリーファイアがある事も覚悟の上での発言だろうな？」

「じよ……冗談ですよ！」

エンシエント・ワンは慌てた姿を見せるモモンガへと笑顔を浮かべる。

そして……その笑顔を見て、死の支配者は固まった。

エンシエント・ワンが鏡の前で、崩れ落ちることとなった。

（なんだよ……歯を見せて笑うと光るってなんなんだよ！ 俺をどうしたいんだよっ！）

崩れ落ちてホロホロと涙を流すエンシエント・ワンは、モモンガがセバスから周囲の状況をメッセージで聞くまで立ち直らなかつたという。

「草原っ!?!」

「はい。周囲一キロに人工建築物はないっぽいです」

「あー、こりゃ、異世界転移が濃厚になったね。モモンガさん」

「そうですね。もしもユグドラシルが現実になったのだとしたら、周囲は沼地の筈ですしね」

顎に手を当てるエンシエント・ワンは、思考の海へと潜る。

その姿をモモンガは見て、憂いげに考え込む姿も超絶美形とマッチしてて、すごく腹立つな。などと考えていた。

もちろん、そう思えるのは他人事であるから思えるだけで、本人であるエンシエント・ワンからすれば、この姿はあくまで自分であって自分ではない。何とも微妙な気分になる姿であった。

更に言うならば、口を開けて笑顔を見せると歯が光る（実際に暗闇で試したらフラッシュの様に光った）

ウインクをすれば閉じた方の目の端から光の星が一瞬だが宙を飛ぶといったエフェクトが作動していた。

いい加減、この姿でいるのは嫌になっっているのだが、他にどんな嫌がらせのようなエフェクトが発生するかもしれないから、しばらくはこの姿のままにしていることにしたのだ。

「というか、モモンガがそう説得したと言える。」

「言っていることは正当だし、理屈としても正しいだろう。だが、絶対にそれだけはないと言える。」

「なぜならちよつと変わった動作をしたら、目の端に捉えたモモンガが、こちらを注視しているのが何となく気配で察知できるからだ。」

「しかも、微妙にわくわくとし楽しみにしている雰囲気すら感じられる。」

「絶対に宝物殿から、モモンガさんのパンドラを引き摺り出してやる！」

「地下深く誰も入れない場所に封印された。モモンガのパンドラの箱（黒歴史）を陽のあたる場所へと引き摺り出す事を心に誓う。」

「だとしたら、問題は知的生命体がいるのかどうか。か？」

「そうですね。それと知的生命体じゃなくても生物の強さも未知なのが不安です。もしかした、最弱のモンスターでLV100クラスとかLV80とかが普通だと、シャレに

ならないですからね」

「その場合はナザリックを封鎖だな。嚴重に封印処理して、最悪第一階層潰して、物理的にも閉じないとだわ」

苦渋の決断となるであろうが、敢えて軽くうんざりと言う表情を浮かべて言葉にする。

唯一の救いは、エンシエント・ワンもモモンガもアンデッドである事だ。

飢えることもなく。唯一食事の必要がある者達も第六階層と第八階層で食料を生産すれば、数百年規模で存続は可能だろう。

だが、願う事ならば知的生命体がいることを、そしてこの世界の平均的強さがそこそこであることを願う。

六話。逃げ出したい忠誠の儀

玉座の間に錚々たるメンツが揃っている。

ペロロンチーノが生み出した理想の嫁である。真祖シャルティア・ブラッドフォールン。

ペロロンチーノの性癖のすべてを詰め込まれた数珠繋ぎの秘宝館。ワンピースとも言われる可愛そうな娘と思う。本人だけはそう思っていない不幸中の幸いかもしれない。

エンシエント・ワンはシャルティアを自慢気に設定の数々を聞かされて、最初に出た言葉は。

『流石はエロゲ野郎。ないわあー』だったという。

武人建御雷が生み出した蟲王コキユートス。

何度も仕合をしたという意味では、エンシエント・ワンと最も縁近い。この凍河の支配者のコキユートスが創造主共に仲がいいと言えるだろう。

ぶくぶく茶釜が創造した。闇妖精であるアウラ・ベラ・フィオーラ。マール・ペロ・フィオーレの双子姉弟。

この二人が最も創造主姉弟の関係を表している。

アウラはぶくぶく茶釜を、マールはペロンチーノを、ただし、それはぶくぶく茶釜の記憶の中にある幼い日の二人であり、ナザリツクに居たペロンチーノとマールは似ても似つかない。

マールが将来エロゲイイズマイライフなどと言い出さない事を祈るばかりである。

ウルベルト・アレイン・オードルが産み落とされた闇の申し子たる最上位悪魔のデミウルゴス。

エンシエント・ワンは創造主であるウルベルトとも仲が良かったが、デミウルゴスの事はよく知らなかった。

ウルベルト自身が余りデミウルゴスの事を語りたがらなかったし、魔法職であるデミウルゴスと会うことも早々なかったからだ。

何度かウルベルトを訪ねて、第七階層に訪れた際に見たぐらいだ。

ちなみに、エンシエント・ワンが初めてデミウルゴスを見た時は、『こいつ、俺よりドラキュラっぽい?』と被害妄想をしたという。

タブラ・スマラグデイナが愛した。理想の女性像足る美しき慈愛の淫魔アルベド。

もう、うんざりして耳にタコが出来て潰れて固くなるまで、それを繰り返されたんじゃないかね？というほど、エンシエント・ワンをうんざりさせたNPCがアルベドである。

タブラのそのアルベドに対する愛は言うならば病的とまで思われるほどであり、エンシエント・ワンとは別ベクトルであり得ない美女となった。

エンシエント・ワンとしては、アウラ、マーレ姉弟のフレーバーテキストを超えた似方をしている二人を見て、アルベドがどうかタブラのヤンデレに似ていない事を祈っているとか。

領域守護者と動かす事が難しい第四階層守護者のガルガンティアと第八階層守護者ヴァイクティムはいない。

あの二人はこのナザリックでも特殊な存在故に、現在、未曾有の事態に陥っているナザリックに置いて、守護者六人が一斉に階層を抜ける今はあの二人だけは動かす事が決して出来ないのだ。

六人の守護者が一同に介することは非常に珍しい事だ。

最後に一同に会したのはいつのことだったか。ナザリツクでも覚えていない程のことである。

ただ、普段は守護者統括であるアルベド以外は入ることが許されない神聖な玉座の間に集まるように言われた事に対して、皆興奮が隠せずに居た。

シャルティアは頬を上気させて、息は荒く怪しい吐息を繰り返している。

コキュートスは武人という設定に忠実で、不動の体勢を維持して、甲殻の腕を組んでいる。

だが、流石に興奮しているようで、小刻みに白い凍気が口から吐き出されていた。

アウラとマーレは興味深そうに始終キョロキョロと見回して、至高の創造主、ぶくぶく茶釜の紋章が刻まれた御旗を見つけてニヤけている。

デミウルゴスは不敵に見えるニヒルな笑みを浮かべてはいるが、組んだ腕を組み直したり、ズレてもいない丸い眼鏡を指で押し上げている。

尻尾はより素直で音こそ鳴らさないものの、小刻みに揺れている。

唯一落ちて着いているのは、自分の守護場所である見慣れた玉座の間と言う事と、既にモモンガとエンシエント・ワンと顔を合わせて、会話までしているアルベドだけ。いつもと変わらぬ嫺やかさで、玉座の斜め前に控えている。

しかし、公式ともいえるべき威儀整えての謁見という形である今回は、少し……かなり

興奮していて腰の後ろから生えている艶やかな黒翼がわっさわっさと仕切りに動いている辺り、心中はお察しであった。

「至高の御方々の入室でございます！」

玉座の間の扉前に控えているプレアデスの一人、ユリ・アルファとルプスレギナ・ベータが、緊張した声を張り上げ、入室を告げる。

守護者達はその声に敏感に反応すると、レッドカーペットを左右に別れて臣下の礼を以って、王の通り道をあける。

しかし、デミウルゴスはプレアデスの言葉に違和感を感じていた。

（彼女達は確かに今、《至高の御方々》と複数形で言った。となると、ふむ。アルベドが来た際に複雑な表情を浮かべていたのはそういうことですか）

デミウルゴスは俯いている事を幸いだと感じていた。

今の自分は悪魔らしからぬ程に顔が綻んでいるであろうから、そしてその顔を同じ守護者である者達に見られぬ事に感謝する。

上目遣いにダイヤの瞳で周囲で同じように跪く守護者達を見ると、アルベドは元よりアウラとマールエまでもが、既に知っているようでデミウルゴスと同じように顔がだらしなく綻んでいた。

（ふふつ、私が仲間外れですか。アウラとマールエまでも知っていようとは、おそらくは円

形闘技場ですね。しかし……アルベドも何となく臭わせてくれるぐらいしてくれてもよいのでは？ 意地悪な事を……口止めされて居たのでしようが）

的確に状況を判断をして、向かい合うように反対側で跪くアルベドも、デミウルゴスを見ていたようで、気付いた事を祝福するように優しく微笑んで上目遣いに見つめていた。

扉が音を立て開き終わると、スタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンを床に突く乾いた金属音と共に、二人分の足音が威厳を湛えながら、支配者が座るべき玉座へと歩みを進める。

本場にゆつくりと進む速度は、まるで守護者達の意を酌んで敢えて仕儀を作っている事が解り、アルベドとデミウルゴスは、感動で涙が浮かびそうになるのを堪えるだけで精一杯であった。

『ヤバイヤバイヤバイ！ モモンガさん！ これはヤバイって！ 俺もう部屋に帰っていいか！』

『ななな何を言ってるんですか！ 寧ろ私が帰りたいですよ！ あの、ギルド長を譲りますのでここから先は……』

『ポン骨はマジで何言っちゃってんの!! あんたギルド長だろ。いま多数決したら、一対一であんたがギルド長の継続確定なんだぞ。民意は大切！心からそう思いますまる』

実際は二人共に入室前から緊張でガチガチに固まり、ドアの前まで辿り着いた方がいいが、内心ではドアが壊れて開かないなんてないかな。なんて現実逃避をしていた。

しかし、プレアデスの二人が上げた入室の言上に覚悟を決めざるを得なくなつたのである。

(なんで。こんな不安を煽るようにゆつくりと開くんだよ！　つか、この扉の造りは精巧すぎるだろ。動き出さないよな？　あーもう！　全て　〃るし☆ふあー〃の悪意に思うのは俺だけか!?)

エンシエント・ワンは現実逃避に色んなことに思考を割くことで平静を保とうとするが、扉が開くに連れて見える玉座の間の光景に全てが吹き飛んだ。

「面を上げよ……」

玉座に着いて支配者ロールで睥睨しながらも、語尾が弱くなつたオーバーロードに玉座の横に立つエンシエント・ワンからジト目が飛んできた。

モモンガの声に、皆一斉に顔を上げる。

その一糸乱れぬ姿に気圧されるしかない。

不意にアルベドが立ち上がり玉座の少し前まで来て立ち止まると口を開いた。その声には緊張とは違う硬さと迫力がある。

「では皆……至高の御方に忠誠の儀を！」

アルベドの声に、最初に立ち上がり歩み出てきたのはシャルティアだった。

「第一。第二。第三階層守護者シャルティア・ブラッドフォールン。御身の前に……」

吸血鬼の牙が生えた口には弧を描く笑みを浮かべて、優雅に胸に手を当てながら、臣下の礼を執り跪く。

「第五階層守護者、コキュートス。御身ノ前ニ」

次に前に出たのは、虫の体を持つ偉丈夫であるコキュートスだった。

大きな体を畳み臣下の礼を執る。その口からは冷気が絶え間なく吹き出る。

「第六階層守護者、アウラ・ベラ・フィオーラ。御身の前に」

「お……同じく、第六層守護者、マーレ・ペロ・フィオーレ。御身の前に」

アウラは元気よく前に出ると、皆と同じように臣下の礼を執り、マーレは少しおどおどと前に進み出たが、礼を執る時には相応しい威儀を以って膝をついた。

「第七階層守護者、デミウルゴス。御身の前に」

まさに臣下とはこうあるべきという優雅さを以って、スーツを着た丸メガネの悪魔は、優しい微笑みを湛えながら、胸に手を当てて跪く。

「守護者統括、アルベド。御身の前に」

豊かな胸を持つ淫魔は、その淫靡さの欠片も今は見せずに、まさに淑女然とした立居振舞にて、胸に手を当てて、楚々と臣下の礼を執る。

守護者六名が揃い踏みした荘厳なる玉座の間で、更にアルベドがそのまま言葉を続ける。

「第四階層ガルガンチュア及び、第八階層守護者ヴィクティムを除き、各階層守護者。御身の前に平伏し奉る。……ご命令を。至高なる御方々よ。我らの忠義全てを御身に捧げます」

忠義の徒たる頑然なる姿を見せる守護者達の前で、死の支配者モモンガは玉座から立ち上がり、鮮血の王エンシエント・ワンは、黙って睥睨する。

その支配者、至高の者としての圧力たるや凄まじいものを守護者達は感じていた。

『モモンガさん。あとは任せました！ 流石にこれは無理だ！ チョー怖い。なにこれ!?! 何、忠誠の儀って!?!』

『知りませんよ！ というか。私流的に玉座に座つちやつてましたけど、私が王じゃないですよね?』

『いや、あなたがギルド長だから、王でいいんじゃない? やったね。魔王様！ 俺も下に並ぶわ!』

『ふざけんな。王ならあなたでしょ！ 鮮血の……いや、鼻血の王!』

『よっしゃ、その喧嘩を買……わない。得しないもん!』

七話。転がり始めた勘違い

「素晴らしいっ！ 見事な忠誠心だ！ お前達の創造主達も今のお前達を見れば喜ぶだろう！ だが……」

エンシエント・ワンはそこで言葉を止めて間を空ける。

守護者達は不審なものを感じて身を固くした。

「それらの忠義を、俺は受け取る資格がない。ナザリックを……お前達をモモンガさんに……偉大なるギルド長に押し付けて、このナザリックから長く離れていたのだから……。みな、今まで済まなかったな。そして礼を言うぞ。これからも我らがギルド長を支えてやってくれ！」

『ちよっ！ 何いってんですか！ あんたは！』

『ただいま留守にしております。御用の方は……』

『眼の前にいるでしょうが！』

エンシエント・ワンは厚い忠誠心から逃げ出した。

しかし、回り込まれてしまった。

「何を仰せられるのです！ エンシエント・ワン様は、故あって離れられていたのではな

いですか!」

「それはどういう事かな? アルベド?」

「デミウルゴス。エンシエント・ワン様は理由あつてナザリックを離れられていたのつ! そして……他の至高の方々も」

アルベドが悲痛に叫ぶ。その声に反応したのはナザリックの智謀の持ち主という設定が成されているデミウルゴスだった。

他の守護者達も “他の至高の方々” の所で大きく反応した。

「モモンガ様にナザリックを委ね。エンシエント・ワン様やタブラ・スマラグディナ様、更には他の至高の方々は皆、世界を……ナザリックを救う為に奔走されていたのです……っ!」

モモンガとエンシエント・ワンは先程までのメッセージでの醜い言い争いも忘れて、内心の声が合致した。

(えっ? なにそれ!) つと……

「それは? 詳しくお聞きしても?」

「ま……さて、アルベドよ。お前は何を言っているのだ?」

不味い方向に話が行きかけてる様子を見て、堪らずにモモンガが問い掛ける。

「隠したい気持ちはわかります。ですが、皆には知らせておくべきことかと愚考いたし

ます」

「うむ?」

「世界を救う為に奔走されていると言ったね。アルベド」

「そうよ。私はエンシエント・ワン様がお帰りに成られた際に、全てここで聞いていたの。モモンガ様に、世界の終末を止められなかった事を許してくれと謝罪されていた事を……」

エンシエント・ワンは絶句した……。確かに言った。でも、あれは世界がこうなる前であつてゲームの話として、雰囲気だけで言っただけであつて……

『も……モモンガさん。これはもしかして意思を持つ前からの記憶があると言うことなんですかね?』

『どうやら、そうみたいです』

『えっ! そうみたいですって、どうでしょう。すごい勘違いしてるみたいなんですけどもっ!』

『落ち着いてください。ここは私に任せてください』

『え、いや……はい。モモンガさんにお任せします』

モモンガは一步前に足を踏み出すと、バサリとローブをはためかせた。

「そうか。あの場にアルベドも居たな……。失念していた……。その通りだ!」

『えっ？ ちよっ！』

「エンシエント・ワンさんを始め、アインズ・ウール・ゴウンの仲間達は皆、世界を存続させるために、リアルで戦っていたのだ！」

守護者達に衝撃が走った。ついでにエンシエント・ワンにも衝撃が走った。

「私にナザリックを託させると、皆、戦いに赴かれたのだ」

「ペロロンチーノ様もでありんすか……？」

「その通りだ！」

（その通りだ！ じゃねえー！ なにドヤ顔して言っちゃっててくれてんの!? ねえー?）

ドヤ顔といっても骨故に表情もないが、エンシエント・ワンの目には嫌らしくニヤリと笑っている姿が幻視できていた。

だが、エンシエント・ワンは絶句して、何も言う事が出来ない。

何故ならば周囲の守護者全員がエンシエント・ワンをキラキラとした畏敬の視線を送ってくるからだ。

（甘いな……。モモンガさんよお！ 俺は言う時はバシツと言う男なんだぜ？）

未だ人間の姿のままなので、人間の手をギュッと力一杯、握るとエンシエント・ワンは意を決した。

「では、ぶくぶく茶釜様も一緒だったのですか!？」

アウラの一言はエンシエント・ワンの手から力を抜けさせる事には十分すぎた。

「あ……ああ、まあ、会うことは無かったが……。俺と同じように戦っていたはずだ

……」

「わあああ……じゃあ、ぶくぶく茶釜様も帰って来られるのでしょうか?」

アウラの無邪気なまでの、この言葉にモモンガとエンシエント・ワンの二人は言葉を失う。

無理だ……そう言いたいが、その言葉がどれだけこの少女を傷付けるか。

アウラだけではない。皆、同じ気持ちなのだろう。期待の眼差しをこちらへと向けてくる。

「んん、そのことについては少し話が変わってくる。皆もよく聞くが良い。セバスが来てからと思ったのだが……。この世界は我々の知っている世界とは違うようなのだ

……」

「えっ?」

誰かが上げた声が玉座の間に響く。

「守護者各位はナザリックのある土地の周りほどのようになっていたか覚えているか?」

モモンガの問いに当然のように守護者達は頷いて返してきた。

その中でも、アルベドがいち早く答えた。

「確か、沼地で御座いますわ。名はグレンデラ沼地とか?」

「そうだ。だが、セバスの報告では周囲一キロは草原となっているようだ」

「それは……」

「恐らくナザリックごと、別の地に転移させられた可能性が高い。故に、モモンガさんは各階層の異変を調べさせて、守護者達を集めたんだよ」

「少し前に報告が来て、更に詳細な調査を命じた。間もなくセバスも戻ってくる頃だろう」

そう言った直後に玉座の扉からノックの音が響いた。

「セバス様がお戻りになりました」

プレアデスのユリが、こちらへと報告するが、モモンガが軽く頷くのを見て、即座に扉を開けてセバスを迎え入れる。

「セバス。よく戻った。それでは周囲の事を報告せよ」

モモンガの言葉に、セバスは守護者達へとちらりと視線を向けた。

「構わん。ナザリックが置かれた異常事態は守護者も共有するべきものだ。報告せよ」

「はい。周囲一キロには草原が広がり、探索いたしました。小動物だけで、知性ある生物

の姿及び文明の痕跡は見つけられませんでした」

「やはり草原か……」

モモンガとエンシエント・ワンはお互いに視線を合わせて、小さく頷いた。

「セバス。空に城が浮いてたり、何か……そうメツセージのようなものが浮かんでいたりはしてなかったか？」

「いいえ。エンシエント・ワン様。私が外に出た時に見たのは六階層のような夜空で御座います」

「外は夜。夜空か……やっぱり、モモンガさん。これで確定的だな」

「ええ、エンシエント・ワンさん。ナザリックのあったエリアには空と呼べる物は無かったですからね」

嘗て、ユグドラシルにナザリックがあったエリアには厚い雲が常に立ち込めて、星の見える夜空は無かった。

強いて上げるならばただただ暗いだけだった。

間違っても第六階層の空のような夜空ではなかった。

「見てみたいな……」

エンシエント・ワンは無意識にボソリと呟いていた。

星が瞬く夜空など、スモッグが立ち込めていて、リアルでも見たことがない。

ユグドラシルでも、最初は感動したものだ慣れてみると、変わらぬ夜空というのは単なるグラフィックでしかない気が付かされる。

『後で一緒に行きませんか？ エンシエント・ワンさん』

『ああ、そうだな。ブループラネットさんが愛した本当の夜空を見てみたいな』

「うむ。他に気付いた事はなかったか？」

「いえ、これといつて……。人工物もナザリックを除いて見つけられませんでした」

エンシエント・ワンは顎に暫く手を当てて考えを巡らせる。

「セバス。このナザリックを外から見てどう思った？」

「は？ いえその。特にこれといつて。月光に照らされて綺麗に見えました」

「綺麗なのは当然でありんしょう？ 言葉が足りんせんではなくて？」

「控えろ、シャルティア」

エンシエント・ワンに叱られて、しょんぼりと顔を伏せるシャルティア。しかし、次の言葉で何故叱責されたのかわかった。

「セバス。つまり、それはナザリックが周囲から丸見えになっているということだな？」

セバスもその言葉で、聞かれた意味を理解してハツとなった表情を浮かべる。

「は……はい。周囲は一面の草原となっている為に夜でもはつきりと見えました」

「昼間なら更に目立つだろうな。モモンガさん」

「ええ。アウラとマーレよ。ナザリックの隠蔽は可能か？ 展開できる幻術では心許ないし、維持費用まで考えると物理的なものが好ましい」

やり取りを黙って聞いていたマーレは、急に自分に話を振られたためにあたふたとする。

「えと……えつと……。魔法という手段では難しい……です。地表部の色々を隠すとすると……。ただ、物理的にですと……。例えば壁に土をかけてそこに植物等を生やせば……」

「栄光あるナザリックの壁を土で汚すと？」

黙って聞いていたアルベドが、マーレの言葉にざわりと髪を逆立てる。

「控えよ、アルベド。私が手段を聞いたのだ」

「も……申し訳ございません。モモンガ様！」

モモンガの叱責に、アルベドは腰の後ろの翼を解りやすくしよげさせて俯く。

「土で盛り上げて隠すことは可能か？」

「は……はい。それでした。スキルも併用すれば夜の間にでも……できます。でも……」

「大地の盛り上がりが不自然になるか？ セバスよ。周囲に小高い丘のようなものはあつたか？」

モモンガはセバスに視線を向ける。

「いえ、平坦な草原が数キロに渡って広がっておりますので、丘のような盛り上がりは目立つかと……」

「そうか。では、周囲に同じように土を盛り上げたらどうだ？」

思案げに顎髭を撫でる。小さく頷いて返した。

「それでしたら、然程に目立つこともないかと」

「そういう事だ。マールよ。聞いていたようにナザリックの隠蔽をせよ。丸見えになる上空部分には後ほど幻術を展開させる」

至高のまとめ役、モモンガから直接の命に、マールは興奮からか。杖を胸の前でギョツと握りしめる。

「は……はい！ 全力を尽くしてがんばります！」

「う……うむ。がんばってくれ。そういう訳だ。皆よ。ナザリックは今、未曾有の事態にある事がわかっただろう。嘗ての世界とは別の世界に飛ばされている可能性が極めて高い。故に、他の仲間がこちらの世界に来ているのかも不明だ」

モモンガの言葉に守護者達も意味を理解したようで、一様に落胆しているようだ。

「みな、落ち着け。確かにここは我らがいた世界とは変わってしまったかもしれない。だが、仲間がこちらに来ていないとは限らん。来ているのなら全力で探し出そう。それ

「ここに偉大なるギルド長のモモンガさんが居る！俺がいる。及ばずながら俺もモモンガさんと共に皆を守ろう」

エンシエント・ワンの言葉に、守護者達は慌てて俯いていた視線を上げた。

そこには歯を光らせて笑い、親指を立てているエンシエント・ワンの姿があった。体の周囲に七色の後光を発しながら……

エンシエント・ワンは、今度こそリング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンで、その場から逃走した。後でモモンガが見つけた時には、自室のベッドでゴロゴロと転がり回る姿で見つかったという。

八話。玉座の間。その後

モモンガが立ち去ってから、デミウルゴスが最初に立ち上がった。

少し乱れた服装をなれた手付きで直して、丸眼鏡を押し上げる。

「くー」

「エンシエント・ワン様が帰ってこられたのは大変喜ばしい事です。これから忙しくなるでしょう」

「エンシエント・ワン様とモモンガ様は凄かったね！」

「……くくふー」

「うん。そ……それにすつごくお優しくかったね。お姉ちゃん」

「エンシエント・ワン様が帰って来ラレタノハ素晴ラシイ！ 是非トモ、マタ稽古ヲツケテ頂ケナイモノカ！」

「そうだね。でも、暫くは無理な話ではないかな？ コキユートス」

「ム、ソレハ何故ダ？ デミウルゴス」

皆、口々に先程までのいた至高の方々に対して、思い思いの事を言葉にする。

「それは決まっているさ。あの方々も言っていただろう？ ここが別の世界の可能性が

高いと、であるならば、無駄に体力と時間を消費するのは下策だ。我々も効率を考えて動かないとね」

「で……でも、エンシエント・ワン様は凄くお強かったよね！　ねっ。お姉ちゃん！」

「だね。デスナイトが一瞬だったもんね。消えたと思ったら斧でズバーっつてさ」

「ふうー……クフウ」

アウラとマールは円形闘技場に、至高の方々が来られた際の事を思い出して頬を上気させる。

「おや、アウラとマールは既に戦われる所を見たのかね？」

「又ウ。何故、私ヲ呼ンデクレナカッタノダ！」

「それにしてもデスナイトを一瞬とは腕はいささかも落ちてらっしやらないとは、流石は至高の御方だね」

「私デモアンデッドナイトヲ一瞬デハ難シイ。スキルヲ使エバ解ラヌガ」

デミウルゴスとコキュートスは羨ましげに問いかけた。恨めしげにかもしれない。

そして、アンデッドナイトの力と、己を比べてエンシエント・ワンの力の底知れなさに、畏敬の念を抱く。

「だって、急に来られたんだもん。しょうがないでしょ？　それとも至高の方々に連絡をしてから来てくださいますとも言うの？」

「さ……流石にそれはし……失礼だと思えます！」

「それにしたってマールレ！ あんたは守護者としてどうなの!? 観客席から降りられずにエンシエント・ワン様に抱き上げられて降ろされるとかさあ！」

「あゝ、あゝん?!」

アウラの言葉に玉座の間に殺気が充満する。

殺気が発せられたのは、未だ跪いたままの女性守護者二人からだ。

一人は真祖、もう一人は淫魔の二人だ。

「そ……それは……だって怖かったんだも……ヒッ！」

マールレは見てしまった。アウラの後ろでゆらりと立ち上がり、眼光を光らせる悪鬼羅刹のコンビを……。

「おチビ……今話を詳しく聞かせて貰えないでありますか？」

「ええ、これは重大な問題よ。よく……そうじっくりと聞きたいわね。アウラ！」

「えっ? ……あ」

尋常ならぬ気配と言葉にアウラは、後ろを振り返り、じつとりとした汗が背中を伝う。

「お……お姉ちゃん……」

「マールレ……逃げるよっ！」

アウラはその場から飛び上がるように、マールレの手を掴んで、玉座の間から逃げ出し

た。

氣を利かせたユリ・アルファが扉を開けてくれたので、そのまま玉座の間から飛び出して走る。

自分の安住の地である第六階層へ。

「待ちなさいっ！　アウラ。マール！」

咄嗟にシャルティアとアルベドも追いかけようとしたが、コキユートスがシャルティアを。デミウルゴスがアルベドを足止めした。

「少シ、燥ギ過ギダ。私モ思ウ所ハアレド、ココハ偉大ナ御方ノ玉座ノ間ダゾ」

「そうですね。お二人共、少し落ち着いてください。エンシエント・ワン様も他意はないのでしよう。それよりも指示を貰えないかい？　守護者統括殿？」

二人の言葉に時と場所を思い出したのか。般若よりも恐ろしかった形相は、いつもの淑女らしいものへと戻っていた。

「エンシエント・ワン様が居られることで、ナザリツクの防御も一段と上がっているとはいえ、至高の御方の御手を煩わせるなど、守護者失格だわ。デミウルゴス。魔将達を第一階層に回してくれる？」

「そうですね。まずは第一階層を固めるのが最善でしょう。魔将だけでなく、マールの隠蔽が完了するまで、この私も第一階層に赴きましょう。構いませんね、シャルティア

？」

「デミウルゴスの言葉に、シャルティアは微かに波面を浮かべるが小さく溜息を吐いた。」

「しようがありませんね。私の眷属だけでは不安でありんしたから」

「コキュートスも出来れば第二階層の……そうだね。恐怖公の所で待機してくれてると安心なんだがね？」

「ウム。致シ方ナシ。ダガ、アソコハ我ガ友ノ眷属ヲ踏ミ潰シテシマイソウデ怖イノダガ」

「その辺りは恐怖公と相談してくれたまえ」

コキュートスの言葉に、デミウルゴスは小さく肩を竦めて頬を上げるだけの苦笑を浮かべる。

「では私も戻らせて頂きます。モモンガ様が何処に行かれたかは不明ですが、お傍にお仕えるべきでしょうし」

「わかりました。セバス。モモンガ様には失礼の無いように仕えなさい。それとエンシエント・ワン様の搜索も……」

「それはモモンガ様から先程、連絡を頂きました。エンシエント・ワン様は第九階層の自室に帰られていたそうです」

「そう。それはよかったわ。折角、お戻りになられたのですから、エンシエント・ワン様のお傍に仕える者はどうするの？」

アルベドの言葉に、シャルティアが大きく跳ねて自分を指差す。

「私！ 私がお傍に仕えるでありんす！ 昼と無く夜となく。ずっとお傍に……うえへへへ……」

「それには及びません。ユリ・アルファ。貴方がエンシエント・ワン様の部屋に就きなさい。決して粗相の無いように」

扉の前にいたユリ・アルファは、ピクリと体が反応する。

そして、おそるおそる自分の胸に手を当てて、問い返してきた。

「ぼ……私で宜しいのでしょうか？」

「貴女なら失態なくお傍にお仕え出来るでしょう。それにはエンシエント・ワン様もアソッドである貴女の方が気を使われずに済むかもしれませぬ」

「そうだね。セバス。その考えには賛成するよ。ユリ、頼めるかな？」

「わ……妾もアソッド……しかも同じヴァンパイアでありんすよ？」

「君には第一階層を守るといふ重要な任務があるでしょう。それにこの未曾有の事態に君は守護から外れるというのかね？」

デミウルゴスの最もな言葉に、シャルティアもぐうの音も出ない。くぎぎとは鳴いた

が、それも少しの間であり、大きく溜息を吐くと肩を大きく落とした。

何を言っても理屈ではデミウルゴスには勝つ事はできないとわかっているし、何より言われていることは尤もだからだ。

魔将は疎かデミウルゴスまで第一階層に出向くと言うのに、肝心の第一、第二、第三階層守護者が不在など、言語道断な話だ。

「わかつたでありんす！　でも、ユリ。エンシエント・ワン様が御用とあればすぐに知らせるでありんすよ？　何を置いても、そう、何を置いても直ぐに駆けつけしんすからね！」

「何を言っているのかしら、このビッチは！　心配しなくても、御用の際は即座にこのアルベドが参上します。セバスもわかっているわね！　直ぐに私に知らせなさい。ただし、寝室にお呼びの際は、少し時間が欲しいとそれとなく伝えるように、勿論そのまま……」

「わかりました。お呼びの際はそのように計らいます。では、私はこれで……ユリも直ぐにエンシエント・ワン様の部屋に向かいなさい」

「は……はい！　全身全霊を持ってお仕えます！」

セバスとユリはそれぞれの仕事を成すべき場所へと向かって、玉座の間を後にした。玉座の間に残されたのは守護者四人だけだ。

「それにしても至高の御方が一人でもお帰りに成られたのは本当に喜ばしいね。これからは一層深くお仕えして、出来るならお子も成して欲しいものだ」

デミウルゴスが放った何気ない一言は玉座の間の空気を凍てつかせる。

「ソレハ至高ノ御方ノ才世継ギト言ウ事力？ デミウルゴス、ソレハ不敬ヤモ知レンゾ
！」

「そうかね？ だが、嘗て至高の御方四十一人が居られたこのナザリックも、今ではモモング様とエンシエント・ワン様の御二人だけだ。こう言つては不敬となるが……いつかまたお二人で立ち向かわねば成らぬ事態が起きたらと思うとね。以前の世界のようにね」

「つまりは至高の方々が無敵でも敵わぬ相手が居る。もしくは事態となる可能性もあるかもしれない。そう考えているわけね？ デミウルゴス。それは不敬だわ。けれども、可能性と言う話では懸念は事実ではあるわ」

アルベドもデミウルゴスの言葉に、一瞬間に血が昇りそうになるが、即座にその可能性は否定してはならないと理解する。

一度あつた事が二度ないとは誰にも言う事は出来ない。

寧ろ、その可能性を懸念しないということは配下の者としては、怠慢と言われよう。

「その件については追々、任せない。その私が……至高の御方の……二人でも三人でも

……くふふふふ」

「ちよつと、待ちなんし！ どうしてアルベドがに任せることなんでありんすか!? 私にもそのエンシエント・ワン様やモモンガ様と……」

そこで待ったを掛けたのは、エンシエント・ワンが帰ってきて、その姿を見てから、下着がずつとヤバイことになっているシャルティアだった。

「黙りなさいっ！ このビッチがつ！ 貴女のようなアンデッドが子を産めるわけはないでしょう！」

「エンシエント・ワン様もモモンガ様もアンデッドでありんすえー！」

「至高の御方と一緒にするんじゃないわよ！ それにそんな貧乳の体で母乳を上げられると思ってるの！ ヤツメウナギが！」

「私の姿は至高の御方から作られた姿でありんすえ！ 大口ゴリラが！」

「それはこつちも同じなんですけどね！」

突如始まった姦しい喧嘩に、妄想を膨らませていたコキュートスも、デミウルゴスと二人して呆れたように溜息を吐くと、デミウルゴスは第一階層に、コキュートスは第二階層に向かうのであった。

九話。空の思い出

あれからモモンガは、転移で逃げ出したエンシエント・ワンのフォローをして、階層守護者達に必要な指示を伝えると、直ぐにエンシエント・ワンを探して、エンシエント・ワンの自室に訪れたのだ。

そこでは体をヒルの姿に戻したエンシエント・ワンがベッドに突っ伏し、枕に顔に当たる部分を押し付けて「う——あ——」と叫びながら手脚をうねらせていた。

モモンガはその姿に安堵すると同時に、深い溜め息を吐くと、エンシエント・ワンが突然消えた事に動揺していた守護者達を安心させる為に、セバスへとメツセージを送る。

「エンシエント・ワンさん」

モモンガが未だジタバタとベッドにシワを作る作業をしていたエンシエント・ワンに声を掛けると、ピタリと止まった。

「……モモンガさん」

「はい。なんですか?」

「笑えよ……笑いたければ笑えよ……どうせ、俺は笑えば歯が光り、サムズアップで後光が指す男だよ！」

「エンシエント・ワンさん……その……ぶっ……かつこよかつ……ブハハハハハ！ 超男前でしたよっ！ くっくっぶ……」

「……んモモンガさん」

エンシエント・ワンの言葉に甘えて指を指して、空虚な腹を抱えながら大爆笑するモモンガに、エンシエント・ワンは聞こえる位の声量でボソリと呟く。

それを聞き取ったモモンガも笑うのをピタリと止めた。

それを期にエンシエント・ワンはがばりと身を起き上がらせると、ベッドから降りて、モモンガに対して敬礼を行う。

「W e n n e s m e i n e s G o t t e s W i l l e (我が神の望みとあらば)」

「やめろおおおお！」

直後にモモンガさんの体が連続して発光する事となった。

「あんだだつて、素であれじゃないかあ」

「あれは昔の過ちですう！ 現在進行系で痛い人とは違いますう」

「こんの、ポン骨モモンガさんが、それだと昔のモモンガさんの戦闘終了後のポーズ集を

パンドラに教えるぞっ！」

「やめろお！ やめてください。いやホントに……勘弁してください」

エンシエント・ワンの言葉に、モモンガは迷わずその場に土下座をした。

その体は寿命が尽きかけの電球の様に激しく明滅していた。

「と……とりあえずは傷の挟り合いはやめましょう。お互いに不毛すぎる……」

「そうですね。まあ、この体質もウルベルトさんは羨ましがりそうですけども……」

モモンガは立ち上がり膝からホコリを落とす仕草をする。まあ、完璧な仕事をしているメイドのお陰でホコリは疎かチリ一つ落ちていないが、単なる気分の切り替えである。

エンシエント・ワンも普通に立つと、その姿を覆い隠すようにマントを翻すと、マントの裾と言わずあちこちからコウモリが飛び出してゆく。

そして、コウモリが消えた時には、その場にはヒル人間の姿ではなく、絶世の美男子の姿で立っていた。

「その姿に戻るんですか？」

「えっ？ まあ、確かにクソエフェクトがどうなのかとか。検証がまだ必要ですし、人がいる可能性があるなら、人間種になる重要性がグツと高まりますからね」

「それはそうなんです、あのエフェクトはどういう仕組みなんですかね？」

首を傾げるモモンガを見て、首が転げ落ちそうに見えて、変な意味で怖く見える。

「さあ、異形種の時のエフエクトはかっこいいんですけどね。なんで、この姿になるとネタエフエクトになるのか……？」

「いや、まあ、なんとなく言いたいことはわかるんですけども……」

モモンガは内心で、エフエクト自体が意味がないから、単なる厨二では？　と思っただけ、口に出すと前に進まなくなるので黙っておく。

「ところであのあと大丈夫でした？　居た堪れずに逃げ出してしまったんですけど……」

「そりゃ、大騒ぎでしたよ。でもまあ、こちらでフオローしておきましたが……」

それはすみませんでした。と、後ろ頭を掻きながら人好きがする困ったような笑いを浮かべた。

「エンシエント・ワンさんはこれからはどうされるんですか？」

「どう、ですか？」

「その……帰る手段を探されたりするのかなつと……ちなみに俺は向こう未練はないんですが」

エンシエント・ワンはなんとなく得心がいったのか。掌で拳を打つ仕草をみると、どこからとも無くポンツという音が響いて、空気が弛緩する。

「俺も現実には未練がないですね。帰るも何も多分向こうの、リアルの俺は死んでますよ」

「えっ?」

「正確にはユグドラシルの終了に合わせて安楽死するように、向こうで手続きを済ませてあるんです。だから、もしかしたらこれは俺が死の間際に見てる願望とか夢って奴なのかとか思ってたりにします」

「それは……詳しく聞いても大丈夫なやつですか?」

エンシエント・ワンは遠慮がちに聞いてくるモモンガに、更に苦笑を深めてベッドに仰向けに飛び込んだ。

語る内容は向こうで夢破れた一人の物語。よくある話である。スモッグから肺に癌を患い、気がついた時には骨に転移していたこと、そして治っても今までのように劇団では使えないこと。

治療費が非常に高額であり、完治するには全財産を使い果たすこと。

「まったくままならないものだと思います。直ぐに安楽死をしようと思っていた時に、モモンガさんからメッセージが来ましてね。どうせ死ぬなら思い出のユグドラシルと共に思った次第でして、恥ずかしい話。こつちに来たことで生きれて……いや、生まれ変わったと言っても過言じゃないんですよ」

「そんな……そんな事になってたなんて……」

話をじつと聞いていたモモンガは手をワナワナと震わせる。沈静化しない程度のやるせなさ、自分の気の利かなさに腹が立っているのだ。

「いや、そうへこまれるとこつちが困るんですけど？　まあ、過ぎた話ですよ。ですの
で、ここから去るような真似はしません。帰る場所ありませんしね」

「すみません。なんか悪い事を聞いたみたいで……」

俯くモモンガに、エンシエント・ワンは仰向けから跳ぶようにして、ベッドの足元まできれいに飛び上がり着地する。

「止してくださいよ。今こうして健康な体になっているわけですし、それに聞いてもらえてどこかスッキリした気はします。まあ、お互いに向こうには未練がないって事で、
第二の人生を謳歌しましやう」

エンシエント・ワンの努めて明るく振る舞う様子に、モモンガも深く溜め息を吐くと、同じように立ち上がった。

「そうですね。まあ、お互いにアンデッドで異形種ですけども……」

「おっと、アンデッドジョークですか？　はっはっはっ！」

どちらからとも無く、笑顔を浮かべると、エンシエント・ワンは手を差し出した。

「これからもよろしくギルド長！」

「ええ。こちらからもよろしくおねがいします」

モモンガも手を差し出して、そう口にしたあとで、お互いに固い握手を交わす。

——ガツシイイイン！

効果音の発生に、エンシエント・ワンは力なく手を離すと、ベッドに倒れ込んだ。

「だから！ シリアスなシーンで、なんなんだよつ！ もおお。どうしたいんだよおー！」

思いも寄らない合体技エフェクト効果音に、ベッドを殴りながら身悶えするとは、予想もしていなかった。

それから少しして、セバスがユリを伴い、部屋を訪れた事に、モモンガは心から感謝した。

「ん。美味しいな」

「はい。こちらはヴァナヘイム産のファイナーティピーゴールデンフラワリーオレンジペコーとなっております」

「お……おう。良く噛まずに言えるね……？」

「メイドの嗜みとして努めております」

ユリがテーブル脇に姿勢良く立ち、脇には紅茶ポットが乗ったカートが置いてあった。

（え？ メイドの早口言葉とかあるの？ それにしても名前が長いだけあって美味しいな。現実ではここまで美味しいのは飲んだことはないわ）

エンシエント・ワンは脇役とはいえ世界的に有名な劇団員である。

それなりに上流階級と付き合いがあり、下級階級の人間では味わえないようなものを口にした事は多くあった。

しかし、これほど美味しい紅茶を飲んだことはない。

これと比べればリアルで飲んだ紅茶など出廻らしも良い所だ。

とはいえ、そんな出廻らしの様な紅茶ですら下流階級の貧民には一生口に出来ないのだが。

「思えば……酷い世界だったよなあ」

「はい。何かご不満が御座いましたか？」

「いや、なんでもない。こつちの話だよ」

何か失敗したのかと不安そうに聞いてくるプレアデスのユリ・アルファに、笑顔で手を振り否定する。

その際にユリをジッと見つめる。

美人である。スタイルもよく、アルベドを絶世の美女と言うなら、ユリは美人だ。

アルベド程に近寄りたくもなく、かと言って気安く声を掛け辛い程度の美人である。

手を伸ばせば届きそうな位置にいる理想の女性像だろう。

「如何なさいましたでしょう?」

ジツと見つめていたのを怪訝に思ったのだろう。用があるのかと聞いてきた。

「いや、ユリつて美人さんだよなって思ってたな?」

言葉にした瞬間、変化は劇的だった。

一瞬で顔は真つ赤に染まり、ふらりとよろめいた。

「ちよつ、おま……あぶない」

一瞬、体がガクリと揺れた瞬間に、頭がごろりと外れて落ちてきたのだ。

咄嗟にその頭を落ちきる前にキャッチする。

「ぼぼぼ……僕がですか!」

体は斜め前にあるにも関わらず声だけは下から聞こえるという摩訶不思議な光景があった。

「あぶねえよ。落ち着けて! ステイ! ステイ!」

「も……申し訳ありません! ぼ、私としたことがなんと失礼なことをつ!」

「いやいや、とりあえずは首を付けような?」

エンシエント・ワンから頭を受け取ると、慌てていたのか。今度は頭を力一杯持ち上げすぎて上に放り投げて、そしてお手玉をする。

「だから、落ち着けての。ほら、もう落とすなよ?」

宙を舞い続ける頭を素早くキャッチすると、手渡しせずに首にくつつけてやる。

「何度も何度も、私は何という失態をつ! この失態は命を持ってお詫びをつ!」

「いや、そんなことで死なれたら寝覚めが悪すぎるわ! 少し落ち着け、な? 別に気にしてないし、ある意味で貴重な体験だったからな?」

その言葉にしよんぼりと項垂れる。

貴重な体験は嘘ではない。少なくともこの世に他人の頭を空中キャッチした人間など、エンシエント・ワンが初めてであろう。

「ユリはデュラハンだったよな?」

「は……はいっ! デュラハンです」

ガチガチに固くなっているユリの頭に手を乗せる。

「もしかして、頭つてそんなにすぐ落ちるものなのか?」

そう言いながら、エンシエント・ワンは頭に置いた手を撫でるように動かすが、その感触は人間の頭を撫でているような感触であり、首の部分でズレている感じはしない。

「いいいいいいえ、その……普段は余程じゃない限りは落ちない……です」

「それは意識して外したり、付けたりというオンオフできる感じか？」

「オンオフがよくわかりませんが、気をつけてれば、殴り合っても取れたりはしないうです。精神が乱れたりしたら外れたりします……」

まあ、そうだなと、エンシエント・ワンは心の中で呟いた。

チョーカー一本で頭なんて重いものを固定できるわけが無いとは思っていたが、どうやら魔法的な何かか、デュラハンにしか無い特殊能力で付いてはいるようだ。

「ユリは飲食できるのか？」

「いえ、アンデッドですので……。それに首がこうなっておりますし」

「だよなあ」

因みにエンシエント・ワンは飲食がすることが出来る。

だが、それは口に入れて食べるという行為だけであり、紅茶等の味は判るのだが、食に関しては何を食べても味がしない。

お茶請けのクッキーが付いていたのだが、サクサクという歯応えだけで、甘みも香ばしさも何も感じなかった。

しかも、飲み物も最初は珈琲を飲んだのが、どれだけ砂糖を入れてもエグいだけで、紅茶で美味しいと感じられる程度だ。

「さて……どうすつかねえ？」

「え……えと、その……伽を御所望でしたら……僕は……」

「はっ？ えっ？」

「いえ……あの、美人だと仰つしやりましたので……その御所望なのかと……。あつ、でも、アルベド様やシャルティア様を差し置いてとなりますと……」

「いやいやいやいや、しないよ!? 何言ってるの。そんなことしたらやまいこさんに殺されるよ!」

落ち着いたのか頬を染めながら、前で組んだ手をもじもじとさせて、上目遣いに伺ってくるユリに、慌てて両手を振って否定する。

「あ……、ああ……。申し訳ございません! 本当に申し訳御座いません! 私はまた何という失礼なことをっ!」

「わかつたわかつた! 俺が勘違いさせたのが悪かつたんだからっ! な?」

「いえ、いとたかき御方に間違いなどございません! 僕が悪かつたんですっ!」

（うあー! 面倒くせえ! なんっーか、忠誠が重いよっ!）

『もしもし、エンシエント・ワンさん起きてます?』

不意にメツセージが入って、助かつたとばかりに繋げる。

『モモンガさん! 起きてますって言うか。アンデッドなんで寝れない。つか、助け

てっー!』

『はい? えっ、一体どうしたんですか!?』

『ユリが首がポロリで死ぬって、デユラハンなんです!』

『意味がわかりませんよ!?』と、とにかくそちらに向かいます!』

それからセバスとモモンガが必死に宥めて、漸く落ち着いたのだった。

とりあえずはセバスとユリを、部屋の前に出して守衛の様に立たせてある。

今は寧ろセバスに一任するのが一番だという判断である。

「いや、まさかやまいこさんの娘に手を出すとは、自殺志願ですか?」

「おい、止める! 洒落にならないから! やまいこさんに億が一、兆が一でも知られた

ら本気でアウトだから、あの人がその手の冗談が通じないのは知っているだろう!」

「あ……その、すみません……」

二人の脳裏に嫌な記憶が蘇る。in中二時間に渡って、正座&説教をぶくぶく茶釜さんとやまいこさんにひたすら責められるペロロンチーノとフラットフットの姿を思い出した。

「ペロロンさん元気かなあ。女性不審になってないといいけど」

「あいつは女性不審になって一般人になれると思う。俺は性犯罪のニュース見た後にナザリツクでペロロンの姿を見るとほっとしたもんだよ」

「それはちよつと酷すぎるんじゃない、気持ちばかりですけども……」

二人で昔を懐かしみつつも深い溜め息を吐いた。

ペロロンチーノといえば、その長距離砲撃とあいまってイヤラシイ鳥頭と呼ばれていた。

「所で、メッセくれたつて事はなんか用事か？」

「ああ、そうそう、外に行つてみませんか？」

「そうだ思い出したとばかりに、嬉しそうな気配を漂わせると、両手を広げ魅力的な提案をする。

「おっ!? いいね!」

「私も行きたくてうずうずしてたんですよ!」

そして、すぐさまリング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンを起動させると、一番地表に近い第一階層へと転移した。

そこにはマフィアが両手を上げて逃げ出しそうな強面の悪魔が三体並んでいた。

「うおっ! あれ、こいつらつて……」

「デミウルゴスの三魔将ですね。確かラーズ、エンヴィー、グリードですね。こいつらがどうして、こんな低階層に？」

二人で第一階層で戸惑っていると、三魔将の間をすりりと抜けるようにして、デミウ

ルゴスが姿を表した。

「おや、これはこれは！ 至高の方々が近衛もお連れに成らずに、如何なさいましたでしょうか？」

脇腹にコツンという衝撃に、エンシエント・ワンが見ると、骨張った肘がローブの下から突いてきた。

「あー、デミウルゴス。俺がいるのに近衛が必要か？ 少なくとも百レベルが相手でも、モモンガさんを逃し、皆を呼んでくるまでは持たせる自信はあるんだが？」

「……これは失礼致しました。エンシエント・ワン様のお力は重々に承知しておりませう。しかし、御身を守るのも我ら下僕の使命、何卒御身方々の盾となる者をお連れなさいませう。伏してお願ひ申し上げます！」

その場で跪き今にも死にそうな顔で俯くデミウルゴスに、エンシエント・ワンとモモンガは顔を見合わせた。

「良かろう。デミウルゴス。お前が供をせよ。確かにエンシエント・ワンさん一人よりも二人の方が確実だろう」

「はっ！ このデミウルゴスの具申をおききくださり恐悦至極にございます」

跪いたまま、二人が通り過ぎるのを待つてからデミウルゴスは立ち上がり、後ろを三歩遅れてついてくる。

上乗せされて閾値を超えるためだ。

それでも寄せては返す感動の波は留まることを知らない。

「エンシエント・ワンさん飛びましょう！」

「ああ！ 下から見るより手を伸ばせだ！」

エンシエント・ワンは無限の背負い袋から翼を模した首飾り、飛行ネットレスを取り出して首に掛け、モモンガは普通に呪文を口にする。

「フライ！」

同時に飛び上がると、空へ空へ星へと届けと言わんばかりに上に登ってゆく。少し遅れて変身したデミウルゴスが追従する。

フライで登れる限界高度まで登り来ると、地平線が姿を表す、遙か遠くでは日の出しているようで、全体を見ると指輪のクラウンからリングが伸びているようにも見える。

「すごいな！ 凄いな！ モモンガさん。見てるか!？」

「ええ……ええ、何という……これこそが言葉に出来ない光景と言うのでしょうか？」

ブループラネットさんがあれほど夢中に語るわけですよ！」

天には満点の星々が、地には光が帯となり、大陸を海を空を染め上げている。

それはまさに神が作りたもう光景が広がっていた。

「見せたいな」

「見せたいですね」

「ブループラネットさんに！」

お互い同時に同じ人物の名前を上げて、また笑い出した。

「まさに宝箱だな」

「ええ。どんな秘宝よりも価値のある宝石箱です」

エンシエント・ワンは空に、モモンガは地にそれぞれ手を伸ばす。

「この世界が宝石を散りばめた宝箱なのは、御身を飾る宝石を大切に保管しているから
かもしれません」

「詩人だな。デミウルゴスは」

くすりと笑うエンシエント・ワンにモモンガがふと思いついて口にする。

「ウルベルトさんの子供ですから似ているんですよ」

「ウルベルトさんがここにいたらなんていうかな？」

「決まっていますよ。世界征服しようといえますよ」

「そしたら、ベルリバーさんとバリアブルタリスマンさんとするし☆ふあーさんが大賛成
するだろうな」

「違いありませんよ。あの人達は散々征服したいって言っていましたし！」

「んじゃ、魔王はモモンガさんなって言われて……」

「ウルベルトさんが怒るまでが仕様ですね！　俺が魔王しなくて誰がするんだ！　つて怒りますよー！」

お互いに昔の仲間を思い出して懐かしい思いで即興の想像をする。

だが、間違いなくこの遣り取りの通りになるだろうと、二人は確信している。

それほど一癖も二癖もありながらキャラに素直な人達であったからだ。

「会いたいですね」

「来てるなら探し出すさ！　居なけりや引きずり込んでやる！」

「あははははっ、エンシエント・ワンさんが言うとな本当になそうなりそうなきがしますよ。

ほら、あのスルトの時も……」

「ああ、あれはウルベルトさんが……」

こうして太陽が地平線から伸びて、ナザリックを明るく照らすまで、二人は天高くから話し続けるのであった。

そんな二人の脇で瞳を潤ませて、決意を新たにする悪魔の存在も忘れて……

十話。人としての喜び

夜明けをきつかけにエンシエント・ワンは、ナザリックの自室へと帰ってきていた。

モモンガはマールレの労いに行くという事で、地表付近で別れて、一人自室に戻る。

戻ってからが、エンシエント・ワンにとって大変だった。

セバスは必死に頭を下げるし、ユリは顔を蒼白にして泣きそうな顔を浮かべているのだ。

うっかり部屋の外で待機していた二人の事を忘れて、モモンガとエンシエント・ワンは指輪で転移したために二人には解らず。

セバス達の中に声掛けしても、返答がないために、開けて確認をしたらぬけの殻だったので、大慌てだったそうだ。

エンシエント・ワンは悪い事をしたなと思いつつも、二人にはもう休むように伝えて、部屋の中に入った。

部屋の中の片付けを始める。ユグドラシルを辞めた当時のままとなっていることに、モモンガさんに感謝する。

(中の物も装備も好きにしていって言ったんだけどな)

いつ帰ってきてもいいように、装備は疎か部屋の中の物すら、何一つ変わっていない。律儀に過ぎる死の支配者の骨顔が浮かび上がって苦笑する。

（でも、律儀すぎるつてのもあれだな。もう少し肩の力を抜いてもいいと思うんだが）
必要な物と要らない物を分けながら、必要と思える物は無限インフィニティ・ハウアザックの背負い袋へと無造作に
放り込んでゆく。

愛用の装備一式は霊廟から取ってきてあるが、それ以外は耐性のリングも着けていないし、アイテム類も全て部屋に置きっぱなしにしていた。

「よっし、モモンガさんのとこにいくか」

無限背負い袋に荷物を必要だと思われる物全て入れ終わると、残った要らない物を別の無限背負い袋に無造作に突っ込んで自室を後にする。

モモンガの部屋へと向かう途中で何人ものメイドとすれ違うが、エンシエント・ワンは軽く手を上げるだけの挨拶をする。

自室に帰ってくるまでに「ご苦労さま」と声を掛けるとその度に彼女達は泣き出して、感謝されるのだから溜まったもんじやない。

いくつかの部屋の前を通り過ぎ、思い出しながら、モモンガの部屋の前に到着すると、ノックする前にドアが中から開かれた。

開いてくれたのはプレアデスの一人、艶やかな黒髪をポニーテールにしているナーベ

ラル・ガンマであった。

「ご苦労さん」

「いえ、メイドとしての義務ですので、至高の御方にお仕え出来る事は至上の悦びにございますれば、エンシエント・ワン様もお変わりなく、嬉しい限りに御座います」

「おう！ もつと力抜いていいんだぞ？」

「も……勿体無いお言葉に御座います。しかし、私達戦闘メイドは至高の御方の身の回りのお世話のみに関わらず盾になる事こそ至上！ 力を抜くなどはできません」

「わかったわかった。モモンガさんは奥か？」

「はい。奥で色々となさっておられるようです」

エンシエント・ワンは苦笑を浮かべると、「まあ、がんばれ」と言いながら、ナーベラルを労うように肩を叩く。

叩かれたナーベラルは、ふるふるとその身を震わせて俯いた。

(流石に気安過ぎたか)

だが、やったしまったことは仕方がない。さっさと横を通り過ぎると、モモンガの寝室へと続くドアをノックもせずを開けた。

「素晴らしいぞっ！ 皆の者！」

不意に声が聞こえてきて、ドアを開けた体勢で固まった。

部屋の中、ベッドの前で鏡に向かつて、両手を広げたモモンガは、視界の端で入ってきたエンシエント・ワンと視線が合って、二人して固まることとなった。

「あ」

「……悪い。モモンガ様。後で出直すわ」

さりげに敬称を付けながら、そつとドアを閉めて立ち去ろうとするが、そのドアの縁をガツチリと掴む骨の手に邪魔をされる。

「待って！ 待ってください！」

「いえいえ、ノックもせずに入った俺が悪いんですモモンガ様」

「待ってえええ！ 言い訳をさせてくださいいい！」

ふうつと溜め息を吐いて力を緩めると、寝室へと入った。

「んで、なんだって。劇団の練習みたいな真似してたの？」

「いや……えつと、だって、守護者達は支配者を欲しがってるみたいですし、下手に反乱とかされるよりかは、より支配者らしい姿を見せていれば安心かなつと？」

ベッドに腰掛けながらモモンガの言い訳を聞いて、エンシエント・ワンは深い溜め息を吐いた。

「いや、趣味でやる分にはロールプレイするのはいいけども、常日頃から演じない方がいいと思うんだよな」

「どうしてですか？」

「劇団の言葉に、着飾って役に成るのはいいが、役に成り切って着飾るのはよせって言葉がある」

「それはどういう意味ですか？」

「いくつかの意味はあるんだが、昔、俺がいた劇団に真面目だけが取り柄の奴がいた」

モモンガはエンシエント・ワンが話し始めると黙って聞き始めた。

「そいつは真面目なんだが、演技が硬すぎて、端役も端役しか貰えなかったんだわ。それでもある日、端役の中でも準主役を貰ったことがあった。そいつはむちゃくちゃ喜んで。役になりきろうと普段から役に成り切ってた」

「その人はどうなったんですか？」

なんとなくは想像がつくが、モモンガは聞かすにはいられなかった。

「まあ、そいつの貰った役ってのは皇帝の役だったわけだが……見事に役に成り切り、舞台は大成功！　いくつかの賞も取ってあいつは大喜びしてた。けども、それだけだ。天狗になったあいつはまさに皇帝といった感じで、劇団員は疎か客までもを見下してた。そこからはもう天国から地獄さ。惨めなもんだったよ。今ではどうしてることだかな？」

黙って聞いていたモモンガは、ゴクリと存在していない喉を鳴らした。

「まあ、今のモモンガさんとは立場が違う。本当の支配者が、支配者らしく演じる。それは真つ当だし、正しくはある。でも、普段からそればかりを意識していると、いつかあなたは本当の支配者になる。本当の死の支配者にな」

モモンガは話を聞き終わると、近くの椅子にどざりと座り込んだ。

「じゃあ、俺はどうしたらいいんですか？ 大切な仲間の子供達から支配者を求められてるんですよ。自分達の上に君臨する支配者を……」

「さあな。無責任に聞こえるかもわからんが、俺にはわからん。ただ、一つ言える事は。ここには俺がいるってこつた」

モモンガは下を向いていた視線をベッドに座る男へと向けた。

そこには不敵な笑みを浮かべる友の姿があつた。

「好きにしるよ。支配者になりたいなら支えてやるし、バカやりてえーなら付き合つてやる。前衛の俺と後衛のあんたがいるんだ。守護者全員と第八階層のアレを相手にしても、逃げ出すことくれえはできるだろ？」

「エンシエント・ワンさん……」

「それから俺は昔みたく、エンシエントかワンちゃんと呼んでくれよ。長つたらしくてやなんだよ」

「わかりました。エンシエントさん」

齒が光る事も構わずに、大きくそれでいいと言わんばかりに、笑顔を見せるの。無限背負い袋の一つをベッドの脇に置いた。

「これは？」

「ん？ 俺の部屋にあつた要らない物をすべて詰めてきた。つつても大半は余った素材やらゴミアイテムだがな」

「いいんですか!？」

「いいもなにも、元々はモモンガさんの好きにしていって言つてたろ？」

「わっ、助かります！」

モモンガは無限背負い袋から色んな者を取り出しては、嬉しそうにする。

何より喜んだのは、一つの指輪だった。

「これ！ この指輪をエンシエントさん持つてたんですか!？」

「えっ？ どれ？ ああ、人化の指輪か？ えっ、モモンガさん持つてなかつたっけ」

「持つてないんですよ！ コレクションの中にもなくて……」

チエンジオブバージョン
人化の指輪は異形種でソロプレイヤー必須のアイテムだ。

基本的に人間種が蔓延るエリアに行く場合は、現地に行くまでや買ひ物が終わるまで、偽装しておかないと、人間種の経験値の餌にしかならない。

レベル百になってクランやギルドに加入すると、そんな事はなくなるのだ。

(そういえば……モモンガさんはソロの期間が短かったつけ)

モモンガと組み始めた頃の事を思い出した。

装備も初期装備で始めたばかりの様子で、たち・みーに連れられてやって来たのが、モモンガであった。

その頃には既にたち・みーと武人建御雷。ウィツシユⅢ。式式炎雷やエンシエント・ワンはある程度高レベルになっていた。

毎日毎日、アルフヘイムに赴いては異形種狩り狩りをして力を磨いていた。

そこにモモンガが加わり、まず最初にしたのはモモンガを狩っていた奴らのクラン潰しだ。

徹底的にそいつらを中心に狩りに狩り尽くして、装備を全て奪い取り尽くしたのはいい思い出である。

(恐らくあの時からたち・みーさんは、クランを目指すようになったんだよな)

故に人化の指輪を持っていなかったのだろう。とエンシエント・ワンは思った。

モモンガの性格を知っているがゆえに、仲間を信用してはいないと思えて、人化の指輪を買う事もせずに今に至ったのだろう。

「それはザ・ワンになるまで使ってたやつだなあ。それって今使ったらどんな効果になるんだろう?」

「確か、ユグドラシルの中だと、見た目は選べましたっけ？」

「どうだったかな？ キャラクリした覚えはないから、見た目はランダムになるのかな？ 久しぶり過ぎておぼえてねえや」

「使ってみてもいいですか？」

指輪を手にもちらを伺ってくるモモンガに、エンシエント・ワンは快く頷いてみせた。

「使ってみてよ！ この世界だとどうなるんだろう？」

「それじゃ使いますよ？」

モモンガは指輪を一つ抜き去り、代わりに人化の指輪を指に嵌めた。

変化は特に効果音もエフェクトもなく、指に嵌めた瞬間には、黒髪で少し野暮ったい感じの男が、モモンガのローブを着て立っていた。

「え？」

そのなんの変哲もない現実世界でどこにでもいそうな男に驚きを露わにする。

「えっ？ 変わってます？ あ……手触りがある！」

モモンガは自らの顔に触れると、その手触りは骨の感触である人間のものではなかった。

慌てて姿見の前へと向かう。カガミの中には目を見開いて驚く鈴木悟の姿が映っていた。

「もしかして……その姿はモモンガさんのリアルの姿ですか？」

「え……ええ、なんか、自分の顔って感じはしないんですが……。確かこんな顔だったと思います」

「なるほどね」

モモンガのリアルな状況を思い出した。

現実のモモンガは完全環境都市でサラリーマンをしていたとはいえ、所詮は貧民層に属している。

給料は生きていくだけで精一杯であり、日頃から健康や身嗜みに気を使えるような生活ではなかっただろう。

「モモンガさん。ちよつと待っててよ」

「ええ、えつ？　なんですか？」

「いいからいいから、寝室から出ないでね。鏡の前でモモンガ様してていいよ！」

「モモンガ様するってなんですか!？」

エンシエント・ワンはニヤリと人の悪い笑みを浮かべながら寝室を後にする。

そして、リビングまで戻ると直立不動で待機していたナーベラルにいくつか指示を出した。

それから三十分もしない内に準備が整った。

モモンガは人の姿に変わった自分を、鏡に映して、色んな角度から眺める。

挙句にはローブを脱いで半裸になり、使用せずつになくなった自らの分身も確認した。記憶の中にある見慣れた自身の分身が存在してる事にホツとする。

その瞬間、部屋の扉が開け放たれた。

「おまたせつ！ 準備で、き……たよおおー!？」

「きやああああ！ ちがつ……違うんですつ！」

ベッドの上に脱ぎ散らされた。ローブを掻き抱いて、慌てて体を隠す。

「あ……ああ、そういう……ん……んっ！ 準備できたからリビングに来てくれるか？」

「はい！ わかりましたっ！」

エンシエント・ワンは咳払いをすると、話題を変えるように要件を伝えると、モモンガは顔を微かに赤らめて勢い込んだ返事をしてきた。

部屋を出て扉を閉じる寸前に、顔だけを扉から出した。

「所で、モモンガさんのモモンガは無事だったか？」

「いいから！ 部屋を出ててくださいいよ！」

はははつという闊達な笑かつたい声を残して、リビングへと出ていった。

モモンガはそんなエンシエント・ワンに、困ったような表情を浮かべて送り出した。

着替えを終えて、リビングに入るとそこには色とりどりのお菓子と紅茶がポットで用

意されていた。

テーブルの脇に控えているナーベラルは、人間姿のモモンガに驚愕を露わにする。

しかし、流石は一流のメイドとしての教育をされているだけあって、すぐにいつもの無表情へと戻ると、お湯を注ぎ温めてあつたカップからお湯を捨てると、紅茶ポットから暖かな紅茶を入れる。

「さあ、座つてくれ。モモンガさん」

「これ……は?」

「人間に変身したモモンガさんの実験だよ。肉体構造が人間になっているなら、飯も食えるんじゃないと思つてさ」

モモンガはエンシエント・ワンに導かれる様に、エンシエント・ワンの斜め前の椅子へと着席する。

「ナーベラル。紅茶を」

「はい。初めて口にされるということで、比較的胃に優しいと言われるミルクティーにさせて頂きます。茶葉はミルクティーなので、アッサムの最高級茶葉を使用しております」

ナーベラルは説明しながらも、紅茶をポットからカップへとアッサムティーを注ぎ入れて、ミルクポットから少量のミルクを注ぎ入れて、そつとモモンガの前へと置いた。

「飯にしてもいいんじゃないかねえかとも思ったんだけども、最初に食うなら甘い物の方がつて思つてさ。さあ、食つてくれ」

エンシエント・ワンの言葉が合図だったように、モモンガは震える手で紅茶を口にす
る。

「あつっ!」

「大丈夫ですか!? モモンガ様。すぐにペストーニヤをつ!」

「大丈夫だ」

熱さに悶る至高の御方を前に慌てて、回復にペストーニヤを呼ぼうとするナーベラル
を、エンシエント・ワンが抑えた。

「モモンガさんどうだ?」

「私は大丈夫だ。ナーベラルよ。席を外せ」

「しかし……。側にメイドが仕えていないというのは……」

「いい。俺がいるからな。なんだつたらセバスを呼んでくれ。男にはよ。女に見せたく
ないものもある」

「畏まりました……」

「澁々といった感じで、一礼してからナーベラルが、部屋から退出する。」

「それでどうだ? モモンガさん」

「ははっ……。味ってこうだったんですね。苦いです。苦いけど美味しいんです」
「そうかい」

モモンガはテーブルの上に置いてあるベリーパイを震えた手で掴む。

(何を俺は震えてるんだよ……。たかがお菓子一つに……)

内心で自分の情けなさを、モモンガは嗤う。

たかがお菓子、されどお菓子だ。

現実世界でモモンガが手にする菓子を何人が口に出来ることか。

落とさないようにしっかりと掴んで、口の中に入れた。

まず最初に感じたのは歯応え。サクつとしたパイ生地はカリカリで、一噛みすること

にポロポロと欠片を落とす。

次に濃厚な風味と甘味、香の強いベリーが使われているのか。濃厚なベリーの甘い香りが口から鼻に抜ける。そして舌の奥に濃厚なベリーのジャムがねっとり絡みついて、甘美な刺激が神経を駆け巡る。

やや甘みの強いお菓子も紅茶を含めば、すつと遠ざかり、残った甘い後味が心地よく感じる。

一度口にしたらもう止まらない。あつという間に、一つのパイが姿を消して、紅茶も空になる。

そこに新たな紅茶が注ぎ入れられた。

気がつけばセバスがいつの間にか。部屋の中において、新たなミルクティーを用意してくれた。

入ってきた事すら気が付かなかった程に夢中になっていたのが恥ずかしかったのか顔を微かに伏せさせた。

「すまんな」

「いえ……良うございました」

本当に嬉しそうな表情を浮かべるセバスは、懐からハンカチを取り出すと、スツとモモンガへと差し出した。

一瞬の口の周りが汚れているのかと思っただが、落ち着いてみると、頬が濡れていた事に気付いた。

「これは……その、違うのだ」

「余りに美味くて涙が止まらねえよな」

横から掛けられた言葉に、モモンガは慌てて視線を向けると、片方の唇を上げて笑うエンシエント・ワンの顔があつた。

「セバス。涙を流す主は嫌か？ 情けないと思うか？」

エンシエント・ワンの試すような言葉に、セバスは好々爺の笑みを崩さずに、首をゆつ

くりと横に振った。

「いえ、我ら下僕は主のままに仕える者にございますれば、ただ、一つ言わせていただけるのであれば……」

「なんだ？ 許す」

「涙も見せぬ心無い主より、涙をお見せくだされる心在る主の方が甲斐があるかと……」

「はっ！ 言つてくれる。だ、そうだ。モモンガさん」

「差し出口がましい私にどうか罰を……」

セバスはその場で膝を付き頭を垂れる。

その姿は首を刎ねられても文句は言わないという覚悟が見えた。

「よい。すべてを許そう。セバス・チャン」

「はっ！」

「……ありがとう」

「も……勿体無いお言葉に御座います」

手にしたハンカチを目頭に当てながら、転がりてた感謝の言葉に、セバスの目元には光るものがあつた。

（泣けるのは心があるからか……それでも泣ける体が……心を汲む者が無ければ……）

そんな二人の主従を椅子に持たれて、眩しげに見つめながら、絵になる二人をツマミ

に紅茶を飲むエッセント・ワンであった。

十一話。ついカツとなってやった。

この世界に転移してきてから二日が経つ。

マーレのナザリック隠蔽作業も終わり、傍目には小高い丘が立ち並ぶ平野にしか見えない。

あれからモモンガは毎日三食を口にするようになった。

料理長は大喜びして、毎日の料理が豪華になったそう。それを教えてくれたルプスレギナも大喜びしていたそう。

因みにエンシエント・ワンも人化の指輪を嵌めて見たが、全く変化はしなかった。もちろん、食べ物も口にしてみたが、変わらず味も何もしない。

肉を食べれば粘土を食っている様に感じるし、野菜は雑草を噛んでいるかのようなエグさだけを感じて、結論としては食物は受け付けないとわかったただけだ。

これはなんとなく理由に想像がついていた。モモンガは異形種としてのキャラクターターしか持っていないから、指輪の効果にてリアルの肉体情報が反映されるのだろうと言ふことだ。

逆にエンシエント・ワンは、人間種としてのキャラクターを行っている。

【ザ・ワン】の人間種は人間の見た目をした吸血鬼なのだ。故に人化の指輪を使ったとしても、所詮は人間種にみえる吸血鬼という設定が反映されるのだろう。

モモンガは遠慮をして人化をしなくてもいいといったが、それだけはエンシエント・ワンには許せることではない。

エンシエント・ワンは食事が出来ないだけで、紅茶等の味はわかるのだ。

（モモンガさんは食事は不必要な消費だと考えている節があるが、それだけじゃない。何かを味わうということは心の栄養なんだから）

エンシエント・ワンはモモンガの執務室に急ぐ。

モモンガは寝室の隣。リビングだった部屋を執務室に改造したのだ。

エンシエント・ワンとしては、その気持はよくわかった。

リアルを知る人間としては六畳の間でも広く感じるというのに、リビングは十数畳の広さがあり、付随する寝室もその広さを誇っている。

落ち着かないのだ。広すぎる部屋に居ると、居場所に困る。

モモンガの部屋に辿り着くと、ノックをするまでもなく、中から開いてくれる。

今日はメイドは居らず、セバスが付いているようだ。

「うい。おはようさん」

「おはようございます。エンシエントさん」

中に入るとモモンガが、何かの作業をしていた。大きな楕円形の鏡を前に座り、身振り手振りしている。

まるでオーケストラを指揮している指揮者のようだ。

「エンシエント・ワン様。こちらへどうぞ」

セバスがモモンガの隣に席を用意する。

「ああ、ありがとう。おはようセバス」

「おはようございます。エンシエント・ワン様」

執事らしい折り目正しく体を最敬礼の角度に折り曲げながら、挨拶を返してくる。

その律儀さに、エンシエント・ワンは苦笑を漏らす。

モモンガの隣へと座ると、鏡を覗き込んだ。

そこには画面一杯に草原と少量の木々が映っていた。

ミラー・オブ・リモート・ビューイング
「遠隔視の鏡か。そういえばこんなのも合ったっけ」

「ええ、これが中々、操作が難しくて……」

鏡の縁を見ると、魔法の輝きがあった。

（対攻勢防御対策済みか。相変わらぬの慎重さだな）

この場にメイドではなく、セバスを置いた理由はさらに攻勢防御対策を抜けてきた際の用心からだろうと当たりをつける。

「こういうのは音改さんが得意だったよな」

「ですね。しよつちゆう市場を覗いては、マーケティングしてましたからね」

基本的には遠隔視ミラー・オブ・リモート・ビューイングの鏡は、オープンな都市部などしか見る事にしか利用できない。

普通はギルド拠点には遠視対策の不可視化や攻勢防御を仕掛けてあるのが、基本中の基本だ。

大抵はオープンな都市部を覗き見る位にしか使えない。オープンな都市部には個人のスキル等の攻勢防御も無効化されるからだ。

「よし、操作はなんとなく掴めてきましたよ」

「おお、流星はモモンガさん！」

「おめでとう御座います」

横からじつと見ていたセバスが、祝福を口にする。

「付き合わせてすまん。ありがとう。セバス」

「感謝の言葉など……恐縮します。お仕える主人に尽くす事こそ、我ら使用人としての幸せに御座いますれば……」

「そうか……」

モモンガは照れたように鏡の向こうに視線を戻し、拡大したり縮小したりしながら、

人がいる痕跡を探す。

鏡の映像がある一点を捉える。そこを中心に拡大していくと、そこは微かな黒煙が上がる村のようだった。村の中を人々が入り乱れながら走り回っている。

「祭りですかね？」

「いや……、祭りにしては様子がおかしくないか？」

二人が微かに首を傾げると、脇から見ていたセバスが、その光景を見てボソリと口にした。

「いえ、これは違いますな」

セバスが硬い鋼の声音でそう告げる。

その言葉に、モモンガは人々をアップで映し出すと、そこに広がった光景に反吐が出るようになる。

「ちっ、ムカつく光景だ……」

モモンガの口から転び出た言葉に自分自身で驚いた。

（こんな目を背けたくたる光景をみて、思ったのがムカつく程度だって!? 昔の俺だったら見た瞬間に吐いて、卒倒しててもおかしくないのに）

自分の心の変化に気持ちが悪くなる。それは人が死ぬ光景を見せつけられた時の比ではないほどの気持ち悪さだった。

「……モモンガさん……転移門頼めるか？」

「え？」

「俺はこの光景を見た時に、感じたのはモモンガさんと同じムカつくだった。その後でこう考えたんだ。こいつらを救う利点はなんだったな」

「確かにナザリックに利があるとは思えないですね」

「だろ？　そして自分自身にもムカついた！」

モモンガは人化していないのに、心臓が早鐘を打つような気持ちにさせられる。セバスもあまりの圧の凄まじさに、両足に力を込めて立つので精一杯となる。

「利がない？　利がないと救わねえのか？　ちげえだろ？　利が無くても理由ならあるじゃねえか。ここにナザリックがあり、俺達二人をムカつかせた。このクズどもを殺す万の理由じゃねえか！」

既に部屋に満ちた気配は質量すら伴って、室内を荒れ狂わせている。

エンシエント・ワンはショートカットにしてある鮮血王鎧に装備チェンジすると、手には愛用の「血ヲ啜り肉ヲ喰ウ」とアイギスの大盾を装備して、モモンガを見つめた。

「転移門！」

モモンガの魔法で、眼の前に全てを飲み込むような闇が拡がる。

友が開いてくれた魔法に、エンシエント・ワンは躊躇わずに足を踏み出した。

「セバス……付き合え！」

「はっ！ 御心ままにっ！」

「モモンガさん。行つてきます」

「はい。アルベドとかに指示を出したら、すぐに追いかけますね」

モモンガのその嬉しそうな声を後ろに聞くと、エンシエント・ワンの前には既に別の光景が拡がっていた。

エンリ・エモットは妹を連れて必死に走る……。

母が突き刺されるのを見た。父が兵士に縋り付き、妹を託す姿を見た。

そして、あの鎧姿の男達の笑う顔を見た。

「うっ……」

足を動かしながら、口から呻き声が漏れ出た。

それは自分が見た光景の悲惨さから出た嘔吐えずきだったのか。

それとも後ろから追ってくる男達をみて、父の末路を想像したが故の嗚咽だったのか
わからない。

唯一確かな事は、今自分が足を止めたら、腕の中にある温もりが奪われてしまうとい
うだけだ。

（私はどうなってもいい。死んだって構わない。でも、神様……神様……どうか。ネムだけは……）

しかし、祈りは天には届かない。あまりにも小さなその声は天に届くことも、後ろの男達の胸にも届くことはない。

背中にも熱い衝撃が走る。切り付けられたと言うことだけはわかった。しかし、痛みは興奮からかあまり感じなかった。

ただ、全身から力が抜けて、足が止まった絶望以外は感じなかった。

憐れな少女の心の声はあまりにも小さくて天には届かない。だが……地に転がり落ちた祈りは、地の底には染み入った事は確かだ。

「随分とご機嫌じゃねえか？ えっ？」

声の前から聞こえてきた。気が付くと兵士達は足を止めて、呆然と何かを見ていた。

エンリ・エモットも声のした方向を、無意識に

みた。そこに広がっていたものは闇だ。常世の闇があるならこれを指すのかもしれない。

だが、その闇の中から滲み出るように現れたのは血のように紅い光であった。

エンシエント・ワンが出たのは村の外れ、少女を追いかける少数勢の前だった。

そこにいたのは幼子を抱えて跪く少女と、下卑た表情を浮かべていた二人の兵士だ。

二人の兵士はゲートを見ると、見た事もない光景に動けずにいた。

その少女の姿と、リアルの世界を思い出して、更にムカつく思いが抱かされる。

強者による弱者への暴力……。

「随分とご機嫌じゃねえか？ えっ？」

「貴様、何者だ！」

「手を出すなよ。セバス。娘らを守れ！」

「はっ！」

兵士達は戸惑う。楽な仕事だった。楽な仕事だった筈だ。村を焼き村人を殺して、その後見せしめに適当な村人を生かして証人にする。

たったそれだけ、ゴブリンの群れを狩るより簡単な作業だったはずだ。

それなのに、なんだ。この眼の前にいるフルプレートトの男は、一目見るだけですさまじい防御力を秘めていそうな巨大な盾は？ そして、なんなのだ。その手に持つ有り得ないほど超大な禍々しい斧はと。

「さて……まずは実験だ。さっさと済ませようか」

「なに………を、ぶっ！」

前にいた兵士は、最後まで言い切る事が叶わなかった。なぜなら気が付いた時には視

界一杯に盾が広がり、次の瞬間にはミンチが可愛く思えるほどの肉片へと変貌したからだ。

「うっそだろ!？」

信じられないといった言葉が出たのは、盾の持ち主であるエンシエント・ワンからだ。だった。

(脆過ぎる。試しに盾突撃をしたただけだぞ? 攻撃力なんて皆無でノックバック効果

大なだけなんだが)

盾突撃は攻撃スキルではあるが、基本効果はノックバックをメインとして、タンクが

敵の強さを測るために最初に行ったりする。

ノックバック効果の大きさをみて、大凡の強さが測れるのだ。

だが、現実には広がるのはノックバックなんて言葉じゃ言い表せられないような惨状が広がっていた。

咄嗟に、セバスが少女達を背に庇い、視界を防がなければ飛んだグロテスクショーだ。「ひっ……ひいっ!」

死んだ兵士の後ろにいた兵士は体の正面を真っ赤に染めて腰が抜ける。

それもそうだ。前にいた戦友が消えたと思ったら、次の瞬間には生暖かいものがぶち撒けられて、顔と言わず全身、まさしく全身隈なく細かくなった臓物とかの肉片がこび

りついていたのだ。

「なんだ？ こないのか？ 無抵抗の相手には出来ても、少し旗色が悪くなったらそれか……クズがつ！」

さつきまで、ノックバックが効かなければ、少女二人を連れて撤退しないとイケないかもと、不安に思っていた男の言葉とは思えない強気の言葉だ。

それでも頭の中では冷静に計算をしていた。眼の前の男達のレベル。レベルに頼らない精神的、肉体的な強さ。どれ一つとつてもゴミ以下としか言えない。

ユグドラシルの初日プレイヤーよりも弱いとしか言えない。

「ひいひいひいっ！」

恥も外聞もなく兵士だった男は、剣も放り出して逃げ出した。

しかし、三步も行かぬ内にその身は崩れ落ちて、地面を無様に滑った。

その頭部は跡形も無く粉碎されていた。

「セバス……」

「申し訳御座いません。逃げ出すゴミの余りの無礼さに飛礫程度が相応しいと思いましたが……勝手な事をした事をお許しく下さい」

「ああ、許す。お前が正しいな。それよりも……。大丈夫か？」

頭を下げるセバスに対して、エンシエント・ワンは無限背負い袋インフィニティブオザツクから、ポーションを

取り出して少女に差し出した。

「背中を怪我してるようだ。これを飲め」

「血……ですか!？」

「いや、回復ポーションだ。これを飲めば背中傷も癒えよう」

「あ……有り難うございます！　もし、もしよろしければ父と母をお助けください！

差し出せるものは、何も無いのですが……そのっ！」

エンリの必死の訴えに、エンシエント・ワンは先程から気になる事があったので実行に移した。

傷を負って未だジクジクと血が流れ出る背へと回り込むと、傷口に指を当てる。

「……っう……な……なにを……！　え、うそっ!？」

しかし、次の瞬間には冷たさと同時に痛みが遠退き、微かな暖かささえ感じた。

「その痛みをもって代価としよう。セバス。モモ……仲間が来るまで、この子らを守れ」

「しかし……。我ら下僕もお連れに成らずにゆかれるなどっ!？」

「構わんさ。作業だ。単なる作業だよ……。くつくくくっ！　塵^{みじん}だ！　塵^{おっど}殺してやる

！」

セバスが止める間もなく、エンシエント・ワンはその場から消え去っていた。

(まさか、あの御方は……酔われてらっしゃるのでは?)

エンリとネムには見えなかったが、セバスははつきりと見えていた。

エンリ・エモットの背中に触れた指を舐め取った時の妖艶な迄の笑みを、恍惚と……。それはまるで初めてパイを口にしたモモンガよりも、恍惚とした表情であった。

それはまさに風と表現するしか無かった。

赤い旋風、部下が一人消える度に、濃度が増すその風は次々と鎧姿の男達を飲み込んで、移動を繰り返す。

不思議な事に、その赤い風は逃げる村人を追うことは疎か、通り過ぎた後には村人を追っていた兵士だけが消えて、残された村人は信じられないような物を見たような、きよとんとした表情だけを浮かべて座り込んでいるだけだった。

副隊長はそれを見て確信する。この風は……。この異常は、兵士だけを狙っているのだと。

「なんだ……なんだ。あれは！ なんなのだ!？」

隊長である貴族の男は、死線を潜った事が全く無く。眼の前で起こっている異常事態に恐慌を起こしていた。

「隊長！ 撤退をつ！ 撤退の許可をつ！」

経験豊富で補佐に付けられた副隊長が内心では罵声を浴びせながらも撤退の許可を求める。

だが、その声が響くと同時に赤い旋風が消失した。

(なんだっ！ あれは一体なんだったのだ!?)

ただ解ったことは理解できない事態が収まった様子に安堵した。

淡い希望という安堵を……

「……逃さんよ」

その囁くような小さな声はすぐ横から聞こえていた。そこにいたのは人の形をした赤い闇としか言えない存在だった。

手には超大な斧を一本だけ持ち、血を思わせる真っ赤なフルプレート製の鎧姿で立つ偉丈夫がいた。

その女と見紛う美貌はこの世のものとは思えない妖艶さを醸し出している。

だが、副隊長は別の感想以外は抱けなかった。

(人の形をした化け物か?!?)

無造作にぶら下げられた真っ赤な結晶で作られた斧は血を想起させ、ただ立っているだけだというのに、体の芯から凍えそうな寒さが足元から這い寄ってくるようだ。

そして、やや上を向いた顔は恍惚の表情を浮かべて、口からは冷気のような白い霧を吐き出す。

更には惹き込まれるような金の瞳は全ての者を睥睨する覇気が感じられた。

「……何者だっ?」

副隊長は本能が告げる逃げろという甘美な提案を強固な意志で捻じ伏せて対話を試みる。

「お前たちは……ゴミだ……」

「なにっ?」

「お前は……道に転がる動物のクソより劣るゴミに名乗るのか? ……と聞いている」

「き……きつさまあ!」

兵士としての矜持か。男としての意地か。副隊長は剣を振り上げた。

しかし、エンシエント・ワンは背を向けて、次は隊長らしきパニツクを起こす男へと向かっていった。

「舐めるな」

「クソ以下のゴミを舐める趣味は持ち合わせちゃいねえ。気付いていないからこそ……ゴミか」

そこで漸く気付いた。眼の前で背を向けて歩く男が持つ斧にこびり付くように、剣を握った見慣れた両手がある事を、そして、その手は血のように紅い斧に貪り食われるように姿を消していく。

「お……俺の手ええええええ!」

「まだ、気付かんとは本当に度し難いな」

副隊長だった男は、シヨックで意識を失う最後まで気付くことは無かった。

自身の視点が異様に低くなっている事を、その両足が綺麗に失われていた事を。

「さて……お前には仕事が残っているから、生きてもらうぞ?」

「……へああ!　みみみ見逃して貰えるのかつ!　見逃して貰えるなら……か、金をや

ろうつ!」

「お前はもう口を開くな。殺したくなる!」

エンシエント・ワンは隊長格の情けない男の顔面に鎧の靴を叩き込み。奥歯まで砕けさせる。

顎も外れたようでフガフガとしか言えなくなつてようやく静かになった。

(さて……どうしたもんかな。生かして返すのも如何なものかと思うし、かと言って散りに逃げた奴を一匹づつ潰すのも面倒だ。少し逃げさせて実験にでも使うか)

エンリ・エモットの血を舐めて興奮状態にあつた精神が沈静化する。

血の狂乱の様に本性が現れる事はなかったが、神の血の祝福の効果か。全身に力が漲り、それに伴う様に巻き起こる興奮でついつい好戦的にやり過ぎた感があつた。

なんというか、興奮状態後の深い沈静化というか。賢者タイムというものを感じる。

不意に後ろで土が擦れる音が聞こえて、振り返るとそこには嫉妬マスクを被ったモモ

ンガが居た。

エンシエント・ワンはその姿を見て、さっきまでの殺戮を忘れて吹き出す。

「ちよっ……ぶっはっ……。なんで嫉妬マスクっ!? 嫉妬!? 嫉妬してるんですか!」

いきなりの嫉妬マスク姿に笑いが抑えられない。

「いやあ、人化で来ようと思ってたんですけど、慌てて忘れてきちちゃって、顔隠すならこれでもいいやと……」

「いや、マジで! 流石です! さすモモですよ!」

「所でアレどうします?」

モモンガは村の外を見て呟いた。

そこには必死に走って逃げる兵士達の姿があった。

馬を集めて乗り去ろうとしている。

「あー。アレは後で実験で狩ろうと思ってたんですが、実験に使います?」

「えっ? いいんですか! いやあ、獲物横取りしたら悪いなあって、遠慮してたんですよ」

「いやいや、俺だけ楽しむのもあれですし、どうぞやつちやつてください。あつ、無茶苦茶ザコいんで威力に気を付けないとミンチになるかも?」

「了解しました。んじゃ、これで十分かな?」
トリフレットマジック
魔法三重化・魔法最強化・魔法距離延長化・
マキシマイズマジック
ディスタンスマジック

魔法効果範囲拡大化・魔法の矢」

モモンガが翳した手から、幾重にも重なった魔法陣が展開して、魔法陣から三十本にも及ぶ絶対必中の光の矢が飛び出した。そして草原をひた走る兵士達を穿ってゆく。

「……えっ?」

「流石ですわっ! モモンガ様っ!」

驚愕の音がモモンガの口から漏れ出し、隣で眺めていた鎧姿のアルベドが感嘆の声を上げる。

初歩の初歩、攻撃とも言えないような魔法で、足止めをしてから、次の魔法を試そうと考えていたのだ。

蓋を開けてみれば、魔法を受けた兵士達は足止めどころか。頭が吹き飛ばされたり、胸に大穴が空いていたりして、一人として生き残った者は居なかつたのだ。

「ね? ザコいでしょ?」

「いや、もうこれはザコいと言うよりは……ゴミでしょう? あー。しまったなあ。情報を得る為に生かしとけばよかったなあ」

モモンガがやってから思い出したとばかりに、嫉妬マスクの額を抑えて呻く。

「二匹で良かったら生かしてあるよ? あ、でも一匹は死んでるかも?」

「えっ! 本当ですか! よかったあ。有り難うございます」

「いえいえ」

血の匂いが立つ村の中で、二人の笑い声が木霊した。

そんな二人の脇で見ながら、黒のフルプレートを着たアルベドは、涎が出そうな表情を兜の下で浮かべていた。

「至高の御方々、村人達が落ち着いたようでございます。至高のお二人に礼を申したいと……」

「んー。まあ、礼は既に受け取ったようなもんなのだがなあ。一応は受け取ろうか？」

二人は従者二人を連れて、村人達が集まっている広場へと足を向けるのであった。

十二話。村人転生

村人が集まる広場にゆっくりと向かっている最中に、思考を巡らせる。

（血があれほど美味いと感じるとはなあ。明らかに種族に意識が引つ張られてるような気がする。気を付けないと、心まで化け物になる羽目になりそうだ。それにしても……）

手にぶら下げている「血ヲ啜り肉ヲ喰ウ」へと視線を向けた。

エンシエント・ワンはこの世界に来て、敵の弱さも予想外だったが、何より自分の武器である「血ヲ啜り肉ヲ喰ウ」の変化に驚いていた。

ユグドラシルでは与えたダメージ量の百分の一を経験値として喰らって成長する武器であり、フレージャーテキストには『血肉を喰らい成長を続ける生きた武器である』という一文がある。

とはいえ、まさか言葉の通り斬った相手を喰らうとは思ってもよらなかった。

途中からは調整の方法がなんとなく理解できた為に、喰らう部分を調整して男を生きて捕らえることができたが、それまでは斬った瞬間には、鎧すら残さずに食ったことに驚いた。

(俺も人の事は……いや、武器の事はいえねえか)

初めて人を殺した。殺人を犯したというのに、全くショックを受けた感じがしなかった。

最初は相手がクズだからかとも思ったのだが、モモンガに言った言葉に合点がいった。

無意識に放った『二匹で良かったら生かしてあるよ』という言葉に全てが込められている気がする。

同種とは既に感じていないのだ。虫迄とはいかないが、家畜か小動物程度の見方しか出来ない。

対等とは見れないのだ。

ふと、顎が外れて泡を吹き、失禁している男を目に留めた。

「そうだ。も……嫉妬マスクさん」

「誰が嫉妬マスクさんですか!？」

「いや、下手に名前を知られない方がいいかと思って、偽名にするかもわかりませんし」

エンシエント・ワンの言葉に、納得したのかモモンガも、少し思考を巡らせる。

「そうですねえ。アインズ・ウール・ゴウンを名乗るのはマズイですかね？」

「んー。どうだろうか？ 仲間に気付いて貰えるのならないかもだけでも、ウチは悪名

の方が高いからなあ」

「ですよ。でも、モモンガって名乗るのもなあ」

「それは別にいいんじゃないの？」

「だって、小動物のモモンガですよ？ この世界にもモモンガって動物がいたら……」

「ああ……。ですなあ」

しばらく考えながら立ち止まる。

「モモン・ザ・ダーク……とかは……」

「いや……。それはない。百歩譲ってモモンだけなら……。んー。あつー」

「何か思いつきました？」

「アインズ・ウール・ゴウンは流石にDQNギルドとしての有名過ぎてあれですが、前身であるあれなら」

「あ……。ああ！ いいですね！ 私達二人共そうですし……」

「ナインズ・オウン・ゴール！」

二人で同時に懐かしい名前を口にした。

ナインズ・オウン・ゴール。ギルド『アインズ・ウール・ゴウン』を作る前にたっちみーが作ったクラン名だ。

奇しくも、モモンガもエンシエント・ワンもクラン時代からの知り合いでもあるし、ナ

インズ・オウン・ゴールはそこそこの有名ではあったが、ユグドラシルの後期では知る者がほとんどいない程のマイナー化していた名前だ。

「それじゃ、私はナインズ・オウン・ゴールと名乗ることにします」

「俺はエンシエントとでも名乗りましょう」

お互いに笑みを浮かべながら、失神している男の元へと近付いてゆく。

失禁だけではなく脱糞もしているのか。異臭が辺りに漂っている。

「この穢らわしい汚物が、エンシエント・ワン様が仰つしやられていた兵士を率いていた者なのでしょうか？」

心底、軽蔑している声音でアルベドが問い掛けてくる。

「まあ、そうなんだが、こいつをナザリックに情報源として入れるのも嫌なんで、別の使い方をする。セバス。そっちはどうだ？」

「はい。息はしているようです。すぐにでも止まりそうな感じはしますが……」

「ポーションを使うのも勿体ないな。ペストーニャに命じて回復させよう。セバス。ゲートを開くから、そいつを連れてナザリックに先に戻れ。転移門」

「畏まりました。では、失礼させて頂きます」

「ご苦労さん」

転移門を開くと、セバスは手足のない兵士を抱えると、闇の中へと消え去っていった。

「ところで、こいつはどうするんですか？」

「村人の憂さ晴らしに使ってやろうかな」と

エンシエント・ワンは失神を続ける男に近寄り襟首を持つとうとする。と、その手がやんわりとガントレットを着けた細い手に寄って留められた。

「エンシエント・ワン様。いけませんわ。流石にこのような汚物に触れられては御手が穢れてしまいます。起きなさい。汚物！」

アルベドはエンシエント・ワンの手をそつと押し留めて、倒れている隊長に向かって、軽く蹴りを放つ。

「プゲッ！ はにほふふ！」

「いと高き御方の御手を煩わせるな！ 立て汚物。それとも踏み潰されたいか？」

まともに話せない男に、絶対零度の言葉を浴びせかける。

アルベドの足が男の顔面を抑えつけて、今にも踏み潰してしまいそうな程だ。

「アルベド。気持ちわかるが落ち着け。こいつにはやつてもらわんといけない事があるからな。な？」

「まあ……なんと慈悲深い……。聞いたか汚物。聞こえたならさっさと立て！ 歩け！ 偉大なる御方の慈悲に咽び泣いて感謝しろっ！」

エンシエント・ワンとモモンガは、額に手を当てて、空を仰ぎたくなった。

今にも殺されそうな殺気を浴びて、男は痛む体に鞭を打って這うようにして立ち上がった。

「ほへはいひはふ……おはへおはへほはいはふは……」

男は言語になつていない言葉を、うわ言のように呟きながら、アルベドに促されるまに歩き続ける。

「この汚物はどこに捨てましょうか？」

「いや、村人の前まで連れてゆく。この村を襲った責任を果たさせてやろう」

「まあ、なんと、慈悲深く思慮深いっ！」

エンシエント・ワンの言葉に男は立ち止まり、振り返った。

「助弁してくださいはんへんひへふははい。殺されてしまひますよほほはへへひはひまふほ」

「言葉を喋れよ。ゴミ！ まあ、大凡の検討がつくが、自業自得だろ。人を好きに殺して、自分は殺されたくないか？ 恥を知れ」

腹が立ってきて、インフイニテイハヴオザツク無限背負い袋から、ポーシヨンを取り出して、男に浴びせかけると、その顔面に再び爪先で蹴り飛ばして、村人の前まで吹き飛ばす。

今度は手加減が上手にいったお陰か、顎は砕けずに、齒の大半を粉々にするぐらいで済んだ。

広場に集まる村人達は、吹き飛んできた男に対して恐怖心から身を固くして、一部の

村人は失神しそうになっている。

「こ……この度は村を救っていただき、なんとお礼を言えばよろしいやら」

「礼は少し待て、ここに来る途中で少女達が襲われてるのを助けたから、その二人を連れてこよう」

「は……はあ……」

見ると村の外れから、ユリ・アルファに連れられた少女達がこちらに来てるところだった。

（ユリを呼んで護らせていたのか）

ユリ・アルファなら確実に子供を守るだろう。それに子供相手はユリが、一番の適役と言えた。

「お兄ちゃん！」

「紅い騎士様っ！」

お兄ちゃんのところまで、アルベドから不穏な空気を感じたが、肩を掌で叩いて注意を促すと、途端に空気が弛緩した。

「ああ……そんな……いけませんわ……でも、最初が野外でというのも……」

何を言つとるんだとエンシエント・ワンは内心で思いつつも、ユリに連れられてきた二人に軽く頷くだけで返した。

これから起きることは、通過儀礼であり、通らねばならない道だ。そして、救われた者の義務でもある。

「この中にお前達の両親はいるか？」

エンシエント・ワンは静かにエンリに聞いた。

広場に集まる村人達の顔をじつと見回す。

怪我をして倒れている者も含めても、その中にエンリとネムを愛し、命を持って逃してくれた両親の姿はなかった。

エンリはエンシエント・ワンを見上げて、ゆつくりと、悲しげな瞳で首を横に振った。「そうか。聞け村人達よ。いま、ここにいる男はこの村を襲った隊長の男である。お前達の家族、隣人、恋人を奪ったのは、この者が率いて来た者だ！」

エンシエント・ワンの言葉に、広場にいた村人達に動揺が広がる。

しかし、微かに灯る怒りの熱を感じさせた。

「許せるか？ 今回は偶然でしかない。ここにいる我が友、ナインズ・オウン・ゴールがお前達の窮地を見つけていなければ、今この場にはお前達の死体だけが積み重なり、この村は消えていよう。お前達は次に同じ事があれば、また偶然に縋るのか？ 居るかもわからぬ神に祈りを捧げるのかっ!？」

滔々と語るその姿は劇役者そのままの姿だ。

モモンガはその姿に圧倒される。

エンシエント・ワンをよく知るモモンガですらそれなのだ。村人の心情はどのようなになっているのか？

「此度の災禍は、お前達の罪に対しての罰なのか。力無きままの自分を看過してきた罰であるのか？ 否！ お前達は力無い事を自覚しながらも懸命に生きてきたはずだ。罪はお前たちにはない。懸命に生きるお前達を足蹴にし、奪う事しか知らぬこの兵士達である！ 罪には罰が無ければならない！ ならば、お前達はどうする。許すか？

何人の無辜の村人がこの者に許しを求めたか考えた上で、行動を起こせっ！」

倒れる男の周りに兵士達が持っていた剣や槍や鎧を、無限背負い袋から取り出してばら撒く。

「これはお前達、村人の命を絶ったこいつ等の武器装備だ。この者も含めて好きにせよ！ 我らは決して口も手も出さぬ事を誓おう！」

エンシエント・ワンはそこまで言い終わると、下がってモモンガの隣へと移動して、村人の動向を見守る。

「お姉ちゃん……」

「ネム……」

稚さ残る少女の姉妹が、不安そうに身を寄せ合う。

その体をユリは優しく包み込むように抱きしめた。

「儂の孫はやつと歩くようになったばかりだった」

年嵩の行つた初老の男性が、立ち上がると近くにあつた剣を手に取つた。

「あの人は……結婚しようつて言つてくれたのよ」

年頃の女性がよろよろと立ち上がると、槍を手に取る。

「俺の子供が……」「うちの旦那が」「エモツトさんは優しい良い人だったのに……」

一人、また一人と立ち上がつて武器を手に取る。

「ネム……」

「お姉ちゃん」

「お願いだから少しだけ目を閉じて耳を塞いで、ね？……ユリさん」

「はい。何でございましょうか？」

「妹を少しお願ひします……」

エンリはユリとネムから離れると、男の側に落ちていた短剣を手に取つた。

「お父さんお母さん……私がネムを守るからね？」

そして悲しみを湛えた瞳に炎が灯つた時に、男はタイミングよく目を覚ました。

「にやにやつ！ にやにおしゆゆきだ！ きやねにやら……きやねにやらいふらてもやうきやらー！」

「お父さんとお母さんを……返してよおお！」

「ぎいあつ！ おきやねおきやねをお……」

振り下ろされた短剣が紅い血飛沫に濡れた事が合図のように、村の人間達は次々とその思いの丈を込めて振り下ろす。

「よくも孫をおつー」「死ぬ死ぬ死ぬね！」「よくもよくもよくもおお！」

それは狂気の光景であり、これ以上なく美しい光景だった。

普通の人が見れば正気の沙汰ではないと感じるだろう。

だが、この血生臭い祭典は、必要な儀式なのだ。

ただただ、脅威に怯えるだけの羊の様な人生から、群れで戦う事を選んだ者へと転生するための儀式なのである。

「素晴らしい光景ですわ……狂気の果ての祭典。美しい。是非ともデミウルゴスに見せて上げたかった。流星は至高の御方々！」

「お……おう」

血に塗れながら、既に息絶えた死体に、狂った様な刃を突き入れる人間達の醜い姿に、アルベドはうっとりとした顔を兜の下で見せる。

声にもしつとりとした響きを感じられた。

（いや、確かに自衛する大切さを教える為に、仇討ちという大義名分で、人殺しを経験さ

せておこうと考えたけれども……)

扇動としてやりすぎた感が否めない。

エンシエント・ワンをしてドン引きの光景である。

村人達が、あの純朴そうな少女に至るまで、狂った様に、刃物を振り下ろすとは思っても見なかったのだ。

精々が村人達が少し傷つけて、死ぬ可能性もそこまで高いとは思っても見なかったのだが、武器の出し過ぎがいけなかったかと、エンシエント・ワンは内心で反省していた。エンシエント・ワンとしてはこれからの生活の当てだとか、損害賠償の一部だよなんて感覚であったのだ。

『なるほど、エンシエントさん。これが謝肉祭ってやつですか？』

『いや、全く違う。ってか謝肉って謝罪する肉の塊じゃないからっ！』

既に原型を保っていない元兵士の亡骸というか。肉の塊をみてメッセージでそうやり取りする二人であった。

十三話。言葉の使い方。心の在り方

亡くなった不幸な村人達の葬儀が執り行われている。

葬儀と言つても墓穴を掘り、死者を埋めただけの粗末な墓の前で、村長が一人一人の生前の良い行いを語り、生き残つた村人達が祈りを捧げる程度だが、遺体が帰ってきてその死を偲べるだけマシだろう。

遺体も戻されず、その死を悼むことも偲ぶこともできない人々も、元の世界にはよく見かけられたのだから。

「これからが大変だろうな」

「でしようね。ですが、生き残れただけ幸運でしょう」

遠目にモモンガとエンシエント・ワン改め、ナインズとエンシエントは墓の前で泣き崩れる幼い姉妹を眺める。

（約束が守れなかつたな）

蹲つて泣きじやくる幼い妹を、気丈にも涙を浮かべながらも必死に慰める少女を見つめる。

この村に來た時に、エンリはお父さんとお母さんを助けると言った。そして、エン

シエントは少女の微かな血と痛みを以って代価とした。

しかし、あの姉妹の両親は既に亡くなっていたのだ。

（守れない約束なんてするもんじゃねえな。全く……）

亡くなった両親を蘇らせる手段は幾つも思いつく。しかし、それはナザリツクに損害以外は齎さない手段でしかない。

結論としては、エンシエントが約束を守れなかった。で片付けるのが一番いいのだ。

馬鹿な男が一人、守れもしない約束をして代価をタダ取りした。そんな悪党がここに一人居るだけの話だ。

姉妹は感謝をするだろう。両親を救えなかった事を責めもしないだろう。

だからこそ、エンシエントは己の中に痛みを残す。それが唯一の償いであり、愚かな男の責任だからだ。

「さて、エンシエントさん。ここで得られるだけの情報は得ましたし帰りましょうか？」
「そうだね。色々と学ばせて貰えたよ。本当に色々……」

「エンシエントさん……。ここには俺がいますよ」

不意にどこかで聞いた言葉を、ナインズが言ったことに面を食らって、エンシエントはキョトンとした表情を浮かべる。

そして、ナインズの意図する事を理解し、エンシエントは心の中にあつた微かなわだかま蟠り

が溶けて消えていくように感じる。

「そうだな。ナインズさん……いや、ここでは敢えてこう言わせてもらう。ギルド長がモモンガさんで本当に良かった。ギルド長で居てくれてありがとう」

「な……なんですか！ 急に！ 止めてくださいよ！」

表情は伺えないが、長い付き合いのエンシエントだから判る。この骨は照れてやがる
と。

「くつくつくつ。まったくいい男だよ。あんたはさ」

「本当に止めてくださいよ！ くそつ、なんでこんな時に沈静化はしないんだよ」

ナインズは閾値を超えない程度の、嬉しさと照れ臭さのせいで、しばらくは悶え苦しむことになった。

「ところで……あの少女の血はそんなに美味しかったんですか？」

知られたくない事を、一番知られたくない人に知られていた事に、後々悶え苦しむ事などを知らずに、今は照れている友人を楽しむのであった。

葬儀と埋葬が終わるのをみて、ナインズとエンシエントが帰る為に、村長に挨拶をしようとした時、ちようど向こうからこちらの姿を見つけ駆け寄ってきた。

その表情には不安の色が濃く出ている。

「……顔色が悪いようですが、何か問題ごとですか？」

「は……はい。その。ナインズ様。実はこの村に馬に乗った戦士風の一団がこちらに向かってくるとのこと……」

「なるほど……」

村長をはじめ遠巻きに立つ男達も不安げに、こちらを見つめてくる。

エンシエントの隣から小さく舌打ちが聞こえた。

隣にはアルベドが立っている。

「人間は嫌いか？」

アルベドにだけ聞こえるささやかな声で問いかける。

「好きではありません。脆弱な生き物。下等生物。虫の様に踏み潰せばどれ程綺麗に

……すつきりするか。……勿論、例外は一人だけおりますが……」

ちらりとこちらを伺うように見ながら、慌てて付け加える。

恐らくは第八階層に住むオーレオール・オメガの事だろう。

ナザリツクの転移を管理する人間種の少女だ。

「好きになれとは言わんよ。タブラさんにそうあれかしと設定されたのだ。そうある事が正しいのだろう。だが演技は必要だ。アルベドなら言うまでもなく理解して行動してくれると信用しているが言わせてくれ。むやみに敵意を振りまくな。お前が人間如きとはいえ嫌われている姿を見るのは、ナインズさんも俺も辛い」

「まあ……勿論でございますわ。至高の御方の御心を痛めるような真似は決して致しません！」

「わかつてくれたならいい。感謝するぞ」

「感謝など……勿体ないお言葉でございます」

胸の前で手を組み、祈る聖女の様な姿で体を器用にうねらせる。フルプレートを着て、どうすればこの様な動きが出来るのか不思議である。

(これで恐らくは……暫くは大丈夫なはずだが……)

エンシエントの危惧していることは、守護者達の思い込みによる暴走である。

守護者を絶対の神の狂信者だと考えたと解りやすい。神の為という思い込みで、意志ある存在は容易く暴走して、全てを巻き込んで自爆する。

そういう危うい存在であるのだ。

故に、ナインズも慎重に支配者として演技をしているのだ。

だからこそ、エンシエントはコントロールが可能だと考える。

要は否定しないこと。肯定しつつ全てを好意的に捻じ曲げる。

それは非常に難しい事だが、タンクとして役者の経験者として誘導する自信はあった。

（とはいえ、ぶくぶく茶釜さんが欲しいところだよな。あの人のヘイト管理は神懸つたし）

エンシエントは心からそう思う。しかし、エンシエントが守護者を誘導する事で、ナインズの肩から少しでも荷を下ろすことができるのだ。

村長と話をしていたナインズが、話を終えてエンシエントとアルベドの元へとやってきた。

「それでどうする?」

「とりあえずは俺とエンシエントさんが、村長の横で対応しましょう。アルベドは済まないが、他の村人を守り、隠れてくれるか?」

「はっ! このアルベド。見事虫ケ……人間にも演技してみましよう」

「う……うむ。お前のその努力に私も嬉しく思う」「まあ……。くふふう……。必ずやモ……ナインズ様の御心を守ってみせますわ!」

アルベドの変わりように、ナインズは頭の上にはなマークを三つぐらい浮かべたように、首を傾げてスキップをするかのような足取りのアルベドを見送る。

「えっと、アルベドになにかしました？」

「あー……とりあえずは後で言うわ。とりあえずはナインズさんは旅の魔法詠唱者^{マジックキャスター}で、俺は……いや、私はナインズ様にお仕える護衛の騎士つて事で……後はアドリブで参りましょう」

「いや、それは……流石に……」

「そっちの方が向こうもどちらの名前を優先で覚えるかとなりますので、いいですね？」

「あ、はい」

簡単な話だ。エンシエントと言う名前を広めるか。ナインズ・オウン・ゴールという名前のどちらを広めるべきかという話と、あとは姓を考える手間や、嘘が露見する可能性を考慮すると、貴族らしい名前っぽい、三節ある名前が主人の方がいいのだ。

「というか。あれは正規兵なんですかね？　なんか装備もチグハグな感じがして、統一性があまり感じられないような」

「どうなんでしょうか。ナインズ様。とりあえずは、私が前に出て盾となりましょう。交渉はお任せいたします」

「あつ、はい。なんか、調子が狂うな」

（そんなことを言われても、即興劇はなりきりが早ければ早いほど、成功率が高くなるから我慢してほしい）

エンシエントは相手から見えている事も考慮して、足元から拾う仕草で、インフイニテイハヴオザツク無限背負い袋から盾を取り出すと、向かってくる戦士の集団に対して、二歩ほど進んで直立不動にて待つ。

そして戦士団は、下馬せずにエンシエントから五歩程離れた距離で立ち止まった。

「所属不明の戦士に告げる。貴殿らは何者で、何用にてこの村に参られたのかっ！」

エンシエントは劇団で鍛えた発声法を使い、相手の頭の上に放つようにして、腹に力を込めて問い掛ける。

「——私は、リ・エステイゼ王国、王国戦士長ガゼフ・ストロノーフ。この近隣を荒らし回っている帝国の騎士達を討伐するために王のご命令を受け、村々を回っているものである！ 貴殿の名を伺いたい！」

「私は、主、ナインズ・オウン・ゴールに仕える護衛の戦士エンシエントと申すっ！ 濟まないが貴族ではないため性は持たぬ」

エンシエントは後ろを振り返ると、村長から真偽を問いただしたのだろう。ナインズが微かに顎を引くだけの領きを見せた。

「王国戦士長ガゼフ・ストロノーフ殿。疑うような真似を大変失礼した。主がお話なられるそうである」

「了解したっ！」

ガゼフは後ろの戦士達を手で制すると、馬から降りて、歩いて近付いてきた。

エンシエントは二、三步横に移動して、頭を下げるだけの礼をもって道を開けた。

(……この御仁は……強いな。恐らく俺が王国の至宝を纏つて勝てるか……。ふつ。勝てはしないだろうな。ふふ、世界は広いようで狭いな。この俺ですら勝てるところが全く想像がつかない武人がいらつしやるとはな)

ガゼフはちらりと視界の端に留める程度に、真紅の鎧を纏つた戦士を見つめて、胸に熱いものが灯る思いだ。

時間さえあれば手合わせを願ひ。一手なりとも教えを請いたいという衝動が心の奥底から湧き上がる。

だが、それは叶わぬ願ひだ。王国に仕えていなければ跪き、最大の礼をもって師事を願ひ出たであろうが、忠義は既に捧げた身である。

立ち居振る舞いも礼節を知る者のそれであつた。

心根も素晴らしいものであるに違ひないと思わせる何かが、大盾を持つ戦士にあつた。

歩きながらもガゼフは視線を、次々と移しながら歩みを進める。

まず、エンシエントへと向けられ、次にナインズへと向けられ、流すように村長にちらりとだけ視線を向けると、ナインズへと視線を戻す。

（あれ程の御仁が仕える方と言うことで、それなりの人物なのであろうと思っはいたが……）

ガゼフはやや険のある視線をナインズに向ける。

だが、たかが人間の力だ。ナインズはピクリとも反応せずに、その視線を受け止めた。（なるほど……な）

「……この村の村長だな」

ちらりとだけ再び視線が移されたあとで、無遠慮とも取れる視線をナインズへと戻した。

「隣の御方が、あの御仁の主であるナインズ・オウン・ゴール殿と言う事でよろしいか？」

「そうです。私がエンシエントの主であるナインズ・オウン・ゴールと申します。この村が騎士に襲われている所に居合わせたので、助けに入った魔法詠唱者です」
マジックキャスター

その言葉を聞くと、ガゼフは目に優しさが浮かんで、その場で深々とナインズへと頭を下げた。

無骨な鎧の重い金属音が響く。

「この村を救っていただき、感謝の言葉もない！」

そして、一度頭を上げると、エンシエントを向いてもう一度、深々と頭を下げる。

エンシエントはその姿に口角を上げて深い笑みを形作る。そして、ガゼフの肩に手を

置くと、少し強引に頭を上げさせる。

「王国の戦士団の長足る者が軽々に頭をお下げに成されるな。ひいては王国の戦士団も軽く見られましょう。私は主のお命じになられるままに働いたまで、頭を下げられる様な事はしてはいない」

「その通りです。我々も報酬目当てでしたようなもの。頭を下げられることはしていませんよ」

「ほう。報酬か。とすると冒険者なのかな？」

「それに近いものです」

ふむ。とガゼフは髭の生えた顎を撫で上げる。

「なるほど。かなりの腕の立つ冒険者達とお見受けするが……寡聞にしてゴール殿の名は存じ上げませんな」

「こちらには旅の途中、たまたま通りかかったもので、さほど名が売れていないのでしよう」

「……旅の途中か。優秀な冒険者達のお時間を奪うのは少々心苦しいが、村を襲った不快な輩についてと詳しい説明を聞かせていただききたい」

「もちろん喜んでお話させていただきます。しかし、その前に村長殿を休まさせて上げてほしい。不逞の輩の襲撃から問もなく、先程、亡くなった村人の埋葬も済んだばかり

……。少し酷かと思えます」

「では、我が主よ。村長を家に連れて行って下さい。説明なら私にでもお任せください」
「そうか？ すまん。エンシエントよ。私も魔法を使って少々疲れた。村長のお宅で休ませて頂こう。戦士長も構いませんか？ なんてしたら、村長宅でお話をさせていただいても構いませんか？」

「いや、村人を救ってもらい、尚且、こちらで無理を言うことはしたくない。エンシエント殿にお任せ出来るかな？」

「ええ、お任せを……では、こちらへどうぞ」

エンシエントはガゼフを連れて、村外れから更に離れた場所へと移動する。

後ろから部下である戦士団もついてくる。

「ここにはなにが？」

「いえ、殺した兵士達を見せた方が早いと思ひまして、埋めた場所までご案内させていた
だいた」

立ち止まった場所から、少し離れた場所を指差す。

指が差されたところは、周囲の土とは変わって荒れている。

それは明らかに穴を掘って埋めたように、少しだけ土が盛り上がっていた。

「流石に死体をそのままにしておきますと、病が流行る可能性がある為に、このように処

置を致しました」

「なるほど……。それはそのまま？」

「いえ、破壊された村の復興に金も必要であろうと、主が剥いだ装備を村長宅に保管しております。なんでしたら、掘り起こして確認をしますか？　あまりいい光景ではありませんがね」

数人の戦士が野営用のテントを張るためのシヨベルを手に持ち、荒れた大地へと近付く。

その戦士達は、ガゼフの顔を伺う。その視線に、小さく頷くと掘り返すように、穴を掘り始めた。

「確かにそうであろうな。因みに貴殿が大半を殺されたのか？」

「いえ、私はナインズ様の身边を護衛するのが任、大半は主が魔法で打ち倒されました」

大きい盾を掲げてみせる。大人でも一抱えはある盾を軽々と持ち上げる臂力と、盾の素晴らしさに目を瞠^{みは}る。

「盾も見事だが……。ゴール殿は素晴らしい魔法詠唱者^{マジックキャスター}なのだ。もしかしたら第七位階の魔法もお使いになられるのかな？」

「さて、私は魔法関係には疎いものでして、お恥ずかしいばかりです。戦士長とも成られると魔法にもお詳しいのですか？」

「いえ、生憎、私も魔法の事はさっぱりでして、いけませんな。武のことに長けておる自信はあったのですが、貴殿を見れば何とも竜王も知らぬ仔竜だった思いです」

「何をおっしゃいますか。身のこなしを見ればわかります。貴方はお強い」

エンシエントは拙いなりにカマかけを行い、情報を引き出そうとしてくるガゼフの強かさに内心舌を巻く。

筋肉だけの脳筋とは一味も二味も違うようだ。

（だが、甘いぜ。ガゼフさん。あんたは素直過ぎる。第七位階なんて言葉を出しておきながら、魔法の事はさっぱりだなんてありえない。どちらかは嘘でカマかけ。としたら、第七位階云々がカマかけだ。貴重な情報をありがとよ）

「ところでお二方のしゅ……」

「戦士長様！ 出ました。複数の帝国兵と思われる死体です！ 体つきから見て、兵士に間違いはないかと！ しかし……これはうげえ……」

見聞の為に死体を穴から引き出していた兵士が嘔吐する。

「どうしたっ！」

少なくとも死体など見慣れている手練の戦士が、死体を見て吐くという異常に、ガゼフが早足に穴の縁に近寄って中を覗き込む。

ガゼフの顔色が微かに濁る。

(ああ、あれは当たり前を引いたな)

エンシエントは心の中で苦笑を漏らした。

この死体はもちろんナインズとエンシエントか埋めたものではない。

ナインズとガゼフがやり取りをしている最中に、隙を見てセバスにメッセージを送り、密かに穴を掘らせ、ナザリックに回収した死体を埋めさせたのだ。

その中でも一番グロい死体は村人達が作り上げた。あの肉の塊だった。

恐らくは兵士が引き当てたのは、その肉の塊なのだろう。

「エンシエント……殿……これは……！」

「これとは何を指してらっしやるのかな？」

ガゼフはエンシエントと穴の中の死体を交互に視点を動かす。

そこには隠せない動揺が露わになっている。

「その……原型を保っていないものがあるだが……」

「ああ、それは私刑にしたものでしょう。安心してください。死んだ後に行われたことですので」

「では、村人達が勝手に……？」

「勘違いしないで頂きたい。村人が勝手にやったものではない。私が許可をしたのです

」

「なっ！ 貴方のような御仁が……」

ガゼフは今度こそ隠さずに愕然とした表情を浮かべた。

それに触発されたのか。兵士達数人がシャベルを捨てて、剣に手を添える。

「貴方がたの中に、野盗に家族を殺された者は？ 理不尽に身近な人間が殺された者はいらっしやいますか？」

「王国の戦士団は多くの平民を抱えている。その中には理不尽に身内を殺された者もある」

「心がお強いのでしょうか。だが、世の中には強くなれぬ者もいる。戦士団に入れたことも運が良かったのでしょうか。だが、そう成れない者もいるのも事実。死体にだろうがせめて一太刀と願うのが人の心というもの、そんな遺族に戦士の矜持だとか、人としての尊厳とやらを押し付けるといいますか？」

エンシエントの脳裏に、約束を守る事が出来ずに、墓の前で泣き崩れる幼い姉妹の姿が過ぎる。

はつきりいうと可哀相だとかいう感情は浮かんでは来ない。ただ、その姿に己の考えの浅さと愚かしさに腹が立つのだ。

厳しい言葉にじわりとした目に見えない圧力が高まってゆく。

それは胸がつかえる様な重さで、胃の底に溜まり全身から脂汗を滲ませる。

「いや、すまなかつた。確かにこれは身勝手な考えであつた。蒙もうを啓ひらかれた思いだ。失礼をした。この通りだ。謝罪する」

「戦士長様っ！」

「お前達もこの御仁に刃を抜く事は許さんっ！ これは我らが驕おごつていたということだ。真に民に寄り添っていない証拠しやうこだ」

エンシエントは細く息を吐いた。するととたんに今まであつた圧力が霧散して消えてなくなつた。

「先程も申しましたが、王国の名を背負う者が頭を下げるものではないでしょう。間違えたなら頭は下げるものではなく、頭は使うものです。貴方達は王国の守護者ならば、民の事を努々ゆめゆめ忘れ召されぬよう。お願い申し上げます」

「はっ！」

戦士長と戦士団の全員が、声を揃えて礼を行う。

そんな一団に、エンシエントは満足気に頷くのだつた。

十四話。 現実アニメじゃねえーんだよ!

村長宅でエンシエントは頭を抱えて蹲っていた。

「人としての尊厳とやらを押し付けるといいますか？ キリッ！」

「ぐおおおつ！」

「民の事を^{ゆめゆめ}努々忘れ召されぬよう。ドヤッ！」

「ぎゃああああー！」

悶え苦しむエンシエントの横で、ナインズが感動したような口調で語る。

再現する言葉の最後にキリッだのドヤッだのと、態とつける辺り悪意しかない。

ナインズとしてもパンドラズ・アクターの事で散々弄くり回された恨みを忘れていない。
い。

沈静化するとはいえ恥ずかしいものは恥ずかしいのだ。

それだけならばエンシエントは、遠慮なくナインズにパンドラズ・アクターや、ゲーム時代の言動を上げて言い返していたであろう。だが……

「素晴らしいっ！ お言葉の数々、私も感動致しました。その慈悲深さ。知の深遠を見られるような深いお考え……。このアルベド、感動を禁じえせんっ！ そうですわ。

エンシエント様のお言葉を本にして守護者達に！」

「や……やめろおお！」

目をキラキラとさせて、感動に瞳を潤ませる守護者統括が隣にいるために、弄り返す事が躊躇われるのだ。

しかも、アルベドとしては全くの悪意なく純粹に感動を伝えてくるのだ。

「ん……んん。っ。アルベドよ。それはやめるのだ。この場にあつて耳にする事によつて意味が伝わる事なのだから、ここに居らぬ者に伝えた所で、感動までは伝わるまい」
「左様でございませうか？ いえ、きつとそうなのですね。これはここに居た者にだけ与えられた特権……くふふふっ……」

本にまですると言われては、からかっていたナインズとしても、憐れみを禁じ得ない。少なくとも自分がパンドラズ・アクターの言葉を本にされて、ナザリツクに配布されたら旅に出る。きつと守護者の決してこない場所まで走つて逃げるだろう。

「……くそ……ナインズさんめえ……」

「ま、まあ、あの感動的な言葉のお陰でガゼフとかいう人間も、こちらを全面的に信用してくれたようだし、王国に大きなツテが出来たと思えば……ね？」

流石にやりすぎた感をアルベドの言動から、感じ取つたナインズは慌ててフオローする。

掌をクルックルと百八十度も回転させるフル稼働の骨ファイギアがごと、エンシエントは恨めしげに見上げる。

現在村長宅には村長はいない。

掘り返した死体を埋め戻した後で、村長宅に装備の確認に訪れた戦士長に急報が告げられたのだ。

謎の集団が村を取り囲んでいる。

その一報を聞いた瞬間、エンシエントはナインズと顔を見合わせた。

もしかしたら村の周囲に展開させているナザリックの後詰めが発見されたのではと。

しかし、報告にきた戦士の一言で杞憂だとわかった。

天使も空に浮いているらしい。ナザリックに天使かそれに属するものは一人しか存在していないが、あれを外に出す事など、ナインズの命令がない限りはありえない。

村長は村人達を集めて集会場のような場所に隠れてもらっている。

万が一に備えて、冷静な判断が出来るセバスをつかせているので安心だ。

『どう思う。ナインズさん?』

『天使って何なんですかね』

『まさか、神が実在でもしてるとか?』

『どうなんでしょう。もしそうならワールドエネミーの可能性も考えないと』

『スレイン法国だっけ、神がいるとしたらそこだろうな。そういえば、あのガゼフから聞いたんですが、この世界の魔法形式も位階魔法と言うらしいですよ。俺にナインズさんが第七位階まで使えるのかと聞いてきましたから』

『第七位階ですか？ それは最低ラインって意味ですかね』

『いえ、声と口調からして、ありえない魔法って認識のような感じがしました』

『はっ？ いや、それは流石にないんじゃない？』

『さあ、どうなのかは知らないが、カマかけっぱかったんで、魔法の事はよく知らんという事にしたいけどね？』

等と、お互いアルベドが側にいるためにメッセージでやり取りをする。

暴走候補筆頭のアルベドの前で、ガゼフからの程度の知識を持っているのか？ と
いったやり取りをすればどうなるか。

『なら、あの虫……人間種を攫って情報を引き出しましょう』なんて言い出すのは容易く
視える。

「しかし、何者なのかね？ こいつらは」

ナインズの前に浮かぶ遠隔視ミラー・オブ・リモート・ビューイングの鏡に目を向けると、草原を駆ける戦士団と、その先に待つコートの様な鎧を着た集団が待ち受ける。

その上には人間を睥睨するように宙に浮いて見下す白い天使の群れ。

その見た目はユグドラシルにいた炎の上位天使アークフレイルム・エンジエルそつくりだ。と言うより、そのまんなにしか見えない。

「あつ、これ炎の上位天使アークフレイルム・エンジエルのもう一つ上の監視プリンシパリティ・オブザベインヨンの権天使じゃないですか？ 懐かしいな」

「そういえばPKする時に、わらわら居てウザかったですよね」

「あの時、ウルベルトさんがキレて、大災厄グランドカタストロフを使って、後悔してましたよね。美味しいシチュで口上が挙げられなかったって」

「あの時は素のウルベルトさんでしたよね」

二人で天使を見て、過去の出来事を思い出してクスクスと笑い合う。

そんな話をしていると、映像の向こう側では戦闘が開始されるようだ。

「さて、見せてもらおうかね？ 王国最強の剣の実力をな」

「では、私は天使の強さを見せて貰いましょうか」

天使の見た目が同じだからといって、強さまで同じとは限らない。

二人はそれぞれ自分の解る範囲の相手を調べる事にした。

戦闘の開始はガゼフの雄叫びから始まったようだ。

ガゼフは軍馬を疾走させながら弓を取り出して、矢を番えて山なりに矢を放つ。

それは狙い変わらず、変な鎧コートを纏った男に進み、当たる直前で不自然に弾かれた。

「一矢守りの障壁《ウオール・オブ・プロテクションフロムアローズ》ですかね。第二位階の。けど弾かれたように見えたので、矢の威力次第ですが、もう一つ上かもしれないですね」

「矢の威力は距離があるからそこまで無いんじゃないかな？　魔法の弓では無さそうだったし、それよりもよく鍛え上げられている」

「あのガゼフとかいう戦士ですか？」

「ああ、それもあるけど軍馬もかな。乗り手の動きに合わせて膝で衝撃を殺してるみいだ。心が通じてるんだな。良く訓練された軍馬だ」

エンシエントはガゼフの動きを見て、よく訓練されている様子が、何故かよくわかった。

別にその手の知識に詳しくはなかったわけではない。この体になって今までにない知識が湧き上がるように、感覚でわかるようになった。

「あつ、振り落とされたな」

「あれは魔法の効果かな。知能の低い相手を混乱させる精神系ですかね？」

鏡の向こうではガゼフが、グレートソードを振るい襲い来る天使を切り払っている。

その映像をみて、ナインズとエンシエントは顔を見合わせた。

「よわっ！」

低レベル過ぎて見てられない。まるでユグドラシルの初心者の戦いを見ているようだ。

「いや、そこは切り払うなよ！ 引き付けてから突け！ つか、この武器はオリハルコンですかね？」

「さあ、鍛冶長に見せればわかるのかもしれませんが、少なくとも魔法武器ではないですね。それとこの天使もユグドラシルにいた炎の上位天使アーケフレームエンジェルと強さはあまり変わらないです。少し強い気がするのも監視の権天使の効果と考えると一緒と見て間違いないでしょう」

「うーん。だとしたら、このガゼフとか言う戦士のレベルは、およそ三十前後って感じですかね？」

「えっ!? そんなもんなんですか?」

「そんな物かと思うな。ただ、動きが上手いから潜在的な強さはもう少しあるかも?」
ナインズはエンシエントの言葉に、ガゼフという戦士の戦いを見つめる。

確かに普通の剣を使つての、戦闘と言うことであればそんなものかもと思える。自分ですら目で容易く追える程度の速さしかないのだ。

エンシエントの動きを知るナインズにしてみれば、蠅ハエが止まる速度にすら感じられる。

ただ、エンシエントの言うとおりの体の動かし方やフェイントの掛け方を見ると上手い。

それでも、ナインズが前衛として戦うならば、負けはしないが、少しは梃子摺るだろうってレベルなだけだ。

魔法を使えば一瞬で倒せるだろう。

「おつ、いきなり動きが少しだけ良くなりましたね。何かのスキルか？」

「レベル三十前後として見るなら頑張ってますけど、もう終わりでしょうね」

「体力が尽きたね。これで終わりか」

「それじゃあ、そろそろ……」

「さて、俺は手を出さないんで、存分に実験してください」

「おお、有難うございます！」

「お供させて頂きます」

タイムストップ
グレイター・テレポーション
「時間停止。上位転移！」

タイムストップ
グレイター・テレポーション
時間停止を掛けてから、上位転移で転移する。

とんだ瞬間に周囲を警戒する。見る限り天使も含めて、動く存在はナインズ達だけのようだ。

「時間停止対策もされていないなんて、少なくともプレイヤーはいないようですね」

「基本中の基本だもんな」

とりあえずは傷付いて倒れている一般戦士達と、剣を構える戦士長をゲートで集会所の中へと運び入れる。

「さて、始めましょうか」

「それじゃ、俺は高みの見物させて貰うけども。危なくなったら手を出すからな。まあ、アルベドが居れば問題は無かろうが……」

「勿論ですわ! 私がついている限り至高の御方々に傷一つ……髪の本一本傷も付けさせませんわっ!」

「いや、やばくなるまで手を出すなよ……」

「遊んでないで、始めましょうか。ウズウズしてるんですから」

そういうと途端に世界が動き出す感覚が訪れた。

ナインズから時間停止を解除したのだ。

陽光聖典の隊長であるニグンは、戸惑っていた。

あと一息で殺せそうだった王国の剣ガゼフ・ストロノーフが消えたと同時に、草原には三つの影だけが残されていたからだ。

一人は魔法詠唱者マジックキャスターと思われる魔法のローブを着た人物と、その斜め後ろに巨大なハルバートを構える女性のシルエットを持つフルプレートフルプレートの戦士。

更に後ろ三步程離れた、後方にダラけた姿を見せる真紅のフルプレートを着た盾の戦士がいた。

その中でも顔が見えているのは一番後ろの兜を着けていない戦士だけだ。

「な……何だ貴様らは？」

「はじめましてスレイン法国の皆さん。私の名はナインズ・オウン・ゴール。ナインズと親しみを込めて呼んで頂けると幸いです」

「ふああ。暇だなあ」

後ろで盾を地面に降ろして、その端に顎を乗せてだらけるエンシエントには、緊張感の欠片もない。

少し離れて会話をしているナインズとスレイン法国とのやり取りは取り零しが無いように聞いてはいるが対した情報も出てきていない。

「どうやら舌戦とも言えないような降伏勧告を……否、慈悲勧告を蹴って戦闘を選んだようだ。」

「愚かだねえ。その愚かしさが愛おしくなるほどだぞ。人間……」

ナインズにけしかけられた天使達は、あろう事か後ろで戦う意思を全く見せていないエンシエントにまで襲いかかってきた。

それらをニヤリと笑みを微かに浮かべるだけで、何も行動を起こしたりせずされるが

ままに、放っておく。

突き出された天使の槍は三本。だが、尽く弾かれてただ天使が傷付く。

「なんだっ！ 魔法詠唱者マジックキャスターだけでなく、後ろの戦士も何をした！」

次々と連続して振るわれる槍の中を大きく伸びをする。

「んーっ！ このまんま放置して、自滅させるのも勿体ないかなあ。ナインズさん。

「こつちに来た奴は食っていいかい？」

「ああ、構わないとも。勿体ないですからね」

天使が一人相撲のようにただ無駄に槍を振るう中で、のんびりとした会話を行う二人に、ニグンは怖気が走る。

「はははっ！ そうか！ マジックアイテムだな！ その盾がマジックアイテムかっ！」

的はずれな事を狂ったように叫ぶニグンを、エンシエントは呆れたように見つめて、インフイニティ・ハヴオザツク無限背負い袋に盾を収納すると、代わりに「血ヲ啜り肉ヲ喰ウ」を取り出した。

だが、当然のように盾を収納しても、槍を振るうたびに天使だけが傷付いてゆく。

「マジックアイテムじゃない。パッシブスキルだよ。そんじゃあ、成長の為の糧になつてくれや！ 全てを喰らえ。我が半身よ！」

血の結晶のように紅い斧を一振りすると、周囲を取り巻く天使達は一瞬で消滅をす

る。

そこに抵抗らしい抵抗を受けた様子はない。あのガゼフ・ストロノーフですら武技を使って微かな抵抗の元に漸く斬れる第三位階の天使達をだ。

「バ……かな！ バカなっ！ ありえるかっ！ 第四位階の天使だぞっ！」

遠くの方で天使三体が切り裂かれるのとほぼ同時に、監視の権天使も、フリンシバリテイ・オブザベイシヨン ナインズの獄炎で欠片も残さずに消滅させられていた。

頼りにしていた隊長の天使が一撃で倒された事で恐慌状態を起こした隊員達はてんでバラバラに、思いつく限りの魔法を使う。

そのどれもがナインズに届く事もなく消滅していくのを見て、ついにはスリングの鉄球まで使う始末だ。

「えっ……っ？」

鉄球を打った兵士の最後はあつけないものだった。周囲の人間がアルベドの爆発音のような踏み込みの音に気を取られた時には頭が消滅する。

そして、ナインズの前にはバルディッシュを振り抜いた体勢のアルベドが立っていた。

「アルベドよ。あの程度の攻撃ではこの身が傷付かないことは承知のはず……」

「お待ち下さい。ナインズ様っ！ 至高の御身と戦うには、最低限度の攻撃というもの

がございます。それを下賤な飛礫などと……っ！」

「はっはっはっ。それを言うならこいつら自体が失格ではないか。なあ？」

ナインズはそういうと挑発するように、ニグンへと視線を向ける。

その視線の意味がわかり、ニグンは奥歯が砕けるほどに食いしばった。

「時間を稼げっ！ 最高位天使を召喚するっ！」

ニグンは懐から青く澄んだ水晶を取り出して掲げる。

その言葉と水晶にナインズは初めて警戒を露わにした。

「あれはまさか魔封じの水晶か……それも輝きからすると超位魔法を以外を封じられるものだな？ やれやれ、ユグドラシルのアイテムもあるわけか……すると最高位天使の正体は熾天使級？ アルベド、特殊技術スキルを使用し私を守れ。流星セラフ・エイスマスファイアに恒星天の熾天使以上は出ないと思うが……」

「見よ！ 最高位天使の尊きすが……」

「ふーん。これが切り札ねえ。ほい。ナインズさん」

掲げて今発動する、という緊張感の中で、ニグンの手には何も握られてはいなかった。持っていた魔封じの水晶は消え失せて、それはまるで石ころでも投げけるかのように、ナインズへと放り投げられていた。

エンシエントの手によって。

「は……はあああああ!?!」

「いや、口上が長過ぎだわ。言い終わるまで相手が待つと思うなよ。アニメじゃあるまいし、さっさと使つとけよ」

放り投げられた水晶はすつぽりとナインズの手の中へと収まり、辺りからは緊迫感が消失する。

「あー……付与魔法探知……っ!? これはっ! これが最高位天使の正体と言う訳かつ!」

ナインズは水晶に込められた魔法を調べると、突然俯いて顔を抑え込んだ。

「おのれえ、なんと卑怯な真似を、それを返せ! 貴様の愚劣な輩には過ぎたものだとわかったであろう!」

『そんなにヤバイものが込められてたのか? ナインズさん』

『あー……もうどうでもいいって感じです。とりあえずは召喚するんで、エンシエントの武器の糧にしてください』

『えっ? まあ、いいけども……』

ニグンはなんとか取り戻そうと、プリンシパリティ・オブザベイシオン監視の権天使を再度召喚して、奪い返そうとするが、それよりも早くナインズの召喚は完了していた。

「いい。威光の主天使!」

「なんつと言う事だ。敵に召喚させてしまうとはっ！ おのれおのれおのれええ！」

ニグンは怒りの後に驚愕に呆然とすることになった。

「エンシエントさんを攻撃せよっ！」

「なっ……何をっ！ ナインズ様っ！」

話の通っていないなかったアルベドが、ナインズのあり得ない行動に、驚愕して引き留めようとする。

「アルベド、いいんだ。予定通りだからな！」

アルベドがその意図を聞く前に、エンシエントから声がかけられる。

「喰いではさつきよりありそうだが、物足りねえーなつとー！」

エンシエントは威光の主天使より高く跳び上がると、頭から股下まで、一気に「血ヲ啜り肉ヲ喰ウ」を振り下ろした。

ニグンが法国の上司から直接賜り、魔神すらも一撃で葬り去ると言われる。最高位天使と呼ばれる者は、たった一撃を持って滅び去った。

更にはついではばかりに、ニグンが呼び出したばかりの監視プリンパリティ・オラザベシヨンの権天使も一閃にて滅ぼす。

「そ……んな……ばっかな。魔神をも葬り去る最高位の天使なのだぞ……！」

「良かったな。私が召喚主で。お前が召喚をして、一撃で滅ぼされていたら発狂してい

たんじやないか？」

「これが奥の手だとしたら、俺がいる意味がない。むしろ、アルベド一人でも十二分過ぎることだったな。ナインズさん。俺は村に戻っておこう。そして追い返したとでも言っておくから、そのまんま、ナザリックに招待してやってくれ」

「ああ、ありがとう。我が友よ。さて、貴様らには絶望を知って貰おうか？」

エンシエントは村へと向かって歩く。背中に愚かな男達の絶望の声をBGM代わりに聞きながら、その足はとても軽やかなものであった。

十五話。底の見えぬ深謀遠慮と慈悲深さ。

ナインズ達一行がナザリックに帰ってきて最初に行つた事は、エンシエントの謝罪であつた。

結果的にナインズも行動した訳だが、その切つ掛けはあくまで、エンシエントが先に行動を起こした事だ。

ナザリックの為だけを思えば、あの時点ではなんの利益も認められない村の救助など、個人の我侷でしかない。

故に、如何な至高の四十一人とも言えども、ケジメはつけなければならないのだと言う事を、守護者達にも知らしめる為に、エンシエントは謝罪をする必要性をナインズに訴えた。

結果として、王国戦士長との友誼が結べたとしても結果論であると。

その為、現在は人間種の姿をやめて、元のヒル人間へと戻っていた。

アインズが玉座の下に整然と並ぶ、守護者各位やプレアデスの面々を威厳ある姿で睨める。

「皆、忙しい中、玉座の間に集まってくれて感謝しよう！」

前回の謁見では守護者だけだったが、今回はセバスを筆頭にプレアデス達まで集めている。

「感謝などと……。我ら至高の御方の忠実なる下僕。お呼びとあらば何を置いても馳せ参じるのが使命であります」

「そうか。デミウルゴス。そう言つて貰えると私も心が軽くなる」

「勿体ないお言葉です」

「エンシエントさん」

「はっー」

名を呼ばれて玉座の横に立っていたエンシエントが、一步前に前に歩み出る。

「本日、皆に集まつてもらつたのは他でもない。まずは今回、勝手に動いたのは俺の浅慮故の行動である。それをまず皆に謝罪する！」

エンシエントは謝罪をすると言葉にするだけで、頭を下げたりはしない。

それでは、ガゼフと同じだからだ。

「な……。何を仰せられてらつしやるのですかっ！ 至高の御方が謝られるようなことは何一つとしてごさいません！」

「そうでありんす。私達は至高の御方の御心に沿う為に生み出された下僕、御心のままに動かれる事が正しいことと思ひんす！」

貴族の礼法のように胸に手を当てて、軽く体を折り曲げる。

「お前達の厚い忠義と優しさに感謝しよう」

「モ……勿体ナキ才言葉ヲ頂イテ、我ラコソ感謝ノ言葉モ御座イマセン」

「私達守護者が至高の御方に忠義を尽くすのは当然です」

「は……はい。僕も忠義を尽くしたいと思ひます」

アルベドを除く階層守護者達の声を聞いて、ナインズは手を大きく打ち鳴らしながら立ち上がった。

「素晴らしいぞつ！ 皆の者！ お前達の厚い忠義は我らはしかと受け止めた。そして、暗い話はこれくらいにしておこう。何があつたかはアルベドから聞くように。ただ、その中で一つだけ至急、この場の者、そしてナザリック地下大墳墓の者に伝えるべきことがある。——グレート・ブレイク・アイテム上位道具破壊」

ナインズの言葉に、壁にフラッグポールで飾られている紋章旗の一つが蒼い炎を上げて燃え消える。

その光景に玉座の間にいる者達全員が驚愕の声を上げた。

その紋章旗が指す人物は、モモンガを表す物であつたからだ。自らの旗を焼くという行為に何事かとざわめく。

そんなざわめく中で落ち着いた一人の人物が、ナインズの前に歩み出る。

その姿を認めて、玉座の間にいる者は見た喉を鳴らして、成り行きを見守る。

ナインズの前に歩み出た人物、エンシエントは綺麗に三角に折られた一枚の旗を掲げるように持ち、膝について差し出す。

ナインズはその旗を恭しく受け取ると、端を持って宙に放り投げた。

すると、一枚の紋章旗が焼かれたモモンガの紋章旗のポールに綺麗に納まり、その威容をはためかせる。

「私は名を変え、ナインズ・オウン・ゴールと名乗る！ これからはナインズと呼ぶがいー！」

「そして、名こそ変わらぬが私もエンシエントと名を縮める！」

エンシエントも横で胸を張り告げる。

エンシエントの言葉を待ってからギルドスタッフを床で鳴らす。

「我らの決定に異論ある者は立って示せ！」

静寂が玉座の間に満ちる。声一つ呼吸音一つとして誰も鳴らしてはならぬ厳肅さが玉座の間にいる者達に迫られる。

「ご尊名伺いました。ナインズ・オウン・ゴール様。エンシエント様、万歳！ いと尊き方々、ナインズ・オウン・ゴール様。エンシエント様にナザリック地下大墳墓、全ての者よりの絶対の忠誠をつ！」

アルベドに遅れて守護者達も声を上げる。

「いと美しき君、我らが絶対の支配者。ナインズ・オウン・ゴール様。エンシエント様に栄光を！ 下僕全ての忠誠を捧げます。万歳！」

「絶対ノ強者デアリ、至高ノ御方ニ剣ヲ捧ゲマス。ナインズ・オウン・ゴール様。エンシエント様。万歳」

「慈悲深く、強大なる至高の御方に忠誠を。万歳っ！」

「ほ……僕達の頭上高くに居まします慈悲深い御方に絶対を誓います！」

「我らの絶対の支配者、端倪すべからざる方々に全てを捧げます！ ナインズ様、エンシエント様に全てを！ 万歳っ！」

「死の支配者。鮮血の王。ナザリツクに栄光をつ！」

全員の言葉が言い終わるのを待ち、エンシエントがナインズの斜め前に歩み出る。

そしてマントを翻すように、片腕を広げると、背後から無数のコウモリが祝福するよ
うに飛びたつた。

「聞け！ 守護者達よ。そしてナザリツクにいる全ての者達よ！ この世界でナインズ・オウン・ゴールを不変のものとせよ！ 天空に！ 海に！ 地の果てに！ 全ての知性ある者たちに、そして世界のどこか、例え世界を隔てた場所に居ようとも、我らが友。汝らが創造主に名が届くように！ 我らはここにいます、ナザリツクはここにある

と知らせるのだ！ 我らはこの地で狼煙をあげるのだっ！」

大歓声が玉座の間に木霊する。

それはナザリツクを。ひいてはこの世界を揺るがすかのように高らかに響き渡る。

ナインズとエンシエントが姿を消した後の玉座の間には、全員が興奮のままに居残っていた。

皆が居残る玉座の間で、アルベドは村で起こったこと、見たことを皆に話した。

「というわけよ。これが今回起こったことの全て、震えが来る思いね。デミウルゴス……」

「ええ、まさに……まさに端倪すべからざる御方々です！」

「ど……どういふことですか？」

二人だけで解り合っている事が何を指しているのかわからずに、マールが不思議そうに問い掛ける。

「ふふ、デミウルゴス。ナインズ様とエンシエント様があの夜に語られた事を教えてあげてくれる？」

「はい。あの夜に至高の方々は夜空を見上げ、地上を睥睨し、天空の星々と、地上に向かって手を伸ばされてこう言われました。まるで宝箱のようだ。宝石箱のようだ。」

そしてこうも言われました私の創造主、ウルベルト・アレイン・オードル様が共にいらつしやれば、征服を望まれるだろうと。それに多くの至高の方も賛同するであろうと！
最後にはナインズ様が魔王をなさるとっ！」

「それを踏まえて今回の行動を当ててみれば簡単な話、情報の取得と実験体の確保、さらにはこの地の橋頭堡と国家に繋がる伝手まで確保されたのよ」

「それは……まさに一石四鳥ともいふべきなんと言ふ一手を打たれたんでありんしょうか……」

「シャルティア。それだけではありませんよ。ナインズ様とエンシエント様は自身の変化やこの地の戦闘力分析、この世界の人間心理の探求、少なくとも私達如きが思いつくだけでも、これだけの効果をあげられたのです。あの方々ならば、更に多くの意味があるのでしょうか。それもナザリックが異常に見舞われた数日の後に、たった一日の事ですよ？ ああ。何たる深謀、何たる叡智と行動力！」

「流石は私達の至高の支配者様達だよね！」

「ウム！ アノ至高ノ御方々ニ掛カレバ、デミウルゴスデスラ読ミ切レヌトハナ」

「す……凄いですよね！」

アルベドは愛しい方々の守護者達が讀える言葉に頬を緩ませていたが、その顔を守護者統括らしく、キリリと引き締めて凜々しい顔になると、守護者、その後ろに並ぶ下僕

に向き直って告げる。

「これよりナザリツクの目標は、この世界にナインズ・オウン・ゴールの名を知らしめる！ この世界を、至高の方々への宝箱を、その身を飾る宝石箱をいと尊き御方々に捧げることだと知れっ！」

「はっ！」

場所は変わって、ナインズの執務室へと四人は移動をした。

とりあえずはナザリツクの今後を決める為に、ナインズとエンシエント、防衛指揮官であるデミウルゴスと統括であるアルベドが集まっている。

「今回の事は色々と忙しくさせたなデミウルゴス」

「何を仰せられますか。エンシエント様のご慧眼には恐れ入るばかりでございます！」

「そ……そうか？ そう言ってもらえると嬉しいな」

「因みに、今回接触した村ですが……」

「あそこはそうだな。とりあえずはエイトエツジアサシンを配置して、しばらくは監視だな」

「はい。そう言われると思い、勝手ながら後詰にあてたエイトエツジアサシンを数体配

置させておきました」

「流石はデミウルゴス。ナザリツク一の知恵者なだけはあるな。頼もしい限りだ」

「何を仰せられていらつしやるのか。私は精々が至高の御方々に追いつこう必死に足元に這い寄ることしかできません」

デミウルゴスはエンシエントの言葉に、嬉しきで頬を緩ませながら、テーブルに一枚の羊皮紙を置いて広げた。

「これは？」

「これがこの国……この世界の一般的な地図らしいですよ？ アルベド」

地図というものを知る者達は、その地図とは名ばかりの落書きを鼻で笑う。

「ナインズ様が入手されたこちらですが、司書に複数枚模写させました」

「うむ。ご苦労。それでナザリツクがある場所がここか」

「解り辛いことこの上ないな。たぶんだけど、軍事的に正確な地図は一般には出回らせてないんじゃないか？ だとしたら、この地図もどこまで当てにしているか」

「ええ、まさにエンシエント様の仰つしやられる通りに思います。ですので、私としましては、第一に情報の取得を最優先したいと思えます」

「それがいいだろう。人選は誰にする？」

「候補としては少なくとも戦闘力が高い者と情報収集力の高い者を二人一組は絶対です

ね。あとはより人間種に見た目が近い者の方が警戒感持たれずに行動できるだろうし」

「だな。未だ脅威度が未確定だから、最悪を常に想像しておかねえと……」

「プレイヤーですか。それもうちみたいに拠点ごとが一番最悪なパターンですね」

「左様でございますね。それで今回捕まえたスレイン法国なる国の兵士達ですが……」

数時間に及ぶ話し合いが漸く終わって、エンシエントは自室へと帰ってきた。

今日一日であった濃密な出来事の連続に、肉体は平気だが、精神が疲れた気がしている。

ベッドに飛び込むようにして、体をベッドに預けた。

ナインズも今頃はベッドで横になり、溜息を吐いているかもしれないと考えると、おかしさが込み上げてくる。

寝室の外、リビングには一般メイドが控えていた。

（あれは……そうだ。確かりュミ……リュミル？ いや違う。フランス語っぽい……リュミエル？ リュミエールだ！ そうだそうだ。確かへ口へ口さんが特殊エフエクトつけた子だったよなあ）

横になることで少し思考がマシになり、リビングへと戻ると、眼鏡を掛けたリュミエールが迎えてくれた。

その髪は光を含んでいるように、キラキラと自ら発光しているようだ。

「もう、おやすみはよろしいのでしょうか」

「ああ、少し精神的に疲れていたようだ。すまんが、リュミエール。紅茶を入れてくれないか？」

「え……あ、はい！ ただいまっ！ ただいま！」

「慌てなくていいぞ」

（きやーああ！ 至高の御方に名前を知っていたただいてるう！ お目見えをするのは初めてなのにつ！ きやああああ！）

（あー。名前呼んだだけであれほど喜ぶとはなあ……。一度、ナインズさんにNPCの設定見せてもらわんと……。リュミエールは特徴ある子で助かったわ）

微かに手を震わせながら、紅茶を入れると、リビングの定位置へと下がる。

気配からして、喜びが溢れているようだ。

（NPCの情報を見る前に、あいつに会っておかないとな。流石にここまで相手にしないのも可哀想だしな）

「リュミエール」

「はいっ！ 何でしょうか。何なりとお命じくださいませ！」

「ええつと、すまんが、ルプスレギナ・ベータを呼んできてくれるか？」

「え、はい！ 畏まりましたっ！」

リユミエールはそう言つて、一礼してから部屋を出てゆく。

ルプスレギナ・ベータ。プレアデスの次女であり、そして……。

外からけたたましい音が鳴り響き、防音が割と効いている部屋の中にまで聞こえてきた。

「失礼します。ルプスレギナ・ベータ。至高の御方、そして私の愛しい創造主であるエンシエント様に呼ばれて参りました」

そう。エンシエントが創造したNPCである。

ルプスレギナ。ラテン語で『ルプス（狼）』『レギナ（女王）』で狼の女王となる。

『狼の女王か。鮮血の王の後だな！』

『いや、あんまり巨乳にしないでくれよ？ 女性の魅力は胸じゃなく全体のラインがた

いせつなんだからさ！』

そんなやり取りでホワイトブリムとかと作ったのは、懐かしい思い出だ。

エンシエントが【ザ・ワン】の種族を取った後に創造したキャラである。

とある民間伝承では、ヴァンパイアの下僕として、人狼を使役しているという所から

作った。

この世界に飛ばされてから、会いたくはあったのだが遠ざけていた理由が、守護者を含めてプレアデスやNPCの中で、創造主として現在共にナザリックにいるのは、ナインズが創造したパンドラズ・アクターとこのルプスレギナ・ベータだからだ。

他の守護者やプレアデスと平等に扱うために敢えて遠ざけていたのだ。

エンシエントは目の前に立って生きて動いている自分の子供ともいべき存在を見る。

その瞳は不安そうに揺れて、帽子の上から解るほどに耳が萎れてしまっている。

(全く……駄目な父親だな俺は……)

「ルプスレギナ・ベータ」

「は……はい！」

「今まで寂しくさせて悪かったな。悪い創造主で許してくれ」

「そんなっ！ エンシエント様が謝られることは何も……何も……何一つとして……」

必死に走ってきたのか。特注のメイド服は微かにシワができてきている。そのスカートをルプスレギナはグツと掴んで、新たなシワを強く生み出した。

至高の方に作られた大切な衣服のほずであるのに、そこに考えが至れない。

ただただ、ひたすら恋焦がれて、日々、創造主様から呼ばれる日を、ルプスレギナと

付けられた名を、その口から紡がれる目を焦がれて、待っていた。

だから、謝罪などいらぬのだ。ただ、名を呼んでくれただけで、全ては許され報われるのだから、だから、これ以上は望むべきでは無いことだと理解していた。

それなのに、ルプスレギナ・ベータの創造主は、蜂蜜よりも蕩けるような甘い声で囁いてきた。

「そうだな。俺が今お前に謝つても、お前を困らせるだけだな……。おいで。ルプー」
……ひつ、ぐ……ひつ……うう……ぐうう……

室内に嗚咽が転がり出てくる。大粒の雫は落ちて、ルプスレギナの足元を濡らして行く。

そして、ヒルの手がソファーに座られた膝をポンツと叩いた時には、ルプスレギナは思いつき飛び込む。顔を愛しい主のお腹へと擦り付けるように、押し付けて泣き始めた。

「ふえええええ……！ エンシエント様っ！ エンシエント様……ああああつ。うああん。エンシエント様エンシエント様エンシ……エント様！」

目の前に実際に存在しているのだ。まやかしてもなく。温もりを持ってここにいるのだと、確かめるように、ただひたすら抱きついて子供のように泣きじゃくった。

ただ、ひたすらに泣き続ける我が子を、今までの事も詫びるように、気が済むまで頭

を撫で続ける。

ルプスレギナは気付いていなかった。その頭からは主に頂いた帽子が剥ぎ取られて、帽子よりも尊く温かいもので包まれていることに……

そして部屋の中には、部屋に帰ってきたリュミエールが、ルプスレギナを見つめて、貰い泣きしながらも暖かな笑みを向けていた。

十六話。 変わり続ける精神

二時間もこうしてソファアに腰掛け続けている。

膝の上には赤毛を三編みにした二十代の女性が泣きつかれて眠っている。

その頭をゆつくりと優しく、ヒルの手が撫で続ける。

「くう……わふうう……ふうう」

寝息を立ててスヤスヤと眠る姿は、年齢よりも幼く見える。

（余程、寂しい思いをさせたんだろうな。はあ……。これからどうするか。今後の事を考えて、ルプスレギナとの再会を選んだが……早まったか？）

しかし、内心嬉しくはあった。無上の敬愛や尊敬はナザリツクの者達から受けるが、ここまで無条件の純粋な愛情を正面から受けるのは、前の世界も含めて初めてなのだ。

「全く、結婚もしてないのに子供が先とはな」

「くう……くつふふふ……フウハアスウハアア……わふうふう……」

「ルプー……俺の可愛い我が子よ……」

「うふうふう……うひい……」

「おいっ！ お前、起きてるだろっ？ なあ？」

エンシエントの一言にビクリと体を固くして、寝息まで止まる。

(こいつつわあ……)

「ていつ！」

膝の上で身動きしないルプスレギナの頭に、やや強めに手刀を叩き込んだ。

「あいたああ！ エンシエント様、痛いつすよお」

「狸寝入りなんかしてるからだ。ばかたれ！」

「私は狸じゃなくて狼つす」

「そういう意味じゃねえよ。そんな揚げ足取りな所は誰に似たんだか」

「エンシエント様つすよ。私の創造主はエンシエント様以外は居ないんつすから」

やれやれ何を言っているのかと言わんばかりに呆れ顔を浮かべながら、これ見よがしに肩を大きく竦める。

先程までの殊勝な態度は何処へ行ったのやらわからない。

「とりあえずはどけ」

「嫌つす！」

「いや、とりあえずは人間種に変わるから退いてくれ」

「解つたつすよ……」

渋々ながらも、膝の上から離れると、少し離れた所で膝をついて臣下の礼を執る。

それを横目に溜息を吐くと、マントをバサリと翻して、人間種へと変身を行う。

こうでもしないと紅茶を飲めないのだ。なんせ、ヒル人間の時の口は頭頂部か両手の指にしか付いていないせいで、口にするには不便というか、不恰好この上ない。

人間の姿へと変身すると、再びソファアールへと腰掛けて足を組んだ。

「どうした？ ルプスレギナ」

「いえ、先程は大変失礼を致しました。至高の創造主様……」

「わかつているさ。試したんだろ？ その上で罰を覚悟でああいう態度を敢えて取った」

違うか？ と微笑を浮かべて、紅茶を手に取ると、いつの間にか新しい物へと変わっていて、温かい物であった。

視線をリユミエールへと向けると、軽く頭を下げてきた。

「ご明察にございます」

「だろうな。俺に飛び込んできた様に見せてほとんど衝撃がなかった。直前で勢いを殺したんだろう？ それに泣いていたにも関わらず、服にはシミ一つない。ハンカチか何かを当てていたな。以上から考えられるのは、俺がお前にこういう態度を望んでいるとお前が気付いたということだ」

「エンシエント様にお会いすることができて、私がそうしなかったという気持ちは嘘で

はありません！」

「わかっているさ。ありがとうな。ルプスレギナ」

「はい……こうしてお会いして名を呼んでいただけただけで、全てが報われる思いにございませす」

「褒美つてわけじゃないが、守護者やプレアデスがいない時はもつと碎けた感じで話す事を許可する」

「そこまで言うのと、残りの紅茶を一息に飲み干して立ち上がった。

「えっ、いいんすか？」

「ああ、俺は気にしねえよ。お前だったら空気を読む事ぐらいできるだろ。妹や一般メイドに良くした褒美と思え。色々他のメイドからも話を聞いている」

「いやー。照れるつすよー」

そのまま、ルプスレギナの側まで行くと、帽子の脱げた頭を一撫でしてから、剥ぎ取った帽子を被せてやる。

「ルプスレギナ。仕事は大丈夫か？」

「大丈夫つす！ デミウルゴス様から第九階層の厳戒態勢は解かれたつすから、掃除も終わらせました！」

「そうか。ならコキュートスを第六階層の円形闘技場アンファイテアトルムに呼んでくれるか？ 時間はそう

だな。三十分後で構わん」

「はっ！ 畏まりましたっ！」

(やはり空気を読んでやっているか。フレーバーテキスト通りって事だな)

オンオフを切り替えるような、自然に切り替えるようにおふざけと本気とを使い分け
ているのがよくわかる。

エンシエントが設定した通りに、他者の心に敏いというか設定のままのようだ。

「俺はナインズさんのところへ行つてから向かう」

「あの……それでコキュートス様をお呼びした後……私も……」

「まあ、見物なら好きにしろ」

「やったつすー！ リューちゃんも一緒に行かないっすか？」

「えっと、私が行つてもお邪魔では無いでしょうか？」

「来ても構わんぞ。ただ、ルプスレギナよ。キッチンと守つてやれよ」

「了解です！」

少し戸惑うリュミエールの手を引いて、ルプスレギナは「早く行くつすよ！」と足取り軽く出ていった。

馬鹿な子程可愛いと、抜けた所があると設定したのは間違いかもしれないと、エンシエントは少し後悔するのであった。

エンシエントはナインズの居室へと辿り着くと、ドアが一人でに開く。

見ると一般メイドが開いてくれていた。

（毎度思うが、メイドの特殊スキルか何かか？ どうやって来たのを知っているのか興味湧くな）

ともあれ、今はナインズへの用事をさっさと済ませておきたい。

部屋に入るとナインズは、執務机に座りいくつかの報告書類を読んでいた。

その生真面目さは変わらないと苦笑する。

「エンシエントさん。どうかしたんですか？」

「いや、少しナインズさんに用があつてさ。今少し大丈夫か？」

「ええ、報告書を読むぐらいだし、デミウルゴスもアルベドも優秀ですからね」

「ちよつと、見届人として円形闘技場アンファイテートルムに付き合つてほしくてさ」

エンシエントの言葉に、ナインズは怪訝に感じる。

「ちよつと、本気でコミュニケーションと手合わせをしたくてな。回復役として欲しいんだよ」

「ああ。そりゃ、そうですね。エンシエントさんはアンデッドですから、普通の回復手段

が使えないですし」

「だろ？ 三十分後にアンファイテアトルム円形闘技場にコキユートス呼んでるから、見届人兼回復役として

付き合ってくれよ」

「いいですよ。今日の戦闘はあまりにもシヨボ過ぎで見応えすら無かったですしね」

昼間のガゼフとスレイン法国の兵士達の戦闘を指しているのだろう。

確かに低レベル過ぎた。レベル三十前後といえ、ユグドラシル初心者でも、パワーレベリングで初日に到達できるほどだ。

「んじゃ、三十分後にそれまで部屋で準備しとくからさ」

「はい。三十分後に楽しみにしてます」

エンシエントが出ていった事を確認すると、ナインズはいい事を思いついたとばかりに、第六階層へと転移する事にした。

ナインズはエンシエントに常々、人間になった時にお菓子を用意してくれたりした礼をしたと考えていたのだ。

三十分後、エンシエントは闘技場の通路に転移していた。

「はっ？ あれ？ 闘技場の舞台に転移したのに、どうして闘技場通路に？ 不具合か？」

ついゲーム時代の運営のクソさを考えてしまい、不具合という思考に飛んだが、よく考えればこの世界には運営はいないことに至った。

（オーレオールがミスするとは思えんけども、そもそも、転移管理といってもリングの転移に干渉出来るのか？）

訳が分からんと思いつつも、闘技場通路を歩く。

エンシエントの今の姿はいつもの鮮血王鎧姿ではない。

真紅の鎧ではあるが微細な所は全く違っていた。

それは鮮血王鎧の前に装備していた過去の装備だった。

背中には黒いマントを掛けている。

そしてその背中にしまっておりある武器もいつもの「血ヲ啜り肉ヲ喰ウ」ではなく、柄は黒、刃は赤黒い巨大な刃が付いていた。

柄の長さはエンシエントの身長と同じ程度だが、その刃が異常であった。

棒状柄の先端より一メートルは長く突き出していて、柄の部分の三分の一を刃が占めているほどだ。

いて、柄の棒の部分の三分の一を刃が占めているほどだ。巨大な半月の刃が棒にくっついだけという無骨さである。

銘を「ブラックドッグ」という。エンシエント専用のハルバード斧仕様となっている。重量だけなら「血ヲ啜り肉ヲ喰ウ」にも匹敵するほどの得物だが、魔法効果は単純に硬化がエンチャントされているだけのレア度は遺産級レガシーとなっている。

暫く歩く出口の光が目に入ってきた。

そして出口を出ると、エンシエントは目の前に信じられない光景が広がっていた。

『王者の風格を漂わせて入場してきたのは、そうナザリック地下大墳墓、至高の四十一人が一人っ！ 鮮血の王、エンシエント様ー！ 対する挑戦者は、ナザリックが第五階層守護者、凍河の支配者、蟲王武人コキユートス』

アウラの司会にも驚いたが何より驚いたのは、闘技場の観客席を埋め尽くす多種多様なナザリックの下僕達の姿だ。

ざっと見ただけで、階層守護者は疎かプレアデスも全員揃っている。

そして闘技場広場の反対側の檻が開き、ハルバードを持つコキユートスが姿を表した。

「きやあああ！ エンシエント様あ！ 至高にして至宝！ 私が敬愛する神でありんすううええ！」

「黙りなさい！ ビッチ！ あの方は貴女の様な上げ底ビッチはお呼びではないのよ！」

「ああ、っ！ 賞味期限切れのババアが……」

「貴方達、^{はしや}燥ぐ気持ちはわからなくもないですが、ナインズ様の御前ですよ？」

エンシエントは優れた聴覚により、観覧席のそんなにやり取りを聞きながらうんざりとした表情を浮かべる。

「騒々しいっ！ 静かにせよっ！」

VIP 観覧席からナインズの声が闘技場内に広がると騒がしかった観客席が一瞬で静寂に見舞われて、騒々しさに慣れていた耳が痛いとすら感じられる。

『ちよ……魔王ロール。すんごい気まずい感じになつてない!？』

『少し練習したんで、ついやってみちやいましたが、想像してたよりも反応が大き過ぎて、こっちがビビりました』

『じゃあ、やるなよ。というか。なにこのお祭り騒ぎ。軽く手合わせするだけっていったよね？ ね？ アウラも何か司会してるしき？』

『いえ……あの、守護者達にエンシエントさんとコキュートスが試合をするから見たい奴は来ても良いって言ったんですが……。なんか、話が大きくなっちゃって、アウラも自分は第六階層の守護者ですからとか張り切るし……』

『つまり、場の空気に流されたんだな。コノヤロウ!』

『すみません……』

こうなつては仕方ない。それにエンシエントもこんな大舞台は嫌いではない。

リアルでは主役を張ることもできず、舞台上が上がつても華やかさとは程遠い所にいたが、異世界でこんな大舞台の主役を張るなら悪くないと思える。

「コキュートスよ。付き合わせて悪かつたな。軽い手合わせのつもりだつたんだが」

エンシエントはそう言つて苦笑を浮かべてみせた。

対してコキュートスは、表情こそわからないが、頻りに下顎を打ち鳴らしながら白い冷気を吐き出していた。

「トンデモ御座イマセン。武人建御雷様ニ並ブ武人デアラセラレル、エンシエント様ニ稽古ヲツケテ頂ケル誉レヲ頂キ感謝ヲ致シマス!」

「そうか。そう言つて貰えると気が休まる。ではやろうか? お前も俺も言葉を交わすよつか刃を交わすのがお似合いだろう」

「是非モ無ク!」

二人の距離は十メートルほど、だが、お互いにその気になれば無いも同じ距離であつた。

『それでは鮮血の王、エンシエント様と武人コキュートスの試合を開始したいと思いま

す。ルールは簡単、どちらかが参つたを言うまでとさせて頂きます！　では……始めつ
 ！』

お互いに武器を構える。コキュートスはハルバードの断頭牙の他に、虚空から斬神刀
 皇を取り出して構える。

エンシエントは愛用の「血ヲ啜り肉ヲ喰ウ」ではなく、ハルバードのクロガネだけを
 両手に持ち構える。

「ソノ武器テ宜シイノデスカ？」

「構わんさ。もし、「血ヲ啜り肉ヲ喰ウ」を使わせたいなら……俺をその気にさせてみる
 ！」

「血ガ滾リマスー！」

先に動いたのはコキュートスであった。

「氷柱フロストオーラ。スキル摩訶鉢特摩」
アイス・ピラー　まかほどま

『おおっと、先手を取つたのはコキュートスだっ！　闘技場が一瞬で血も凍る世界へと
 変わってしまったー！』

「有利フィールドに変えたか。それで準備は終わりか？」

「イエ、本気デ行カセテ頂キマスノデ……」

更に武器をもう一本取り出す。見たことがないグレートソードだ。

「全く……ゾクゾクするぜ！ んじゃ、俺もやらせてもらうか。神の血の祝福・ブラッド・メイク カースト・ゴッドチャイルド血化粧・神の子の呪い。さあ、はじめようかい！」

スキルのバフを使用して強化されていくたびに、コキュートスは歓喜から狂喜へと変わる。

その力足るや。流石は武人建御雷と同等と言われる所以を惜しみなく表していた。

神の血の祝福で、すべてのステータスの底上げがされて、血化粧で体に濃密な血霧が生まれる。

そして最後の神の子の呪いは、コキュートスですら、見たことがないスキルであった。
(マサカ、コレ程トハ……ッ！)

コキュートスの体から溢れんばかりの喜びと僅かばかりの畏れが滲み出してくる。

「イキマスゾ！ レイザーエッジ・四方八方」

「いい殺気だ。肝が冷えるぜ！ 血の武装盾」

コキュートスの斬神刀皇が振るわれて、斬撃が飛来する。

その数は十二。スキルによって増えた斬撃がレイザーエッジですべてエンシエントへと殺到してくる。

だが、それらの斬撃は、霧化している血が包み込むように抑え防がれる。

次の瞬間には、エンシエントの姿が掻き消えて、甲高い音を立てたと思えば、コキュー

トスのハルバードが背後から振るわれたクロガネの一撃を防いでいた。

(何トイウ鋭イ斬撃カッ！)

コキュートスは無意識に斬神刀皇を振るった。それを危なげもなく後ろに飛んで躲したエンシエントにコキュートスは追撃を行う。

アチャラナーダ
「不動明王撃」

コキュートスの背後に巨大な人影が浮かび上がる。燃えるような髪を持ち、右手には剣を、左手には索と呼ばれる縄を持つ不動明王が現れて、エンシエントの身の丈よりも巨大な剣を振るった。

「スライド・ムーブ。シャドーステップ」

エンシエントは一撃が届く前に、有りえない軌道で回避する。そして即座に影に沈み込むように消えると、離れた場所に転移していた。

「なんて、戦いでありんしょうか……？」

「す……凄いですね。コキュートスさんもエンシエント様も……」

「マール、コキュートスもエンシエント様もまだ本気を出していないよ。お互いに様子見程度しかしていないようだ」

「ナインズ様……。よろしいのです？ エンシエント様にもしもの事が御座いますが

……」

「なに、大丈夫だ。あれでも武人建御雷さんと対等に渡り合っていた人だぞ？ 最悪、そうアルベドのいう万が一があれば、お前が割って入って止めよ」

「はい。この身に替えましてー」

エンシエントとコキュートスは場所を入れ替える様に立ち回りながら、お互いにお互いの力の差を測る。

試合が始まってから二時間近く経つが、一見しては決定的な一撃はお互いに受けず、細かい傷だけが増えていた。

「楽しいなあ！ コキュートス！」

「ハイ！ コレ程二胸躍ルノハ久シブリノ事ニ御座イマス！」

ハルバードが閃き、斬神刀皇が空気さえも切り裂きながら殺到する。

その尽くをすんでの所で躲し、スキルで防ぐ。

お返しにクロガネで一撃を放ち、血の武装で体を狙えば、グレートソードがそれを防ぐ。

それはまさに円形闘技場、円形劇場に相応しい異形の剣舞であった。

(アア、ナント楽シイ時間カ……シカシ、ソノ楽シイ時間モ長クハ続ケラレヌカ)

コキュートスとエンシエントの攻防は一進一退で全くの互角と言ってもいい勝負だ。しかし、決定的に違う所があった。——片やアンデッド、片や鍛え上げられた武人とはいえ生物という違い。

それは戦う者として決定的な違いだ。

これがゲームのシステムの中ならば、完全に互角の戦いが千日手の如く続いたであろうが、これは現実の戦いであり、疲れという概念がある。

現にコキュートスには小さいながらも細かい傷が無数に付けられていた。

しかも、その傷は少しづつではあるが、癒えるどころか、傷口が広がりつつあったのだ。

(ムウ。コレガエンシエント様ガ使ワレテイタ、神ノ子ノ呪イノ効果ナノカ！)

既に付けられた傷は鎧を貫通して、その下にある肉体に届きつつあった。

「すまんな。これがゲームとこの世界の違いであり、大きな差だ！ 終わらせて貰うぞ。
ユグドラシル
ブラッド・レイ ブラッド・サイス
 鮮血の雨・血の武装」

エンシエントが纏っていた血霧が濃度を増して、浮かび上がると、無数の鋭い雨となり、コキュートスの全身に浴びせかかる。

その威力は大したことが無いものの、正に雨のようで、全てを防ぐことは出来ない。そして地面に溜まった血が大鎌となって襲いかかってくる。

上と下からの同時攻撃、辛うじて血の大鎌を全ての武器を使って切り飛ばすが、次の瞬間にはグレートソードを握る腕が宙を舞っていた。

「グオオオオッ！」

切り飛ばされて失った腕の切口をハルバードを手放して押さえ込む。

コキユートスの背後から首筋に、赤黒い刃が押し当てられた。

「俺の勝ちだっ！」

「私ノ負けデス。流石ハエンシエント様……」

その瞬間、闘技場内から割れんばかりの大歓声が鳴り響いた！

『勝者っ！ 至高の御方！ 鮮血の王エンシエント様だあ！』

アウラが大声でエンシエントの勝利を宣言する。

すると、観客席からナインズが飛んで降りてきた。そして静かにエンシエントの横に

立つと、その腕を高々と掲げてみせる。

「ナザリックの者達よ。これが我友、エンシエントの力であるっ！ 喝采せよっ！」

ナインズの声に闘技場内が爆発した。

歓声と拍手と足を踏み鳴らす音以外が何も聞こえなくなるほどだ。

『ナインズさん』

『なんですか？』

『後で……俺と模擬戦なっ！』

『えっ、ええー……』

『えっ、じゃねえよ。俺としては冒険者やる為に手加減の練習したかったのに、なに真剣勝負やらせてんのっ！』

『は、いや、そうならそうと言ってくださいよ』

『……P v Pな』

『はい……』

エンシエントは恨みの籠もった瞳をナインズに向けるが、内心では感謝していた。それほどまでに戦う事を楽しいと感じていた。

(あー。ヤバイな。完全に体に精神が引つ張られてる気がする)

自分の変化に戸惑いながらも、精神と肉体の折り合いの付け方を何とかしないとなど思うのであった。

十七話。誰が為に己が為。

アルベドが楚々とした姿で執務機の側に控える。

机の上にはいくつかの報告書や、守護者の予定などが書かれた書類が置かれている。

手に取ってざっと目を通しただけで、特に目立った粗はなく、ほぼ完璧な計画書と報告書だ。

(これ……俺要らねえーんじゃねえのか?)

執務席に座り、書類に目を通す振りだけをする。

アウラとマールは周囲の探索を中心に、ナザリツクの偽装としての用地を探してもらっている。

デミウルゴスは現在陽光聖典で色々と実験しているらしいし、アルベドはナザリツクの運営を任せている。

ナインズが作った執務室には、その主人であるナインズは不在となって変わりに、エンシエントがナインズが座る位置に座っていた。

扉の前にはルプスレギナが不動の体制で控え、そばにはアルベドが微笑みを浮かべている。

「今頃、ナインズさんは街に着いた頃かね？ エ・ランテルとか言ったか」

「はい。ゲートを使われずに移動をなさっているので、丁度、着いた頃合いかと存じますわ」

「そうか……。はあああ……」

「ど………どうかなさいましたでしょうか？ エンシエント様っ！」

「いや、俺もさっさと冒険者として旅に出たいなと思つてな。セバスも出立したんだらう？」

「はい。三日前に出立致しましたので、まだ帝国には着いていないとは思えませんが……」
本来ならば二人が同時に冒険者になるはずだったのだが、アルベドとデミウルゴス兩名の強い反対によって、片方がまず冒険者になり、自身の目を持って周辺の情報を集めてから、冒険者となる事になったのだ。

ナインズが先に冒険者になったのは、単にじゃんけんにも負けた結果だ。

エンシエントは今頃冒険者になってワクワクしているであろうナインズの事を思うと、爪を噛む思いである。

机の上にある報告書一枚を手にとって、中身に目を通す。

そこにはカルネ村で捕まえた男達の事が書き連ねられていた。

ガゼフ達を襲っていたスレイン法国の陽光聖典とか言う奴らは、何かしらの魔法が掛

けられていたらしく、特定条件下で三つの質問に答えると死ぬ魔法がかけられていたらしい。

だから、隊長だった陽光聖典という部隊の隊長であるニグン・グリッド・ルーインという男は、名前と所属と階級の三つ答えただけで、泡を吹いて死んだらしい。

その後、捕まえた人間に同じ事をしたらしいが、全て三つの質問で死亡した。

(哀れなものだな。掛けられた本人は知らされていなかったんだからな)

スレイン法国は相当な秘密主義らしい。

だが、あの村を襲っていた偽装兵は役に立った。あまりにも下っ端だからか。件の魔法は掛けられて居らず、色んな情報を語ってくれた。

スレイン法国で汚れ仕事を専門で行う部隊の者のせいか。スレイン法国内の神殿内の事は殆ど知らなかったが、周辺諸国の事はかなり詳しかった。

その中で、王国は内部が腐りきった国であり、スレイン法国が見限り、帝国と併合せようとしていることや、帝国の国情や皇帝の尊程度の事は聞いた。

その情報を受けて、セバスとソリュシヤンは帝国に向かわせた。

ナインズがエ・ランテル方面に行くということで、必然的に俺も王国方面に行くことになる。

いざという時、それはプレイヤーかそれに近い存在が確認できた場合に、ナインズと

連携を取りやすいからだ。

だが、そうすると帝国方面の情報収集が疎かになる為に、セバスとソリュシャンを向かわせたのだ。

更にいうと、帝国では冒険者は優遇されて居らず、ワーカーなる汚れ仕事を熟す者達が幅を効かせているらしく、ある程度の身分保障が欲しいナインズとエンシエントとしては、王国を選ぶのは必然だった。

「はあ……俺も早く冒険に行きたいんだがなあ」

「いけませんわ。流石にこのナザリックに至高の御方が一人もいらつしやらないというは、寂しいものですもの。もし、それでも行くと仰るなら、どうか私をお連れくださいっ！」

アルベドは豊満な胸の上に掌を置いて、必死に訴える。その姿はエンシエントの事を中心から心配しているようにも見えるが、自分が寂しいだけと言うのは誰の目にも明らかだ。

聞き咎めたのはエンシエントに創造されたルプスレギナであった。

「何言ってるっすか？ 付いていくのは私だって話はあるはずっす！」

「お黙りなさいっ！ ルプスレギナ・ベータ。いと尊き御方を御守りするには、貴女には荷が重いわよ。引き換え私は防御に特化した存在、私が付いていくほうがより安全になると思わなくって？」

「いやいや、行くのは人間の街つすよ？ そんなに目立つ羽とか角とか付けて行つたら、即討伐対象つすよ」

「くっ！ ナインズ様やエンシエント様。至高の方々とデー……共に居るためならば、私は角も翼も取り去る覚悟よっ！」

「今、絶対『デート』って言いかけたつすよねっ!？」

物騒な事になり始めた二人の会話に、エンシエントは大きな溜息を吐いた。

「ルプスレギナは落ち着け。アルベド。俺もナインズさんも自分と一緒に行動したいからといって、己の体を傷付けてまで付いて来られても困るぞ。俺たちの為とはいえ、愛するお前達に傷付いて欲しくはない」

「愛するっ!？ 愛する愛する愛する愛されてあい愛逢アイ愛するうう!」

「うっわ。エンシエント様、ハーレム願望はいっすけど、私は何番目つすか？」

アルベドはヨダレを垂らしながら、ルプスレギナは恐らく意味がわかつているはずだが、頬を押さえていやんいやんと体をくねらせる姿に、エンシエントはうんざりとする。
(はあ……心を癒やしにカルネ村にでも行くこう……)

エンシエントはリング・オブ・アイズ・ウール・ゴウンを、無言で発動させると表層へ転移をするのであった。

表層にある出入り口には、ユリが待機していた。

すつと自然な仕草で頭を下げる。

ユリがこういう仕草をするとドキツとする。いや、ハラハラするの間違いか。

「お出かけでございますか。エンシエント様」

「ああ、少し気分転換にカルネ村にな」

「左様で御座いますれば、お供させて頂きます」

ユリの言葉に微かに首を傾げた。

「別に一人で構わんぞ？」

「いえ、私もこれからカルネ村に行くところでしたので、丁度よろしいかと存じ上げます」

「そうか。ユリがカルネ村を担当しているのだったか。じゃあ、一緒に行くか」

「はい」

飛行ネックレスを使って、ユリと二人でカルネ村へ向かって飛び立つのだった。

カルネ村に着く頃には太陽は中天へと差し掛かっていた。

村からは見えない所で降りると、歩いて近付いてゆく。

折角友好関係を結べたと言うのに、不審がられるのは不本意だからだ。村に着くまで、ユリと他愛ない会話する。

「ユリ。村人との関係はどうだ？」

「はい。村人とは比較的友好関係を結べております。ただ……」

ユリがふと言い淀んだ事を不思議に思う。

「ただ、なんだ？」

「いえ……その……これは致し方が無い事なのですが、教養がなさ過ぎるのが……」

「教養……教養か……。そういえばこの世界の教育水準はどの程度なんだ？」

「村長で簡単な物の読み書きが出来て、計算が簡単な四則演算程度です」

「その程度なのかつ！ もう少し出来るのかと思っただが……」

ユリは少し悲しげに首を振って見せる。

「主に行商人とのやり取りをしていたのも、エンリさんとネムちゃんのご両親である工モット夫妻が行わつていたようで……。エンリさんで村長と同程度の教育水準です」

「そうか……」

「お許し頂けるのであれば、学校といかなくても、私塾を開いて教育を施したい所なので

すが……」

エンシエントの顔色を伺うように、問い掛けてくる。

教師であるやまいこの娘らしい発案に、エンシエントは思考を巡らせる。

ナインズは反対をしないだろう。寧ろNPCであるユリが自分からそう言い出したことに、感激すらするに違いない。

「ふむ。ナインズさんと相談してみよう。だが、私塾は少し待て、今は村の再建で教育どころではないだろう？　ただ、暇を見てエンリ姉妹に物を教えるぐらいならば、俺個人の権限で許可しよう」

「有難うございます！　慈悲深きエンシエント様！」

「だが、無理はするなよ。何かあれば言ってこい」

「はいー」

案外いいのかもしれない。ナザリックから距離的に考えれば、一番近い人里はカルネ村となる。

ゆくゆくを考えれば、何れは人口を増やして村から街に、なるべく早く発展させたいものだ。

思考を巡らせている内に、村へと辿り着くことが出来た。

村の中の雰囲気を感じるだけで、少し明るい感じがする。

立ち直りかけているいい証拠だ。もしくは何かしらいい出来事があったか。

「あつ！ エンシエント様とユリお姉ちゃん！」

村の端に着くと不意に幼い声が聞こえて、家々が連なる方から、小さな影が駆け寄ってくるのが見えた。

両親を救う事ができなかった姉妹の、ネムという妹の方だった。

小さな影はそのまますぐ近くに来ると、エンシエントの足に抱きついてきた。

それを見て、ユリがピクリと反応をするが、エンシエントが手を上げて止める。

「少しぶりだな。確かネムと言ったか？ 元気か？」

「うん！ ネムは元気だよ！」

「そうか」

エンシエントとはネムの両脇に手を入れると、そのまま抱き上げる。

「こらあ！ ネム。エンシエント様に失礼でしょう！ 降りなさい！」

「エンリだったな。構わん。子供はわがままで甘える物だ。そうあれと願うのが大人というものだからな」

「し……しかし、命の恩人に失礼になりますので……」

「そうか？ そう思うならそうなのかもしれない。ネムよ。姉に叱られたくはなからう？

ほら、姉のところへ戻るがいい」

「はいっー」

エンシエントは遜らない程度の丁寧な言葉遣いを心掛ける。

聞くものにとっては横柄に聞こえるかもしれないが、配下の手前、舐められる様な態度を取ることは相手が危険に見舞われかねない。

「エンリよ。村の空気が少し明るいようだが、何かいい事でもあったのか？」

「はい。昨日徴税官の方が訪れて、今年の税は免除すると仰っていただけなのです」

「そうか。それは良かったな。所でこの地の領主はどのようなものか？」

「えっと、その……お貴族様の事はよくわからないので、村長様なら知ってるかも……です」

「ふむ」

エンシエントは村の中を見回して、ユリの言ったことを考える。

自分が住む村の領主が誰かを知らないと思ってもみなかった。

ユリが危惧する訳である。教養がないのは、支配者階級からすれば、都合のいい存在だとはいえる。

命令に唯々諾々と疑問も持たずに、人形のように従うのは、支配者からすれば楽だし安全だ。

しかし、裏を返せば融通が利かない非効率の塊でしかない。

「……あの、エンシエント様は戦士様なのですよね……」

「うむ。そうだが？」

「もし、失礼でなければ……その……戦い方を教えていただけませんかっ！」

エンリは思いつめた表情で頭を下げる。

「理由は……この前のことか？」

「はい……。あれから村人達とも話し合っただけです。そして考えたんです。このままでいいのかと……今までこの村は森の賢王の支配地と言う事で、モンスターに襲われることないので油断していたんです。いつまでも平和なんだって……」

ふむと顎に手を当てて思案げな表情を浮かべて、新たに出た「森の賢王」なる存在を考える。

ユグドラシルでは「王」とかいう存在は大抵エリアボスだったりするために驚異になることもあるのだ。

「そうか。だが、人間には無力であったと？ 確かに魔物の脅威より、盗賊とかの脅威を考えないのは迂闊だな」

「はい。だから、少なくとも自衛できる様になりたいと……自分達の事は自分達で守りたいんです」

「その考えは正しいものだな。だが、俺とてずっとこの村に居るわけではない。ふむ。

「そうだな」

村の防衛だけならば、デスナイトやアンデットを使うのが一番手っ取り早くはあるのだが、流石に抵抗があるし、村の自立心を潰したくはない。

そして、一つ思い付くと、無限背負い袋からアイテムを取り出した。

「エンリよ。これをお前にやろう」

「えつと、これは笛でしょうか？」

「そうだ。その笛の名は『ゴブリン將軍の角笛』という。吹けば低レベルのゴブリンソルジャー達が数体現れて、お前の命令を聞くであろう。その者達から戦うすべを学べ」

ユリは驚いて目を見開いた。

至高の御方がアイテムを、人間に下賜されるとは思っても見なかったのだ。

「そんな、こんな凄い物を受け取れません！」

「よい。これは貸した。俺が戦いを教える事と同じ事だと考えればよい。二つ置いておこう。なに大したものではない」

「では、お借りしておきます。エンシエント様に何かあれば及ばずながらもお手伝いしたいと思います」

「そう肩肘張らなくていい。まずは村を立ち直らせる事を考えよ」

「はいっ！」

「エンシエント様、ありがとうございます！」

「ああ、ではな。エンリ、ネムよ。息災でいろ」

エンシエントはそう言うと、マントをバサリと翻して、村から去ってゆく。

村が一望できる丘まで来ると、村全体を見下ろした。

「よろしかったのでしょうか？ 人間にあのようなアイテムを下賜されても？」

「あのような。と言われても、たかが五百ガチャのハズレアイテム……いや、ゴミアイテムだ。ナザリックに低レベルのゴブリンが何の役に立つ？ ならば、人間に対してくれてやり、貸しとした方が有用だろ？」

「流石は至高の御方……慈悲深く思慮深さに感動を禁じえません」

その場で膝を付いて、深く頭を下げるユリを見る。

気になる事を聞いてみた。

「なあ、ユリよ。お前にとつて人間とはどのような存在だ？」

「はい。取るに足らぬ存在ではありますが、その生き方に興味を持たされる存在です。欲深く醜い存在でもあり、人の為に何かができる美しい生き物であると。ただ、その非効率さに苛立つことはありますが……」

「そうか。お前に村を任せて正解だったようだ」

「勿体ないお言葉です！」

村をじつと見下ろす。子供たちが親の手伝いか。瓦礫を運んだりしながら燥いだりしている。

その数は数人ほどで、さっきの姉妹も含めると、両手で数えるほども子供の姿はない。「俺は人は非効率だからこそ、人足り得ると考える。効率を突き詰めれば、全ては上手く回るのかもしれない。だが、それでは駄目なのだ。それでは人の美しさも醜さも、尊さも下劣さも生まれぬ。人形のように……歯車の様な人間には人の輝きは生まれぬ」

「申し訳ございません。浅薄な私にはよくわかりません」

「いや、いいさ。お前の創造主はその人が持つ輝きが好きな人間だった。だからこそ、人を教え導く道を選んだ人だった。ユリもそんな人の娘だ。人間と言うものをよく見て学ぶといい。あれほど観察のしがいがある生き物もそうはいないぞ？」

「はっ！ できる限り至高の御方の意に添えますように、我が創造主に恥じぬ働きをお約束を致します」

エンシエントは遠くに見える村を見ながら、満足気に頷いた。

（ああ、懐かしいな。時間が無い時にやったシティブルディングゲームを思い出すわ）
移動中にやったオフラインゲームの村から発展させて、都市に育てるゲームを思い出して懐かしむ。

あの手の思い通りにいかない感覚、それが楽しかった思いが蘇る。

（特産品とかあるのかな？ 外貨を得る手段を得させたいな。とりあえずは人手を何とかしないとな。人的資源の確保が一番難しいからな。大事に育てないと……）

村から遙か空に向かって高らかに鳴り響く角笛の音を聞きながら、エンシエントはそんなことを考えていた。

十八話。カルネ村での再会

ナインズが冒険に旅立ってから、エンシエントはナザリックでやることも無く、カルネ村に行く事を日課にしていた。

変わった事は特になく、精々アウラが調査の手を森へと伸ばしたぐらいであろう。

一応は森の賢王という魔獣が居ても手を出すことを禁じている。

対魔獣であればアウラは規格外の力を発揮するが、それでもエリアボスの疑いがあるなら、下手に触れるべきではない。

それらしき存在を見つけても、バレないように見張るだけで止めさせる。

「よし、今日もカルネ村に行くか」

エンシエントはソファアから立ち上がると、鮮血王鎧へと着替える。

ただし、武器は「クロガネ」や「血ヲ啜り肉ヲ喰ウ」ではなく、新たに鍛冶長に作ってもらった。オリハルコン製のバトルアックスを背中に装備した。

そして黒^{ブラックウイドウ}後家^{スライマー}蜘蛛のマントを肩に掛ける。

鎧もランクを落として装備したかったのだが、流石に外に出るなら防具だけでも最高の物をと、アルベドから言われてはどうしようもない。

ナザリックを出てフライで飛び、村外れの丘からは歩いて村へと向かう。エンシエントはここから見える村の景色が気に入っていた。

少しずつ復興する姿や、呼び出したゴブリン達が作り出した木製の扉まで見下ろせる。

一つ驚いたのは、魔法で召喚されたゴブリン達が、時間経過で消える事はなく、自我さえ持っていた事だ。

ユグドラシルでは魔法で召喚されたものは、時間経過と共に消えたものだが、この世界ではその法則ですら、少し違っているようである。

もしくはアイテムを使った召喚であるためかもしれない。

更にいうとこれはエンシエントにとって嬉しい誤算だが、村長の許可を得て村人達のゴブリンを呼び出したことが幸いしたのか。あまり村人達はゴブリンに対して忌避感がなかった。

ユリが言うには森の賢王とやらのおかげで、ゴブリンに襲われたことが無いために、モンスターという認識が薄いのだそうだ。

村へと近付いてゆくにつれて、村がいつもの雰囲気と違う気がする。

この時間帯なら畑に出ている村人の姿が見えない事に気付いた。

（何かあったか？ 火の手がないってことは盗賊に襲われている訳では無さそうだが

……)

少し足早に近付いてゆくと、村の出入り口の前で数人の男達と荷馬車が目に飛び込んできた。

(行商人か？ その割には空荷のようだが……。あれはっ！)

エンシエントが目にしたのは黒いフルプレートで大剣を二本背負った戦士と、その横で付き添うように立っていたナーベラル・ガンマだった。

エンシエントは慌ててこめかみに指を当てて、メッセージの魔法を使用する。

『えつと、もしかしてナインズさん。村の入口で足止め食らってませんか？』

メッセージを送ると、黒のフルプレートを纏った戦士が、少しあたふたした様にそそくさと後ろへと下がる。そしてエンシエントと同じようにこめかみに指を当てた。

『えつ？ え、もしかして見られています？』

『ええばつちりと……。あんた何やってんの？』

エンシエントとしてはどうして戦士の格好しているのかわからずに問いかけた。てつきり人化で魔法詠唱者として、冒険者をしていると思っていたのだ。

『えつ、いえ、なるべく正体を隠して情報を誤認させようと思ひまして……。』

その言葉に、エンシエントは深々と溜息を吐いた。

『ナインズさん。あんた……。俺をいつから戦士と勘違いしていた？』をしいただけだろ

う！」

『ぐつ、ぐふううう……』

『まあ、俺もそういうのは嫌いじゃないけどな』

どうやら完治していたと思っていた病が再発していた厨二の友人に、溜息を吐いた。

エンシエントとナインズはいくつかの打ち合わせと、設定のすり合わせを行い、エン

シエントは村へと降りていった。

メッセージでやり取りしている内に、村の中からエンリが出て来ていた。

見た所、態度から馬車に乗る人物と顔見知りのようだと、エンシエントは胸を撫で下ろす。

「ふむ。旅人さん達かな？」

村の外壁沿いに歩いて門の所までくると、さも今気付いたとばかりに声を掛ける。

「あつ！ エンシエント様っ！ この人達は私の友人のンファイレアと護衛の冒険者さん達です」

「そうか。よく来てくれたな。ん？ そこにいるのは、モモンじゃないか？」

エンシエントはエンリから視線を外し、護衛の一団の中にいる一人へと視線を向けた。

「お師匠様お久し振りです。どうしてこんなところへ？」

「久しぶりだな。こっちはナインズさんと共に来ていてな。縁あってこの村の面倒を見ています」

「では、このゴ布林達はナインズ様が作られたあのアイテムを？」

「実験も兼ねての事だよ」

先程打ち合わせした通りになるべく不自然にならないように会話をする。

「えっと、こちらの戦士の方とお知り合いですか？」

不意に馬車の横に付いていた革鎧を着た金髪で短髪の男。ペテル・モークが話に割り込んだ。

「こちらは私の恩人であるナインズ様のご友人であり、私の剣の師であるエンシエント様ですよ」

「そんな大したことはない。少し基礎を教えたただけだ。俺はエンシエントと言う。モモンが世話になっているようだ。とりあえずは村の中へ入らないか？」

エンシエントがこんな村の入口でやり取りするよりもと一行を中へと促した。

村の中に入ると、エンリに連れられてンフィーレアは家に連れて行かれてしまった。

今、エンシエントとナインズは一軒の空き家にいた。

この家は既に村を去った人間の持ち物らしいが、この村によく来るエンシエントとユ

りの為に、村長がくれた物だ。

ユリはいずれここで私塾を開きたいと考えているようだ。

「それで、ナインズさん……モモンはここで何やってんの？」

「いえ、指名依頼を受けまして、それが偶々、この村の近くにあるトブの大森林での薬草採取だったんです」

「そうか。んじゃ、いくつか聞きたいんだけど、この世界の冒険者のレベルってどれぐらい？」

「あのペテルとか言う人間が居たじゃないですか？」

ペテルと言う名前を聞いて、なんとなく思い出すと戦士職っぽい人間が思い浮かんだ。

「あの初期装備の短髪の人？」

「そうそう、それが今一緒に行動してる漆黒の剣ってパーティーのリーダーなんですけど……」

「ああ。彼がね」

「彼はあれでも街ではそれなりの冒険者なんですけど、レベルが十あるかないかぐらいです」

「は……えっ？ いや、ちょっと待って……。なにそれ？」

レベル十といえばユグドラシルではソロでも二日あれば余裕で超えられる。

仲間と組んで、パワーレベルリングすれば、一日あれば四十近くまで上げられるのだ。ただし、六十位から途端に上げることが難しくなる。

（十レベル？ それで冒険者としてそれなり？）

エンシェントはこの世界の強さの概念が少しおかしい気がした。

「それじゃ、一番上のクラスはどれぐらいなの？ 流石に五十超えて八十ぐらいはあるんだよね？」

「その辺はよくわからないんですよ。今まで会ったのがミスリルなんですが、そんなに強そうには……」

「どうなってるんだ？」

もしかして、ユグドラシルとレベルの概念が違うのか？

「それよりもカルネ村はどうしちゃったんですか？ 塀が出来ていたり数日前と変わりが過ぎです」

「いや、俺が村に来た時に人手が足りないと言ってたから、ゴミアイテムをあげたんだが、こつちだとゴブリンが消えないんだよな」

「えっ？ 召喚でモンスター消えないんですか？」

「どうなんだろう。ゴブリン将軍の角笛自体がどういう原理で成り立ってるかわからな

いし、確かフレーザーテキストでは呼び出すって書いてあるけど、召喚って書かれてないしなあ」

ナインズは顎に手を当て、ぶつぶつと独り言をつぶやき始める。

その姿を見て、エンシエントは苦笑した。

（変わらないな。昔っから検証とかになったら夢中になっっていたからな）

ナインズはぶにつと萌えと違つて頭が良くないと思つているようだが、事實はそうではない。

ナインズのキャラはガチビルドではなく。割と趣味が入ったドリームビルド寄りの構成となっている。

その分でできる幅はあるのだが器用貧乏に近い。そんな構成にも関わらず、PVPでは勝率が六割という異様な勝率になっているのは、誰よりもユグドラシルに真剣だったからだ。

（建やんとはよく言つてたっけな。もしも、たつちさんに勝てるとしたら、自分達よりもモモンガさんの方が早いだろうって……）

「よし、ちよつとナザリックに戻つてきます！」

「いやいや、まて、パーティーはどうすんだよ。依頼を受けてるんだろ？」

「ああくそ。そうか。それがあつたんですね」

「そこまで焦ることじゃないし、依頼が終わってからもいいんじゃない？」

「うーん。そうですね。とりあえずは依頼を終わらせる事を優先します」

全くこのユグドラヲタクはしようがないなと思う。

その時、不意に家のドアがノックされて、扉の前に控えたナーベラルが剣に手をかける。

エンシエントは立ち上がると、やたら殺気立つナーベラルにデコピンをして扉を開けた。

扉の前には、ンファイレアと呼ばれた少年が立っていた。

「なにか用かな？ ああ、な……モモンを呼びに来たのか？」

「いえ……その、エンシエント様に少しお話がありました、お時間はよろしいでしょうか？」

「別に構わないが？」

「いえ、ここではちよつと……」

振り返るとナインズが、小さく頷いている。

「では、少し外を歩こうか？ 話は外で聞こう」

そう言うと、エンシエントは外へと歩き出した。すると不意にメッセージが脳内に届き、ンファイレアという少年が、あらゆるマジックアイテムを使えるタレントなるスキ

ルを持つことが伝えられる。

あらゆるマジックアイテムを使えるの範囲がよくわからないが、本当の意味でどんなマジックアイテムでも使えるとなると危険極まりない。

一例を上げると、個人所有権が設定されているスタツフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンですら、使える可能性があるということだ。

まあ、ナザリツクの一歩安全な場所に預けてあるので、あそこまで辿り着ける者など居ないであろう。

少し離れたまで来ると、ンファイレアが口を開いた。

「村を救っていただき、有難うございましたっ！」

深く頭を下げて、礼を口にするンファイレアにエンシエントは拍子抜けした。

「なんだ。そんなことか。別に大したことはしちやいない。誰かが困っていたら 助けるのは当たり前だそうだからな」

「それでも、エンリを助けてくれて有難うございます！」

ンファイレアは頭を上げないままに、もう一度感謝を伝える。

だが、エンシエントとしては、それは本音であろうが本題ではないと感じていた。

「まあ、礼は受け取ろう。それだけじゃないだろうか？ それを言うだけならば、あの場でも言えるはずだからな」

エンシエントは近くの木に寄りかかり腕を組んで、ンファイレアが何かを口にするのを待つ。

ンファイレアはその言葉を受けて、臆したように口籠った。

「その……エンリに赤いポーシオンを使つたつて聞いたんですが、どこで手に入れたのか教えて下さいませんか!？」

ンファイレアの言葉に、エンシエントは呆れた表情を浮かべる。

「そんな事か。それならば断ると言わせてもらう。あれは……そう、とても貴重な物だからね。もしも、あれの出所がしれると、どうなるかわかるだろう?」

エンシエントはそう言つて拒否するが、ンファイレアはポーシオンに並々ならぬ思いがあつて諦めなかつた。

「秘密は守りますっ! 決して誰にも言わないと誓います!」

「それでもだ。君はエンリという少女と知り合いらしいが、君の中では彼女の命と引き換えにする覚悟があるのかな?」

エンシエントは試すようにンファイレアへと問い掛けた。

赤いポーシオン。ユグドラシルだと最低ランクのポーシオンなのだが、ンファイレアの口調からしてとても価値があるように感じる。

もしかしたら先程のナインズの言つていたレベルの話の考えると、この世界全体のレ

ベルが低い可能性があった。

「ど……どうして……エンリが関係するんですか？」

「君が何にその知識を何に利用するのかわからないが、うっかりとバレる……いや、何かしらの理由で知る方法などいくらでもあるだろう。そうなると君だけではなく、この村や彼女だって危険にさらされるだろう。それでも知りたいと？」

ンフィーレアはグツと喉の奥で鳴いた。

少し哀れにも思うが、エンシエントとしてはンフィーレアの言葉は安易の逃げにしか聞こえない。

問題を解く努力もせずに正解を得ようとしているように感じるのだ。

「もしも、その赤いポーションを得たいなら努力するといい」

「それはどういう意味ですか!？」

「さてね。どういう意味に取るかは君次第だ。遠回りする事も人間には必要な事だ」

エンシエントはそれだけを言い残すと、手をひらひらと振って、その場から離れた。後には少年が一人、その場で俯いて立ち竦むだけであった。

十九話。厨二をクレマンティーヌ

馬車の車輪がゴトゴトと音を立てて、ゆったりとした速度で進む。

荷を満載にした馬車は重く。更には道が悪い事で下手をすれば車軸が折れる可能性がある為に、本当にゆっくりとしか進めていない。

「本当に……美人ですよねっ！　どうか、お友達からお願いしますっ！」

「面白い人っすねえ。どうするっすかねえ？」

「おっ、脈アリな感じですかっ！　そう思ってもいいですねっ！」

「そうっすね。個人的には嫌いなタイプではないっすよー？」

さつきから漆黒の剣のメンバーのルクルットと言うレンジャーが、ルプスレギナをナンプアしているために、騒がしい一行となっている。

しかも、ルプスレギナが満更でもないと思わせ振る態度を見せるものだから、余計に燥いているようにも見える。

因みにその受け答えにも、少し照れたりだとか。上目遣いに流し目と、どこで覚えてきたのか芸が細かい。

「やった！　ようやく来た。俺の春っ！」

嬉しさも絶頂に至って、流石にリーダーであるペテルも止めるべく動こうとした瞬間に、それは訪れた。

「ふふ、本当に気持ち悪い。生理的に無理だわ」

心の底から侮蔑を含んだ冷めた声で見下す。

「そもそも、その髪型が駄目ね。何を勘違いしたのか。その変な髪。それでも本当にレインジャーのつもりなのかしらね？」

その言葉の数々に空気が完全に死んだ。注意しようと振り返ったペテルも、馬車で御者をしているンファイレアも顔が引き攣った。

ただ一人ナーベラルだけは、ルプスレギナを尊敬の眼差しで見つめている。

エンシエントが気配を消して、ルプスレギナの頭に拳骨を落とす。

「うちのルプーが迷惑を掛けてすまん」

「いえ、うちの仲間が悪いんで……。こちらこそ申し訳ありません」

漆黒の剣のリーダーであるペテルも、ルクルツトを殴り倒していた。

拳骨を落とされたルプスレギナは、頭を押さえながらも、涙目になっっているルクルツトを指差して笑っている。

その笑いも「プギャー」という、非常に腹の立つ笑い方をするものだから、ルクルツトが更に落ち込んでゆく。

彼が女性不信に陥らない事を祈るばかりだなと思うエンシエントだった。

「えつと……モモンさんのお師様がお連れになつてゐる女性は凄いですね……」

ニニヤと呼ばれる魔法詠唱者マジックキャスターも引き攣つた顔でモモンに話し掛けた。

「いえ……なんかすみません……」

「モモンさ——んが謝られる事ではないと思います。寧ろあの羽虫ガガンボが謝罪するべき

……。あいたつ！」

「だから、お前は どうして……」

「ああ、いえ、事実悪いのはルクルツトさんだと思いますので……」

ワイワイガヤガヤとしながらも、エ・ランテルへと進む。

行きとは違い帰りは二人と一匹が増える事となった。

楽しそうに街の様子や冒険話を聞かされては、エンシエントとしてはもう我慢できる

筈もない。

だから、モモンの帰りに合わせて共にエ・ランテルまで行くことになったのだ。

メッセージでルプスレギナへ、アルベドに見つからぬようにカルネ村にさせたの

だ。

因みに騒ぎにならぬように、デミウルゴスにだけは伝えてある。

エンシエントとルプスレギナはエ・ランテルで一泊した後で王都に向かつて出発する

ことになっている。

いいパーティだなと、エンシエントは漆黒の剣パーティを眩しく見つめた。

ルクルットがムードメイカーで、トラブルになる前にリーダーであるペテルが殴り倒す事により空気の緩和を行う。

こうすることで周りが気兼ねしない空気を作り出しているのだ。

ルクルットはどうかはわからないが、ペテルは演技だとわかる。

ダインという森祭司ドレイドが適度に空気を引き締めて、二ニヤという少女を目立たない位置へと立たせる。

そう少女だ。エンシエントにしてみれば見戯に等しい演技だが、骨格や筋肉の付き方、そして歩き方を見れば容易く見抜けたが、どのような理由があるのかは知らないが男として演技をしているようだ。

(ンファイレアといい。二ニヤという少女といい。複雑な感じだな)

だが、それらを踏まえても、こうして見知らぬ人と旅をしてバカをやって、みんなで笑い合う。いいもんだなとエンシエントは、自然と微笑んでいた。

その瞬間、全員が何事かと振り返った。

『エンシエントさん！ 笑っちゃ……。歯が……。ふふおっ！ だ……。駄目だあ』

もうすぐ日が沈もうとしている道を、光る歯が照らしていた。

気まずい雰囲気の中で、エ・ランテルの街へと辿り着いた。

「いえ、そんな気になさらないで下さい……。そんな呪いに掛けられていただなんて……」

「俺は……結構、そのかつこいいと思つたぜ？」

「いや、変なのは本当に解つてるからそつとしておいてくれ」

漆黒の剣のメンバーを始め、事情を知らないプレアデスの二人には、決して解けない呪いに掛けられた過去を捏造をして、その場は何とか誤魔化した。

そして、ナインズと呼ばれる偉大な魔法詠唱者マジックキャスターに仕えて共に旅をする理由も、その呪いを解く為と言う事にした。

その話をしてからは、エ・ランテルに着くまで気味悪い雰囲気が、ずっと付き纏つていた事は言うまでもないだろう。

(アンデットだけど死にたい……。穴があつたら埋葬されたい……。)

唯一の救いは誰も笑おうとせずに、慰めてくれたことだろう。ただ一人を除いて。

「モモン。どうだ？ 折角使役した魔獣だ。それに乗つて凱旋と行こうではないか？」

「いい考えでござるよ！ 殿っ！ 拙者に乗つてくだされでござる」

その言葉を聞いてモモンはピシリと固まった。

周りも悪意は無いが、先程までの暗い雰囲気を払拭したいのか賛同してきた。

「そんなに威風堂々とした大魔獣だ。街の人間は大いに驚くだろ。どうだ？」

『ちよ……ちよつと、何言ってるんですか？ ハムスターに乗れっというんですか!』

傍目には無言で考え込んでいる姿に見えるだろうが、内心では狼狽えまくっていた。

「流石は殿のお師様でござるよ！ さき、拙者の背にどうぞでござる。殿」

「う……うむ。しかし、師を歩かせて弟子が騎乗するなど……。そうだ。師匠がお乗り

ください！」

ナイスアイディアとばかりに、そう提案するモモンにエンシエントは、実に冷たい目を向けながら口を開いた。

「ほほう？ 師匠に弟子が取った手柄を掠め盗れとそう言うのか……モモンよ！」

「やはりここはエンシエント氏が言う通り、モモン氏が凱旋に乗るべきである！ それでこそモモン氏の評価に繋がると言うものである！」

「そうだぜ。モモンさん。あんたが従えたんだ。胸を張って魔獣に乗ればいいと思うぜ
！」

その場にいる全員の意見が一致する。それはそうだ。折角捕まえたこれほど立派な大魔獣へと乗れるならば、誰だつて乗るべきだと思うだろう。

その元となる小動物を知っていなければだ。

渋谷、本当に渋谷ながらも期待に満ちた目で、皆に見られれば固辞し続ける事もできずに、モモンは大股開きになって、巨大なハムスターに跨った。

『ブークスクス！ モモンガが……ハムスターに乗ってるうう！』
『てんめえええ……』

メッセージでモモンの絶叫を聞きつつ、エンシエントは、夕闇に沈み始めた街へと初めて足を踏み入れた。

門を潜るとまさに人の街があつた。

これから日が沈もうとしているせいか。外に出ている人間はいないものの、周囲の建物からは好奇の眼差しや、あのハムスター似の魔獣を恐れたりする声が聞こえる。

(恐れながらも好奇心は抑えられない。実に不合理で面白い！)

自然と頬が緩みそうになるのを手で抑える。

そうこうしている間にも、馬車を先頭に一行は進む。好奇の目で見られながハムスターに乗ったモモンと共に進む。

「ここが冒険者組合の建物なんですが、モモンさんは魔獣登録を行うんですね」

「ええ、さつさと登録してそちらと合流しますよ」

「打ち上げるから、ナーベちゃんとは、その時までお別れだ。寂しがらないでね」

「黙れ！ 蛆虫！ 首を振り切つて上げましょうか？」

ナーベの言葉に即座に反応したのは、ルプーであった。

「ダーメつすよ。ナーちゃん。そういう時はきちんと寂しいって言つて喜んだ所を叩き落とすつす！」

ルプーとしてはすぐに舞い上がるルクルト트가気に入ったようで、意外と楽しくやつていたりする。但し玩具としてはだが……

だが、その人間に対してからかいつつも上手に立ち回るルプーの姿を見て、モモンが羨ましくあつたりした。

（ナーベラルよりも、やっぱりルプスレギナの方が良かったか。私もユリにすればよかつたな。しかし、前衛前衛はバランスが悪くなるし……）

他愛の無い考えをしつつ、冒険者組合へと向かつた。

しかし、ふとエンシエントが気になつて見回すと、馬車の後ろに付いていくところであつた。

「あれ、エ……師匠は行かないんですか？ 冒険者組合に」

「ん、ああ。ルプーと俺は王都で登録するつもりだし、この時間だと人が少ないだろうから、冒険者らしい空気が味わえないだろ？ だったら、王都まで我慢するさ」

（それに初冒険者組合がハムスターと一緒にだなんて、悪い冗談過ぎる）という、心の声は

敢えて伝えないでおく。

「そうですか。それじゃあ、こっちをさっさと終わらせて合流しますね」

「ああ、この街で一泊するから明日少しだけ案内してくれ」

エンシエントは後ろ手に軽く手を振りながら馬車の後ろを付いて、バレアレ薬品店へと向かった。

薬品の調査を行う為か、割と街の奥まった場所にその店があった。

看板には名前らしきものが書かれてはいるが、エンシエントには読めそうにない。

だが、エンシエントはそれよりも気になることがあった。

店の周りに複数の気配を感じるのだ。しかも、気配を消したような不審なものである。

『ルプー気付いているか?』

『はい。人間の……それも怪しい奴らの気配を感じます。消しますか?』

『いや、今は様子を見る。お前は後ろを固め前は俺が行こう。店の中からは微かな血の匂いを感じる』

『では、私が前を! 御身を危険に晒すことなどつ!』

『構わん。ただ、後ろの奴らが逃げる素振りを見せたら逃がして影の悪魔シャドードーモンに後を追わせろ。背後関係を洗いたい』

『了解致しました』

「皆さん。少し待ってもらえるか」

エンシエントの不意の言葉にンフィーレアとペテルが、店の前に馬車を止めて問い掛けてくる。

「はい？ 何でしょうか？」

「何かありましたか？」

「いえ、少し気になることがあったので、ンフィーレアさん店の鍵を……」

聞こえていたのか周囲の隠れた気配がざわ付く。

「え、ええ。これですが……」

「ありがとうございます」

エンシエントは差し出された鍵を手にとって、店に近付いた瞬間、鍵は必要なくなってしまった。

突然、弾けるように扉が内から破壊されて、何者かが外に飛び出してきたのだ。

エンシエントにぶつかるようにして、その何者かは止まった。

「ごめん。カジツちゃん。バレちったよぉ」

「このバカが！」

その人影は、おどけた様な甘える声を出して、路地の方へと声を掛けた。

すると、路地裏からロープ姿をした数人の男達が姿を現す。

「エンシエントさんっ！」

誰かが悲鳴の様に声を上げた。明らかに動きからして飛び出した女は暗殺者のそれであり、それにぶつかられる様にして動きを止めたと言う事はそういうことだと思つたからだ。

「私もお、もー少し遊びたかつたんだけどお。バレちゃあしよーがないよねえ！」

「そうか？　なら、もう少し遊びに付き合つてやろう」

殺されたと思つたエンシエントから、上げられた声に漆黒の剣のメンバーは安堵し、野良猫を思わせる女は驚愕の表情を浮かべた。

「なあんで生きてるのかなあ？」

「お前ごときじゃ殺せないからだ。みんなは冒険者組合の方へと逃げなさい。こいつは俺が抑えよう！　いけっ！」

「行かせえるとお思つてんのかあ？　ああ！」

女に刺されながらも、そう言ってくれたエンシエントに、漆黒の剣のメンバーは、ンフィーレアの護衛をするように来た道を引き返し始めた。

「カジツちゃん！」

「いけっ！　ゾンビ共、彼奴等を捕らえろ」

女はようやく帰ってきた獲物を逃してたまるか、カジツちゃんなる人物に声を上げる。

逃げる漆黒の剣のメンバーの前に、腐乱した動く死体が姿を表した。

「なーんだ。低級ゾンビっすか。何が出てくるか期待していたっすけど、期待外れっすよ」

その声が聞こえたのは一瞬だけ、次の瞬間にはゾンビ達は残らず灰となって、その場に崩れ落ちてこんもりと小山を作るだけのものとなっていた。

「行きなさい。あの御方が行けと言われたのだから、貴方達は何も心配しなくていいの。それにほら、こいつら雑魚っすからね。心配いらねっす」

妖艶な笑みを浮かべつつ、漆黒の剣のメンバーに事実を告げるルプーは、即座にいたずらっ子の様な笑みを浮かべ直すと、ローブ姿の男達に向かって、背中 of 得物を抜き放っていた。

「カジツトお！ クソ役立たずがっ！ あんたもいつまでアタシにくつついてんだよっ！」

「心外だな。離してくれないのはお前だろうに……」

女が握るステイレットは確かにエンシエントの鎧の隙間を貫通して、その刀身の根本まで体の中に埋まっていた。

だが、エンシエントは眉一つ動かさずに、微かな笑みすら浮かべている。

「こんのお！ クレマンティーヌ様からあ離れろって言つてんだらおがよおっ！」

「やれやれ、我儘な小娘だな。嫌いじゃないがね？」

エンシエントは肉で締め取つていたステイレットを離してやると、少しだけたたらを踏んで、クレマンティーヌは後ろへと下がった。

「なあに、さっきの防御系の武技かなあ。珍しいもの持つてんじゃあん？」

「ふむ。その武技が何を指しているのか興味があるな。掛かつてくるがいい」

「調子に乗つてえっ！ このクレマンティーヌ様に勝てると思つてんのかあ！」

姿勢を低くして、まるでネズミに襲いかかる猫のように構えるクレマンティーヌに、エンシエントは笑みを浮かべてみせる。

「ははははははははっ！ 心地いいぞ。その傲岸！ その不遜！ まるでお前は人間のエゴを煮詰めたような奴だ！ 気に入ったぞ！」

「ふざけがってえ！ 人外——英雄の領域に足を踏み込んだクレマンティーヌ様に勝てると思つてんのかあ！」

「人外の領域に足を踏み込んだだけのひよっ子の力を見せてみる。そうしたらもつと好きになるかもしれん！」

「一撃で終わらせてやるよお！ 〈能力向上〉〈能力超向上〉〈疾風走破〉こおれで終わり

だつてえーの！」

一步目の踏み込みから超高速で動くその姿は

、常人の目には止まらぬ速度で、確かにある程度強い位の人間ならば、気付かぬ内に命を断たれていたであろう。

しかしそれは、ただの人間ならばの話だ。

エンシエントにはその動きすらも止まって見える。そもそも肉体的性能自体が遙か高みにあり、更には前衛としては、アインズ・ウール・ゴウンでも五本の指に数えられる存在なのだ。

「てえめええあ！ 何をしたっ！」

「なに、余りにも遅すぎてな？ うっかりと……そう、うっかり掴んでしまったよ」

クレマンティーヌの体は宙に浮いた状態で止まり、その手に握ったステイレットは、エンシエントの指先で抓まれていた。

ただ、指の力のみで突進を受け止め、武技の乗った二連撃を抓むだけで、体まで浮かび上がらせて固定していた。

「残念。これだけだと失望するぞ？」

「ふうざけえんなああああ！」

クレマンティーヌは叫び声を上げながら、ステイレットに込められた魔法を開放す

る。一本は雷撃、もう一本は火球だ。

ライトニング
ファイアーボール
雷撃が肉体を硬直させて、火球が肉体を焼き尽くす必殺の連撃だった。

更にステイレットから手を離し、蹴りを叩き込みつつ、体を回転させて腰の後ろから抜いたステイレット二本を、エンシエントの体に突き刺した。

「エンシエント様っ！」

ルプーの叫びが炎で赤く照らされた街の一面に木霊する。

「ごあんねーんでしたあ。君の愛する人は丸焦げ火葬されちゃいまあしたあ！ い

やあ、バーベキューかなあー？」

クレマンティーヌが叫び声を上げたルプーを、挑発するように声を掛けた。

その声を受けて、ルプーの全身が波立って行く感覚が訪れる。

だが、変身をする必要はなかった。

「騒ぐなルプー。俺は楽しんでるんだ」

「エンシエント様っ！」

再び愛する主人の名を叫ぶ。その声音は全く逆の感情が込められていた。

「面白いな。こんな武器はユグドラシルにもなかった。それに武技ってやつも興味深い。ガゼフが使っていた奴がこれか？」

腹部に二本のステイレットが刺さり、全身を炎に包まれながら、一步、また一步と踏

み出す。

「素晴らしい。素敵だった。素敵だよ。人間……。確かに人外に近い精神性と力だ」

一歩一歩進みながら、舞台役者の様に両腕を広げる。

「だが……。哀しいかな。所詮は、人間だ。どこまで行つても、どこまで足掻いても……
所詮は人間なんだよ」

広げた両腕で手首を返す。ただ、それだけの事で炎は消え失せて夜に相應しい静寂が戻ってくる。

「な……。なんだあ！ お前はなんなんだっ！ 化け物っ！」

「そうだ。夜を歩き、人を小馬鹿にした笑みを湛えて、人の命も尊厳も傲慢も粉碎する。そんな誰もが畏怖する化け物……。それが俺だっ！ 合格だ！ 素晴らしい！ お前は手に入れた！ そんな素敵な化け物になる権利をなっ！」

そう言葉にしながら一歩踏み出すだけで、クレマンティーヌは周囲の闇が濃くなつた気がする。

「許してっ！ 許してくださいっ！ どうか命だけはっ！」

誰がクレマンティーヌをみつともないと云えるだろう。

誰が見苦しいと罵れるだろう。誰も何も言う事も罵ることも出来はしない。

なぜならば、目の前にいる存在に、闇を引き連れて闇を歩く存在からすれば、塵芥に

しか過ぎないのだから。

「許す！ 許すき！ そして命だけは喰らつてやろう。そして迎えてやろう。さあ、もう何も恐れることは無い。夜の愛し子よ」

エンシエントは優しい慈愛の笑みすら浮かべている。黄金に輝く瞳がへたり込み地面を濡らすクレマンティーヌの瞳を覗き込む。

（ああ、もう大丈夫なんだあ……。よかつたよかつたあ……）

黄金の瞳が赤く紅く染まっていく毎に、クレマンティーヌの心は甘く蕩かされていったのだった。

「ふふ、ルプスレギナよ」

「はっ！」

「こいつを癒やして、初めてを迎える前に戻してやれ。もしかしたらこのままで眷属にしたらグールになるかもしれんからなあ」

「失礼ながら……：……このような下賤な人間は至高の御方の眷属には相応しくないとお考えますっ！」

ルプスレギナは創造主であるエンシエントに牙を向け、あまつさえ下賤な炎を浴びせたクレマンティーヌに、心から侮蔑の視線を向けて、エンシエントに進言をする。

「なんだ？ 嫉妬か？ 安心しろ。俺の中の一の子供はお前だけだよ」

そう言つて、ゆっくりと帽子の上から頭を撫でてやると、ピンと立った耳がへニヤリと垂れた。

そんな姿をみて、エンシエントは微笑むのであつた。

二十話。死者は踊り、アンデッドは朽ちる。

路地裏の奥で、エンシエントは本来の姿であるヒル人間の姿で佇んでいた。

その足元にはあられも無い姿の女性が倒れ伏している。

ゴミやシミで汚らしい路地裏に、力無くぐったりとしている女の首筋からは一筋の血が流れ落ちて、地面へと血の雫を垂らす。

血の出所には円形の細かい傷が付いていた。

(いや、予想外すぎるわ。まさか、人間の姿の時には牙がないとか……)

そう眷属化を行う為に首筋に、口を付けて牙を突き立てようとした時に気付いたのだ。

自分の口には犬歯は合っても、極々標準的なサイズであり、人間と変わらない程ではない。

そもそも、人間種のキャラクターは仲間達がやった事であり、人間種の姿に全くの興味がなかった為に、異様な美形に作られたのだが、仲間達はすっかり吸血鬼ということ忘れて作ったのだ。

血を啜り、自身の血を与える事による眷属化が人間の姿では出来なかったのだ。

方法としては首筋の肉を食い千切り、自分の血を垂らす。吸血鬼としてそれはどうなんだという話だ。

故に選択肢は一択、人目が無いように路地裏へと連れ込み、本来の姿に戻って吸血を行ったのだが、目の前の光景を客観的に見る。

(ホラーだ。いや、吸血鬼が人を喰ったんだからホラーなんだが、ジャンル違う……。これはモンスターホラーというよりサスペンススリラーだよ)

指先のヒルの口から血を吸ったのだが、直接吸うのは初めてで、余りの旨さについて吸いすぎて、あともう少し吸っていたら眷属化する前に殺してしまうところだった。

『エンシエントさん！ 大丈夫ですか？ どこにいます』

『あー。ちよつと店の路地裏に居ます』

『そうですか。あ、ルプスレギナ見つけました。そっちに行きますね』

『えっ、ちよつ……』

路地の奥に魔法の光が届いた。

「うっわ、エツロ……」

エンシエントは万が一を考えて、人間種への変身をしたのだが、足元にはヨダレを垂らして恍惚の表情を浮かべる半裸というか下着姿にしか見えない女性が横たわり、その前で慌てて人間種に変身した為に息が微かに上がった男がいる。

サスペンスホラーな場面が、傍から見ればR18な子供には見せられないよというジャンルに早変わり。

「ち……ちがうだよ。ナインズさん」

「とりあえずは路地から出ましようか。エンシエントさん^変

「なんか、違う副音声^変が聞こえた気がしたっ!？」

実にいい笑顔で路地の出口を、顎で指すモモンの瞳はこれ以上なく冷たかった。

路地からトボトボと出ると、ルプスレギナがすぐく楽しそうな顔で迎えてくれた。

「それで……話^{事情聴取さ}を聞かせて貰いましょうか。びつくりしましたよ。謎の集団に襲われて逃げてきた漆黒の剣の皆さんから話を聞いて、メッセージを送ったのに返事がありませんでしたし、それなのにエンシエント^{ペロンもとき}さんは、全くもうっ。全くもうですよ!」

「副音声^変が段々酷くなってる!？」

その時に路地の奥から、倒れていた女性……クレマンティーヌが姿を表した。

その顔は紅潮して、エンシエントをチラチラと乙女のような表情で見つめてくる。

その口元には特徴的な牙が生えていた。元々の赤目はより鮮血のような緋の目となり、夜の闇に紅く輝いてすら見える。

「えっと、彼女は？」

「襲撃者の一人で、中々に面白い人間だったんで、眷属にしちやいました。てへぺろ！」
「てへぺろじゃねえーよ」

「だって、正当防衛じゃない？」

「正当防衛というのは身を守ることであり、眷属化は入りませんよ」

モモンは興奮して、エンシエントの鎧の隙間に指を引っ掛けて胸ぐらを掴むように持ち上げる。

その瞬間、変化は劇的だった。路地から恐る恐る出していただけの顔を怒りの形相を浮かべさせると、地面に落ちていたステイレットを拾い上げながら、モモンに向かって突撃する。

だが、そのステイレットがモモンの体に届く前に、その体はルプスレギナの手によって押さえつけられた。

「あなた、何をする気なのかしらね？」

「離せえ！ エンシエント様あ！ いま、クレマンティーヌがお助けしますう」

「いや……大丈夫だからな。大人しくしておけ。モモンは仲間だからな？」

「はい……」

エンシエントの言葉に、途端にシユンとして項垂れ。ルプスレギナへの抵抗をやめ

る。

「これは一体？」

「たぶん眷属化による絶対忠誠ってやつかな……」

「とりあえずは冒険者組合に行きましようよ。結構大事になってましたよ？」

「マジかあ……。とりあえずはルプー、そいつ離してやつてくれるか」

「しかし……。こいつは至高の御方に刃を……。エンシエント様に向けただけでなく、

ナイ……。モモン様にも向けたました。ここで処分をしておくべきかと……」

「いや、まあ、そいつにはまだ色々と用事があるからな。クレマンティーヌ」

「はいっ！ エンシエント様っ！」

ルプーが渋々ながら押さえつづけるのを止めると、その場で直立不動で姿勢を正した。

「とりあえずは決して人に見つからないように、姿を隠せ。お前に影の悪魔を潜ませて

置くから、用があればそいつから伝えさせる」

「はい。私の愛しの王。クレマンティーヌは呼ばれるまで幾千日でも待ちます」

そういうと一瞬で姿を消した。その速度は生きていた頃の比ではない。武技を使つて漸く辿り着く境地に、軽く脚を動かすだけで辿り着けた。

（ああ、私は幸せだっ！ 騒動の隙に逃げようと思っただけ、予想外の収穫だ。欠けていた何かが埋められた様な幸福感と全能感が私を満たしてる！ 逆に憐れになるわあ。

だって、これからは英雄と呼ばれる人間ですらあの愛しい方に喰われる側になるのだから……)

——うふっ、うふふふふふっ！ あーっはっはっはっはっはっ！

狂った女は狂った化け物となり、狂った嬌笑を上げて、夜空を駈ける。

その姿は確かに夜の愛し子に相応しい。血の狂者の姿であった。

「あれ……どうするんです？」

「あー、とりあえずは冒険者組合に行きましようか……」

(まさか、レッサーヴァンパイア下級吸血鬼じゃなくて、グレートヴァンパイア上級吸血鬼となるとは思わなかったな。姿も変わらなかつたし)

あつという間に街の外にまで消えてしまったクレマンティヌを、本当の意味で遠い目をして見送ると、モモンと二人で冒険者組合へと向かうのであった。

「ルプー。男達はどうした？」

「あの人間達には影の悪魔シャドードーモンを付けて、ナーちゃんに見張ってもらつてるつすよ？ 見張るならナーちゃんの方がいいつすから」

「そうか。モモンさん。ナーベに手を出さなつて伝えて貰えます？ ついでなんで英雄

モモンの糧になつてもらいましようよ」

「あ、いいですね。それー！」

人間の街で超越者達の茶番はこうして決まった。

冒険者組合は騒然としていた。モモンの言ったとおり、漆黒の剣はこの冒険者組合ではそれなりの冒険者だったようで、大半は鉄のプレートアイアンを首から下げている。

街でも有名なポーション職人であるバレアレが襲撃されたという事で、急遽冒険者に招集がかけられたのだ。

「エンシエントさん大丈夫ですかっ!？」

モモンと連れ立ってやって来たエンシエントへと、真つ先に駆けつけたのはインフイーレアだった。

その手には青いポーションの瓶が握られて、傷がないかを確認しようとしてくる。

エンシエントは体に触れられる前に、片手を上げてその好意を押し止める。

「ご心配せずに。怪我はない」

「しかし、剣が明らかに刺さっていましたよね?」

「あれは見切つて脇に挟んだだけだから、鎧にも傷は付いていないよ。あの女には逃げられてしまったがね」

安心をさせるように腕を上げて胸の辺りを見せて傷がないこと確認させる。

「それにしてもエンシエントさんは凄いですね！ あの女暗殺者を逃したとはいえ、無傷で凌げるんですから」

「ルプーちゃんも凄えよな。低級とはいえゾンビ数体を一瞬で灰にするんだから！」

漆黒の剣のみんなが口々に褒め称える。その時、一人の老婆が漆黒の剣を押し退ける様に前へと出てきた。

「お主が孫を助けてくれた。エンシエントさんかえ？」

「助けたというか成り行きだ。あなたは？」

「儂はインフィーレアの祖母でリイジー・バレアレと言う。孫を助けてくれて本当にありがとう」

リイジー・バレアレと名乗った老婆は、よろよろとエンシエントへと歩み寄ると、手甲をつけた手を両手で掴むと、額に押し付けるように頭を下げてひどく感謝をする。

エンシエントとしては、その態度に困ってしまう。そこまで感謝される覚えはないし、そもそも、その犯人を眷属にまでしているのだ。

「リイジーと言ったか？ あなたは人に襲われる覚えはあるか？ もしくは敵の狙いは何だと思う？ どうやら奴らは貴方のお孫さんを狙っていたようだが？」

「さて、わかりませぬのう。確かにポーシヨン職人として儂は名が売れている自負はあります。孫となると……タレントが関係しておるのやもしれん」

「タレントか……確かにどんなマジックアイテムも使用できる、だったか？」
「そうです」

少し顎に手を当てるように考え込む素振りを見せる。

「モモンはどう思う?」

「さて、何かしらの自分達では扱えないマジックアイテムを使わせたかったか。もしくは今後マジックアイテムを使用する際の媒介として欲しかったか?」

「その線が濃厚だな。まず敵の拠点を調べないとな。ここまで大掛かりに動くんだ。どこかしらに拠点を持っているだろう」

エンシエントとモモンはお互いに顔を突き合わせて話し合う素振りをする。

正直言つて茶番もいところだ。

実はここに来るまでの間に、クレマンティーヌから影の悪魔を通して、目的と組織を聞き出していた。

敵はズーラーノーンという秘密結社ということをし、そしてモモンとエンシエントを喜ばせた事実は、クレマンティーヌが元は法国の極秘部隊である漆黒聖典の中心近くにいた事だ。

しかも、陽光聖典のように例の魔法は掛けられてない。

『さてさて、ナインズさん。どうしましょうかね?』

『とりあえずは、このポジション職人は欲しいですよね』

『だねえ。カルネに移住して貰ってポジションによる外貨獲得をしたいと考えてるんですかどうでしょう?』

『いいですね! この付近って毎年の様に戦争しているらしいですから、馬鹿みたいに売れますよ!』

『では、茶番劇を始めましょうか!』

「む、ちよつと待て、ナーベどうした? そうか。見つかつたか。わかつた。師匠もここにいるから、見張りだけは欠かさなよ? ……さて、つい今しがた。仲間のナーベが店を襲つた男達の所在を突き止めたらしい」

「本当かモモン?」

「ええ、どうやら悪趣味にも墓地をアジトにしているらしいです。しかも、バレたことを危惧したらしく、アンデッドの数千の軍勢まで召喚したようです」

「つ!? なんじゃとつ? アンデッド数千……まさか、ズーラーノーンの奴等かつ!」

モモンとエンシエントのやり取りにリイジーが激しく反応を見せた。

その名前に漆黒の剣のメンバーも激しく反応する。

「ズーラーノーンって、二十年前に都市一つをアンデッド達の死都に変えたっていうあの秘密結社ですかつ!」

「アンデッド数千つてやべえぜ！　そんだけアンデッドが現れたら、衛兵駐屯所でもきついそれに……」

ルクルツトが焦ったようにいう言葉を引き継いだのは森祭司ドレイドである。ダインである。

その顔には絶望に近い表情が浮かんでいる。

「それに、それほどアンデッドが集まると負のエネルギーで、他のアンデッドも生まれるのである！　より強力な……」

「……より強力なつて……例えば……」

ニニヤが恐れを抱いた声を漏らした時に、その鐘の音は冒険者組合にまで届いた。そこでモモンが言った事が現実を起こっている事であることを正しく認識したのだ。

一方、墓地ではアンデッドの見本市のようになっていた。

スケルトンにゾンビ。集合する死体の巨人に内臓の卵スウェル・スキ。膨れた皮に黄光の屍トまで、果

てには墓地の門を決死の覚悟で守る衛兵達を嘲笑うかのように上空を飛んで街に向かう骨スケルトン・ドラゴンの竜二体を見た。

「駄目だ……。こんな……。衛兵駐屯所から応援が来てもどうしようもないじゃないか……」

「エ・ランテルの街は終わりだ……。か……。鐘を……。警鐘を打ち鳴らせつ！　ここで少

しでも食い止めろっ！ 街の人間が一人でも逃げ出せるようにっ！」

誰かがポツリと呟いて絶望の表情を浮かべる。

それでも街が滅びるにしても、一人でも多く街の人間を生残されるために、墓地の門を衛兵達は必死に守り続ける。

その時、冒険者ギルドの前で話し合っていた漆黒の剣とバレアレの祖母と孫、そして後に伝説の二英雄と呼ばれる赤と黒の戦士は見た。

街の外から飛び込んできた骨で出来た異形のドラゴンを……。

「ス……骨スケリトル・ドラゴンの竜っ!？」

「あんなモノまでっ！ 墓地では何が起きとるんじゃっ！」

全員が自分達ではとてもでは無いが相手にする事が難しい敵の出現に恐慌状態に陥りそうになる。

だが、そんな中で冷静に動き出す者もいた。

「モモンっ！」

「はいっ！」

「跳べっ！」

息のあった師弟のコンビは、微かな躊躇いすらなく動く。エンシエントはかがみ込み、両手を組んで、地面スレスレまで下げると、即座にモモンがその手に足を掛けて跳び上がった。

それは上空を悠々と舞う死せる竜まで届いた。

モモンは背中に差した剣を抜き放つと、一体の骨スケリトル・ドラゴンの竜を切り払う。

一刀で巨大な頭骨は半分には砕け散り、即座に振るわれた二刀目で頭が完全に砕け散った。

だが、骨スケリトル・ドラゴンの竜は一体ではなく二体いる。

だが、その哀れな竜も僅かな時間で存在を消した。

それは一本の巨大な戦ウオーアツクス斧が、地上から頭を砕き体も半分ほど吹き飛ばしのだ。

「ルプー！」

戦斧を放り投げた紅い戦士は、頼りになるパートナーの名を呼ぶ。

その意は即座に伝わる。

「浄化ホーリー・フレイムの炎つす！」

滅ぼされて崩れてゆく骨スケリトル・ドラゴンの竜を構成していた骨の塊は、街に被害を齎す前に、白い炎で全て燃やし尽くされ、雪のように灰だけが街に降り注ぐ。

その灰を切り裂きながら投げられた筈の戦斧は、エンシエントの手元へと、まるで

ブーメランのように戻ってきていた。

「我々は墓地を掃除しにゆく！ みんなは街が混乱を起こさぬように落ち着かせてくれっ！ 行きましょう。師匠！」

「ああ、こんな事態は放つてはおけんからな」

二人は顔を見合わせると、ルプーを連れて墓地へと駆け出した。

そんな一行の後ろ姿を見送り、他の面々は無事を祈るしかなかった。

あの二人にどうしようもない事など無いと信じられるし、逆にあの二人がどうしようもない事だと、この街は滅びる運命にしかないからだ。

だからこそ、漆黒の剣は行動を起こす。

少しでも冒険者を集めて、混乱を鎮めるのだ。

そのためには冒険者組合のインザック組合長を始め、都市長も協力してもらわなくてはならない。

エンシエントとモモン一行はエ・ランテルの街並みを走る。通りには激しく打ち鳴らされる警鐘の音に何事かと、街の人々が外に出て呆然と立ち尽くす。

運の悪い人間は、空を飛んでゆく骨スクリトル、ドロンの竜を見てしまい、腰を抜かしたり失神している者もいた。

『スケリトル・ドラゴンはやりすぎだったんじゃない？ 流石に空飛んでるの見た時は焦ったわっ！』

『いえ、そんな指示は出してないんですけど、POPアンデッドを適当に選んで、エ・ラントルの墓地に送れとは言いましてけども……』

『自然発生型か。まさかズラドンとか言うのが呼び出したのか？』

『ズラーノーンですよ。ズラドンって変な怪獣みたいじゃないですか』

墓地へと到着すると、そこはまさに戦場だった。

兵士達の怒号が響き、魔法が使える者は塀をよじ登って外へ出ようとするスケルトンなどのアンデッドを辛うじて叩き落とす。

門の前に急造のバリケードが組まれて、門を死守している。

「お前ら……冒険者かつ！ 助か……なに？ ^{カッパ}銅か！ くそっ！ 悪いがすぐに組合に

行つて応援を呼んでくれ！ 兵士だけでは防ぎきれんっ！」

「必要ない。俺達が最初で最後の応援だ。俺の名はモモン。」

「俺の名はエンシエントだ。ああ、行くか？ 墓地を散歩するには少し騒がしいがな」

^{カッパ}銅のプレートを付けた新人冒険者と無印の一般人の大仰な言いように、門を抑える兵

士達も激昂しかける。

だが、声を上げるより早く、二人の姿は上にあつた。

数メートルはある墓地の門と兵士達の頭上を重さを感じない様子で、楽々と飛び越える姿に兵士が見惚れる。

そして、はつと我に帰ると門の内側から肉の潰れる様な鈍い音を聞きながら慌てて、門の脇にある階段を駆け上がる。

別に共に戦おうとか、二人を信じた訳ではない。

ただ、どちらでもいいから生きているなら助けたいという、兵士の義務感に似た思いであつたのだ。

だが、墓地を囲む塀に登つた時に信じられない物を見て、その場に立ち尽くした。

そんな兵士の様子に、衛兵隊長は怒りを上げる。

「何を呆然としているっ！ 衛兵駐屯所から応援が来るまで休んでいる暇なんか無いんだぞ！」

「隊長……アンデッドが……アンデッドがいませんっ！」

兵士の訳のわからぬ報告に、隊長は耳を澄ませた。

すると、門を叩く音も衝撃も無くなっていることに気付いた。

それに気付いた者は慌てて塀へと登る。

兵士達はそこに奇跡を見た。先程まで波のように溢れていたアンデッドの群れが、動かぬ屍へと変わり果てていた。

どの残骸も強大な力で断ち切られ、潰され、破壊され尽くした跡だけが見受けられる。その残骸の彼方でアンデッドが、凄まじい力で宙を吹き飛ばされる光景を見た。

「まさか……これ程のアンデッドを掃討して、更に奥へと進撃しているのかっ!？」

「彼らは一体何だったんでしょっか……?」

一人のまだ年若い兵士が呆然と、静かになつた墓地を見つめながらポツリと呟く。

その言葉に、衛兵隊長が同じ心持ちで答えた。

「俺たちは伝説を見たのかもしれない……。黒と紅の伝説を。二人の英雄の始まりを……」

感慨深く呟いた隊長の言葉を否定できる者は誰一人として存在していなかった。

次々と襲い来るアンデッドの群れを薙ぎ倒し、ぶつ倒ししている者がいた。

それはプレアデスの次女ルプスレギナ・ベータだ。

「なんで、私の所ばっかり来るっすかあー!」

「まあ、そりや……」

「ですねえ……」

「俺達アンデッドだし？」

このメンツの中でアンデッドで無いのは一人だけ、それは人狼であるルプスレギナだけである。

モモンは死の支配者であり、エンシエントはカインザアベルの後継である。

アンデッドは生者を憎悪し、生命反応に惹かれて集まる習性がある。

必然的に処理する量は、ルプーが多くなるのだ。

「まあ、大物は片付けてやるから、スケルトンとかの雑魚は頑張れ。それにほら、お前は骨が好きだろ？」

「私は狼であつて、犬じゃないっすー！」

そんな動物愛護に溢れた主従のやり取りが、死者だけが舞い踊る墓地に響く。

死者達の舞踏は終わりを告げようとしていた。

二十一話。激動の一夜

墓地の中心地、墓地を見守るシンボルがある場所にアジトはあつた。

巧妙に隠された入口は古い年月を感じさせて、ここまで準備するまでに相応の苦勞があつた事は間違いないだろう。

それも最悪な形で崩壊した。

計画をそっくりそのまま利用されて、茶番劇という形で終わらせられたのだ。

荒縄で縛り上げられた見窄らしいミイラのような男が転がされて、その近くに立つナーベは足蹴にして、ルプーは何処で拾ってきたのか小枝で頬を突きながら挑発をする。

「ねえねえ、どんな気分ですか？ 長年計画してたものが一瞬で壊される気分は？ ま

さにプギヤーすね。ぶぶぶつ」

「おのれっ！ 我らの高尚な行いを妨げる不屈き者共がっ！」

口角泡を飛ばして、罵り声を上げるカジットなる男は、即座にナーベラルによつて頭を踏みつけられて地面に縫い付けられた。

「高尚ねえ。リアルにも居たっけなあ？ てめえの欲を優先しといて高尚と言うクソカ

すが。他人に迷惑を掛けて高尚もクソもねえだろうに。悪一文字背負う覚悟も無いくせに、御託を並べるんじゃないよ」

「さて、お前達がズーラーノーンという奴らでいいのかね？」

エンシエントは吐き捨てるように呟き、モモンは冷静に問いかける。

「そ……そうだ。儂がズーラーノーンの十二高弟が一人カジットだ。お主達は覚悟しておけっ！　ここで死の螺旋を防ごうとも、残りの十一高弟が、貴様らの命を狙い続けるっ！」

モモンは興味深そうに顔を寄せて、エンシエントが微かな笑みを浮かべる。

「ほう。それは怖いな。それで死の螺旋というのは何だ？　都市を滅ぼすだけが目的か？」

「死の螺旋も知らんとは浅薄な奴らよ！　うぎい！」

「下賤な鳴き声を至高の御方の耳に入れるな。シヨウジヨウバエ！　聞かれたことだけに素直に答えろ」

カジットの口振りに腹を立てたナーベラルは強い力で地面に押し付けた。

頭蓋骨の軋む音がエンシエント達にすら聞こえる。

「浅薄ですまんがね？　教えてくれんか？　都市を滅ぼしてなんの得がある？」

「ぎぐつぐつ！　死の螺旋で我が身を不死者に転生させるのだっ！」

エンシエントは嘲るように、カジットを見下ろして鼻で笑う。

「ほお。それほどの事をしてたかが不死者か。一つ面白いことを教えてやろう」

エンシエントは軽く手を降つて、マントを翻すと本来の姿へと戻つた。

カジットは恐怖と嫌悪感に全身を硬直させて、必死にナーベラルの足から逃れようと身を振る。

ヌラヌラと光る体表に、波打つようにさざめく肉体、ナメクジのように柔らかさうで、グニグニとした硬さを感じさせる人間大の存在が、眼の前に突然現れたのだ。

並の神経ならば嫌悪感以外は感じられないだろう。

「我が名はエンシエント。始祖にして神祖の後継たるヴァンパイアである。そしてモモン……いや、我らが死の支配者ナインズさん」

エンシエントと名乗つた赤黒い物体は目が無いはずなのに、頭を横に向ける。

釣られてそちらへとカジットは視線を向けると、己が敬愛し、狂愛し、妄信する神の姿があつた。

闇そのものと言つてもいい存在感、骨の体に眼だけは全ての生物、その魂を食らつて出来たように紅く燃え盛る瞳を持つ。

「我が名はナインズ。至高にして全ての死の支配者。死と生命を超越せしオーバーロード。ナインズ・オウン・ゴールである！」

カジットはもう何も言葉が出なかった。

ただただ、焦がれて半ば信心する意味すら失っていた至高の存在が眼の前に顕現なされたのだ。

ミイラのように乾いた頬を涙で濡らし続ける。

「カジットなる者よ……貴様は死の螺旋で不死者となり、何を得るつもりであった？

我が手より逃れて何を手にするつもりか？」

「お……お、おとおおお！ 我が神、我らが真なる神よおお！ 儂が……私めは母の

復活を……母を復活させる為に、不死者を望みましたっ！」

「この世には復活の魔法はないのか？」

「あり……ありまする！ ですが、生命力低き者の復活は出来ぬのですっ！ 生命力低

き者の復活は灰と化し二度と蘇る事が出来ぬのです！」

エンシェントはウニヨウニヨと動く自分の手を顎に当てる。

（生命力無き、つまりはレベルが低い者はレベルダウンに耐えられないってことか？）

しかし、ユグドラシルでは死者蘇生レイズデッドを五レベル以下の相手に掛けても、レベル一未満になつたりなんてしない。

レベル一以下でキャラロストなんてしたら、どんなハメ技ができる事か。クソゲーと
いうかバグゲー扱いになる。

「母の復活か……真なる復活トウル・リザレクションを使える者は存在しないと見ていいな」

「カジットなる者よ。クレマンティーヌと言う女はお前達にとつてどういう存在か？」

「クレマンティーヌでございませうか？ 奴は我らがブローラーノーンの十二高弟の中では

末席の者で御座います」

クレマンティーヌで思い出した。エンシエントはメッセージで、クレマンティーヌへと繋いで計画を伝えて、計画開始の合図を送った。

モモンは骨の顎を撫でて、これからのことを考える。

目の前にいる男の利用価値と、別の形の利用価値を秤にかける。

『エンシエントさん。どうしましょう？』

『この爺さんを生かして、情報を得るか。もしくは死体を衛兵に渡して名を高めるかってこと？』

『はい。出来れば生かして情報を得たほうがいい気がするんですよ。中々裏の世界の情報に詳しくそうですし。でも、これだけの騒ぎを起こした張本人を差し出さないつても、締まらないかなって思いました……』

『それなら計画を少し変更して、名を売る事よりも、実益を取りましようよ。適当にこいつの弟子を焼いて渡せばいいんじゃないの？ 最悪、これだけのアンデッドを討伐したってだけで功績としては十分じゃない？』

『それじゃちよつとお任せしてよろしいですか?』

『りよ。んじや、後ほど』

メッセージで会話を終えたモモンは、鷹揚に頷いてみせる。

それだけで黙り込まれて、不安に苛まされていたカジットの顔に希望が浮かぶ。

「良からう。貴様を我が下僕として望み通り、不死者としてやろう。母親の復活も容易

いが、貴様には働きが足りん。多大な功績を上げた時に復活を約束してやろう」

「おおおおおおお！ 至高なる死の支配者様。我らが偉大なる神よ。慈悲を賜わり光

栄の至りっ！ 必ずや！ 必ずや御方に仕え、下僕とし役に立つて見せまするう！」

「ならば、我が拠点にて使つてやる。エンシエントさん後は頼みます」

「はいよ。さつきクレマンティーヌから細工は流々とききたから、後は仕上げを御覧じろ

だ。任せといてくれ」

モモンはナインズとして、ゲートでナザリックへと帰還する。

その背中には浮足立つカジットと、仏頂面を浮かべるナーベラルが続いた。

「これからどうするっすか?」

「ふふ、シヨールはクライマックスに盛り上げてこそだろ? とりあえずは急いで冒険者

組合に戻るうかい」

平時と変わらぬ静寂を取り戻した墓地を、二人の人影が駆ける。

全てはナザリツクの利益の為に動き出した。

墓地の出口に辿り着くと、門を固めていた衛兵達が慌てて開門してくれる。

「あ……ご無事で良かったです。して、その……中のアンデッド達ですが……」

「それなら心配はいらん。全ての悪しき者は全て葬った。中にはズーラーノーンと思わしき者共がいたが首魁であるカジットという者は混乱に乗じて逃げだした。モモンが後を追っている」

エンシエントの言葉に、衛兵達から歓声が上がった。

その中から、周りの兵士とは装備が違う男性が歩みだすと、エンシエントの肩に両手を置いて、頭を深く下げる。

その顔からは雫が地に落ちては大地に少しだけの染みを作り出す。

「ありがとう！ 紅の騎士……いや、真紅の英雄よ。あなた方が居なければ……この街は終わりを迎えていただろう。街に住む者に代わり礼を言う。ありがとう。本当にありがとう！」

「なに、貴方達という誇りある衛兵の皆さんが居たから間に合わせる事が出来た。貴方達が命を掛けて、ここを死守したからこそ街は救われたのだ。私が英雄だと言うのなら、貴方達こそがこの街の守護者である。胸を張られよ。よく耐えられたっ！」

エンシエントがやや大仰に褒め称えると、周囲の兵士も含めて大粒の涙をポロポロと

零し始めた。

静けさが戻ってきた墓地に生者の嗚咽が漏れる。

実際はアンデッドには決して墓地から出ないように指示していたのだが、塀の上までは墓地と認識してしまっただのか、周りから見たら溢れだそうとしているようにしか感じられなかっただろう。

実は兵士達は気付いていないが、アンデッドの一部が塀に登った後でいそいそと塀から墓地に戻るといふ滑稽な光景もあったのだが、そんな行動を取るなど考えてもいなかった兵士には、登っているように見えていた。

スケリトル・ドラゴン

だからこそ、骨の竜を街で見た時は慌てて討伐したのだ。

茶番には観衆が必須であり、観衆に感謝しない役者などはいるわけが無い。

観衆を満足させ、共演者を満足させ、自身も楽しんでこそその演劇なのだからだ。

現に目の前の観衆は涙を流して、大喜びしているではないかと、的外れな感想を持つのであった。

その時、街の方角から一人の男性が走り込んでくるのが見えた。

それは漆黒の剣の中でも身軽なルクルットだと、エンシエントは闇を見通す目で判つた。

「た……大変だつ……。ンファイレアさんが……。ンファイレアさんが例の女につ！」

「ンファイアさんがどうしたんだ!？」

「街で転んだ人達に手当をしてたんだ。そしたら空から舞い降りるように……くそっ!」
ンファイアさんが攫われちまったっ!」

「こっちは陽動だったかつ!　すぐに冒険者組合に向かおう!　ルクルツトさんも、少し休んだら来てくれっ!」

それだけを言い残すと、エンシエントとルプーは脇目も振らずに疾走を始めた。

茶番劇の第二幕の開始である。

冒険者組合につくとそこらかしこに怪我人が散見していた。

酷いもので骨を折った者や額を切つて血を流す者、幸いにも怪我人だけで死者は出てはいない。

エンシエントとしても、いくら家畜か動物程度の価値しか見えなくても、死者を出してまでは演劇をするつもりはない。

悲劇は好きだが、現実の悲劇は誰も楽しみはしない。

「ルプーは怪我人に中傷治癒ミドル・キュアウーンスを掛けてまわれ。俺は話を聞きに行く」

ルプーは渋々周辺の怪我人に治癒を掛けに行く。

(こいつ怪我人が痛みを訴えてる姿を凄く楽しそうに見てたから心配だが、英雄的な行動は率先させないとな)

冒険者組合に入ると、エンシエントの姿を認めた漆黒の剣のメンバーと、憔悴した様子の子のレイジーがよろよろと近寄ってきた。

「おお……おおお、エンシエント殿、よく無事で……孫が儂のンファイレアが攫われてしまったんじや」

「話はルクルットさんより聞いている。あの時の女で間違いないのだな？」

レイジーの言葉に、落ち着いた様子で、女の事を見たことのある漆黒の剣の顔を見る。

「ええ、間違いありません。あの特徴のある髪型と話し方は決して忘れられませんよ」

「……」瞬の事でした。冒険者組合に來た街の人達に治療しているとこころに來て、こう言っただけです。『死の螺旋で漸く変異が出來た！ 後はこいつさえ、手に入ればあの御方の復活が早まる』って……」

ニニヤが辛そうに話すのを、エンシエントは黙って耳にする。

その時、冒険者達の中から身なりが良い初老に差し掛かった髭の男が歩み寄ってきた。

「君が、真紅の英雄くんかね？ 墓地の衛兵隊長から話は聞いたよ。私の名前はプルト

ン・アインザックという。このエ・ランテルの冒険者組合の長をしている」

「俺の名前はエンシエントだ。その組合長さんが、俺になんの用かな？」

「君はあのモモンという冒険者の師匠だと聞く。モモン君はどこにいるか聞いても？」

「モモンは逃げたブーラーノーンの首魁を追っている。それがどうかしたかな？」

エンシエントの言葉に、アインザックと名乗った男は困ったように頭を掻いた。

「いつ頃戻ってくるかはわかるかね？」

「さて、それはわからんよ。無事なのは弟子として信用してるから疑ってはいないが。奴は怒り心頭だから、必ず捕まえて帰ってくるだろう」

「それは困った。実はこの街の郊外の森にて、ミスリル級の冒険者が連絡を絶った。辛うじて生きて帰った者は不審な人間達と出会い戦いになったと言っていたが、彼らの仲間の方がわからないのだ。他の冒険者はさらなる襲撃に対しての備えとして動かせんし、ミスリルで歯が立たん相手にそれ以下を送るのもな」

「それで少数勢のモモンに白羽の矢が立ったと言うわけか。だが、俺とて知らんものはどうしようもない」

うむつと一つ頷いて、アインザックは無遠慮にエンシエントの頭から爪先まで眺める。

「君もそれなり……いや、かなりの凄腕と聞いている。どうだろうか、力を貸してもらえないか？」

「いや、そうは言うが俺は知り合いが攫われてそちらをなんとかせねばならん。それに俺は組合に所属する冒険者ではないぞ？」

「それならば今ここで……」

エンシエントはアインザツクの言葉を遮るように手を上げる。

「言いたいことはわかるが、辞退させて貰おう。俺は王都で登録するつもりでね。この街に居座るつもりはないのだ」

「くっ……ぐう、それはどうしてというのは野暮なのだろう……。わかった。ここでの功績を王都で冒険者になる際に加味するように強く書いた紹介状を書こう！ それでどうか動いてはくれないかっ！」

「……わかった。では、仮冒険者として依頼を受けよう。それでいいか？」

「恩に着るっ！ 私も必ず約束を果たす事を誓おう！」

「それで？ その連絡を断った冒険者達は何処で行方がわからなくなった？」

「ここからそう遠くない森だ。トブの大森林で盗賊団のねぐらを偵察中に、不審な一団と遭遇、戦闘に入ったらしい。大凡の位置は地図で渡そう」

「わかった。という訳だ。リイジーよすまない。だが、安心しろ。お前の孫は必ず助け出す。こちらを優先するのは命の危険度の高さからだ。ンファイレーアには利用価値があるから決して殺されん。冒険者達の事を調べたら、その足で即座に奴を追う。俺にはその方法があるからな」

エンシエントは早口にそう言うと、安心させるようにリイジーの肩をポンと叩いた。

「すまぬ。すみません。どうか……どうか孫のソフィーレアを……」

「ああ、任せろ。無事に救う事をこの戦斧に誓おう！」

そうこうしている奥から地図を手にアインザックが地図を持って戻ってきた。

アインザックは地図の一点にバツ印を示した地図を差し出しながら頭を下げる。

「それで、そのミスリル冒険者パーティーの名前は？」

「パーティー名はクラルグラで、リーダーはイグヴァルジという。どうか頼む……」

「わかった。全く……街に到着した日に……激動の一夜だな」

「まったくだ。悪夢の様にしか思えんよ。よろしく頼む」

再び頭を下げる組合長に背を向けて、軽く腕を上げるだけの返答を返して外に出る

と、ルプーの治療も終えていたようだった。

「ルプー。冒険者前の準備運動だ。軽く終らせて帰ってから飯にでもしよう」

「了解すすつ！」

バタフライエフェクト。劇は舞台の外へと広がってゆく。

それはまるで即興劇の醍醐味であるかのように、観客も予期せぬ共演者も呼び込んで、広がってゆくのであった。

二十二話。狼と剣士と終わらぬ騒動。

地図は最初にみた落書きのような物では無く。縮尺がそれなりのものであった。とはいえ、何メートルだとか何キロとかいった詳細な物ではない。

精々が歩いて何日程といったぐらいたが、だが、大凡でもわかるのは助かる。

バツ印が付いていたのは、街道から外れた森の中らしい。

(さて、どうしたものか……)

エンシエントとしてはンフィーレアは既に無事に確保しているので、焦る必要はないのだが、だが無駄に時間を掛けたくはない。

行方不明になった冒険者を見つけたとしても、殆ど利益がないのだ。

だが、冒険者組合に貸しを作れるのは魅力的に思える。

「ルプー、人間の匂いが追えるか？」

「えー。犬じゃないつすから、この姿だとそこまでわかんないつすよ？」

「その姿じゃなければいいんだよな？」

人狼と言うだけあって、ルプスレギナにはもう一つの形態がある。

赤月の大狼と呼ばれる狼としての姿だ。

だが、ルプスレギナは基本的にはその姿があまり好きではなかった。

何故ならばその姿はメイドとして相応しいものではない。

「うーん。後でいっぱい構ってもらえるっすか？」

「ああ、ブラッシングでも取って来いでも何でもしてやる」

「いや、普通に撫でてほしいっすよお。しょうがないっすねえ」

犬じゃないんっすよ。もう。とぶつくさ言いながら、メイド服や装備をすりと脱いで、全裸へと変わった。

月に照らされた肢体は滑らかで、自ら光を放つてすら見える。

メイド服を無限背負い袋インフイニティ・ハヴネザックに収納すると、四つん這いの姿になり、まるで誇りある狼が月に向かい、吠えかからんばかりに背を反らした。

ルプスレギナにざわりと肌が粟立ち波立っていく感覚が訪れ全身に電気が走る。本能と言う名の獣に快楽を与えられているような快感と不快感が身体を支配する。

ルプスレギナは嫌っているが、エンシエントにしてみれば相変わらず変身した姿は美しいと思う。

——オオオオオオツ……ウオオオオオオツ……ン！

赤い月を思わせる色の艶やかな毛を靡かせる巨大な狼は強く大地を踏み締めて、空に向かつて万獣を怯えさせる咆哮を放つ。

アウラが所有するフェリルのフェンが魔獣に分類されるとするならば、こちらは神獣に相応しい偉容を讃えている。大きく気品ある佇まいは、まさに北歐神話に出てくる神狼と呼ぶに相応しい姿だ。

その神々しいまでの巨狼は、エンシエントに向けて地に伏せるように頭を低く下げ

る。その鼻筋を優しい手付きで撫で上げると、姿とは似つかわしくない可愛らしい声で「くうるうう」と鳴いた。

「ああ、いつ見てもルプスの姿は美しいよ。さあ、人間の匂いのする方へ連れて行っておくれ。我がレギーナ^女」

エンシエントは軽く飛び上がり、ルプスレギナの背に飛び乗った。

ルプスレギナは暫く風の匂いを楽しむかのように、首をもたげて臭いを嗅ぐと、ある一点を見つめて、「ぐるるう」と唸った。

「見つけたか……。行けっ！」

そう言うが早い。ルプスレギナは後ろ足で地面を蹴り上げて走り出す。

その速度は嵐を思わせる風。暴威の化身といってもおかしいものではない。

木々の隙間を巨体とは思えぬ速度で駆ける姿はまるで木々の方が避けているように見える。

そして数瞬もしない間に、それは見えてきた。崖つぷちに空けられた穴。その入口付近に立つ歩哨と思われる汚らしい人間の姿だ。

「な……なんだっ！ 何かく……ぶげえ！」

「いつ……ダベエ！」

入口付近で見張りを務めていた男達は、その本来の役目も果たせず、その生涯を終えた。

それはほんの爪の一振りだけでだ。

「あつ、こら、ルプー駄目だつての！」

「こごう……くるうるるう……」

エンシエントは狼語がわかるわけではないが、何となく、『ついうっかり……』と聞こえた気がした。

エンシエントは背から滑り降りるように、地面へと着地すると、ほぼ原型を留めていない男二人を見た。

そして、胸を撫で下ろす。

どうやら、探しているミスリル冒険者パーティーの奴らではないようだ。

粗末な鞣し革の鎧と鉄製の剣しか買えないミスリル冒険者ならわからないが、まさかそんな者の筈はない。

「うう……まだ、背筋がゾワゾワするっす」

その時に人の姿に戻ったルプスレギナが、修道服に見えるメイド服を着直して、背後から声を掛けてきた。

「ルプー。ご苦労さん」

「申し訳ございません。エンシエント様……、殺してしまい。あの姿になるとどうにも理性が飛んでしまっ……」

「ああ、気にするな。こいつらはどうやらミスリル冒険者が探っていた野盗の類だろう。俺がうっかりしていた」

「そんな！ 至高なる創造主であるエンシエント様に間違いなどございませんっ！」

「そうか。だが、まだ野盗が無関係とは限らんし、逆に何か知ってると思うのが妥当だな」

洞窟の周囲を見ると、いくつか落としたり穴とかの罫を仕掛けられて居たようだが、ルプーの一撃で吹き飛んでしまったようだ。

しかし、ルプーの足音などが聞こえていたのか。洞窟の奥から明かりが近付いて来るのが、チラチラと見える。

「さて、話し合いに行こうか」

「話し合うんですか？ 問答無用で潰すのかと……」

「いやいや、話し合うというのは大切な事だぞ。人間として最低限の礼……」

その時、洞窟の奥からクロスボウのボルトが飛来して、エンシエントが振り上げた手に握り止められた。

次の瞬間には、そのボルトをあり得ない臂力で投げ返す。

洞窟奥から断末魔の声が聞こえてきた。

「話し合いっすか？」

「悪い。俺は人間じゃなかったわ。そしてあいつらも人間じゃねえわ」

冗談っぽくルプスレギナは口にするが、至高の御方の言葉を遮った洞窟奥を睨みつけて、喉奥で唸り声を低く上げている。

そんな様子を見せる。可愛い自分の娘を微笑ましく見つめると、エンシエントは腕を振り上げて、洞窟奥を指差した。

「ルプー。(命を) 取ってこーい！」

「わん！ って犬じゃないっすううう！」

言葉の残響を残しながらルプスレギナは、背中から聖印を象つたようなハルバードにも見える武器を引き抜いて、洞窟奥の暗闇に飛び込んでいった。

「やれやれ。犬じゃないって言うなら、ちゃんと一人は残しとけよ。話を聞けないからな」

などと呟きながら、ふと思った。そういえばルプーは蘇生が使えたなど。

その思考が既に人の感性ではないと思ひ直し、苦笑を浮かべて小さく首を降った。

エンシエントは悠々とした足取りで洞窟奥へと向かってゆく。そのまま奥まった所まで来ると永コンティニユアル・ライト続 光の掛かった魔道具が吊るされていた。それを見て野盗の中でも、少しは羽振りがいいのが見て取れた。

洞窟の奥へと行くにつれて血の匂いが濃くなつてゆく。

時折、通路の端には一撃の元に首を落とされた汚らしい男達の死体が転がっていた。

さらに奥へと向かうと人の声が聞こえてきた。

その声はルプーの声で随分と楽しげな声音をしている。

「ほれほれ、どーしたつすかあ? ……当たるわよ。刺さつちやうわよ。うふふふ、そういうのが好きな人なのかしら」

「この……化け物がっ! くそくそくそ! なんなんだ! きさまはっ!」

どうやら少しは歯応えのあるネズミを見つけたようで、随分と楽しげに甚振いたぶっているようだった。

相手の声には必死さが感じられるが、ルプーは随分と余裕のある声を楽しげに上げて

いる。

「やれやれ、楽しむのはいいが、楽しすぎだ」

ルプーは後ろからのそりと聞こえた声に、大きく飛び退ると振り返ってきた。

「いやあー。こいつ中々強いっすよ。人間にしてはっすけども」

「まったく。壊れたら話も聞けないだろうに」

全身から玉のような汗を浮かばせた無精髭の男が、肩で息をする。

その目には微かな怯えが見える。負け犬の目だ。

「あー。うちの相棒が失礼したな」

「いやあーん。愛棒だなんて、気が早いつすよお！」

「お前は少し黙ってろっ」

無精髭でやや長髪の男は、刀と呼ばれる剣を手に深く息を吸ってから、姿勢を正して相対する。

「ひとつ聞きたい事があるんだがな。このあたりでごく最近に冒険者を見なかったか？

もしくは殺したか？」

「知らんっ………といえ、信じてくれるか？」

無精髭の剣士は、一度納刀して腰を落として構えた。

その姿に、エンシエントは肩を竦めて見せる。

無精髭の男は、構えながら思った。眼の前の男は強いと、だが、負けるとまでは思っていないかった。

連れの女には遊ばれた感があるが、それも武技を使う暇がなかったからだ。故に武技さえ使えれば、勝つ自信がある。

特に相対する男の得物は巨大な戦斧だ。振るうにも狭い洞窟内では取り回しが利くはずもない。

だが、背負われている男の武器は使われることすらなかった。

「すまん。信じられんから、少しだけ体に聞かせて貰おう。……うん。これでいいか」
誰の持ち物だったかは知らないが、足元に落ちていた血に塗れた短剣を手にすると、ぶらりとぶら下げるように腕を降ろした。

「舐めているのか？」

「舐めてはいないさ。抜刀術だったか？ 居合だったかだろ？」

「知っているのか」

「まあな。だが、駄目駄目だ。それじゃこれで十分だ」

「舐めるな。俺の神刀は鉄如き容易く切り裂く！」

「そうかい。準備がいいようだからいくぞ？」

すつと一歩前に足を踏み出す。剣士は全神経を張り詰めて、刀に掛けた指に力を込め

た。

二歩目を出すと、劍士は全身の筋肉を張り詰めさせる。

三步目を踏み出した時に、劍士は動いた。流水の如くと言うには少しだけ不格好な抜刀は、最速最短をもってエンシエントの喉口へと襲いかかる。

——キンッ!

それは硬質というには少しだけ澄んでいた音色だった。

たつたそれだけの音を残して、男が誇っていた神刀という刃は容易く切られて宙を舞い、洞窟の壁面に突き刺さる。

残されたのは耳が痛くなるような静寂と、劍士の手元に残った柄だけで、エンシエントの握る短剣には傷一つ存在していない。

「負け犬の剣だ。命を取ってやる価値もない。行くぞ。ルプー」

「えっ!? いいんすか?」

「構わん。こいつの剣は弱者の剣だ。だが、嘘は無い剣だ」

エンシエントはつまらなさそうに吐き捨てる、さつさと背を向けて入ってきた洞窟の入口へと戻る。

その背中を追うルプーが微かに背後の男を見ると、呆然と手元に残った柄だけの握りを見つめている。

その絶望を形にしたような表情に、ルプーは背中にも得も言えぬゾクゾクしたものが走り、にししと笑っていた。

外へ出ると既に月は傾き、もう数時間もすれば夜明けを迎えそうにも感じる。

「時間を無駄にした。次を探すとしよう」

「良かったんすか？ もしかしたらあの人間が嘘をついてるかもしれないつすよ？」

「それはないだろう。腐つてもミスリルだ。あんな弱者にやられるとは思えん」

少し離れた所へと移動して、今度は自身の影を使って探すかと、歩き出した時に洞窟の入口に人の気配が現れた。

「さて、待ってくれっ！」

「なんだ。時間がないんだ。それとも冒険者に心当たりがあつたか？」

「いや、ミスリル云々の冒険者は知らない。本当だっ！ 言いたいのはそれじゃない。

俺は……俺は弱いのか？」

エンシエントがその言葉で漸く後ろを振り返ると、無精髭の剣士が洞窟の入口で手を付いて息を切らしながら、必死の形相でこちらへと問いかけてきていた。

「弱いかどうかはしらんよ。俺にとつちや、その入口に立っていた見張りと変わらん。ただ、一つ言えることは……」

「な……なんだ！ なんでもいいから教えてくれ！」

「剣士のつもりか知らんが、己の姿を見ろ。己の立っているところを見てみる。この意味がわからんなら、お前は永遠の負け犬。弱き者だ」

「それはどういう」

ふう、と小さく溜息を吐くと、ルプーへと視線を巡らせて森の中に分け入っていく。言葉の意味もわからない愚か者と話す時間など、エンシエントには持ち合わせていないのだ。

「待て……待ってくれ……。俺は……。俺はどうすればいいっていうんだ……」
憐れな剣士の慟哭を聞きながら、エンシエントは生い茂る森の中を疾駆したのであった。

この数日後、名も無き剣士が『死を撒く剣団』の全ての首を持ち、女を救い出したが報奨も受けず名も告げずに姿を消した。誰もその行方はわからなかったという。

二十三話。後の祭り。騒動は終わり平静が戻る。

盗賊達のアジトから数分ほど走り、森の中でも小高くなっている崖の上に登る。傾いた月は影を濃く長く地に落とす。

「ここいらでいいか。眷属招来。ミスリルのプレートエルダー！ヴァンパイア・バットを首から下げた人間を探せー！」
影がゴボリと質量を持って膨らむと、中から無数の古代吸血蝙蝠エルダー！ヴァンパイア・ウルフと古代吸血狼が溢れ出した。

次から次に溢れ出る眷属達は出てくるなり、偉大なる至高の召喚者の命めいを実行するために忠実に動き始める。

そしてほんの数秒で、それを発見することが出来た。

首からミスリルのプレートをぶら下げ、物言わぬ死体となった冒険者パーティの姿だ。

(最初からこうした方が早かったな)

エンシエントはそう思ったが、眷属招来は簡単な命令しか聞かないし、人の目に触れ

る可能性があるから、なるべくならば使いたくはなかった。

崖から飛び降りると死体を見つけた方へと走り始めた。

冒険者達は纏まって死んでいた。恐らくは不意をつかれたのか。戦闘痕はなく剣すら抜いていない。

皆一様に驚いたような表情だけを浮かべている。

傷は殆どが槍のような刺殺武器の一撃、数人は魔法でやられた可能性がある。

「眷属たちよ。周囲の数百メートルに人の気配がないかを探せ」

一斉に周囲の警戒で散る眷属達の気配を追いながら、足元に転がる死体の事を考える。

（冒険者はみんなほぼ不意を突かれている。つまり敵を認識していなかった？ もしくは警戒する相手ではない知り合い？ 死体を何故放置した。もしも知り合いならば隠蔽を行う筈だ）

胸に空いた穴に指を突っ込んで傷の深さを探る。

刺突武器でやられた冒険者の傷の深さは、ほぼ変わらなかった。どれもが心臓に達する所で終わっている。先端が微かに心臓を圧迫するように止めていた。

そのせいか出血は驚くほど少ない。

「相当な腕なのは確かだが、ならばどうして、こんな特徴のある殺し方で死体の隠蔽を行

わない?」

(装備が荒らされた形跡はない。不意の遭遇で先手を打たれた? 他国の密偵か何か? 違うな。死体の傷から少なくとも複数人いた印象を受ける)

「エンシエント様?」

「うん。わからん。鑑識じゃねえしな。とりあえずはルプー。こいつらの死体をナザリックへ持っていつてくれ。俺はクレマンティーヌと合流し、ンフィーレアを連れてエ・ランテルへと戻る」

「はっ!」

エンシエントは冒険者達の首にぶら下がったミスリルのプレートを引き千切ってポケットに仕舞い込んだ。そして、周囲に人の気配が無い事を確認してから眷属達も消し去る。

「では、私は先にナザリックにてお待ちしております!」

ルプーは無^{インフイニティ・ハヴァザツク}限背負い袋から、魔封じの水晶を取り出すと宙に掲げる。

すると、目の前には闇を思わせる穴が開いた。

「ああ、ご苦労。俺もンフィーレアを街に戻したら、一度ナザリックへと帰還する。クレマンティーヌのこともあるしな」

「はいっ!」

ルプーは無造作に冒険者の死体を中へと放り込むと、自らも中に入って少しだけ名残惜しそうにしながらも消えてゆく。

「さて、俺もクレマンティーンと合流して、さっさとこの騒動を終わらせるか」
その場から全力で街の方へと走り始めた。

数奇な運命は偶然か必然か。出会うことはなく。平和に終わる。

だが、世界線が変われば、ここで人が死に、ナザリツク全体を巻き込む騒動を起こしていたのかもしれない。

そんな事はエンシエントには、わかるよしも無かった。

クレマンティーンと合流して、眠っているンファイレアを抱いて、街に戻る頃には既に地平線が日の出を迎えていた。

冒険者組合のウエスタンドスイングスタンドアを開いて凱旋を果たした。

腕の中で昏々と眠り続けるンファイレアの姿を見るなり、真つ先に駆け付けたのはリイジーである。

「ンファイレアっ！ ンファイレアやい。おお、無事で良かった……ほんに無事で良

かった」

「パートナーのルプーが診てみたが、何かしらの魔法で眠らされてるようだ。時間と共に目を覚ますだろう」

「おお、おお……ありがとう！ 本当にありがとう！ エンシエントさん」
「構わん。あくまで依頼として受けただけだ」

眠り続けるンファイレアを、そつと冒険者組合のベンチへと寝かせる。

すぐにリイジーが、ンファイレアの側へと寄り添う。

エンシエントは敢えて疲れたとばかりに、肩をぐるりと回してゴキリと鳴らす。

そうして周囲を見回すと、冒険者組合の中には疲れた表情を浮かべる冒険者達が壁に寄り掛かったり、床に座り込んだりしている。

流石に緊張を強いられての徹夜は皆疲れた様子だった。

リイジーがンファイレアから顔を上げて、エンシエントを見つめる。

「それで犯人の女なのじゃが……」

「残念だが、ンファイレアさんを取り返すだけで精一杯だった」

リイジーがやや不安そうに聞いてくるのを、微かに俯いて悔しさを滲ませて見せる。

エンシエントのその姿を見て、首を振りながらエンシエントを抱き締めるように両腕を掴んだ。

「いや、孫とあんたが無事だっただけで十分じゃ。儂に出来る事があるなら何なりと言
うておくれなあ」

「では、後ほど、依頼料として願いを聞いてもらいたい。これはあんたの為でもあること
だ」

「なんじゃ？」

「ンファイレアが目覚めてからでいいんだが、カルネ村に移住を考えてくれんか？」

「それはまた、どうして？」

「あそこは俺の知人であり、恩人の力ある魔法詠唱者マジック・キャスターナインズの庇護下にある。あそこ
ならばそうそう例の女も手が出せはしないんだが」

リイジーは興味深そうな顔を浮かべる。

エンシエントは更にダメ押しの一言葉を、リイジーの耳元で呟いて、手の中に一本の
ポーションを握らせる。それは既存のポーションではあり得ない赤いポーションで
あった。

「……ここだけの話だが、ナインズはポーションの造詣も深い。ここよりは研究が捗る
と思うんだがな？」

「よし、決めた。儂らはカルネに移住しよう。なに店の入口も壊されたそうじゃし、危険
を承知であそこに住み続けるより、移住した方が良さそうじゃわ」

その豹変の仕方に苦笑する他ない。

もしかしたら、リイジーはこの地に残り、ンファイレアだけを移住させると言い出される可能性があつたから、ダメ押しにポジションを引き合いに出したのだが効果は絶大だ。

「では、後程、護衛も兼ねてルプーを同行させよう。ンファイレアが起きたら移住の準備を進めてくれ」

「そういえば連れておつた女性はどうしたんじや?」

「ルプーはちよつとな。俺はこれから少し組合長に話がある」

「うむ! 何から何まですまん。よろしく頼むよ」

その時、ンファイレアが目を覚ましたのか、少し声を上げた。リイジーは直ぐにンファイレアの側へと近寄つた。

それを見て、エンシエントは二人から離れると、カウンターで疲れた表情を浮かべる受付嬢へと近付いて声を掛ける。

「疲れてる所すまんが、組合長のプルトン・アインザックに会いたい」

「はあい……。ええつとお、冒険者プレートをお出しく下さい……」

受付嬢は徹夜と事務仕事から、かなり憔悴気味なのか。少し眠たげに間延びした声を上げる。

「いや、冒険者じゃない。個人的に依頼を受けたエンシエントだと言えば伝わるはずだ」
「はあい……エンシエ……え？ エンシエント様ですか！ あの真紅の英雄のっ!!」

受付嬢が上げた素っ頓狂な声に周囲で疲れた顔をしていた冒険者達が一斉に顔を上げた。

エンシエントは知らなかったが、漆黒の英雄モモンと真紅の英雄エンシエントの名は、冒険者達の間では噂が飛び交っていた。

スクリトル、ドラゴン
骨の竜を倒した際に居合わせた冒険者達もかなり居たのだ。

あの時の光景を忘れられない者達も多い。

そんな視線に意にも介さずに、受付嬢が組合長の執務室へと案内する後ろを歩いてゆく。

「あれが真紅の英雄か……あの人がこの冒険者組合に登録してくれたらなあ」

「馬鹿、この街には既に漆黒の英雄がいるだろ。あの人は王都で登録するらしいぜ!」

「漆黒といい。真紅といい。なんで、いい女を連れてるんだよ……くそっ」

「いいよなあ。可愛い彼女と二人で冒険をするとか……。男ならみんな憧れるぜ」

後ろからざわめきを背中に受けつつ、巨大戦斧を背負う背中は、英雄に相応しい偉容を示していた。

もしも、モモンが聞いていたら心の中でこう思ったであろう。

『いいえ、あいつは単なるペロロンもどきです』と。

組合長の執務室は二階にあった。

受付嬢がノックをすると誰何の声^{すいか}がして、エンシエントを案内してきたという^と即座に扉が開けられた。

「これはこれは、真紅の英雄エンシエント殿、ご無事で良かった」

「労いに感謝する。それで例の依頼の件なのだが……」

「見つかりましたか?!」

「ええ」

アインザツクの執務机の上にポケットから、ミスリルで出来たプレート^{プレート}を全て取り出して置いた。

「そうか……間違いなく。搜索を依頼していたミスリル冒険者の物で間違いない……。そして彼らは……?」

「何者かに殺されていた。槍のような物でな。何か心当たりはないか?」

「槍……槍か。何人か使っている者に心当たりはあるが、とてもではないがミスリルの冒険者に敵う者ではないな」

「そうか。遺体は悪いが獣に食い荒らされて酷いものだったので埋葬させて貰った。仲

間のクレリックが埋葬したからアンデッドになる事もあるまい」

「そうだな。死んだ事がわかり、こうしてプレートが帰ってきただけでも十分だ。済まなかつたな。エンシエント殿」

組合長としては中々の人物のようで、冒険者の証であるプレートの前で祈りを捧げるように手を組むと、暫しの黙祷を捧げる。

「君がうちの組合に登録してくれると助かるのだがなあ」

縋るようなアインザツクの視線に、再びエンシエントは断りの言葉を口にする。

「すまん。前にも言ったが、俺には俺の目的があつて王都で登録する事になっている」

「ふう、そうだな。これは私のワガママであつたな。申し訳ない。これが約束の紹介状と今回の依頼料だ」

封蝋がされた一枚の封書と、ジャラリという重い音がする革袋を、執務机の上に置いた。

「話をするに、君はすぐにでも王都に旅立ちたそうだったからね。墓地での騒動で出たであろう報奨金も含めて渡しておく。それとこちらの紹介状には私と都市長の連名、それに衛兵隊長の報告書も入っている。少なくともこれを王都に冒険者組合に出せば無碍にはされまい。おそらくだがミスリルには成れるはずだ。あとは君次第になる」

「いや、感謝する。では、俺はまだやる事があるので失礼する」

「最後にもう一度だけ、聞かせてくれ……どうか留まってくれないか」

組合長の未練がましい声に、エンシエントは背を向けて手を挙げるだけで返事として部屋から退出すると、部屋の中には苦悩に満ちたアインザツクの深い溜め息が室内に響いた。

二十四話。知らぬ所で進む勘違いと既成事実。

激動の夜が明けた後に、モモンが黒焦げの死体を持つて帰還を果たした。

ズーラーノーンの首魁だったという証として、鈍い光沢を持つ黒い玉を差し出した。

死の宝珠という名の魔道具は、モモン曰く「珍しく知性あるアイテムだけど、ゴミアイテム。クレマンティーヌが持つてきた叡者の額冠の方がレア」というなんともい物らしい。

だが、この世界に於いては非常に貴重なアイテムらしく、魔術師組合の組合長の「馬鹿！ お前こんなもん持つてる奴は幹部クラス以上に決まってんだろっ！」との言を持つて、首魁という証明がなされた。

予定通りにモモンが帰ってくるのと、一度転移門ゲートを開いてもらい、ナザリックからルブーを召喚してバレアレア家引越しの護衛として付けさせた。

ンファイアレアが寝ている間に、勝手に決めた事に不満を漏らすかと思つたが、想い人がいるカルネ村に移住ということで、寧ろ目覚めるなり率先して引越しの準備を嬉々としてしたそうだ。

エンシエントはというと、一日エ・ランテル観光をしたかったのだが、行く所行く所、

感謝と新たに生まれた二英雄を称える声にうんざりとして、早々に王都に向けて旅立つた——ということになっている。

エンシエントは今ナザリックで書類仕事に追われていた。

「えー、何々？ アペリオン丘陵にてスクロール素材になり得る動物を発見。牧場にて養殖と実験を提案な。いいんじゃないか？ セバスの報告ではスクロールに適してる素材は帝国にもなかったようだからな。つか、スクロールとか魔道具が少なすぎだろ。マンパワーに頼るとかどんだけ個人の能力主義だよ。そんなもん。さつさと差を無くさないと貧富が広がるだけだわ」

エンシエントはリアルの世界を思い出す。

リアルの世界も生まれた瞬間に二極化される世界だった。この世界にもタレントだとかいう生まれ持った才能で未来が明るいか暗いか変わるし、魔法だってそうだ。

そういう個人差の優遇を行うと、極端な話で魔法が使える者と、使えぬ者で選民思想すら生まれかねない。

事実、クレマンティーヌから聞いた話で、国内では才能の差で家族内ですら差別があるというのだから、愚かしいにも程がある。

「やっぱ、法国は世界のガンだな。そもそも神なんて偶像を騙る事でしか人心を纏められないなら、さつさと滅んどけ！ つか、神が差別主義者過ぎるだろ！」

エンシエントとしては神は嫌いだが、不要かと言われればそうは思つてはいない。神という概念すらない時代から知性ある者は、それに準ずる存在を生み出しては継ることで生きていくからだ。

心が弱つている時、愛する者を失つたりした時、無聊ぶりようを慰める存在に縋ることは悪い事とは思えない。

だが、逆を言えば神なんてものはその程度でいいのだ。それ以上になると碌なことにならないのは、どんな世界の歴史でも証明されている。

(やっぱり法国だよな。潜在的な敵なのは。クレマンティーヌの話じゃ人類の守護者を気取つた選民思想の塊だかんなあ)

そのクレマンティーヌだが、今はデミウルゴスの所へと出向させている。

情報の整理と管理に掛けてはデミウルゴスが一番の適任だからだ。

その後にはシャルティアの下に付けて、帝国領内の情報収集の補佐にする。

シャルティアはクレマンティーヌが、エンシエントの眷属と成つた事に怒りを露わにしたが、叡者の額冠と情報の功を持って、守護者を始めナザリツクの者達へは、今後はナザリツクに連なる現地現地の者という事で納得させた。

シャルティアはそれで怒りを表面上は抑えることに成功したと思つたが、ある日を境にクレマンティーヌを猫可愛がりし始めた。

それを見て、エンシエントはヴァンパイア同士で気があったのだろうと胸を撫で下ろしたが、実はそうではない。

全てはエンシエントの言葉が問題であった。

「俺の眷属だから、子供みたいなもんだな」と言つた何気ない一言に、シャルティアはヴァンパイアとしてのエンシエントの子供Ⅱ私との子供つ!? 等というとんでもない勘違いを起こし、尚且、クレマンティヌの血を吸い、逆にシャルティアの血を吸わせる事で血の繋がり、つまり親子の縁を結んだ結果と言える。

そんな事に成っているとは、エンシエントは知る由もなかつたが、それに気付いた時に、第九階層の一室で、とある変態鳥頭ペロロンチーノの名前を叫ぶ鮮血の王がいたとかいらないとか。

「とりあえずは牧場の件は、俺は認可つと」

今の所、ナザリックの運営はナインズとエンシエントの合議制となつている。

エンシエントとしては、ナインズの独断で行うべきだという主張をしたのだが、ナインズに「いや、あんた面倒くさいから丸投げしたいだけだろ!」と見抜かれたせいで、お互いに同じ書類を別に見て、認可、不認可、要検討を決めて意見が割れたら、その時は会議という形にしている。

こうする事である程度は話し合いの必要は無いということになる。

「(こ)ち(ら)を(ど)う(ぞ)。アルフ Heim 産の……」

「ああ、説明はいいよ。美味しいというのはわかってる。ユリを信用しているからな」

「……っ！ 有難うございます。その言葉だけでも勿体無く思います！」

エンシエントの言葉に感動を覚えて、ユリは涙を浮かべる。

因みに、エンシエントの私室は一般メイドが担当しているが、エンシエントの執務室ではユリが専属となっていた。

別にこれは私的な問題ではなく、カルネ村の進捗状態など確認の為だ。

カルネ村はナインズの庇護下になっているが、直接的な担当はエンシエントが行うこととなっている。

「さて、ここからは金勘定するか」

冒険者組合長が依頼料兼報奨金と差し出した貨幣の入った革袋の中には、白金貨二十枚と金貨五十枚、銀貨が十二枚が入っていた。

「とりあえずは、この一番高そうな貨幣を五枚と金貨……金貨だよな？ これを十枚と銀貨を五枚程は俺が持つとして……ああ、くそ、きちんと貨幣価値を調べとけばよかったな」

モモンとエンシエントは共にエ・ランテル観光をした時に買い物しようと思ったんだが、飯屋に入れば金はいらんと言われ、物を買おうとすると周囲に人が寄ってきて握手を求められたり感謝を言われるので、まともに物も買うことが出来なかったのだ。

握手を求められて、モモンは気軽に応じていたが、エンシエントは握手拒んだだけに顔はいいがいけ好かない奴という微妙な評価を頂いていた。

握手をするとどこからか某ロボットアニメの合体シーンのような音がするのだから、出来るはずが無い。

執務机の上に置かれた硬貨の中で、自分の分を確保すると白金貨を二枚と金貨を五枚銀貨七枚を革袋に入れて、ユリ・アルファへと手渡す。

「これは？」

「私塾の件はナインズさんと一応は相談して、ユリに一任することとした。その為の資金にするといい。俺も王都に入ったら文字習熟用の本を購入するつもりだが、行商等が来た時にでも必要な物があれば買うといい。なんだったら、ユリの物も買って良い」

「……………このような物を頂いては……………」

「勘違いするな。現地に溶け込み。貨幣の価値や商人の性根確認等の必要経費だ。ユリの物を買うのもそうだが？ 物を売り買いうというのは市場の意識調査と考えてするんだ。その為の買い物と思え。全てはナザリックの為だ」

エンシエントはそう言うと、硬貨を入れた革袋をユリに押し付けるように手渡した。

ユリはそれをまるで宝物を渡されたように恭しく受け取ると、胸に抱くように抱え

た。

「はっ！ 至高の御方の思慮深さに感服致します」

「村で必要な農具などの器具や出来れば牛や羊、豚や鶏といった家畜も購入したいな」

「はい。近隣の農村を調べ、購入できるように努力致します」

エンシエントは机に置かれた。紅茶を手にとって口をつけ、ふうと一息ついた。

残りは半分に分けて、白金貨七枚と金貨二十枚をナザリックに収めて、白金貨六枚と金貨十五枚をセバスの資金とする。

エンシエントは恐らくナインズも同じようにするだろうと予想する。

こうして金を稼いでいると、ナザリックを一人で長年維持していたナインズに頭が下がる思いだ。

「商売もしたいな。定期的な資金の確保や物資の確保手段が欲しいところだな」

「カルネ村の成長を促しますか？」

ユリの言葉にエンシエントは苦笑で返す。

「急な変化と成長は人に歪みを齎す。何をするにしても慣らしながらだ。そうじゃないと人は容易く反感するようになるぞ。そこそこが一番いいんだよ」

「はい。徐々にはありますが、村に入る人間も出てきています。ですが、中にはゴブリンがいる事を見て、腰が引ける者も見受けられました」

「だろ？ ゆくゆくは共同生活圏の構築、村から街への発展だ。まあ、俺もナインズさんも、ユリもアンデッドで時間は無限にあるようなもんだ。気長に行こう」

「はい！」

百年二百年、考えている事はあるが、今は口にする事すら憚られる事を、エンシエントは頭の後ろで手を組みながら思いを馳せるのであった。

それからしばらく他愛のない村の事を話したり、色んな報告書を読んだりとしてしているうちに、執務室のドアがノックされた。

「アルベド様ガ面会ヲ才求メデゴザイマス」

天井から八肢刀エイトエッジ・アサシンの暗殺蟲の声が聞こえてきて、ユリに領いてドアを開けさせた。

「よく来た。アルベド。なにか用か？」

「ナインズ様がお帰りに成られました事をご報告に伺いました」

「そうか。ご苦労。では、ユリ、村の事を任せたまえ」

「はっ！ 全身全霊をもちまして、御期待に添えるよう努力致します！」

恐縮するユリへ鷹揚に頷くと、アルベドの元へと歩いてゆく。

「では、エンシエント様……御手を……」

アルベドは廊下へと出ると、楚々とした動きで、そつとエンシエントへと手を差し出した。

「いや、一人で歩けるからな」

「いけませんわっ！ 億が一、兆が一、いいえっ！ 無量大数の一にでもお転びする可能性が有るならば、それを事前に防ぐ事こそ、この……このっ！ 守護者統括の役目にございます。それとも私の手は触れられぬ程に汚らわしい物だと……。もしそうで有るならば、この汚らわしい手など切り落としてっ！」

「わかった！ わかったから！ すまないが手を引いて貰えないかっ?!」

「はい。このアルベドの手に御手をどうぞ……」

アルベドの嬬やかに手に、エンシエントはそつと手を置いた。

一瞬だが握手のようなエレクト音が出るかと思つたが、そんなことは無かつた。手で掴むだけだと握手と認識されないであろう。

「くう……ふううう……」

「あの、アルベド？」

「ふう……ふう……くうふう」

「おーい。アルベド……さん？」

「くふふふふつ。ご馳走さ……いえ、失礼致しました。では、ご案内させて頂きます

わ

「いや、いまご馳走さまって言いかけたよなっ!」

「その様なことはございませぬわ……くふふっ」

廊下を非常に慎重に、ゆっくりと歩くアルベドは、始終息を乱していた。

さり氣に腰から生えた漆黒の羽が、エンシエントを包み込むように、更には撫でるように動くのは氣の所為ではないと思う。

ナインズの執務室に着いたエンシエントは語ったと言う。転ぶ危険より貞操の危機を感じたと、それに対してナインズは、「馬鹿じゃないですか? いや、馬鹿じゃないですか? リア充死ねばいいのに!」と嫉妬マスクを被ったそう。

現在絶賛不貞腐れ中の死の支配者様オーバーロードがいた。

顔には泣いているのか怒っているのかよくわからない仮面、通称「嫉妬マスク」を被り、執務机に座っている。

アルベドには自分達だけで内密の会議を行うと行って退出させている。

「ナインズさん。あんたいい加減に機嫌直せよ」

「いやいや、漸くナザリックに帰ってきて、貞操の危機とかリア充発言聞かされたら

ねえ」

「いや、あんた何言ってるの。俺には性欲もクソもねえよ。つか、あんたの方が人化の指輪を使えばワンチャンあるんじゃないのか？」

「えー。でも、タブラさんの子供ですよ？」

「よっしゃ！ よく言ったその言葉！ 今度人化の指輪をあんたに嵌めて、アルベドとシャルティアを寝室に放り込んでやるよっ！」

「やめてくださいっ！ 真剣に！ 最近、食事の時に凄いですから、アルベドのあの視線が……」

そこまで言ってから、ナインズは何かを思い出したのかカタカタと震えだした。

嫉妬マスクをそつと外した。

「所で、冒険者組合の方はどうだった？」

「ああ、無事にオリハルコンまで上がる事ができました。異例らしいですが、エンシエントさんは？」

「俺の方は、王都に行ってみない事にはわからんなあ。ミスリル云々つてのは言われたかどうかかな？」

その場で肩を竦めてそう嘯うそぶいて見せる。

「まあ、犯人を取り逃がしてる事になってるしな」

「それなんですけど、どうして捕まえた事にして適当に作らなかつたんです?」

その言葉を聞いて、エンシエントは苦笑する。

順調にというかなんというか。いとも簡単に作ると言つたことに驚きが禁じ得ない。

「まあ、そういうんじゃないかと、王都で登録を行うのに、エ・ランテルでの事がどこまで評価されるかわからなかつたのと、今後の布石としてだな」

「と、い、うと?」

「例えば、モモンがアダマンタイトに上がる事に、功績が必要な時に倒される悪役が必要だろ? もしくは……そう、もしくは俺達に都合の悪い人間を消す際に汚名を被つてくれる存在が欲しいってのもある」

そうなのだ。万が一でも冒険者組合長のアインザックが敵対した場合、もしくは都合の悪い存在が現れた際に、それを消して罪を擦り付ける存在が欲しかつたのだ。

エンシエントは無意識にそんなに目的を持って行動して事に改めて驚く。

俺も順調に人間辞めてやがると……

ふふつと自嘲の笑みを浮かべると、ナインズはそうとはわからずに一緒に微笑むのであつた。

二十五話。旅立ち出会う者。それはDEATHティニー？

ナザリックから王都へと旅立つ前に、カルネ村に立ち寄った。

ンフィーレアは昨日カルネ村へと到着して、ナインズとの顔合わせは既に終わらせてある。

赤のポーシヨンの製法を、ナインズは聞かれたそうだが、材料を言うトリイジーは首を傾げたらしい。

この世界では無いか。若しくは発見されていないかなのだろう。

故に今後はナザリックの機材を貸し出して、この世界だけの素材で赤のポーシヨンを目指してもらおう事となったのだ。

いつもの村を一望できる丘へと降り立つと、村の変わり様に驚きが禁じ得なかつた。

以前あつた粗末な柵は取り壊されて、辺境の開拓村としてはそれなりに立派な村壁そんへきとなつている。

要所に物見櫓が建てられているのも素晴らしい。

何より、エンシエントが感心したのは村人達が、村の拡張も考えて作っている所だ。

壁の内に弓を射させる為の足場も組まれていない。

更にいうと加工された木材を使って作っている。同じ木造りでも丸太を用いて作った方が、頑強に作る事ができる。

だが、流用性が効きづらくもなるのだ。

逆に言えば村の防御力はそこまで求めていないのだろう。

足止めと威嚇さえできればいい。その間に人だけは逃がす。

拡張性と利便性、簡便さとそれなりの効果、人間の欲と弱さと賢さを示している。弱者の知恵と言える物があった。

「あー！ エンシエント様とルプーお姉ちゃん！」

村の入口にまでくると、真つ先にネムから声が掛けられた。

(この子が必ず最初に気付くな)

エンシエントはふつと表情を緩めた。

「ネムよ。息災か？」

「そくさいですか？ ネムはいつも元気です！」

ネムには少し難しかったかと思つたが、なんとなく伝わったようだ。

「ネムちゃん。大つきくなつたつすねえ！ 昔はこーんなに小さかつたつすのに」

ルプーはイタズラつ子の様な笑顔を浮かべて、親指と人差指の間を僅かに開ける。

「ルプーお姉ちゃん。それだと妖精さんだよ？」

キョトンとした後で何がおかしいのか。ネムはけらけらと笑う。

その反応に気を良くしたルプーは更に言葉を続ける。

「知らないっすか？ 人はお母さんのお腹の中に仕込まれる前は、みんな白い妖精さ……あいたあ！」

「お前は子供に何を言おうとしとるんだっ！ 引くわ！ ドン引きだわ！」

ルプーの突然の下ネタに、村人の前ではなるべく偉そうに心を掛けていたエンシエントの口調が崩れた。

それからすぐにエンリとンファイレアが、数人のゴブリンと共に村の入口へと顔を出した。

ゴブリン達はエンシエントを見ると、ビクリと体を震わせた。

「ンファイレアくん。その後はどうかかな？」

「はい！ その節は本当にありがとうございました！」

ンファイレアはあの時の事は殆ど覚えていなかった。

最後の記憶は、怪我人の様子を見ている時に首筋に走った衝撃だけで、次に気がつけば冒険者組合の待合室だったそうだ。

深々と頭を下げるンファイレアに、エンシエントは肩を叩いて頭を上げさせる。

「後遺症が何もなくて良かったな」

「ええ。でも、エンシエントさんに助けていただかなかつたら、僕はどうなつてたことか……」

「私からもお礼を言わせてくださいっ！　ンファイレアを助けてくださって、本当にありがとうございました！」

「なに、成り行きだ。だが、こうして腕のいいポーシヨン職人と出会えた。ンファイレアくんはエンリリの大切な人なのか？」

横にいたエンリリも頭を下げて礼を言ってくるのを手を上げて止めた。

そして、ふと仲良く歩いてるところを見て、そう聞いてみた。

「……えっ！　いやあ、エンリリとは……」

「はい！　ンファイレアは私の大切な友達なんです！」

ンファイレアはエンシエントの突然言った言葉に、ドギマギとした態度を見せる。だが、すぐにエンリリの言葉に固まった。

そんな二人の様子を見て、エンシエントは微かに俯いて表情が隠れたンファイレアの肩を、さつきとは別の意味で叩くのだった。

「エンシエント様はお出かけされるんですか？」

不意にエンリリがルプーと連れ立っているのを見て問い掛ける。

エ・ランテルから旅立ったと言うことになって、いるために形だけでも旅装となっていたのだ。

「ああ、ゴタゴタが続いて延び延びになっていたが王都に行くことになってな」

「エンシエントさま居なくなっちゃうんですか？」

エンシエントの言葉にネムは淋しげに眩く。

「こら、エンシエント様にもご都合があるのっ！」

「構わん。ネムよ、寂しいか？」

「……はい」

「そうか。では、ユリと共に待っているといい。なに別に永遠に旅立つのでは無い。月に一度ぐらいいは顔を出そう。それまで姉の言葉をよく聞き、ユリから色々学び、姉を助けるのだ。そうすれば褒美をくれてやろう」

優しげにそう言つて諭すと、ネムの顔はパツと華やいだ。

「本当ですかっ！ やったあー！ やったあー！」

「もうっ！ ネムったら！ 本当に申し訳ありません！」

ネムは喜びを全身で表すように、エンシエント達の周りを飛び跳ねながら回る。

それにエンリは叱り呆れたようにいうと、再度、エンシエントに頭を下げた。

「構わないとも、前にも言ったが。子供が甘え我儘を言うのも、大人がそうあれかしと願

うものだ」

エンシエント達二人はエンリ達と別れると村を離れてゆく。

遙か後ろではまだネムが手を振っているのがわかる。

「あの人間の子供は少し無礼が過ぎませんか？」

少しだけ殺意を見せながら、ルプーはちらりと村へと視線を向けた。

「そうだな。だが、それがいいんだ」

「はい？」

「お前達は至高の御方と言って距離を開けすぎる。たまには……そうナインズさんや俺に我儘を言っがいいんだぞ？」

「そんな！ 滅相もないっ！」

ルプーは首をブンブンと振って大仰に否定する。

「ナインズさんも俺も、お前達ナザリツクにいる者を我が子と思っている。親に甘えられぬ子、子に甘えられぬ親どちらも不幸だな」

「善処します……」

「今はそれでいいか」

そう言つて、エンシエントはルプーの頭を帽子越しに撫でた。

そんな二人が向かうのは一路王都である。

王都へと続く街道に巨大なトカゲの頭部を背中へ担ぎながら歩く二人がいた。

エンシエントとルプーの二人がカルネ村を出たのはつい先程だが、王都近くの郊外まで転移門^{ゲイト}で移動し、そこからはエンシエントはルプーと二人だ。

最初は適当に徒歩で旅を楽しみながらと考えていたのだが、既に大幅にズレてしまった予定的にもうそろそろ着いてもいい頃合いだと、ナインズに転移門^{ゲイト}を開いてもらったのだが、運が悪い事に本当に偶々、ギガントバジリスクの直ぐ側に出口が開いてしまったのだ。

首をもたげたギガントバジリスクは、エンシエントの「うわ！ びっくりした」の一言と共に無意識で振るわれた戦斧に首を刎ねられて即死した。

街一つ滅ぼすと言われるギガントバジリスクとして、『驚かれ死』というのはあんまりではないであろうか。

なにはともあれ、とりあえずはそのままにしておくのも勿体ないと思い、討伐部位がわからない為に刎ねた首を持って歩いていたので。

王都近くだというのに、街道に人が疎らでしかなかった。

商人が運ぶ荷の搬入や行商や冒険者といった類の人間は、まずルプーの美貌に見惚れ、次に横を歩くエンシエントに嫉妬の視線を向けて、背中に背負うギガントバジリスクの首を見るなりそつと目を逸らす。

王都の入場門は既に見えているのだが、そこへと続く街道の様子を呆れた顔で見る。

「マジでこれが王都近くの街道か？ 道が荒れ過ぎだろ？」

道は整地されてるには程遠い荒れ具合だった。

雨が降ればあつという間に、道は泥濘ぬかるみんで馬車も通れぬものになるだろう。

せいぜいがエ・ランテルよりマシ程度である。

「なんで、こんなに道が悪いんすかねえ」

手を頭の後ろに組んだルプーは、足元に転がっていた石ころを蹴り飛ばしてポツリと呟いた。

「治世が悪い証拠だな。道つてのはそれこそ人が作るもんだ。人の足が踏んで馬車が固めて、時には旅人が窪みに石を詰めて歩きやすくしたりする。国が管理するに越したことはねえーが、そこに多くの人が往来すれば道なんてもんは自然と奇麗になるもんだ」
だからこそ、治世が悪いというしかない。人が頻繁に往来するほどの旨味がない国と
言うことだ。

魔物のせいで塀から外が危険だと、街から出るのは最低限にもなる。

そのための冒険者と言うのだろうか、冒険者は奉仕者ではない。誰が金も出ない魔物退治をするというのか。

エ・ランテルの冒険者組合で聞いた話では、つい最近、漸く討伐した魔物に対して国から金が出るようになったとか。

それで街道か少しばかり安全になったとしても、人々はそれまでのイメージである塀の外は魔境に近いイメージが払拭はされない。

「こういうところに金を使わない統治はろくなもんじゃねえ。暗愚かぼんくらか傲慢か腰抜けのどれかか。若しくは全部かだな」

「おいおい、そういう事を言うとは敬罪って言われて、とっ捕まっちゃうぜ？」

不意に後ろから野太い女の声が聞こえてきた。

振り返るとそこには赤い鎧を身に纏った大柄な女——アダマントイト級冒険者、蒼の薔薇のガガーランがいた。

ガガーランは豪快な笑みを浮かべて、肩に巨大な刺突戦鎧ウオーピックを担いでいる。

「その時は、捕まえに来た奴を叩きのめして帝国にでも逃げるさ」

「はっ！ そういう豪快な考え方は好きだぜっ！ ところでよお？ 持つてるのはギガントバジリスクか？」

その人物はロープに繋がれて、背中にぶら下げられた頭を見るなり、興味深そうにジ

ロジロと見つめて聞いてきた。

「よく知らん。眼の前に出てきたらから驚いて倒しただけだ」

真実だが眼の前の人物は軽口だと思つたのだろう。言葉を聞いてことさらおかしそうに笑い出した。

「はーはつはつ！ そりや剛毅だなつ！ 気に入つた。そこの物陰でちよちよつと抱かれてみねえか」

少し馴れ馴れしげに、肩に手を置いて街道から少し外れた茂みを親指で指す。

その気軽さに、エンシエントは微かに笑い、肩から女の巖のような手を外した。

「遠慮しとこう。連れもいるしな」

「そうかいそうかい！ まあ、そんな別嬪な彼女が居れば、他の女にや目もくれねえわな！」

「にやにやにや、にやいを言つてるつすか！ エンシエント様とはそんなつ！」

そう言われたルプスレギナ・ベータは、恐れ多さと恥ずかしさで、顔を真っ赤に染めて、いつもの軽口も囁み囁みだ。

だが、エンシエントとしては勘違いさせて置いた方が何かと都合がいいので、ルプーの肩に手を置くとフツと笑ってみせた。

「まあ、そういうわけだ」

「えっえっ?! エンシエントしやまつ!」

エンシエントの言動に、許容量を超えたルプーは頭から湯気が出そうなほどに、体温を上げるとその場で俯いてしまった。

「かあー! 妬けちまうねえ。いい男じゃないか。俺の名前はガガーランつてんだ。ところでなんだつて首だけを持ってんだい?」

ガガーランは不思議そうに聞いてきた。ギガントバジリスクをたつた二人で倒すような冒険者がするような事ではない。

しない事はないが、それは悪趣味な冒険者がハンティングトロフィー代わりに白骨化した物を飾る場合に限る。

それとてギガントバジリスクを相手にして、荷を増やしてまですることは無い。

「狩って冒険者組合に持っていけば、金になるんだろう?」

「いや、それだったら証明部位だけ持っていけばいいんじゃないか?」

エンシエントは知らなかったし、ガガーランも知らなかった。

エンシエントは証明部位と言うものを、そしてガガーランは、二人が冒険者ですらないと言う事を。

「そうなの? ガガーランさんだったか? 部位証明とやらを教えてください。冒険者登録前で知らんのだ」

「はあっ?! えっ! 冒険者じゃないって!? アンタがかあ?」

「ああ。王都には冒険者登録をしに来たんだ」

ガガーランは意味がわからなかった。頭の大きさから見ても大型十メートルを超えている。

もしも、ガガーランがこんなものを相手にした場合には、二人でもかなり厳しい。

凄腕の魔法詠唱者であるイビルアイなら一人でも倒せるだろうが、ガガーランでは支援があつてなんとかだ。

それも決して無傷とは言えないだろう。ポロポロで疲れ果ててしまふに違いない。

だからこそ、自分が顔を知らないだけで名の知れた冒険者だと思つたのだ。

「おいおいおい。冗談じゃ……ないんだよな?」

冗談と言うには眼の前にはその証拠がある。

「すまん。何か悪い事を言つたか?」

エンシエントとしても良くわからない。エンシエントにして見れば雑魚も良い所だ。

例えるならばアダマンタイトがゴブリン一匹を狩つて、それを他の冒険者に驚かれていますといえばかりやすいかもしれない。

「いや、別にそんなんじゃない。な、なあ? 背負つてる戦斧があんたの得物だろ?

見せてもらつてもいいか?」

「ああ、別に構わんが？」

一度、地面へとギガントバジリスクの生首を置くと、背中から巨大な戦斧を片手で軽々と抜いて、ガガーランへと差し出した。

その武器は戦士であるガガーランだからわかる。

(こいつは……とんでもない武器だ！)

まず、柄から刃先に至るまで総オリハルコンだ。

握りには見たこともない革が巻かれていて、とても握りやすそうに見える。

何より、その斧のバランスがおかしい。ガガーランの持つ刺突^{ウオーピック}戦鎚もそうだが、重量が片方に偏る武器の類は両手持ちでなければおかしい。

なのにこの戦斧は巨大な両刃になっているのに、握りの部分が極端に短くなっているのだ。

まるで片手で振るようになってくるかのようである。

ガガーランはゴクリと喉を鳴らして、戦斧を受け取る。

ズシリとくる重量は、信じられないような目で、眼の前の男を見るという行動となった。

この戦斧を振るえと言われれば、ガガーランでも振ることは出来る。

それでもあくまでも振る事が出来るだけで、振るえる≠戦えるではないのだ。

その重量に冷や汗がドツと吹き出るようだ。

「もういいか？」

「あ……ああ、すまない。もしよかったら、剣技を見せちゃ貰えないかつ!？」

返してもらった戦斧を背に仕舞おうと思っていた所に、ガガーランは失礼と思いつつもそう願わざる得なかった。

「別に構わんよ」

エンシエントはそういうと背中に仕舞おうとしていた戦斧を片手で無造作に振るう。

ただ一振り、されど一振りだ。

振り上げられた戦斧は上から唐竹割りの様に真下に振り下ろされて、下段に来た時にピタリと止められる。

初動から留めまでブレはなく、剣風とも言うべきもので地面には一本の筋すら出来ている。

ガガーランはその姿に見惚れた。

剣を覚えたての素人程に、剣技を見せろと言うと、武技を使ったりやたら振り回したがる。

だが、眼の前の男はどうだ。ただ一振り縦に振るだけ、それだけでどんな武技よりも無駄なく力強く振られた。

剣の……否、武芸者の極みがそこにはあった。

「は……ははは……はーはっはっはっ！ あんた人間かつ?!」

「失敬な。お前さんにだけは言われたくねえな」

エンシエントとしても眼の前の男の様な女に驚いていた。

エンシエントは武人建御雷と同じく武人である。

武人あることを自負して、ゲームの中とはいえ己を鍛えに鍛えた。

武人建御雷がただ強さを求める武人とするならば、エンシエントは己を練り上げる武人だ。

ゲームで言うならば、プレイヤースキルを鍛える事に是とするプレイヤーだった。

だからこそ、ガガーランという人間の凄さが解る。

エンシエントは自身がズルをした事を理解していた。ある日突然ゲームのキャラクターになり、そのキャラは人外で労せず人間では得られない身体能力を持っていた。

だが、この眼の前のガガーランは、自分を鍛えに鍛えてエンシエントの動きを捉えるまでに、そしてその技の練度の強さに気付くまでに己を高みに引き上げたのだ。

これを素晴らしいと言わずしてなんと言うというのか？

「はっはっはっはっ！ 完敗だ！ 俺の完敗だよ。あんたにや勝てるどころか。逆立ちしたって傷一つつけられる所が想像できないよ！」

ガガーランは天下の往来で何々大笑した。頬を涙で濡らしながら笑った。力には自信があった。彼のガゼフ・ストロノーフにすら負けない自信があった。

いつか届くと思つた。英雄の域にいる戦士長に、今は勝てなくても、いずれはと……だが、全て遠き夢だつた。ガゼフより強く、英雄の域と言うには余りにも高すぎるその場所にいる者を見た。見てしまった。

だから泣いた。だから笑つたのだ。

届かなかつた悔しさに、そして目指す高さがわかつて笑つた。

エンシエントはその悔しく思いながらも負けを認めて、泣きながら笑う女の姿がとても眩しく見えて目を細めた。

「お前さんも相当なもんだよ。よくそれだけ自分を鍛え上げたもんだ。よく練り上げた」

「あんたは……本当にいい男だな。この俺が惚れそうだよ」

「エンシエントだ。俺の事はエンシエントと呼べ」

「ああ、エンシエントさん。色々と足止めさせて悪かつたな。お詫びといつちやなんだが、冒険者になるんだろ？俺が案内してついでに推薦してやるよ」

「それはありがたいな」

そう言うなりガガーランは、腰のポーチからナイフを取り出すと、いとも簡単にギガ

ントバジリスクの目玉をくり抜いて革袋に入れて渡してくれる。

ギガントバジリスクの証明部位はその石化の視線を放つ目玉で、その大きさと体長もわかると言った。

エンシエントは漸く始まる冒険に胸を踊らせながら、三人で王都へと入っていった。

二十六話。それは知ってるようで知らない世界。

いぎ、胸を踊らせて王都へと入ったエンシエントが見たのは、格調高い町並みと言え
ば聞こえはいいが、実際は古臭いだけの街という印象しか受けなかった。

「陰気な街だ」

「ははっ、素直だねえ。まあ、そう思われたってしょうがねえ。俺だってそう思う時があ
る」

ボソリと呟いたエンシエントの言葉に、横を歩くガガーランが答える。

陰気と言う他ないだろう。通りを歩く者や市場で買い物する者も、笑顔はぼつりぼつ
りであるものの、上っ面だけであつて常に何処か影が付きまどつている。

心から笑っている笑顔が無いのだ。それに何より……

「子供がいけないな」

そう、道を歩いている子供が殆どいない。

歩いていたとしても、決して離すまいと手を繋がれた子供が親に連れられてである。
「子供が一人で遊んでたら危ねえじゃねえか」

何を当たり前的事をと言うガガーランに、エンシエントは微かに目を細める。

ここでは子供同士だけで遊ぶ事が異常で、周りの大人もその異常を普通に思っている。

カルネ村なんて辺境の農村ですら当たり前に行われることがだ。

王都に来る前に見たネムという少女の笑顔が浮かぶ。

エンシエントは何とも言えない不快感を覚えていた。

外は危険で生きて行けず、堀の内側の限られた区域のみで生きて死ぬ。

命の大半を生きたことだけに割いて、搾り取られるだけ搾り取られて、笑顔が消えて目が死んで、生き足掻くだけの生を強いられる。

そして遠くに見える王城と一部の豪華な屋敷が立つ所に贅を尽くした貴族とやら特権階級がいるのだろう。

陰気なはずだ。この陰気さは死臭だ。国が弱り死のうとする間際の死臭。

(ああ……これはまさに……)

「……アークロジ」

ルプーはビクリと体を震わせて、エンシエントの顔をゆつくりと見つめる。

そこにはルプーですら見たことがない創造主の顔があった。

エンシエントは表情豊かとは言えない。歯を見せて笑えば光るし、怒るといふ事自体が無駄な行為とも考えている。

死人は泣く事もないし、苦しみを表すこともない。^{アンデッド}

だが、それでもルプーには創造主が常に笑って……嗤っているのを知っている。

時に人の輝きに……人の生き様に目を細めて笑い。

時に人の愚かさに……醜さに頬を歪めて嗤う。

困ったように笑い、慈しんで笑う。

蔑んだように嗤い。見下して嗤う。

そんな偉大で慈悲深く思慮深い至高の創造主が、何でもない街を見て表情が抜け落ちていた。

ルプーは……ルプスレギナ・ベータも創造主に似ている。常に笑い嗤っているのだ。

だからこそ、同じ笑みを奪った眼の前の光景に腸が煮え繰り返る。

「お……おい！ お前ら大丈夫か？」

街道であつたおかしな二人の男女のただならぬ様子に、堪らずガガーランは声を掛ける。

それに即座に反応したのは、ルプスレギナであつた。

「黙れ！ 人げ……」

「黙れ。ルプー」

喉奥で怒りに唸り声を上げていたルプスレギナにエンシエントの短い声が掛かり、ル

プスレギナ・ベータはルプーへと戻される。

氷のような声が煮え滾る腸と脳を一瞬で氷点下にまで冷やした。

エンシエントは自分を落ち着けるように深い溜め息を吐いた。

「いや、すまん！ 悪かったな。思わず眼の前の光景に圧倒されちまったんだよ。なあ、ルプー？ でかい街だよな！」

朗らかに笑いながら手を上げて、ルプーの頭を大きな手でゆつくりと撫でる。

「は……はい！ 凄く大きくてびっくりしましたわっ！」

「お……おう。そうか？ そりゃよかった」

「ああ、よかったよ。早めに来られて」

ガガーランを振り返ったエンシエントの顔は、いつもと同じ唇を上げるだけの笑みを浮かべて嗤っていた。

冒険者組合の建物は王都のものとしては、それなりに立派なものだった。

長きに渡る冒険者の乱暴な扱いにも慣れた頑丈な檜の木で出来たウエスタンドアを開いて中へと一歩踏み出す。

ガヤガヤドヤドヤと騒がしかった組合内が、エンシエント達一行を目にすると水を打ったように静かになった。

とんでもない美女を連れられた色男が現れたからと言うわけではない。

単純にここ王都に於いても二組しか居ないアダマンタイト級冒険者パーティ『蒼の薔薇』のガガーランをみて、みんな黙り込んだのだ。

だが、完全に静かになった訳ではない。ヒソヒソと小声で、ガガーランが連れてきた二人組は誰かと噂をする。

当のガガーランは慣れているのか。周りの空気が一変しているにも関わらずズカズカと、受付カウンターへとやって来た。

「よお、姉ちゃん！」

「こんにちは。ガガーラン様。本日はどの様なご要件でしょうか？」

「なあに、俺の連れを登録してえんだが、おばちゃんいるかい？」

その言葉に、周囲の冒険者達がざわめいた。

ガガーランはいい意味で、この冒険者組合で有名だ。

面倒見が良く姉御肌、気風もよくて困った冒険者が居れば助けてやつたりもする。

ただし、新人でまだ冒険者のイロハも知らない若い冒険者を中心にだが、それでもここにいる冒険者で、ガガーランの世話になっていない人間の方が少ないほどだ。

冒険者組合の華と言われれば誰もが蒼の薔薇のリーダーであるラキユースを上げるが、一番の冒険者は誰かと聞かれると、冒険者ならば必ずこう答えるであろう。

一番の冒険者はガガーランであると。

そんなガガーランが連れてきたあの二人組は何者だと、そこかしこで囁かれる。

ガガーランのツバメじゃないかという下世話を言う者もいれば、エンシエントの背負う戦斧に目を留めてあれは名のある戦士だという古参もいる。

「なんだいなんだい！　うるっさい男の声が聞こえたと思つたら、ガガーランじゃないか」

受付カウンター奥の扉から、赤毛をポブカットにした四十代の女性が、小指で耳を穿りながら出てきた。

タレ目がちな瞳は男なら誰でも守りたくなるような色気を持つ。若い頃は浮名を馳せていただろう事は想像に難くない。

「誰が男の声だっ！　あんたが耳が遠くなつたんじゃないかって声を大きくしてやったんだよ」

ガガーランの怒声に眉を潜めながら、カウンターまでやってくると片手をついた。

そしてガガーランへと視線を向ける。

「はんっ！　ひよっこが言うようになったじゃないか。その大胸筋に筋肉以外の優しさ

なんて入ってるなんてね。それで……う？ あんたが紹介って事はそれなりの人物なんだろうが……ふーん。ガガーランと、えーと？ そのあんなら名前は？」

昔は張りのある綺麗な胸だったであろう少しだけ垂れた胸を微かに揺らして、エンシエントとルプーの頭から爪先までを無遠慮に見つめて問いかけてきた。

「エンシエントという」

「……ルプーっす……」

ルプーが少しだけ不貞腐れたように答えるが、女性は気にもせずにかウンターから手を離すと踵を返した。

「エンシエントとルプーね。アタシはここで組合長してるアレーナってんだよ。気軽に綺麗なお姉さんとでも呼ぶといい。さてと奥へ入んな。茶の一杯ぐらいは出して話を聞いてやろうさね」

「厚かましいんだよ！ なにが綺麗なお姉さんだ！ 行き遅れのババアじゃないのか？」

アレーナはガガーランに刺すような視線を浴びせると、さっさと奥へと戻っていった。

その後が続いてガガーランが、カウンター横のウエスタンドアを蹴るように乱暴に開けて入ってゆく。

その後ろを、すげえ女共だなど感心しながら、エンシエントとルプーが続いた。

応接室には乱雑に色々な書類が置かれていた。否、バラ撒かれていた。

「なんだあ？ また無理難題でも突き付けられたのか？」

ガガーランが足元の書類の一枚を取ってぴらぴらと振ってから、床へと放り出した。気になったのでエンシエントも、一枚とって中を見してみる。

ふとアレーナが何か言うかと思つたが、何も言わずに執務机に座り、疲れた溜め息を吐いただけだ。

懐からルーペの様な片眼鏡タイプの文字翻訳の魔法道具マジックアイテムを取り出して、一通り目を通す書類には要請書という名前が付いているが、実質命令書に近いものである。

内容は要約すると次回の帝国との戦争で、冒険者も参陣せよなどと書かれていた。バルプロ・アンドレアン・イエルド・ライル・ヴァイセルフという名が署名されている。

「あのバカがまたギヤーギヤー言ってるんだろ？ ラキユースがグググチ言つてたぜ」

「あれが王になったとしたら、荷物纏めて帝国で玉の輿にでものるかねえ」

「はっ！ ババアを嫁にもらつてくれる奇特な男がいりゃいいがな」

エンシエントは手にとつた書類は無価値と判断して床へと投げ捨てる。

ナザリックに使える一般メイドなら悲鳴を上げそうな光景だなど場違いに思った。

現にルプスレギナは戦闘メイドで、メインが戦闘にも関わらず嫌悪感で眉根に皺を寄せている。

「どれ、それじゃ筋肉女のお連れさんとも話をさせてもらおうかね？」

「冒険者登録の件だな」

エンシエントは執務機の前に立って、アインザックの紹介状を差し出した。

それを受け取ると、アレーナは中も開けずにまずエンシエントを見つめる。

「アインザックのクソジジイの紹介かい。その前に一つ言っておきたい事があるんだ

よ」

「なんだ？」

「さっきの話を聞いてたろ？ あんたは本当にここで冒険者になっちまってもいいのか

っ？」

その口調は試すような色が含まれてはいるが、言外に「止めておきな」と言っている優しさが垣間見える。

「腕利きの冒険者は要らないのか？」

「くくくつ、はははは！ 自分をそう言うつての相当な馬鹿か。本当の英雄かのどつちかだが、あんたは馬鹿にはみえないねえ。そりゃ、うちとしては腕つききは欲しいさね。でも、勘違いしちゃいけない。組合の為に冒険者が居るんじゃない。冒険者の為に組合

があるのさ。アタシはまず第一に冒険者の事を考える。だからこそ聞かなきゃいけない。明くる年にも、ここはなくなっちゃうかもしれない。そんな所にいた所であんたの為にやならないと思うんだよ」

「お……おい！ おばちゃん！」

ネガティブに物事を話して折角の腕利きを手放そうとする組合長に、流石のガガーラも声を上げた。

「アレーナさんだ！ 黙ってなっ！ 悪い事は言わない。アインザックの紹介状があるって事は、アレに気に入られたってこつたる？ だったら、エ・ランテルで登録しな。それがあんたの為だ」

上目遣いに一見睨むように逆に懇願するかのように、エ・ランテルで冒険者登録を勧めてくる組合長を見ていて、エンシエントは可笑しく思えてきた。

自らの欲でもなく、王都の民なんて者の為でもない。

これは、アレーナという冒険者組合長としての意地なのだろう。

冒険者のための組合でいたいという、下らなくも素敵な極々個人的な信念の為の行動だ。

とても人間らしい利己的な行いである。

「くつくつくつ、気に入ったよ。あんたアレーナさん。俺は冒険者組合の為の冒険者に

なるつもりはねえよ。だが、あんたのいる組合の冒険者にならなつてやつてもいい！
損だ得だの冒険者が損得勘定で冒険できるか？　そこにワクワクするもんがあるから
冒険するのがロマンつてもんだろ？」

エンシエントは気に入つたのだ。

面白いと思えた。そう思つたらエンシエントにとつては負けなのだ。

（踊りたくなる舞台があるなら、演じてやるのが役者つてもんだ。だったら、演じてやろう。ただし、俺が書いたシナリオで演じて巻き込んでやろう）

この街に来た時は、なんてくだらならい街で魅力も何も感じない。

寧ろ、腹立たしさと苛立ちだけが募つた。

だが、蓋を開けてみればどうだ。なんとも中に住んでる人間は面白く気持ちのいい奴らじゃないか。

「はあああああ……。全く……。なんだつてこの冒険者組合にはこう馬鹿共が集まるんだらうねえ……これじゃいつまでも引退出来やしない。改めて自己紹介するよ。私の名前はアレーナだ。歓迎するよ。まだ若い冒険者殿」

「ああ、エンシエントだ。こつちはルプー。頼りにしていいぞ。そしてこつちも頼りにさせて貰おう」

「あつはつはつは、やっぱりあんたはいい男だよ！　俺の目は間違つてなかつたぜ」

陰気臭く暗い雰囲気の王都で、明るい笑い声が響き渡る。
それは喜劇の幕開けで、悲劇の始まりでもあった。

二十七話。王都での何気ない一日。

冒険者となる事を決めたエンシエントを見て、組合長であるアレーナも諦めた様に渡された紹介状の中身に目を走らせる。

そして特大の溜め息を吐いた。紹介状をテーブルの上に丁重に置くと、肘を執務机に突いて眼の前に両手を組んで手に額を乗せる。

その姿は敬虔な信徒のようだ。

「……………くつくつくつく……………」

「組合長のおばちゃんどうした？」

「あーはっはっはっはっはっ！ ひいーひっひっひひ……………」

含み笑いを漏らすアレーナを心配して、ガガーランが声を掛けるが、直後に狂ったように笑い始めた。

「ついに……………ボケてパーツになっちまったか。こうなるといつそ憐れだな」

「誰がボケだ！ これが笑わずにいられるかい」

ガガーランの前に紹介状を投げ置くように渡す。

その文面をガガーランも目で追っていくうちに、信じられないような気持ちになって

くる。

その文面には、戦果と呼ぶには馬鹿げた物が載せられていた。

二人で骨スケリトル・ドラゴンの竜を二体討伐、内エンシエントは一撃で討伐。

その後、二人でスケルトンを始め集合する死体の巨人ネクロス・オーム・ジャイアントに内臓の卵オーガン・エツグ。膨れた皮に黄光フレイトの屍までいる数千のアンデッド軍団を三人で撃破、死の螺旋を止めた英雄と、衛兵隊長の報告書が付けられている。

その後、有名なポーション職人のンファイレア氏の救出と失踪した冒険者達の搜索と発見。

死の螺旋以外の一件一件は大したことがないものだ。

だが、それらが全て夕方から夜明けになるまでに解決したというのだから、異常という一言で片付けられない。

これらが一晚に起きて、その日に無事収束するなど、アインザックと都市長の連名でおおかつ衛兵隊長の報告書がなければ、誰でも一笑に付すだろう。

読んだガガーランですら、街道での腕を見ていないと、馬鹿な噂話と一蹴していたに違いない。

「王都で要らなければ、必ず連絡しろとまで書いてあるなんてね。あんた相当執拗しつこく引き留められたらう？」

「ふつ、あそこには俺の弟子のモモンがいるからな。師匠が居ればやり難かろう?」「はっはっ、いい師匠を持ったもんだね。いや、アタシにしてみりやいい弟子さね。あんたをここへ寄越すきっかけになつてくれたんだからねえ」

ガガーランは更に驚きを露わにする。

見た目であるなら二十代後半が精々であるのに、あれだけの腕前で更には弟子まで取つていたというのだから、実際は何歳なのか見当もつかない。

（ああ、そういえば竜王国の女王が竜と人の子で、無茶苦茶長命だつて聞いたことがあつたな。関係者か?）

なんとなくそうでもない、この歳であれだけの技量と膂力が説明つかなかつただ。

だが、竜王国の惨状は遠く王国のここまで轟いている。

もしも、関係者であるならば、こんなところで冒険者になるより自国でピーストマンを殺しているだろう。

ならば、別の竜人の可能性もある。

（なんていうか不思議でおもしろいな）

ガガーランの頭の中で、ふと仲間の顔が浮かんで心の中で笑った。

もしも、仲間達に紹介して力を見せてやったら、どんな顔をするだろうかと思つてみ

た。

「さて、この紹介状とガガーランの紹介を加味して考えて、ミスリルが精一杯だねえ」
「はあ？ ババあ、あんたボケてんのか？ 俺より強くてこれだけの功績を残した男をミスリルだって？」

ルプーもざわりと気配を荒立たせる。

偉大なる創造主で、至高の御方から決して事を荒立てるなど厳命されて我慢していたが、流石にここまで馬鹿にされては黙っていれば下僕失格だ。

「ああ、それでいい」

だが、不当に近い扱いを受けた男は、平然とした顔でその評価を受け取る。

「あ、あんた何言ってるのかわかってんのか？ あんただったらアダマントだと言われてもおかしくないんだぜ？」

「そうです！ エンシエント様、流石にそのような過小評価を受けてはっ！ なんてしたらこの女を縊り殺してっ！」

自分よりも物騒な言葉を吐く女に対してぎよつとするが、自分の男がバカにされたとしたらさもありませんと感じる。

「ほう。あんたはミスリルで良いってんだね？」

アレーナは面白いものを見つけた子供のような顔で、試しに聞いてきた。

それは挑発に聞こえるかもしれないが、エンシエントにとっては違った。

「ま、そんなところが妥当だろ？」

「くつくつくつ、いや、本当にいい男だね。あんたどうだい？ 綺麗なお姉さんと一夜の

あばんちゅーるを楽しんでみるかい？」

「あんたとガガーランは親戚かつ!？」

胸を強調するように執務机に前屈みになる。

男心をわかつた熟女だと、エンシエントは苦笑しながらツツコミを入れる。同じ部屋にいた誰かと言動がそっくりだ。

男にとっては魅力的な巨乳も性欲を失った男にとってはたかが脂肪の塊だ。

「それはお断りだ。それなりの功績を持った冒険者ではない人間を登録させて、目立ちにしても悪目立ちせずには一足飛びで上げるにはそこが限界だわな」

正解だろと目だけで問い掛ける。それに対してアレーナは、優秀な生徒を褒めるように目を細めた。

「当冒険者組合へようこそ！ 歓迎しますよ。真紅の英雄殿」

「ああ、こちらこそ宜しく頼むよ。組合長殿」

「そこはほら、綺麗なお姉さんでも構わないんだよ？」

「今は遠慮しとこう。アダマンタイトになるまでな。近々そう呼んでやるよ」

「ふふふつ、楽しみにして待っているとしようかね」

アレーナはこれからの事を考えて、楽しそうに笑みを浮かべるのであった。

冒険者組合を出ると、既に昼も少し過ぎた時間となっている。

エンシエントとルプーの胸元でミスリルのプレートが陽光を受けて輝いてみえる。

「よお、御兩人これからなんか予定あるのかい？」

「特にはないな。とりあえずは宿をとってから王都観光と洒落込むさ」

「だったら、俺が案内してやろうか？」

ガガーランは漢臭い笑みを浮かべて、親指で自らを指す。

ふつと笑うと、エンシエントは手を上げて辞退する。

「いや、折角の見知らぬ街だ。気のままに迷うのも一興だ。それに余り他の女性に構うと妬かれるからな」

そう言いながら、ルプーの肩を抱いて引き寄せてみせる。

「えっ！ はっあの。エンシエント様っ!？」

肩に触れた瞬間に体を硬直させて、顔を髪の色と同じ赤に染めあげる。

「はっはっはっ！ そりゃ、俺はお邪魔虫だわな！ それじゃ後でいいから、黄金の蜂蜜

亭に来てくれ。仲間を紹介してやるよ！」

「そうだな。今日か明日にでも顔を出させて貰おう」

「おう！ それじゃあ楽しみにしてるぜ！」

ガガーランはこちらに背を向けると、その肩で風を切りながら去ってゆく。

二人はその背を見送ると、冒険者組合で教えて貰った宿へと向かう。

そこは組合からほど近い場所にあった。

大きさとしては、エ・ランテルでモモンが泊まっていた宿屋よりも、グレードとして三つほど上といった感じだが、つい、ナザリックの自室と比べてしまうとポロ屋に感じる。

「……エンシエント様……流石に、至高の御方には相応しいとは思えません」

「まあ、ナザリックに比べたら、ここも王都で一番の宿屋もそう変わりはないだろ？ そ

れよりさっさと中で部屋を取って、街へと散策に行くぞ」

「はいー」

中に入ると宿の基本構造なのか。冒険者の為の宿のせいか。一階は酒場、二階が宿の造りになっていた。

一階の酒場には首から金とミスリルのプレートを下げた奴等が昼間からたむろしている。

陽気に酒を飲んでいる奴らは冒険後の打ち上げか何かだろう。

逆に酒場の隅で暗く酒を飲んでいる奴は、依頼が無くて不貞腐れた酒か。悼み酒か。一目するだけで多種多様な人間がいるのが見えて、エンシエントは面白いと思つた。

店内に一步踏み出して店主がいるカウンターへと向かう。

何人かがエンシエントとルプーを見てヒソヒソと噂をする。

「店主、部屋を借りたい」

「……個室と相部屋と大部屋のどれだ」

無愛想な親父がカウンターを拭きながら聞いてくる。

「相部屋を一つだ」

「あいよ。おまえさん見ない顔だが上がりたてか？」

少し興味深げに店主が聞いてきた。恐らく冒険者の顔の大半を覚えていいるのだろう。

聞き方に淀みない。確信を持った聞き方だ。

「いや……成り立てだ」

「ふんっ！ 何人か噂してた奴か。あんまり調子に乗らん事だな」

吐き捨てるように大声でさういう。ああ、さういう事かと、周りを見回すと店主とのやり取りを面白そうに聞いている冒険者の姿が入ってきた。

陽気に酒を飲んでいた奴らは少し苦笑を、暗く酒を飲んでいた奴らは厭らしい笑顔を

浮かべている。

「肝に銘じよう。いくらだ？」

「銀貨二枚と銅貨三枚だ。一食飯付きなら銅貨四枚」

「飯は要らん。これで頼む」

平然と受け答えしながら、エンシエントは懐から白金貨を取り出してカウンターへ置いた。

店主は固まったように白金貨を見つめる。エンシエントは逆に店主の顔を見つめる。

「おい。ふざけてんのか？」

一瞬だけ苛ついた表情を浮かべて、店主は声を荒げる。

「ああ、すまん。こっちだったな」

一度出した白金貨を仕舞うと、金貨と取り替えてカウンターへと置いた。

「ちっ、ボンボンかよ」

店主はポツリと口から舌打ちと文句を漏らしながら、金貨を手にとるとカウンターの下から何枚かの釣りを出して、カウンターへと置いた。

それを見てエンシエントは、「なるほどな」と思った。

「ん？」

その釣り銭へと視線を走らせてから、店主の顔を見つめる。

「なんだ？」

「いやなんでもないさ」

カウンターに置かれた釣り銭をさっさと取ると、差し出された鍵札を手にして、さっさと二階へと上がる。

（オヤジの反応見る限り、釣り銭に詐欺はない。まあ、それなりの冒険者組合の息が掛かってるだけに、その手のバレる詐欺はしないか）

エンシエントが全ての感覚を持って、演技をしているかどうかを探っていたのだから間違いないだろう。

流石に心音の大きさをも騙せる役者なら、騙されてやつてもいいとすら、エンシエントは考える側の人間だ。

部屋へと到着すると、ルプーがすぐ怒りを露わにする。

「あの人間達は失礼ではないでしょうか！ あの店主も黙って自分の仕事をすればいいのにつ！」

エンシエントがベッドへと腰掛けると、膝をポンと叩いてやる。と、それを見たルプーは少し遠慮がちに主人の顔を見た。もう一度、膝をポンと叩くと飛び込むようにベッドの上へ乗り、太股に頭を乗せる。

その頭を落ち着かせるように、宥める様に優しい手付きで撫で続ける。

その固いようで少し柔らかい髪は、現実リアルで飼っていた死んだ犬をやはり思い出す。

「ルプーの怒りはわかる。だが、人間には言外に潜んだ意味を悟らせようという判りにくい優しさもあるんだよ」

「言外に潜んだですか？」

エンシエントはルプーの髪を撫でながら、小さく頷いて見せた。

「例えば、さっきのミスリルに上がりたてかどうかは、あの男は俺を見た事がないのを確信しているのに、敢えて大きな声で聞いてきた」

「はい」

「あれは周りにこいつはこの宿では新人だから顔を覚えてやれ。困ってたら助けてやれと言ってるんだよ」

「どうしてそんな回りくどい事を？」

「直接的に言うとは、俺が反発してムキになって困った所を見せないかもしれない。人にはその人の体面つてものがあからな」

エンシエントは劇団で人付き合いが多かったから、その手の機微は必要だったのだ。

失敗をして反省を促すなら、みんなの前で叱り、既に反省してる相手なら影で叱る。

出来ないことが出来るようになって褒める時はみんなの前で褒めて、調子に乗らせたくない時は影で褒める。

人付き合いの機微で一番大切な事である。相手の立場になつて体面を考えてやる。役者の仕事をしていたて、自然と身についたものである。

「だからな。人の言動の表と裏。裏に隠された意図。それらを読めないと付き合いはギクシヤクするし思わぬ反発を食らう。足元を掬われる事だつてある」

「……はい。気をつけます」

エンシエントは頭の上にある萎れた耳も巻き込む様にして、少しだけ乱暴に撫でてやる。

その手の気遣いも、相手が気付かずに暴走したりする事もあるが、そういう奴は往々にして自ら堕ちてゆくものだ。

「さて、大凡の貨幣価値もわかつたし、買い食いをしたり、書物を探したりするか?」

「はい! お供しますっ!」

「俺は食つても味がわからんから、お前に頼るぞ。初めての王都だ。精々楽しむとしよう」

二人連れ立って宿を出ると、人の雑踏の中へと足を踏み入れた。

市場はそれほど品の種類がある訳ではなかった。

なんの肉かはわからない串焼き、どうやって冷やしているのかわからないシャーベツ

トの様なアイス。

樽を積んだ酒屋やお茶屋なども軒を連ねる。

いくつかわかつた事は、嗜好品ほど高く日常の食品等はそれなりの値段だということだ。

書物は何人か売り買いのついでに世間話で、色んな店主の話を聞いては見たが、残念ながら高級街の方にしかないらしい。

流石に陽が陰ってきたこの時間から高級街にまで足を伸ばす気はないし、着いても閉まっていますではしょうがない。

ウインドウショッピングならぬ市場巡りは、一通り巡って、ちよつとした広場で座りながら買ったものを、主にルプーが楽しんでいる。

そして、エンシエントは食べ物には口にはできないが、飲み物ならいくつか味の判る物があつて嬉しい発見だった。

アルコール関係の味がわかつたのは有り難い、毒物耐性があるから酔えはしないが、味がわかるだけで楽しみになる。

ルプーが串焼きを食べ終わるのを待つて、エンシエントは立ち上がった。

結構な散財をしたが、それでも金貨数枚程度で済んだ。

物価の調査もこれですとなくだがわかつてきた。

「とりあえずは、一度でも黄金の蜂蜜亭に顔を出しておくか。折角得られたトップ冒険者とのツテだ、大切にに使わせてもらおう」

「はいっす！」

「ところで美味かったか？」

「エンシエント様から頂いた物ならなんだつて美味しいです。ですが、正直味は……」

「ナザリツクに劣るか。まあ、当然だな。ナザリツクと比べること自体がおかしいわな

……いくか」

「はいっ！」

エンシエントとルプーはこうして王都で初日を終わらせようとしていた。

二十八話。在りし日の光景。泣けぬ主と寄り添う獣。

閉まりかけの店の主に、いくらか駄賃を握らせて道を聞きながら、黄金の蜂蜜亭へとやってきた頃には、辺りは薄暗く高級住宅街近くだけあって、街灯がぼつりぼつりと灯っている。

高級住宅街と魔術師組合の中間ほどに、黄金の蜂蜜亭はあった。

外見だけ見ても、エンシエント達が泊まっている宿とは格が違いすぎる。

その店構えを見るなり、ルプーはこちらに泊まれた方がいいのでは？　と言ったほどだ。

エンシエントとしては、最初に取った宿の相部屋に泊まってミラー・オフ・ゲート転移門の鏡でナザリックに戻る為に無駄金を使う必要はないと断った。

もちろん、ミラー・オフ・ゲート転移門の鏡はナザリック内に直結だが、指定された者以外が入ると、転移を管理しているオーレオールに依って、第二階層の黒ブラック・カプセル棺にご招待されるようになっている。

黄金の蜂蜜亭は外見と同様に下品にならない程度に豪華を極めている。

趣味の良さがわかる調度品は、来客に対して嫌味にならないほどの華美さと、目を飽きさせない様に計算された配置になっている。

とはいえ、ナザリックでいえばプレアデスの部屋よりちよつと下レベルの出来である。

(まあ、ナザリック全体が仲間と喧々譁々して作った渾身の作品だからな)

嬢の行き届いたカウンターの受付は、品の良い女性がしていた。

「失礼致します。どの様なご用件で御座いますでしょうか？」

「ミスリルのエンシエントという者だが、蒼の薔薇のガガーランと約束をしている。

……居られるかな？」

「失礼いたしました。ただいま。呼んで参ります」

そう言われてから周囲を見回すが、夕食をしてる貴族や商人達が夕食を取りながら歓談に興じている。

その中に冒険者と見られる人間は一人も見えない。

女性店員はよく教育が行き届いているのか、エンシエントの様な冒険者に慣れているのか。逡巡の躊躇いも見せずに来客を知らせようと、踵を返すとその必要は無かった。

「よお、御兩人。王都は楽しめたのかい？」

背後から掛けられた声に振り返ると、相変わらずの巨体に赤い鎧姿のガガーランと共

に、血を思わせる赤いローブを着て妙な仮面の小柄なイビルアイ、その隣にはこれまた特徴的な姿をしている小柄なティナがいた。

「ふん。ガガーランの言っていた奴か？」

「おおよ！ こいつはこゝろ見えてかなり凄い奴なんだぜ？」

仮面はマジックアイテムなのか女性とも老人とも取れるような声で、見上げるようにガガーランへと声を掛けていた。

その視線は仮面で隠されている為に何う事は出来ないが、なんとなくだが視線を感じる為に、無遠慮な視線を向けているのだろう。

もう一人の少女も滑るように、淀みない動きでスツと近付いてくると、二、三度スンスンと鼻を鳴らして匂いを嗅いだできた。

「女みたいな顔してるけど、男。わたしは興味ない」

露出が高めでピツタリとした服を着た少女は、ツイつと離れると、今度はルプーの方へと近付いて抱きつこうとする。

「こつちの方がいい。ワイルドな感じがする」

だが、抱きつかれる寸前に、ルプーの手がティナの頭を掴み取って宙へと浮かせる。

「流石に……失礼が過ぎるんじゃないかしら？」

「グウギイイ……」

痛みに呻き、足をバタつかせながらも咄嗟に腰の後ろへ差した短剣を抜こうとする。そこにイビルアイが飛び込んで、ティナを掴んでいるルプーの腕を掴んで離させようとする。

「ティナの非礼は詫びよう。だが、大切な仲間なんだ。手を離してくれないか？」

素晴らしいながら、空気が張り詰めてゆくのがわかる。

一触即発の空気に、ルプーは不敵に笑って返した。

「ふふっ、断ると言っ……」

「ルプー。止めろ！ 離してやれ」

「はいー」

言い終わる前に、エンシエントの言葉で張り詰めた空気は一瞬で霧散する。

頭を離されたティナは、着地と同時に毛足の長い絨毯を蹴って後ろへと下がり、腰の後ろからは愛用の短剣を引き抜く。

その顔には冷や汗がビッシヨリと浮かんでいた。

「随分な狂犬をよく飼慣らしているじゃないか」

「普段は俺の言う事をよく聞く忠犬なんだがね。とはいえ、御せなかつた俺が悪かつたな。素直に謝罪しよう」

エンシエントが謝罪を口にする、ルプーはあからさまに狼狽する。

「エンシエント様が謝罪されることなどっ！」

「ならば、次からはもう少し考えて行動をしろ。お前の行動でも俺の責任になると見え。

お前も謝るんだ。ルプー」

「それには及ばん。ティナも失礼が過ぎた。こちらこそ仲間を代表して謝罪しよう」

珍妙な姿をしている割には随分と理知的な人物だと評価を下す。

「そつちの女の子も悪かったな。少し怪我をしたか？ ルプー癒やしてやれ」

「別にいらない」

ティナは落としていた腰を上げると、短剣を仕舞った。

ガガーランは突然の争い事に戸惑いを隠せなかったが、ティナへと近寄るとその頭に拳骨を振り下ろした。

「おめえなあ！ そういう所を改めろよ！ 言っておいただろうが、俺よりも強いから失礼な事はするなつてよ」

「存在自体が失礼なガガーランには言われたくない」

頭を抑えて蹲りながら、少し涙目になったティナは抗議の声を上げる。

そこにルプーは、にこやかに近付くと手を翳す。

「中傷回復、はい。これで治ったつすよ。悪かったつすねえ。……でも、あの御方に失

「礼な事をした貴女も悪かったのよ？」

「あり、がとう。わたしも悪かった。そして貴女とは是非とも仲良くしたい」

「いやー。そりや無理っすよー！ 私の身も心もエンシエント様の物っすからあ」

そのやり取りを見て、イビルアイがエンシエントを見上げて声を掛けてきた。

「お前の女は何者だ？ アレはうちでもかなりの腕を持つ……野伏レンジャだぞ。それを容易く

捕まえて、片腕で宙に浮かせる筋力と、更には神聖魔法だと？」

「俺の可愛い忠犬さ。バトル・クレリックと言えばわかるか？」

「知らん。だが、あの背負っている得物を見ると、前衛が出来るクレリック。テンプラーと似たようなもんだらう」

イビルアイは敢えて言わなかったが、正確にはティナとイビルアイ二人の体重を掛けてビクリともしなかったのだ。

「まあ、そんなものだと思って構わない」

「おいおい。イビルアイまで失礼な事はしてくれるなよ？」

「脳筋のお前や見境の無いレズ女と一緒にするな！」

イビルアイは心外だとばかりに声を荒げる。仮面の奥では盛大に顔を歪めている事だろう。

ガガーランはイビルアイのそんな様子もどこ吹く風で、大きな笑い声を上げると巖の

様な手で肩をガンガンと叩いてくる。

鎧越しても伝わる衝撃に苦笑を浮かべる。その様子を下から見上げるように、イビルアイは驚いた表情を浮かべていた事に、二人は気付かなかった。

「じゃあ、改めて紹介するぜ！ この小つさいのがイビルアイ。んで、向こうの変な小さいのはティナという。あと二人メンバーがいるんだが、今は席を外していてな？ そしてこの男がエンシエント、今日冒険者になったミスリル冒険者だ。そして向こうの凶暴なのがルプーだ。こいつの女だから手を出すなよ！ ティナ！」

「ちつさい言うな！ お前は脳筋じゃないか！」

「無差別に男を食うガガーランと一緒にするな。NTRも悪くない」

「いやあ。犯されるうっす！」

騒がしくなってきた一同とやり取りに、エンシエントは目頭を抑えて、つかつかとルプーの側に行くくと、ルプーにセクハラをしようとしているティナの襟首を掴むと、ポイツと投げ捨てルプーには軽くチョップを頭に落とす。

「あいたつす！」

「嫉妬の馬鹿力……」

「お前はもう少し場を考えろ。君も無闇に恋人に触れないでくれよ」

エンシエントの言葉にティナは不貞腐れた様に頬に膨らませて、ルプーは逆に顔を

真つ赤に染めてその場に崩れ落ちた。

注意をしようと言顔を引き曇らせながら近付いて来ていた受付嬢は、収まった様子にホツと胸を撫で下ろしたようだ。

「悪かったなあ。姉ちゃん。他の客にも迷惑を掛けた。詫びとしてここは私が奢るから好きに飲み食いしてくれ」

ガガーランは食事を楽しんでいた他の客に、大声で詫びながらそう宣言すると、迷惑そうにしていた着飾った客達も喜びを露わにする。

「ガガーラン、引き締まった太っ腹」

「馬鹿！ お前も半分負担するんだよ！ ったく、面倒掛けやがって！ ラキユースに黙っててやるから出せよ」

「ぐぬっ……しようがない……。だから、鬼ボスには言わないで」

流石にルプーも関与しているのに、相手側にだけ負担させるのも悪いと思い、エンシエントも声を上げる。

「俺も……」

しかし、その言葉は言い終わる前に、ガガーランの男臭い良い笑顔で止められた。

「いいんだよ。招待したの俺だ。それに先に失礼したのも、うちの馬鹿だからな。遠慮しねえでくれよ？」

「了解した。それじゃ借りところ」

エンシエントはガガーランの気持ちを汲んで、肩を竦めて苦笑を浮かべるだけにする。

場所を移して一階にある酒場スペースの一画、隔離する様に離されたテーブルにいた。

奥にガガーランが座り、その左隣にはイビルアイが座る。

手前、ガガーランの向かいにエンシエントが座り、その隣にはルプーが座っていた。

ルプーの更に横にティナが座っているが、少しづつバレないようにルプーへと寄ってきているのを、ガガーランが力尽くで椅子ごと自分の方へと引き寄せる。

「いやあ、本当にうちの仲間が迷惑を掛けてすまなかつたな」

「別に構わん。既に済んだことだ。改めて自己紹介させてもらおう。俺の名はエンシエント。本日をも以てミスリル冒険者になった者だ。こっちはルプーだ」

「ルプーつす。よろしくつす！」

ルプーは片手を上げて、敬礼をするように額に当てて、にこやかに挨拶をする。

「是非ともよろしくしたい。わたしはティナ」

「お前はもう少し落ち着け！ 私の名前はイビルアイだ」

「ここにリーダーのラキユースとティアアつっ、この馬鹿の双子が居るんだが、その五人で蒼の薔薇つていうパーティーを組んでる」

「脳筋のガガーランに馬鹿と言われた。これはルプーに慰めて貰わないと落ち込む」

エンシエントは目の前の面々をみて面白いと思った。

アインズ・ウール・ゴウンに劣るが中々に一癖も二癖もあるようなメンツに、ペロロンやるし☆ふぁーを思い出す。

(流石にるし☆ふぁーと比べたら可哀想か)

ナザリックで一番の問題児、トラブルメーカーを思い出して頭が痛くなつた気がする。

「それにしても、エンシエントは強いと解つてたが、流石はお前の女なだけあって、つえーじゃねーか。ラキユースにタメ張るんじゃないか？」

「いやあー。そのラキユースつてどんな人か知らないつすけど、私の方がつえーつすよ？」

「はっはっはっ、かもしれねえなあ。あのティナを簡単に捕まえちゃうんだからよお」

ガガーランはあながち嘘ではなくルプーの方が強いかもしれねえなとは思つたが、フル装備のラキユースを知っている身からすれば、あり得ないなと思ひ直した。

「それは違う。ルプーが美人過ぎるから調子が出なかつただけ。本気になつたわたしは色々エロエロ凄いい！」

懲りずに無駄に高いスキルを使い無音椅子移動でルプーに近寄ろうと試みている。

「お前は本気でいい加減にしないと、ラキュースに言いつけるからな？ それと後で金返せ」

イビルアイはテーブルの向かいに座るティナに、置かれた砂糖の塊を指で弾いてぶつけるが、ぶつかると寸前にティナは口で受け止めてモグモグと口を動かす。

その後ろ頭を叩いて、ガガーランが快活に笑いながら見つめている。

何十回と行^わつてきた慣れたやり取りは淀みない。

それを見て苦笑を浮かべて呆れる。在りし日のナザリックの仲間達が思い浮かぶ。

（そうか。ガガーランを見て、どこか懐かしい気がして嫌いになれないのは建やんに似てるんだ）

武に傾倒して共にたつち・みーを倒そうと決めた友を思い出す。

武人建御雷も良くこうやって他人のやり取りを横に見ながら、闊^{かつたう}達^だに笑い、時に悪乗りして時に諫める。

そして、自分の弱さを熟知して、武器を鍛えて常に天辺を意識していた。

——ああ、あいつらに会いたいなあ……

懐かしい光景に、エンシエントは無意識に拳を握り込んでいた。

自分が失った……否、切り捨てた筈なのに、目の前の光景がどうにも懐かしく羨ましく……妬ましくなる。

無意識に胸に、既に鼓動を止めている心臓が堪らなく疼いているようで、気がつけばガタリと立ち上がっていた。

突然の行動に、わいわいとしていた雰囲気は止まり、何かかとみんなの視線がエンシエントへと集まる。

「今日はすまなかつた。リーダーも居ない事だし御暇させて貰おう。後日、改めて挨拶させてもらう」

「そ、そうか？ すまなかつたな。こつちから呼んどいて迷惑だけ掛けてよ」

「いや、こつちこそ色々と迷惑を掛けたな。行くぞ。ルプー」

「は……はいっ！」

エンシエントはそう言うのとルプーが立ち上がるのも待たずに、さっさと踵を返して店を出てゆく。その後ろを駆け足でルプーが追い掛けた。

「碌でもない男。女をあんな扱いするなんてルプー可哀想……」

「うーん。あんな奴じゃないんだが、なんかあったのか？ なんか、急に態度が変わったように見えただがなあ」

ティナは憤慨して、ガガーランは不思議そうな顔を浮かべて首を傾げる。ただ、一人。イビルアイだけは別のイメージが浮かんでいた。

「そういうんじゃないと思うぞ？ 奴は泣いていた……ような、気がする」

「はあ!? 泣いてたつてあの男がか？ そりゃ無えだろ」

「イビルアイはもう老眼……憐れ」

「誰が老眼だ！ そういうんじゃないくて……何なのだろうな……。感覚に近い感じで、そう……感じたんだ。不思議だがな？」

エンシエントは足早に薄闇に沈んだ夜の街を進む。

その足は決して止まる事なく、周囲に気を配る余裕すら無くしていた。

(くそくそくそくそくそくそくそ！)

アンデッド
死人は涙を流さない。流せない。だが、辛くないわけではない。

いつだって生者を……今を謳歌する生者が羨ましくて妬ましくて憎くて憎くて仕方が無いのだ。

後ろから気遣わしげにルプーは付いてゆく。その耳は酷く萎れてしまっている。

「エンシエント様……」

ルプーの呼ぶ声に振り返ると、不安そうに瞳を揺らすルプスレギナ・ベータの姿が

あった。

その瞳の中に映る自分の姿を見てみると、心が落ち着いてくる。

「すまなかつたな。もう落ち着いた。大丈夫だ」

「エンシエント様が大丈夫で有られれば、私はそれでいいのです。謝られないでください」

不意にとても愛おしくなって、気が付けばルプスレギナを抱きしめていた。

「ふ……あ……えんしえんとさまあ？」

「情けないな。俺は。偉そうに言っておいてこの体たらくだ」

ルプスレギナはエンシエントの背中に回した腕を所在なさげにしていたが、意を決したように強く逞しい主の身体を抱きしめた。

「いいんです。私の主様は側に居られるだけで、全てが許されるのです」

「ありがとう。お前が側に居てくれて助かった」

「エンシエント様っ！ 私はそう言って頂けるだけで……」

しばらく、二人で睡み合うように抱きしめ合っていると、まるで見ているかのようなタイミングで、メッセージが頭に響いた。

エンシエントはルプスレギナから身体を離して、一度気合いを入れるように、自分自身を殴りつけて情けない自分の中から叩き出す。

『エンシエントさんっ！ 今、大丈夫ですか！』

ナインズのかなり慌てたような声に、エンシエントとは面を喰らいつつも応える。

『どうしたんですか？ ナインズさん』

『よかつたっ！ 大変なことがわかつたので、至急……いえ、こつちから転移門ゲートを開くので飛び込んでください！』

余程、慌てていたのか。飛び込んでと言った時には既に闇が目の前に広がる。

「ルプスレギナよ。一度、ナザリックに帰還するぞ。緊急らしい」

「はい。畏まりました！」

主従は顔を見合わせると、二人して闇の中へと消えていった。

後に残されたのは、夜の静寂だけであった。

二十九話。見えた脅威と抗えぬ不安。

エンシエントとルプスレギナが穴を抜けた先は、ナインズの執務室だった。

執務室には四人がいた。デミウルゴスとアルベド、ナインズは解るが、何故かクレマンティーヌまでも死にそうな顔で三人に囲まれている。

重い空気が居た堪れない事になっていた。

エンシエント達の姿を認めると、クレマンティーヌは頬を赤らめて顔を明るくさせる。まるで地獄に仏を見たようだ。そしてナインズはガタリと立ち上がった。

ナインズは内心ではこの空気に耐えられなかったのだろう。

「ナインズさん。至急ってことだから、とんでもないことが起こったんだろうが……。クレマンティーヌがここにいてるって事は、なんかやらかしたか？」

「ち……違うつ……」

クレマンティーヌは回らぬ口で説明をしようとしたが、横から冷たい悪魔の声に遮られて硬直する。

「誰が口を開いて良いと？ やれやれ、しかも何かね？ その口調は。至高の御方に対

して……、もう一度教育が必要なようだね？」

「こいつも関係者でしょう？　いつそ殺しておいた方が……眷属にされるなんて羨ま……厚かましいっ！」

物騒な事を口にするデミウルゴスとアルベドに、挟まれるように立つクレマンティー又は、顔色を死人の様にしている。死人アンデッドであるのだが。

「まあ、待て。許可なく眷属化したのは俺が悪い。だが、眷属にした限りは俺の子供の様なものと思つて勘弁してやってくれ。ところで何があつたんです？　ナインズさん」

エンシエントは執務机に就くナインズへと向き直つて聞いてみる。

「これ見てもらつてもいいですか？　クレマンティー又から得た情報を纏めた物なのですが……」

執務机に上の殴れば人を殺せそうな分厚さがある書類の束を見ると、表紙には『スレイン法国に関する報告書』と書かれている。

中をパラパラと見るだけでも、法国の教義やら人口、都市の位置とその人口に至るまで事細かに書いてあつた。

「その中に気になる物があつたんですよ。ここにです」

エンシエントは覗き込むように、報告書へと視線を向けて絶句した。

それは法国内で見た力の強い武器防具アイテムの欄にあつた。

その書類には大凡の絵が付けられて名前まで載せられている。

『白銀の生地に着き付く蛇が描かれた異国風の服。名前をケイ・セケ・コウク。所有者、カイレババア』

その下には明らかにチャイナ服と思わしき服に、裾の所から肩に掛けて昇龍が描かれている服の絵があつた。

「ナインズさん！ これつて！」

「多分、ワールドアイテムの『傾城傾国』だと思います。ただ、それも不味いですけど……もう一つが……」

隣のページには一本の槍が描かれていた。

説明の所には『法国でも非常に力の強い槍である。名称も槍としかわからない。所有者、漆黒聖典隊長』と書かれている。

「ゴツズならゲイボルク。ワールドアイテムならグングニル、ロンギヌスカ……最悪だ……」

「ロンギヌス……あれだけはこの世界にはあつちやいけない。ただ……法国でもトップの人間の許可がないと使用することが許されていないそうですから、多分間違いないかと……」

形も『燃え上がる三眼』で見たやつとそっくりです。と続けたが、なんの救いにもな

らなかった。

ロンギヌス。それはユグドラシルの中でも最悪の名を冠するワールドアイテムの武器だ。

グングニルもワールドアイテムで存在しているが、グングニルは一切の防御力も防御系魔法も無効化してHPの三分の二を削られるというエゲツなさを持つが、ロンギヌスと比べると可愛いものだ。

ロンギヌスはワールドアイテムの中でも二十と呼ばれる極大の効果を持つ、それは使用者のキャラクターデータを以て、相手のキャラクターデータを抹消するというとんでもない仕様の最悪武器だ。

かつてユグドラシル時代に一度だけ使われた事が有るのを、ナインズもエンシエントも知っていた。

その際にはプレイヤーに対してではなく、イベントボスに使われたのだが、そのイベントボスが復活しなくなり、それ以降は進行不可能になるという進行不可バグを生み出したのだ。

それがこの世界に存在すると言うのは非常に不味い。

「ロンギヌス……あれだけは放置できん」

「ああ……だめだ。あれだけは前の世界もそうだったが、この世界には絶対あっちゃ駄

目なやつだ……」

顎に手を当てて考え込んでいたが、ふと目の端に守護者と眷属が、真つ青な顔をして跪いているのが見えて、エンシエントは首を傾げながら尋ねた。

「どうしたお前達？」

「いえ……我々は何ということ……。エンシエント様の御子様に対して……この罰は如何様にも……」

「私も同様に御座います。愛しの君の愛しき子に対して何たる態度を……この無礼は命を持つて……」

クレマンティーヌはと言えば、おそらくはデミウルゴスのいう教育の賜物なのか共に跪いているだけのようだ。

エンシエントはナインズと顔を見合わせて、わからないように溜息を吐いた。

「よくわかった。だが、お前たちは勘違いしている」

「勘違い……でございませうか？」

アルベドが未だ跪いたまま、震えた声で問い返してきた。

「ああ、俺の言う子と言うものはお前達も入っている。ルプスレギナを始め、デミウルゴス、アルベドといった全てのナザリックの者を子と思い愛している。とはいっても、クレマンティーヌとは違う。お前達は俺達の友であるタブラさんとウルベルトさんが残

していつてくれた愛する子だ。クレマンティーヌとは比べ物にならないに決まってる
だろ？」

なあ？ と同意を求めるように、エンシエントはナインズへと視線を向けると、ナインズも立ち上がり、守護者達の側へと寄つて肩に骨の手を置く。

「当然だろう。お前達は我らにとつて我が子も同然、現地で眷属にした者とは隔絶された差がある程に愛しているさ。だから、二人共に顔をあげよ」

「なんと、私如きには勿体無きお言葉……至高の御方々のその御心には、我が忠誠と忠勤を持つてお答えしたいと思ひます！」

エンシエントとナインズの言葉を受けて、デミウルゴスは涙で濡れた頬をハンカチで拭う。

そして、アルベドはと言うと……

「愛する愛している愛する愛して愛して愛して愛して愛して……うふふふふつ、くふふふふふつ！」

あつ、これはやばいとナインズとエンシエントは二人して感じる。

ナインズは咳払いをして、取り敢えずは空気を変えた。

「ともあれ、クレマンティーヌには重要な情報が貰えた。これらはとんでもない価値のある情報だと言える。更にいうとこの者のお陰でユグドラシルには無かつたアイテム

の存在も確認出来た。これは現在に置いてナザリック最大の功と言えよう！」

ナインズの言葉に反応したのは、デミウルゴスとアルベドである。

ナザリックにとって最大の功というのは、とんでもなく栄誉な事であり、それをナザリック以外の者に奪われるとは守護者として、至高の御方の下僕として譲れないものがあり、とんでもない失態であるといえる。

だが、二人にはクレマンティーヌが持っていた情報の価値を正しく理解しているために、何も言う事が出来ない。

「何か褒美をくれてやらねばならない。ワールドアイテムなどといった物はくれてやれんが、出来る限り望みは叶えてやろう。何か欲しい物や望みはあるか？」

「えと、その……私はエンシエント様の眷属ですので、私の功績はエンシエント様が受けるのが相応しいかと思う。いえ、思いますです」

守護者達による天井知らずな無言の圧力に、クレマンティーヌの死人になって動けなくなった胃がキリキリと痛むような気がする。

だが、クレマンティーヌは正しい言葉の選択を行った。

今まで押し潰されそうになっていた圧力がふわっと軽くなった気がしたのだ。

「確かにな。お前は殺されてもおかしくは無かった。否、エンシエントさんが眷属にしていなければ、情報を吐き出させるだけ吐き出させて、がしよくこちゅうおう餓食狐蟲王の住処にしていただ

ろう」

ナインズが何気なく吐いた言葉に、クレマンティーヌは心の底から安堵するのと、同時にエンシエントに対してとてつもなく感謝する。

がしよくちゆうおう
餓食狐蟲王という存在をクレマンティーヌは一度だけ目にする機会があった。それは陽光聖典の中に情報を持つと思われる者がいるかどうかを聞かれた時に、住処とやらにされていた陽光聖典の姿を見たのだ。

自分は人を甚振る事を好み、苦しむ姿を見る事が楽しい狂った人間である事をクレマンティーヌは知っている。

だが、自分はまだまだともだという事が嫌というほど理解できた。

あれを見て平然としていられる者などいるはずは無い。

生きたまま感覚が残されている状態で、まるで溺死体のように全身がブクブクと膨れ上がり、破れた皮膚の下からは透明なゼリー状の袋が顔を覗かせる。

そんな姿の人間が無表情に口から涎を垂らして、口からあーあーと言葉にならない音を出すだけの物体になる。クレマンティーヌは思わずその場で嘔吐できない体にも関わらず吐きそうになり、本当の意味で気が狂いそうであった。

(あんなモノにされるぐらいならば、陵辱の限りを尽くされて殺された方がマシだ！)

「は……はい、ですので、今ある立場こそが最大のご褒美です。本当に……」

クレマンティーヌの心からの謙虚な言葉に、アルベドは女神のような慈母の微笑みを浮かべて、デミウルゴスは当然でしようと、眼鏡に指を当てながら頷いていた。

クレマンティーヌにとっては心から今自分が無事で居られることが幸せに感じているのだ。

「うーん。だがなあ。それは俺の欲っつーか。我儘で勝手にやった事だからなあ。本当に他には無いのか？ それだけだとこの情報に見合わないんだよな……」

「そうですねえ。この情報だけでも私達は知らなければとんでもない事態になっていました。それこそナザリックを崩壊させかねないほどの」

エンシエントの言葉にクレマンティーヌは完全に固まってしまい。ナインズの言葉に守護者達は驚愕の余り固まってしまった。

「取り敢えずは報奨の件は置いておくとして、クレマンティーヌよ。ご苦労だった。アルベド。守護者達に……いや、ナザリック全体の者に伝えよ。このクレマンティーヌはエンシエントさんの眷属であり、お前たちと同じようにナザリックで働く者だと周知せよー！」

「はっ！」

「クレマンティーヌはご苦労だった。下がっていい。そうだな。取り敢えずはシャルティアの居る第二階層の死蝨玄室へと連れてゆけ。この後へシャルティアにつけるつ

もりだからな」

「はい。では、行くわよ。クレマンティーヌ」

「は……はいっ！ アルベド様！」

アルベドはナインズから貰った薬指に輝くリング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンの力を使って、転移で姿を消した。

三人となった執務室で、エンシエントとナインズは唸り声を上げる。

「どうする？ ナインズさん。法国はやばいな」

「ええ、明らかにやばいです。恐らく……いや、絶対プレイヤーが居るか。居たかですね……」

二人して開かれた報告書のページを見つめ続ける。

「質問をよろしいでしょうか？ そのロンギヌスと言う物と『傾城傾国』なるワールドアイテムは。どのような効果があるのでしょうか？」

「ん？ ああ、知らなかったんだな。先程はクレマンティーヌがいたから話す事は出来なかったが、これを説明せねばこの情報の価値は理解できないだろうな。ナインズさんの方が詳しいからお願い」

「うむ。このケイ・セケ・コウクと呼ばれる物……まあ、正式名称『傾城傾国』はキャラクターに乗っ取る。いや、洗脳するワールドアイテムだ。これの恐ろしいところはシャ

ルティアや私、そしてエンシエントさんまで精神支配に耐性のある者でも支配されてしまう」

「なん……………と……………っ！」

デミウルゴスはまさに言葉通りに絶句する。

だが、そんな様子も気にせず告げられた次の説明に、デミウルゴスは真の意味で、何故、至高の方々があれ程この情報を評価したのかを理解した。

「もう一つのアイテムだが、私達……………いや、ユグドラシルにあつても最大最悪の代物だ。名をロンギヌス。使用者の存在を消滅させる代わりに、敵も存在が消滅させられる」

「……………っ!？」

「即ち、これを使われたら例えば、俺やナインズさん。お前達守護者であろうとも、通常の手段では復活できん。トウル・リザレクション真なる復活やユグドラシル通貨を全て使おうともだ。同じ

ワールドアイテムを使用すれば……………いや、それでもこの世界ではどうなるかわからん」
「うむ。使われたら……………こちらには打つ手がない……………」

「そ……………それでは全軍を以て、スレイン法国へ進軍して滅ぼされてはっ！」

デミウルゴスは震える声でそう進言するが、デミウルゴスもこれは愚策だとわかつている。

二つの脅威があるからと言って、それ以上の脅威がないとは限らないのだ。

だが、下僕としてそう言わざるを得ない心境であつた。

もしも、至高の御方が洗脳されて敵対してきたら？　もしも、至高の御方の一人でも存在を消されて身罷られるようなことがあれば？

例え話、可能性の話である。だが、その例えであろうと可能性であろうとも許せるはずなどない。

出来うる事ならば、速やかに即座に今この瞬間にすら法国が滅びる必要がある。否、滅ぼさねばならないという焦燥感にすら駆られる。

だが、法国側にはプレイヤーがいて、そのプレイヤーが何人いるのか？　どれほどのアイテムを所蔵しているのかも不明なのだ。

デミウルゴスはその鋭利な爪を自身の掌に突き刺す事により辛うじて自制する。

そして、デミウルゴスが考えた通りに、至高の御方の口から否定の言葉が飛び出した。「だめだ。正面切つては戦えない。向こうには法国と言う後ろ盾があり、使い捨てにできる存在もいる。だが、ナザリックにはそれがない」

「そう……です。ね。もしも、プレイヤーがいるなら……かなり不味い。うまく隠れてい

る」
表立って暴れている分には何ら脅威ではなく。馬鹿なガキとして鎧袖一触に出来る。

だが、もしもプレイヤーがいるならば、思った以上に慎重である。

ワールドアイテムを餌に法国を裏から操っているとすれば、かなり大胆で頭が良い。プレイヤーがいるとすれば法国内ではなく別の場所に拠点があるはずだ。

そして、プレイヤーが現れて、法国を危険視して滅ぼせば、人間を煽動して敵対できるし、傾城傾国もロンギヌスも奪われたとして潰しようがある。

問題はワールドアイテムがそれだけとは限らないこと。否、それ以上存在すると考えるのが当たり前だ。

光輪アフラマズダーの善神。ナザリックに対して、絶対あつてはいけないのがこれだ。世界を丸々一つ覆い尽くし、尚且、カルマ値がマイナスであるものほど、その世界でのステータスが極端に下がる。半分以下になると言ってもいい。

カルマがマイナス百でステが一割下げられて、ダメージを喰らわされる。

エンシエントならばそれほどでは無い。ナインズもワールドアイテムを所持しているから大丈夫だ。アルベドやデミウルゴス、シャルティアなどはカルマがマイナス五百の為に能力値が半分になり、尚且、大きなダメージを食らうだろう。

ユグドラシルなら九つある中の一つが数日の間、使用不可能になる程度だが、この世界だとその数日ですら、ギルド拠点のナザリック外に出る事は不可能になるだろう。

いや、この世界だとう作用するかわからないから、最悪永遠になんてことになりかねない。

「取り敢えずは……法国に対しては何もしない。慎重に慎重を重ねて行動せねばならん」

「ああ、少なくともワールドアイテムを二つ以上所持しているプレイヤーが居るか居たかしたつてことは、相当にでかいギルドだからな」

ワールドアイテムの所持数トップギルドが、十一個所有しているアインズ・ウール・ゴウンがトップとすれば、次点がワールドアイテム所持数三と言えば解りやすい。大半のギルドはワールドアイテムすら所持していなかったのだから……

それなのに現在確認されているワールドアイテムは二つだ。

エンシエントとナインズは背中に冷たいものを感じていた。

三十話。宝物殿の最後の宝は希望。

今、執務室にはエンシエントとナインズの二人だけとなっている。

ルプスレギナも一時的に休憩として、ナザリックで食事している頃だろう。

一般メイドのインクリメントが側に控えては居るが、その他は八肢刀エイトエッジ・アサシンの暗殺蟲ですら遠ざけてある。

インクリメントが入れてくれる紅茶を、人化したナインズとエンシエントが楽しみつつも、二人で今後の事を話し合う。

「すまん。インクリメント。ここでの会話は一切を秘密にしてくれ。本当ならお前さんも遠ざけた方が正しいんだが、紅茶を楽しみながら話したかったんでな」

「いえっ！ お気持ちは十分に……我らメイドは主人にお仕える事こそ至上の喜びに御座いますれば、聞いた事は決して漏らしません。ご所望でしたら用が済んだならばこの首をお落としください」

スツと祈りを捧げるシスターのように澄んだ瞳で、膝を突くと首を差し出すように頭を垂れる。

いや、事実彼女は信徒なのだろう。至高の四十一人に仕える信徒であり狂徒でもあ

る。

故に至高の御方の手で命を散らされるなら、それはそれで至上の喜びであるのだ。

「い……いや、そんなことするわけが無いだろ？ お前を信用している。インクリメントなら大丈夫だ」

「ああ……有難うございませ……慈悲深き至高の御方……」

エンシエントはカップに残された紅茶を口にして、ナインズと顔を見合わせると、互いに吐けない溜息を吐く。

「それでどうする？ これからだか……」

「……とりあえずはエンシエントさんには後ほど、ワールドアイテムをお渡しするんで要望とかがありますか？」

「うーん。とりあえずは二十は出せないな。あとは強欲と無欲、幾億の刃、山河社稷図、ヒュギエイアの杯、桜花の魂振りつてところか？ この中じや幾億の刃一択だな」

人化して紅茶を共に楽しんでるナインズは、一口含んで首を傾げた。

その姿にリアルを思い出して、ほんの少しだけ懐かしさを覚える。

「意外ですね。真なる無ギンヌンガガブを選ぶかと思っただんですが……」

エンシエントは少しだけ目を細める。それは微笑んでいるようだ。

「いや、あれは俺が持つ資格は無いよ。前にアルベドが玉座の間で大切に磨いている姿

を見てさ。話を聞いたら、タブラ様から最後に賜った物だから、これを磨いているとタブラ様を感じられる様な気がしてって言われたらさ」

その言葉に、ナインズと嬉しそうに目を細めた。

和やかな空気が執務室に流れている気がする。

実はそれだけではなく、真なる無は杖のような形状で使うのならば、広域対物破壊を可能とするワールドアイテムだが、形状を変化させて使うと、武器破壊されない頑丈な武器にしか過ぎない。

それならば愛用の「血ヲ啜り肉ヲ喰ウ」を使う方が成長させられるだけマシだというものだ。

「それなら強欲と無欲はどうしてですか」

「簡単な話で言うと、装備の問題かな？」

強欲と無欲は小手装備に分類される為に、今使っている鮮血王鎧との相性は最悪に近いのだ。

鮮血王鎧は一式防具のために、特殊効果が一式揃っていないと発動しない。

「でも、この世界にもワールドアイテムがあるなんて予想外でしたね。下手をすれば先手を取られていましたよ！ エンシエントさんナイスです！」

「んふっふっふ、でしょうでしょう？ 単なるノリで眷属にしたわけじゃないんです

よっ！」

「いえ、偶々ですからね？ 本気で次からは一言でも相談してくださいね」

「はい……。すみませんでした……」

腕組みしてドヤ顔するエンシエントに、やや疲れた顔でナインズは答えた。

本当にたまたまでしか無い。あれがもし男だったり、ストライクゾーンを離れてる女だったら、エンシエントとしても躊躇いなく殺したであろう。

偶々、女性の体型ライン好きの厨二を拗らせてなければ、こうはなっていなかった。

ナインズやエンシエントに取って攻撃されたか否かはどうでもいい要素なのだ。

そもそも力の差がある。攻撃とすら感じていない。精々が戯れ付いてきた猫の甘噛み程度しか感じていないのだ。

「さて、それじゃ幾億の刃を取ってきますね」

そう言つて紅茶を全て飲み干すと、ナインズは立ち上がって人化指輪を外した。

一瞬で骨の身体に戻つたナインズを見て、エンシエントは不思議に思う。

「そういえばさ。ナインズさんの食べた物つてどこに消えてるの？ トイレしないよね。俺もナインズさんも？」

「えっ？ ……そういえばしないですよね。あれ？ そしたら食べた食べ物つて何処に消えてるんでしょう？」

「物理現象としておかしいよな。俺だつて汗掻かないしトイレも行かないのに水分取つても取らなくてもいいつて……」

「まあ、それを言つたら死んでるのに動いてる私達が一番不可思議な存在ですけどね？」

「俺はともかく、ナインズさん骨だもんな。筋肉も無いのにな」

「まあ、それはともかく宝物殿に行つてきますよ？」

「待つて待つて！ 俺も行くから、ちよつと見たいものがあるしさ！ インクリメント。紅茶を有難うな！」

エンシエントも少しだけ冷めた紅茶を飲み干して、立ち上がりながら振り返つて、インクリメントに手を上げて感謝を口にする。

「い……いえ、私達メイドは至高の御方にお仕えする事が幸福に御座いますれば……そのお言葉だけで天にも昇る心地にございますっ！」

お礼を言われるとも思つていなかったインクリメントは、飛び跳ね土下座をする勢いで、深く頭を下げる。

髪が宙を舞つてまるで昔の企業CMのようだ。

「お……おう。じゃあ行つてくる」

「うむ。インクリメントよ。紅茶美味かつたぞ」

それだけをナインズは言い残して、執務室から宝物殿へと指輪の力で転移する。

残されたインクリメントは、至高の方々が消えた瞬間に頭を下げた状態で、その場にヘナヘナとへたり込んだ。

格好としてはヘッドスライディング土下座をしているが如くだ。

「今日の当番でよかったあ……皆さんを退出させてるのに、私だけが残るように言ってくださったし……エンシエント様はお優しいし……ナインズ様も凛々しくて……あの漆黒の如きシルクのような髪の人間の御姿はなんてかっこいいんでしょか……はふう、いけないいけない！　メイドにふさわしい態度でいないとっ！」

インクリメントはその場から慌てて立ち上がると、自分の顔を両手で叩いて、気合を入れ直す。

それでも暫くの間は頬が引き締まる事はなかった。

宝物殿の通路を二人連れ立って歩く。ここに来るのは二度目だ。

初日に装備一式の回収した時以来となる。

「ところで、エンシエントさん。宝物殿に来た理由は、それだけじゃないんでしょ？」
「おっ？　やっぱわかります？　まあ、人に聞かれたくない話をしたかったのと、パン

ドラに会いたかったってのもありますよ」

「人に聞かれたくない話はわかるとして、パンドラですか？」

「ナインズさんはパンドラを恥ずかしいと感じてますけど、俺は大好きなんですよ。あのキャラ！ それにお願いもしてありましたしね」

「……はあ？ お願いですか？」

二人で他愛もない話をしながら進んでいると、宝物殿管理責任者室のただっ広い、ガラんとした空間が見えてきた。

これのすぐ横は雑多な程にユグドラシル金貨が山と積まれているはずだが、ここはそれを感じさせない静謐さが宝物殿らしからぬらしさを雰囲気付けている。

部屋はホコリ一つどころか。部屋全体が洗い立てのように白く光沢を放つ壁と床に覆われている。

その中央にある何気ないソファアーツとテーブルだけの光景はシニールレアリズムの芸術性すら感じさせた。

そしてソレはソファアーツに座っていた。

甲冑姿に大太刀を腰に差して立つ、鎧武者姿である。

「よお、建やん。元氣してっか？」

「これはこれはエンシエント様……十三日と十二時間三十二分振りに御座います」

「なげえーよ！ はっはっはっ！」

エンシエントは驚きもせず、鎧武者の肩をバンバンと力強く叩く。

ついていけないのは、ナインズだ。以前に来た時は、タブラ・スマラグディナの姿で待機していて、パンドラ本来の卵のような顔を持つドツペル姿に戻してははすなのだ。

「パンドラ。おまえはなぜ、勝手に武人建御雷さんの姿を取っている？」

パンドラに問い掛ける声は冷たく、微かな怒気が感じられる。

確かに色んな変身をさせたりもした。それは仲間が来ない寂しさを、無聊を慰める為にしたのだ。

だが、今のパンドラはここに仲間であるエンシエントが居るにも関わらず、仲間の姿を汚すように真似ている。その様子に苛立ちを感じていた。

「ナインズさん。落ち着いてくれって、怒ってやるなよ。オレが前回来たときに来た時は建やんの姿で迎えてくれて言ったんだからさ。な？ パンドラ？」

「は……はい。ナインズ様の逆鱗に触れるとは知らず、申し訳ございません……」

エンシエントの慌てようと、パンドラのあからさまな落ち込みように、ナインズは深いため息を吐いて自身を落ち着かせる。

「どうしてか聞いてもいいですか？」

「うーん。建やんを忘れないためと、覚悟を揺るがさせない為かな？」

「覚悟……ですか？」

エンシエントはパンドラに元の姿に戻っていいと言ってから、どさりとソファアへと飛び込むように座る。

ナインズもその姿を見てソファアまで来ると、力無くとさりと座り込んだ。

テーブルの横には叱られた子供が落ち込むように、パンドラが立っていた。

「俺がこの世界に来た時、夜空を見上げて言った事を覚えているか？」

そう言いながら、エンシエントはカラダを前に乗り出させるように、前屈みになって膝の前で指を組んだ。

「覚えています……というか。あの光景、初めてこの世界に来て、初めて見た本当の夜空と世界を見た時のことは決して忘れてたりできませんよ」

感慨深げにナインズは、あの時の光景を思い出すように眼窩の炎を消し去って目を閉じて呟いた。

「あの時に俺はさ。これを皆に見せたい。仲間……大好きな仲間達に見せてやりたいと思った。あのクソツタレな世界から助け出してやりたいと本気で思ったんだよ」

「それは……私もそれは思いました……この世界に来て、冒険者として過ごしてみても、色んな人や景色を見て……ああ、見せてやりたいなって……。だから探そうって……」

エンシエントはその言葉聞いて、しみじみとした表情を浮かべる。仄かな温かみが懐かしさを感じさせる空気が流れて、そして……エンシエントの口から放たれた言葉によつて一瞬で凍りついた。

その顔にはいつもの余裕のある笑みはない。

「ナインズさんはさ。この世界に仲間が来ていると思うか？ あの時にインしていなかった……。いや、あの時に来れなかった奴がこの世界にいるかもつてさ？」

淋しげに……本当に寂しげに呟く姿を見て、ナインズはなにもない筈の胸の内が締め付けられるように感じて、精神が沈静化されていく。

この時ほど、沈静化に感謝した事はない。ヘロヘロにナザリツクが残っていると云われた時のような憤りと悲しみを覚えて、今にも叫びだしたくなつたのだ。

「なら諦めるんですか？ 仲間を探す事を？ 俺達二人だけでつとこの世界を堪能しようかと？」

「違うそうじゃない。俺が言ったことを忘れたのか？ 俺はあの時に言ったはずだぜ？ 来てるなら探し出すさ。居なけりや引きずり込んでやるつて？」

「でも、エンシエントさんは、今来ていないことを前提に話していましたよね……つ！ まさか！」

エンシエントは齒を光らせながらニカリと笑うと、組んでいた指を解いて眼の前で手

を打ち鳴らして両手を広げる。

「そう、わかったか？ この世界にもワールドアイテムがあるんだよ！俺はさ、今ナザリックにある全てのワールドアイテムを使っても、その性質上、そっち向きのアイテムは流れ星の指輪二つとカロリックストーン。後は肉体を完全に元の状態に戻すシューティングスターファイブスゴベルゴスベル第五の福音位だろ？ 流石に世界を越えて仲間を呼ぶのには厳しいと思っっていたんだよ」

「でもでもですよ!? 流石に世界線を越えては……」

「そう！俺もずっとそこを考えていた。よしんば越えられたとして、どうやって仲間をあのクソツタレの世界から見つけて、どうやってこの世界に連れてくるかだよな？」

「それです！くそっ！なんで、沈静化されるんだよっ！」

ナインズも興が乗ってきたのか。希望を感じてきたのか。前のめりになりながら体は何度も発光して、精神の沈静効果が発動する。

しかし、沈静化されてもすぐに見えてきた希望に感情が昂ぶり、再び沈静化されるま
でになる。

「そう、それで俺達の存在定義になるんだが、俺達は生きてない。寧ろ死人アンデッドだよな？ ナインズさんに至っては物理法則に反する筋肉すらない。俺達はどこで物を考えてどこで物事を感じていると思う？」

「それは魂つて奴ですかね？」

「そう、その通り！ この世界に来てから魂が入っていない筈のNPCだったキャラクターに自我が芽生えて、自己を認識する理由は？」

「この世界に来て魂が宿った？ ……違う。それだつたらアルベドが、俺とエンシエントさんの最後のやり取りを覚えているはずがない。いや、俺達が物事を考えているのが仮に魂なのだすると、新しく魂が宿った時点からの記憶のはず…、それだつたら現地の産のリッチーとかはどうなる？ いやいや、それだつたらエルダーリッチーになったカジットの自我が消えて、今は単なるエルダーリッチーでしかないはずなのに、今もカジットとしての自我があつて研究している？ 母を復活させる事に対しての執着は人間の物だ。ちよつとまてよ。それならそもそも復活が成り立たない…。」

ナインズは頭がいいとは言えない。でも、決して馬鹿ではない。むしろ考える天才なのだ。それでもなければ膨大なユグドラシルのデータを記憶して、戦闘という短い対人の心の読み合いを勝ち進めはしない。

ぷにつと萌えですら、ナインズに一目も二目もおいて、俺は思いつく天才だと自負してるけど、ナインズさんは考える天才だから勝てないと言わしめたのだ。

その考える天才。一つのこと、それもユグドラシルに関しての事ならば世界でもトップの男が、俯いて周りも見えなくして呟き考えている。

「ロンギヌスなんてのもあったんだ……他の二十もあってもおかしくない。永劫の蛇の指輪、いや。五行相克があれば……世界の改変？　そこまでいらぬ。ただ、仲間の情報、魂の情報と言う物をこの世界にさえ引き寄せられれば……いける？　そうか。いけますよっ！　これはっ！」

一通り考えが纏ったのか。勢いよく頭蓋骨を上げると、まるでガソリンが注がれたように燃える瞳を持って見つめてくる。

「どうだ？　俺が言いたい事がわかったかい？　ナインズさん。俺は最初、世界を越える可能性のある魔法、若しくは現地産のアイテムを探そうと考えた。でも、ロンギヌスの存在を聞いて、考え直したんだ。過去にプレイヤーが来た事があるのでは？　同時に飛んでたらこんな手広く勢力が掴めてるはずがない。だったら、既にユグドラシルの仮想世界にまでは世界は繋がってるんじゃないかってさ」

「それでここに来たんですね！　守護者に知られたら創造主を蘇らせようと無茶をするから……いや、暴走を始めるから？」

「今のところは夢物語だ。単なる可能性の話でしかない。でもさ。あるんだよ！　可能性が……俺達が今ここにいることがその証なんだよ！」

ナインズは笑顔で頷いて見せる。守護者にこの事を知られればどうなるか？

簡単な話だ。デミウルゴスはスレイン法国を速やかに滅ぼしてアイテムを探すだろ

う。

アルベドは全勢力の情報を集める為に、ナザリックの戦力を割いてまで探し出そうとするだろう。

アウラもマールもコキュートスも、否、プレアデス達ですら何としても見つけ出そうと躍起になるかもしれない。

それは決してしてはいけないのだ。未だ可能性でしかなく、見つけられる保証もない。

それなのに目立つ行動を取って、ナザリックが表立つのは愚行に過ぎない。

たとえ、仲間を全て呼び寄せる事が出来たとしても、その時に世界を敵に回していれば、仲間が悲しむ事にしかならない。

だからこそ、慎重に行動しなければならない。

ナザリックのナインズを始め守護者達やプレアデス。一般メイドに至るまで、みんなが揃っていないといけないのだ。

未だ。雲を掴むような可能性の話でしかない。だが、見上げる位なら手を伸ばせの精神で伸ばせば、人は火星にだって行けたのだ。

ならば、可能性はただの可能性ではない。

ナインズは考えてもみななかった。まさか、パンドラが守る宝物庫で、可能性という何

物にも代えがたい宝が見つかった。

なにもない筈のガランとした宝物殿の広場で、その日だけは二人の明るい未来に向けての話し合いがされていた。

それをバンドラズ・アクター。影の役者は優しい笑みを浮かべて見守る。

エンシエントは無意識にだが、自分達が描く未来予想図に、自身が含まれていない事に今はまだ気付いていなかった。

未だ。幕は上がらず、役者に出番は来ない。

劇の終わりは見えたが、そこには役者が一人と主人公が一人、そして世界は動き出す。世界にとつても、異邦者にとつても幸福へと続く劇が幕を開けるまであと少しである。

三十一話。拠点と教育

翌日にはエンシエントとルプーは、古めかしい大きな屋敷の中にあつた。

屋敷の中は一般メイド達の手に依つて、完璧に近い掃除が成されている。

近いというのはあくまでも掃除であつて、建て替えではない為に経年劣化の汚れは致し方ない。

だが、一般メイド達はそれですらも許さず、落ちない汚れは壁紙等で隠したり、家具や絵を掛けて、蒼の薔薇が泊まっていた宿並みの見た目となっている。

一般メイドは凝り性のヘロヘロとホワイトプリムの性質を受け継いでいるせいか、外観まで弄ろうとしたが、流石にそれはエンシエントが止めさせた。

内観はこれからの生活を考えて綺麗にしたが、外観にまで手を加えると悪目立ちし過ぎる。

宿から屋敷の借り上げに変更した理由は、単純に警備上の問題だ。

昨日泊まっていた宿は警備も碌に置くことが出来ないし、警報関係もザルにならざるを得ない。

かと言って、既に一足飛びでエンシエントはミスリルになり、モモンに至ってはオリ

ハルコンになってしまっている。

目立たず行動する事が無理ならば、出来る事はなるべく身辺を固める事だ。

その為に少し支出は多くなるが、屋敷を一軒借り上げて防備を固める他にない。

ナザリツクの外に出ている構成は、王都にエンシエントとルプー。ナザリツクに近いエ・ランテルにモモンとナーベ。帝国ではセバスとソリュシヤンに雑貨店をやらせる事にした。

ユグドラシルと言う名前で商店を開店させるつもりだ。こちらはあくまでも囷として、プレイヤーかそれに類する者を引きずり出す目的となっている。

現在はナザリツクで何を商品にするか、何を扱う店にするか等を決めている頃合いだろう。

そしていま、王都の屋敷にはセバスとユリの二人が来ていた。

リビングというには豪華なソファアが置かれ、王族でもこれほどの物は持つてはいないであろうテーブルには紅茶が置かれている。

奥のソファアにエンシエントが座り、向い合うようにして二人が立つ。

エンシエントはソファアを勧めたのだが、二人は頑なに座ろうとはしなかった。

紅茶を口にしてから、エンシエントは口を開いて突然呼び出した事を詫げる。

「すまん。二人共。特にセバスは開店前で忙しいだろうに……」

「いえ、私は執事として当然の事をしているまでに御座います。エンシエント様が気に病まれる事など何一つとしてございません」

「そうです。我ら皆、至高の御方のお役に立つ事が存在意義で御座いますれば、どうかエンシエント様が謝罪などなさらないで下さい」

「そうか。ならば礼を言おう。二人共今日はよく来てくれた。二人には少しばかり姿を借りようと思つてな」

「勿体無きお言葉に御座います。それで姿を借りる……でございますか？」

セバスは胸に当てて、綺麗な礼を見せた後で聞き返してきた。

その言葉に、エンシエントが一つ手を打つと、別の扉から二人の人物が入ってきた。

人の姿をしてはいるが、人と言うには少し異形であった。

ツルツとした頭には毛の一本どころか目や鼻といった感覚器官が全く無く。口などという穴というものがない。

「ああ、流石に屋敷を持つことになるとは思わなくてな。メイドだけでは手が足りん。それに一般メイドでは、戦闘力が不安だからな。ナインズさんにドツペルゲンガーを用意してもらつたんだ。勿論、既にナザリックで一般メイドを模倣したドツペルを配備するつもりだが……流石に取り次ぎとかは執事が必要だろう？ 執事とメイドと言えば筆頭はお前達だからな」

エンシエントがそういうと、セバスばかりかユリまでも目を潤ませる。

「それ程までにご評価を頂けておりましたとは……。わかりました。このセバス、矮小な身の内なれど、最善を尽くさせていただきます」

「ぼ……私もなんなりとお命じ下さい！」

意気込みはよくわかるが、そんな在意気込まれても困る。セバスに今まで通りに帝国で開店準備をしてもらわなければならないし、カルネ村ではようやく酪農などの畜産も出来るようになってきたところなのだ。

ユリもこれから人口が増えてゆく村を見てもらわなければならないのだから、姿を写させてくれるだけでいいのだ。

「お……おう。ただ、姿を写させて貰うだけでいいんだぞ？ お前達……」

エンシエントの声にセバスとユリ、其々の前にドツペルゲンガーが向かい合う。

すると、ドツペルゲンガーはグニヤリと形を崩すと、粘土が捏ねられるように暫くの間、姿を変えてから見た目は完璧にセバスとユリの姿になった。

エンシエントはその姿を見て、満足気にうなずいて見せた。

「見た目はそっくりで御座いますな？」

「見た目ハそっくりで御座いマスな？」

ドツペルゲンガーの口から、セバスが話した内容と全く同じセリフが少し遅れて出て

きた。

しかし、その口調は少し迪々しく言葉が覺束ない。

「少し迪々しい感じが致しますね」

「す、少し迪々しいか……感じが致しますユね」

ユリの姿を真似たドツペルは個体差からか、更に迪々しく舌つ足らずな感じまでする。

それを見て、エンシエントは興味深く感じた。

同じ傭兵NPCならば、性能も何もかもが同じはずだが、ユリの方だけ少しだけ劣っている。

これは個体差か。若しくは変身した相手の違いゆえかわからない。

(面白いな！ これでもた一つ検証する事が増えたぞ)

エンシエントはその事実が面白く感じたが、面白く感じない者もいる。

「なんですか……？ その言葉遣いは？ 私の声で……貴女、そこでメイドとして礼をしてみなさい！」

「え……ハ、はい！」

ユリがいつもしている様な礼を、ユリドツペルがしてみせる。

エンシエントからしてみれば見慣れたいつものユリの洗練された礼に感じたが、当の

本人は至つてご不満のようだ。

「なんですか！ その礼はっ！ 角度が浅い！ 顔は微笑みなさい。ただし、その笑みは決して主人に見てもらうものではありませんっ！ 気持ちから出る笑みから生まれる優雅さと、柔らかさが足りない！」

そこにはエンシエントの知らない教師としてのユリ・アルファがいた。手にはいつの間にか指示棒が握られている。

「手の角度はもう少し上っ！ ああ、足の引き方が浅いつ！ もう二センチ下げなさい！ 速度が早いっ！ もう少しゆっくり！ 頭を下げる速度も重要なのですよ！」

セバスも気になって、一度礼をさせてみる。

「これは……っ。いけませんねえ。エンシエント様」

「は……はいっ?! 何でしょう?」

初めて見るユリの迫力に気圧されていたエンシエントは、急にセバスから話しかけられて思わず敬語になってしまう。

「急にお声掛け致しまして申し訳御座いません。しかし、これはあまりにも酷い……。少々お時間を頂いてもよろしいでしょうか？ 見た目や大凡のスキルは似せられても所作までは真似できぬようですな。これでは名誉あるナザリックの執事として到底表

に出すことは出来ないと思考いたします」

「あ……うん」

「少しお預かりして執事としての心得と所作を学習させたいと存じ上げますが……？」
所作と言われてもエンシエントにはよくわからない。指摘された違いですら解らないのに、本当に必要なのかと思う。

むしろ、セバスもユリも多忙の身でここに来てもらって申し訳ない気持ちがあるのだ。

「うーん」

「私からも是非にとも再教育させて頂きたいです。私の姿をしていて至高の御方のすぐお傍で仕えるというのに、この所作では私が赦せませんっ！ 何卒！」

ユリの言い分もよくわかる。自分の姿をした人物が情けない姿を見せているのかと思うと腹が立つだろう。

「わかった。二人共、その二人はこの屋敷でも特に来客と接する機会のある者だ。無理のない範囲で教育してやってくれ」

「はっ！ 畏まりましたっ！ いますっ！」

「はい。有難うございますっ！ さあ、行きますよドツペルゲンガー。さっさと動くつ

！ 時間は有限で覚えることは無限にあるんですよっ！」

ユリが握る指揮棒が振るわれる度に、ピシイピシイつという鋭い音が部屋に走る。

「それでは俺は少し……外に出掛けるからな。その間に頼む……ルプー行くぞ」

「は……はいっ！ お供しますっ！」

リビングを出る時に後ろを少しだけ振り返ると、とてもレアなユリの姿で捨てられた子犬のような目をしたユリドツペルの姿と、少し恨めしげに見送るセバドツペルの姿がとても印象的だった。

隣の部屋で待機していたルプーは、慌てて部屋から飛び出すとエンシエントの後へと続く。

途中でユリのスパルタな指導の声が轟く度に、いつもどこか飄々としているルプーは、体を飛び跳ねさせる。その表情は強張っていた。

屋敷を借り上げて大掃除やらドツペルの手配などで、ほぼ一日が潰されてしまった。

とはいえ、警備体制の構築などはデミウルゴスが計画した為に、警備自体は一国の軍隊ですら落とせない難攻不落と化したのだが。

「これからどうするっすか？」

昼もだいぶ過ぎて陽はかなり傾いている。

何をするにしても中途半端な時間だ。居心地悪く思わず出てきてしまったが、今更、冒険者組合に行くのも遅いし、店を回ろうにも、買う物もなく既にちらりと見るだけでも閉まり始めているのは遠目にもわかる。

「ふむ。どうしたもんかね。何をするにしても中途半端が過ぎる感じがする。かと言つて、今戻るのもあれだしな？」

ルプーに解るだろう？ と視線を向けると帽子の中の耳は萎れて勢いよく頭が縦に振られる。

今あの中では教育という名の圧力が渦巻いていることだろう。

そして、ふと教育という言葉で、行きたいと思つていた所に行けなかった事を思い出した。丁度ユリも来ている事だし、今のうちに書物等を扱う店に行つておこうと考えた。

「よし、幸いにもここは高級街に近いからな。昨日行けなかった、書籍を買いに行くぞ」「了解つす！」

昨日の内に聞いておいた本屋の場所へと向かう。

その店は高級住宅街に入つてすぐの場所にあつた。

店構えは中々に立派なもので、イメージにあつた本屋といった感じはしない。

恐らくは客層の大半が店の立地から考えて、貴族や富裕層を相手にするためだろう。

紙自体も高価なのかもしれない。

「いらつしやいませ。……冒険者のお客様でございますか？」

店舗には感じのいい老執事といった雰囲気店主が一人でいた。

セバスが洗練された執事というなら、こちらの執事風の店主は子供の養育等に欲しいと思わせる人物である。

「失礼、ミスリル冒険者のエンシエントという。一つお聞きしたいのだが、ここが書籍を扱っている店で間違いないかな？」

「はい。当店では上級紙から低級紙の扱い、書籍の取扱いをしております……」

周囲を見回すと日光による紙の劣化を防ぐ為か窓はなく、コンティニユアル・ライト 永続 光が掛かった魔

道具が光源としていくつか吊るされている。

「どういった物をお探しでございますでしょうか？」

「知り合いの子らに文字を習熟させたい。一般的に幼児教育で用いる文字習熟の手習い書が若しくはそれに近い物を、いくつか見繕って頂きたい。それとそうだな。難しい……そう、高等教育で学べるもの。記した辞典なども欲しいな」

なるべく伝わるように言ったつもりだが、この世界で教科書等と言っても伝わるか解らないし、そもそも高等教育なんて概念があるのかすら疑わしい。

「左様でしたら……」

暫く考え込んだかと思うと、中々に優雅な足取りで店内を迷いなく歩きながら、色んな書物を手に戻ってきた。

「こちらなどはいかがでございましょう？　こちらは貴族様から商人の方まで広く使われている教育書にございます。それと高等という物が何を指すのかがわかりませんでしたので、こちらの歴史書、植物を記した図鑑、動物を記した図鑑、魔物の生態を記した図鑑で御座います。それとお子様ということで、当店ではこちらの吟遊詩人が記した物語等がおすすめには御座います」

エンシエントは少しだけ驚いた。

高級街にあり、エンシエントの身分が冒険者と言う事で侮るかと思っただが、決してそのような色は見せずに要望通りの書籍と、ついでに意図まで察して薦めてくると思ってもみなかった。

「これらの本はお幾らかかな？」

「教育書と物語が一冊一金貨となっておりまして。そしてこちらの歴史書と植物図鑑が一冊に付き三金貨。ただ、こちらの動物図鑑は五金貨となっておりまして……さらにこの魔物の生態は白金貨一枚と金貨五枚となっておりまして……こちらは冒険者組合で閲覧された方がお得かと……」

「つむ」

上目遣いでこちらを氣遣うように伺い立ててくる姿も好感を抱かせる。

貴族でもない冒険者が本一冊にそんな金額が出せるとは思えないし、勿体無いのではと思われたのだろう。

「いや、全て頂こう。本に……知識にはそれ以上の価値がある。そうだろうか？」

「はい。仰つしやられるとおりに御座います。知は劍、知は盾、知は千の兵と言われておりますれば、ご慧眼におみそれいたしました。それでは……」

店主が金額を口にする前に、懐から白金貨二枚と金貨を八枚渡す。

少し驚いた様子を見せると、手の中にある確かな重みと数えるまでもない感触に恭しく静かに頷いた。

「確かに……。おお、そうだ。こちらをお持ちください」

店主は近くの引き出しから何かの革で装丁された手帳を差し出してきた。

「こちらもお使いください」

「よろしいのか？」

「はい。腕が立ち理知的な冒険者様とは誼よしみを通じる方が、私の将来の財産となりましょう。どうかお納めください」

「そうか。有り難く頂戴しておく。何かあればまた寄らせて頂こう」

「はい。その時をお待ち申し上げます」

そう言いながらくしやりと皺の浮いた顔を微笑ませて見送ってくれた。

店を出ると空は茜色に染まり、夕陽に伸びる影が長く引き伸ばされている。

「中々、いい爺さんだったつすね！」

「礼節を知る人間と出会うと気持ちのいいものだ。さて、これらの本はナザリックで模写させて村で使えるか見てみよう」

「金貨一枚で大量生産できるんつすからポロい商売つすね！ ニシシツ！」

悪そうな笑みを浮かべて笑い声を上げるルプーを、エンシエントは軽く小突いて止めさせる。

「いずれはそうするべき時は来るが、今はそんな事はしない。さっきの店主も言っていたが知識は武器であり防具でもある。ある程度は独占する事で旨味が多くなる。それに今のこの国の状態で、そんな事をして無駄だろう。何せこの国の支配階級は知識は合っても活かす知能がないからな」

ふむと呟いて、エンシエントは買った本をインフィニティ・ハヴァザック無限背負い袋へと収納して、手の中に残った革装丁の手帳を見つめる。

「この世界ではそこそこの値打ちがあるんだろうが、俺達には使い道がないな……」

ふと手の中で手帳を弄びながら、使い道を考える。

紙の質は精々が中程度で、ナザリックで作れる紙の質よりはかなり劣る。

(そうだなあ。昨日は蒼の薔薇に少しばかり悪い事をしたかもしれない)

折角のツテが、エンシエントの感傷によって壊れるのも些かどうかとも思える。

あれは向こうに非はなく、完全にエンシエントの我儘だ。痲癩かんしゃくと言ひ換えてもいい。

「これを詫代わりに贈るか。ついでに改めてリーダーも紹介してもらおう。昨日の今日だが行ってみてから、居なければ素直に帰ればいい、か？」

「ん？ どうしたつすか？」

「いや何でもない。ルプー。黄金の蜂蜜亭に行くぞ。昨日の蒼の薔薇にきちんと挨拶を出来ていなかったからな」

「了解つす！」

二人の主従は奇しくも昨日と、ほぼ同じ時間に

高級街から少し外れた昨日の店に向かうことになった。

地平線に沈みかけた太陽と反対側に浮かぶ薄く現れた今日の月は、赤く嘲笑うかのよ
うに弧を描いていた。

三十二話。夜の闇を彷徨う蜘蛛とそれを喰らう蝙蝠

微かな振動が骨に痛みを走らせて、闇の中から意識が浮き上がってくる。

（ああ、まだ……つづくんだ。ようやく終わったと思ったのに……もう死ねたと思ったのに……）

目が覚めるという事がこれほど地獄に感じ始めたのはどれほど前のことだろうか。心があるという事が苦しい事しかないと思い始めたのは、何度目の事だろう。

痛い事が何も感じなくなったのは、いつのことだろう。

女は今の自分の状態を思い浮かべる。

最後に他人の瞳を通して見た自分は顔を二倍以上に腫れ上がらせ、口の中はずたずたにして、鼻で呼吸もできずに、浅く空気を食うだけのまるで醜いゴブリンの様だった。

（痛いなんて感覚はなくなったのに……。寒さだけは消えない。これはきつと心が上げる最後の痛みだ）

終わりは既に見えている。たとえ教会に今すぐ連れてゆかれても、たどり着く前に息絶えるだろう。だが、それが嬉しかった。解放されると思える。全ての嫌なことから解

き放たれるのだ。

それがわかるから、心が最後に声を上げたのかもしれない。

感じないはずの痛みは、誰にも看取られずに息絶える寂しさを感じて叫びを上げたのだらう。

瞼を閉じれば顔ですら思い出せなくなった妹の姿だけが映る。故郷の光景も思い出せなくなったが、妹の輪郭だけは忘れることはなかった。

しかし、最後に浮かんだ妹の輪郭ですら、既にボヤけて霞の向こうに消えていく。

だから、手を伸ばす。決して消してしまつてはいけないものだ……。手を伸ばして掴もうとする。

何も掴めないはずの手は確かに何かを掴んで寄せた。それはこうなつてから初めて、自分の意思で掴み取ったモノだった。

地面に汚らしいズタ袋が転がり、そこから伸びた痣だらけの腕は足を掴む。

それは赤い色をした絶望、紅い色をした希望。それは頬を吊り上げて嗤う闇色の光であつた。

地面に転がるズタ袋から人の腕だった物が伸びて、エンシエントの足を掴んでいた。その手は折れて自然に任せて治したであろう歪んだ腕で、元の肌の色が解らぬ程に変色している。

ペンですら握る力も出せないであろう折れた指は、一部は欠けて残りの指もひん曲がっていた。

こんな手に掴まれた所で、振り払った意識すらなく手放させることなど容易い。だが、エンシエントの足を止めさせる事が出来たのは、そこには人としての最後の強い意思を感じたからだ。

「おっと、すまんな。袋が緩んでいたみてえだな」

「おい。これはなんだ？」

床に転がるズタ袋の口を縛るために、地面へと屈み込もうとしたが、エンシエントが掴んで止める。

「あ、あつー！」

「これはなんだと聞いたんだ」

男が苛ついた様に見上げると薄く笑うエンシエントの笑んだ顔が飛び込んできた。

その笑みの薄気味悪さと言いい知れぬ迫力に、エンシエントよりもガタイがいい男がたじろぐ。

「こ……これは……うちのモノだ」

「そうか。これはお前の物か？」

「ああ、そうだ。これは俺の物だ。迷惑を掛けたな」

「そうかそうかそうか……そうか……。クククツ、これは物か……」

男の言葉にエンシエントの笑みは更に深くなり、喉奥で威嚇するように含み嘲笑った。

「ならば、物に責任はない。責任は持ち主が果たすものだよなあ？ 汚い物を見せた責任を。不愉快にさせた責任を。俺の足を止めさせた責任を……取ってもらおうか？」

「お前黒粉ライラでもキメてんのか？ 六腕のサキユロントさんが来る前に失せろっ！ 八本指を知らねえわけじゃねえーんだろ？」

軽く凄みを入れながら何処かへと行かせようと考えたが連れている女をみて思い直した。

荒事で慣れた男に取ってはラリった奴の扱い方には慣れたものだ。自制が利かなくなる分、力は強いが頭が馬鹿になってるから掴み掛かってくるだけ、元冒険者だった男に取っては、その程度の奴など容易く撚ひねることができる。

見れば男の後ろには情婦か知らないが、上玉を連れている。

丁度いい。一匹使い物に成らなくなった穴埋めも出来ると、嫌らしい笑みを心の内で

浮かべた。

それも次の瞬間まで、エンシエントの手が男の腕を掴む。後は更に掴みかかってくる。顔を転がして、顔に足を振り下ろすだけで肉袋の出来上がりである。

だが、エンシエントは強く掴むだけで、男の腕に指の穴が空いて掴みやすくなる。

「いぎあつ……」

「まず、一つ汚いものを視界に入れた罪……」

エンシエントは煩い鳴き声が響かぬように、空いている右手で喉を握り、ぎりぎりと腕を握った手を引っ張る。

ただの人間でしかない体は、それだけで容易く引き千切れてゆく。ブチブチという筋繊維や血管といった肉体を繋ぎ止めている物が弾け切れる。

「ぐぬっー！　ぐっつぬーぬー！」

「二つ、不愉快にさせた罪……」

唯一残された左腕だけで束縛から逃れ出ようと殴りつけていた左腕がエンシエントに掴まれる。

男はその瞬間に自分の左腕がこれからどうなるかを理解した。まるで粘土を握るかの様に容易く自分の腕が握られて穴が開く。

耳にブチブチという不快な音が届けられる。

それは腕が最後に告げる持ち主との別れの言葉であるかののように、途切れた時には湿った音と共にベチャリと地面へと投げ捨てられる。

「むぐうーっ!! うぐーうぐーうぐあー」

「三つ……」

その声に痛みにも埋め尽くされていた頭の中がスウツと冷えてゆく。

痛みもどこか遠く。頭の中が自分でも可笑しくなるほどにクリアになった。

そこに滑り込む死神の声は、とても優しく。恐怖を以て魂を刈り取ってゆく。

——俺の足を止めた罪……

最後に千切り取られるのは何処か？ 男は他人事のように理解してしまった。

何故ならば手が届く範囲にある千切り取れる物は今握っている部分しかないからだ。

だが、その予想は悪い意味で裏切られた。

腕一本で宙にぶら下げられた体、その腹部に焼いた鉄の棒が差し込まれるような灼熱感と味わったことの無い痛みが全身を走り、その刺激だけで全身が意図せぬ痙攣を起した。

「んー。不摂生は良くないな？ はらわた腸の色が悪い気がするぞ？ もしくは腸つてのはこんな

なに色が汚いものなのかなあ？ どう思う？ ルプー？」

「さあ、私にも判りかねます。至高の御方様……、一度全身を癒やしてみてもどうでしょ

うか？」

「ははっ、ルプーは頭がいいなあ。そうしてみようか。完全に癒やしてみてくれないか？」

「はい！ 大治癒^{ヒーリング}」

腹部に走る灼熱と、全身を貫く痛みが遠くに去ってゆく。

しかし、死神は決して去りはしなかった。

もう一度、始まる熱と痛み、気が狂いそうになるのに狂わせてくれない。痛みで気絶と覚醒を何度も繰り返させられる。

「やはり汚いな。個体差だな。汚い奴は生まれた時から汚いって事か……そうだ。こいつは死なない程度に癒やしてやろう。エントマのいいお土産になりそうだ」

「ああ！ それいいっすね！ エンちゃん喜ぶっすよ。留守番ばかりで可哀想だったんすよ！」

「ああ、そうだな。エントマは人間の街の中じゃ浮いてしまうからな。そう考えると、ソリュシャンも性格的に窮屈してるんじゃないか？」

エンシエントはふとマスターソースで読んだプレアデスの個人個人のフレーバーテキストとカルマを思い出して聞いてみた。

「あー。確かにソーちゃんはあれで結構、鬱り易いっすからね。表には出さないけど溜

めてそうっす」

「だなあ。ちよつと、ナインズさんにメッセ入れてみるか」

そんな会話を頭の上でされても男は何もする気が起きなかった。

意味が解らないと言うのもあるが、体が動いてくれない。

脳が味わつたことの無い痛みと、それを巻き戻されるような回復に処理が追いつかずに、殆ど機能していないのだ。

『ナインズさん。今大丈夫か？』

『なんですか？ 今は宿にいるから大丈夫ですけども……また、揉め事ですか……』

『いやあ、見てもらった方が早いかなあつて』

『解りました。すぐに行きます』

そう言つてすぐに黒い鎧姿のモモンが姿を現した。

人間の姿をしたモモンは、困つたような表情を浮かべた。

最初に気付くのは少しは嗅ぎ慣れた血の匂い。そして目にしたのは地面に転がった潰れた腕の肉片と、ズタ袋から飛び出した辛うじて生きた人間の腕、腰を抜かして放心しているガラの悪い男だ。

「なんとなく、状況は察しましたが……あんたの頭には反省って言葉はないのかあつ
！」

「反省ぐらい知ってるよ。るし☆ふぁーじやあるまいし……。明日から頑張るだっけ？」

「いやいや、あんた昨日は目立たないようにつ言つてたじゃないですか!？」

「目立ってないよ？ 誰にも見られてないしさ」

「そういう意味じゃなくて……!」

「ナインズさん……。昔偉い先生がいました。『殴ってから考えればいいじゃない?』って!」

「やまいこおお! そうでした。そうでしたよ。あなた達、武人、鮮血、鉄拳の三脳筋はそういう人達でしたあ!」

黒い鎧を来たモモンは、頭を抱えてその場に蹲る。地面に向かってブツブツと過去の思後始末い出を処理する。

「あの……こちらの汚いのをどうしますか?」

「ああ、それは一応は戦利品だから回復させといてくれ」

「了解っす!」

脳内メモリーのクリーンを行ったモモンは、なんとか再起動することが出来た。

もしかしたら、人化している時は精神の沈静化が弱まるのかもしれない。

「と……とにかく、解りました。それでエンシエントさんはこれからどうしたいんです

か?」

「うん。とりあえずはソリュシャンとエントマなんだけどき。人間大好きっ子なのに、好きに遊ばせてやれて無いのもどうかと思うから、この機会に少し好きにやらせてやりたいかなって?」

「ああ、そういえばソリュシャンには帝国で裏方に回したり、遣りたくない演技とかもやらせてますしね。ご褒美としてたまには……でも、あくまでこいつらみたいな人間のクズだけですよ? 流石にあの袋の中の女の子は見ていて痛ましいですからね……」

「了解了解! 俺も村に増やす人間が欲しかったしな。丁度いいや。んじゃ、ソリュシャンとエントマ呼んで説明しといて。俺はこの男を尋問するからさあ」

エンシエントは未だ放心状態の男の側にしやがみ込むと、何処も見えていない定まらぬ瞳を覗き込む。

——スキル人間種魅了チャーム・パルソン

意思が弱まった人間には、目を赤化させるまでもなく、意思が蕩けて口もだらし無く開いて涎を垂らす。

「さて、お前らのアジトは何処だ? 中に何人いる?」

「……俺達の……アジトは……その赤レンガの建物……地下に隠し扉……人数は、従業員が十二人……客が三人……。女が……五人」

「そうか。それで？ お前達のボスはだれだ？」

「コツコドール。坊主頭の気持ち悪い話し方の男……」

「おーけー。役に立ったな。お前だけには慈悲をやるう？」

「そう言うが早い。エンシエントは素早く手刀を抜き放ち。一刀の元に首を撥ね飛ばした。」

「あー。折角、癒やしたつすのにい。殺すんなら下さいよお」

「お前は冒険を楽しんでるだろっ！ 妹達に譲ってやれ！」

「ぶー、しょうがないっすね！ お姉ちゃんは辛いつすよお」

話を聞き終わり、殺してからルプーの声に振り返ると、そこにセバスを始め、ユリ・アルファとエントマ・ヴァシリツサ・ゼータとソリュシヤン・イプシロンのプレアデス姉妹が揃って、エンシエントに向かって、膝を突いて礼をしていた。

「ああ、みんなよく来てくれたな。ナインズさんから説明は聞いたか？」

「はい。筆頭執事セバス・チャン。御前に……」

「プレアデスが長女、ユリ・アルファ。御前に……」

「プレアデスが次女、ルプスレギナ・ベータ。御前に……」

「プレアデスが三女、ソリュシヤン・イプシロン。御前に……」

「プレアデスが五女、エントマ・ヴァシリツサ・ゼータ。御前に……」

「此度、我らの為に御心をお砕きいただいたことを、伏して感謝を致します……」

皆、名乗りを終えると、前にセバスを置き、後ろでプレアデス姉妹が深く頭を下げる。エンシエントは視線を上げると、モモンが嬉しそうに笑っていた。

(何を言ったのやら……)

「皆、面を上げよ。辞儀はいらぬ。支配者の一人として、お前達に楽しみを与える事も責務である。これは遊びではない……だが、楽しんでいい作業だ。中にいる女達には手出しは許さぬ。後はコツコドールという坊主頭の男にもだ。後は飲み食い好きにして良いい！ 大いに食い大いに楽しめ！ なに、この中にいるのは世界を蝕むだけのただの屑だ。なんの遠慮もいらん！」

「まあ……何という素敵な作業なのでしょう……。慈悲深い至高なる御方に、このソリュシヤン深い感謝を致しますわ」

「お肉ういっぱい食べていいですかあ！」

無邪気に喜ぶ邪悪な存在達を前に、エンシエントは微笑みさえ湛えて頷いてみせる。

「ああ、その感謝を受け取ろう。エントマも外に出れなくてつまらなかつただろう？

今日は楽しむといい」

「有難き幸せ」

「有難うございますですわあ！ エンシエント様はお優しいですう」

「セバスとルプーは女達の救出と回復に回れ。回復したらカルネに行ってもらおう」

「慈悲深きいと尊き御方に深い感謝を……では、行きます。ルプー」

「えー。私も玩具で遊びたいっすよお……」

「では、行けっ！」

「はっ！」「頂いてまいりますわ」「お肉お肉」

「ぶうー！ ずるいつすう」

そして最後に残ったのは、モモンとエンシエント、ユリと回復はしたが、衰弱していて眠り続ける裸の女性の姿だけだ。

「ユリには裏方にして悪いが、この女性を屋敷へと連れ帰ってもらえるか？ お前には

別の褒美として今日手に入れた教科書と辞典をやらう」

「え……あ、有難うございますですっ！ ぼ……私も一層の忠誠をつー！」

「ああ、期待してるよ。とりあえずは終わるまでは外で話しくか？ なあ、ナインズさん」

「そうですね。エンシエントさん」

エンシエントとモモンは赤レンガの壁に凭れ掛かりながら、他愛のない会話する。とりあえずはアダマンタイトになる為の試験を受けるべきかとか。やたらと組合長のアインザックが仕事をさせて、ランクを上げさせたがるといったものから、ナーベの人間

種に対する態度をいくら諫めても止めてくれないといった泣き言に近い愚痴まで、夜も深けた閑静な住宅街である。

建物の中では凄惨極まりない行為が今も行われているにも関わらず静かだ。

それから半刻もしない内に、アジトの出入り口からセバスとルプーの二人が姿を表した。

それぞれに二人ずつ粗末なシーツを巻いただけの女を抱いている。

元は酷い怪我をしていたのだろう。見える肌にも膿や血に混じって汚物の痕跡も見える。

エンシエントはそれを見て不思議に思った。男に聞いた女の数は五人と聞いていたのに、四人しかいないからだ。

もしかしたら既に連れ帰った女も含んでいたのかとも思った。

「セバス？ 中に女は四人しか居なかったか？ 五人と聞いていたんだが？」

セバスは鋭い目を微かに陰らせると、ゆっくりと首を振って答える。

「いえ、一人は我々が行った時には既に……」

「そうか。運がなかったな」

「……はい」

運がなかった。そう言うしかない。タラレバを語るのは弱者の考え方だ。行つた先にタラもレバもない。純然たる現実があるだけだ。

女の生きる気力がもう少し強ければ、楽になりたいという気持ちよりも少しだけでも勝つていれば、結果は変わったかもしれないが、現実には四人が助かり、弱かつた一人が死んだのだ。

「その女の死体はエントマに食わせよう。それもある意味では供養だろう？」

「はっ！ 至高なる御方の慈悲、ご配慮に感謝いたします！」

「構わんよ。困っている人がいたら助けるのは当たり前、だそうだからな」

エンシエントがいった言葉に、セバスは深い感謝を込めて頭を下げる。

「……感謝を……」

「女達は屋敷に連れ帰り、身を清めさせて休ませろ。体調が戻り次第、カルネ村へと移送する」

「はい！ それではお先に失礼をさせていただきます。お屋敷にてお待ちしております」

「ああ、ルプーも頼んだぞ」

「了解っす！」

セバスは女二人を抱えて軽々と屋根まで飛び上がると、常人では目に留めることも出来ない速度で屋根の上を駆けて屋敷へと向かう。

ルプーも遅れじと屋根の上へ登って後を追った。

「困っている人がいたら助けるのは当たり前か。リアルもこつちも人間を見続けると、それがわからなくなってくる」

「ええ。ですから、たつちさんもユグドラシルに理想を求めたんでしょうね」

「ああ、早くこつちに呼んで理想を叶えさせてやりたいな」

「まったくですよ」

エンシエントとナインズはお互いに顔を見合わせて微笑み合う。

その直後に、今度はソリュシヤンとエントマが姿を表した。

ソリュシヤンの手には一人の面長な坊主頭がぶら下げられている。

「楽しめたか？」

「はい。とてもよく楽しませて頂かせて貰いました。今も私の中で元気に頂かせて貰っていますわ」

「お肉ういっぱいいでしたあ。エンシエント様あ。御馳走様でしたあ」

「そうか。二人が楽しめたのならそれに優るものはない。喜んでもらえて俺達も嬉しいぞ」

「ああ、ソリュシャンもアントマも裏方として目立たないながらも重要な仕事をしてもらっている。その感謝の気持ちと思うといい」

「まあ、深い感謝をいたしますわ。偉大なる至高の御方様」

「はい。とても、お腹いっぱいなのですよ。ありがとうございます。エンシエント様あ。ナインズ様あ」

「それではナザリックまで転移門を開いてやろう。その男を氷結牢獄に閉じ込めてくれるか」

ナインズはそう言いながら転移門を開くと、ふとアントマが別の方向を気にしているのが目についた。

「どうした？ エントマ」

「はい。あそこにお肉が落ちてるんでえ、勿体無いかなあつとお」

視線の先には確かに肉が落ちていた。エンシエントが首を刎ねて慈悲を与えた男の死体があった。

「ああ、確かに勿体ないな。食べるか？ エントマ？」

「いいえ。今はあお腹いっぱいなのでえ。恐怖公のお土産にいいかなあつと思いましたがあ」

エンシエントはアントマの頭を撫でてやると、ガントレット越しにも、甲殻特有の固

くてすべすべした感触が帰ってきた。

「エントマは優しいな。中に入れてやるから、恐怖公に差し入れてやるといい」

「わあいですわあ。恐怖公もきつと感謝いたしますう。ありがとうございますう。エンシエント様あ」

エンシエントは無造作に近くに落ちていた男の胴体と首を掴み上げると、開いている転移門の中へと放り込む。

「それじゃ、また後で屋敷からナザリックに行くんで、それまでおつかれっしたー！」

「はい。乙です！」

二人は陰惨な現場とは程遠く軽い挨拶だけをすると、日光が完全に地に没した街を別れて帰る。

転移門が消えて、紅い戦士も消えた高級街の路地は、今度こそ完全に静寂を取り戻した。

微かな血の匂いと汚物の残り香だけを残して、王都をネグラとする薄汚い八本の腕を持つ蜘蛛は、足を一本もぎ取られてしまった。

それをまだ、蜘蛛自身も気付いてはいない。

三十三話。夜更けの蝙蝠と朝露の蜘蛛

屋敷に戻ると、セバスとユリ、ルプーに出迎えられた。

「おかえりなさいませ」

「ああ、ただいま。ユリ・アルファ前へ」

「はい」

三人並んでいる中からユリが一步前に進み出てきた。

インフイニティ・ハヴアサツク

無限背負い袋から買った教科書と図鑑一式を差し出すと、頭を下げながら両手で恭しく受け取る。

「約束していた教科書だ。司書に模写させてから使うといい。カルネ村はどうだ？」

「は……はい。変わりなく。エンリさんもネムさんも元気にしております」

報告を終えると、頂いた教科書を豊かな胸に抱きしめながら一步下がった。

エンシエントはそんなユリにそうかとだけ返事をする、セバスを向いた。

「帝国はどうだ？」

「はっ！ 王国と比べたら住む者たちは活気があり、暮らしやすそうにしております」

「ほう。やはりあらかじめ聞いていたとおり、帝国のほうが優秀か？」

「はい。こう言つてはなんですが、この国に比べれば雲泥の差かと……。道はきちんと舗装され、人が歩く道と馬車道が区切られておりました」

セバスは聞かれた事が嬉しそうに答える。

「ふつ、そんな帝国に今まで持ち堪えてた王国が優秀なのか。帝国もこの国が腐り落ちるのを待っているのか？」

「どうやら、今代の皇帝が特別優秀なようで、能力主義を標榜し、平民ですら有能な者は取り立てているようでございます。帝位継承者を次々と殺し、邪魔な貴族を処刑した所から巷では、不敬にも『鮮血帝』と呼ばれているそうです」

「ほほう。鮮血帝か！ 一度会いたいな。鮮血同士で仲良くなれるかもしれない」

「失礼ながら……：エンシエント様と同じ鮮血を冠するとは不敬であると思います！ 殺すべきです！」

「ルプー。人間種の些事に心を乱すな。そんな事したらまるで、俺の心が狭いみたいに感じられるだろう？ たかが人間の皇帝如きに怒りを向ける価値もない」

「そうですけれども……」

可愛い奴だとエンシエントは、怒りに顔を歪ませるルプーの頭を撫でてやる。

そんな主従をユリは羨ましそうに見つめて、セバスは微笑ましいものを見たと目を細めた。

「いずれ機会があれば帝国にも行ってみたいな。報告は以上か？」

「帝国の内情や街の様子は詳細を纏めて、アルベド様に提出しております」

「わかった。戻ったら目を通そう。それと助けた娘達は？」

エンシエントはふと気になったことを聞くと、ユリが答えた。

「娘達は体を清めて、ベッドに休ませておりましたが、目が覚めるなり恐慌状態に陥りまして魔法で再び眠らせております。回復したら村への事ですが、どこまで回復してからに致しましょうか？」

「恐慌状態……恐らくPTSDだとかトラウマとか言われる状態か……。そんな状態で村へ入れた所で逆に村人に悪影響があるかもしれない……。よし、しばらくこの屋敷で静養させよう。介抱にはドツペルではなく一般メイドを充てる。後でナインズさんに記憶を消せるかを試してもらおう」

「はっ！ エンシエント様の慈悲深さに感動を禁じえません」

「報告は以上か？」

エンシエントはとりあえずは聞きたいこと全てを聞き終わったので、他に言いたい事がないかを確認すると、セバスが代表して以上でございませと答えてきた。

「俺は一度ナザリックに戻るが、一緒に戻るか？」

「いえ、私共は助けた女性の介護と、教育の続きをしたいと思えます」

「私もまだあのユリドツペルは相應しいと思えませんので、教育を続けたいと思います」
セバスは胸に手を当てて、軽く一礼して固辞する。ユリもまだ？育したりないのか眼鏡の端を持ち上げて答える。その手には既に指示棒が握られていた。

「あー！　じゃ……じゃ私はエンシエント様のお側に……」

「ルプスレギナ・ベータ……貴女も残るのよ。今日一日の貴方の態度を見る限り、少し弛んでるように見えます。たとえ貴女がエンシエント様が作られた存在で、赦されているとしても、妹達の前であの態度は何ですかっ！　貴女も再教育です！」

「え……えっ？　ユリ姉さん何言ってるっすか？　冗談っすよね。はっ、ははは、笑えないのですけれども？」

「冗談ではありませんからね。エンシエント様もよろしいでしょうか？」

「あ、はい……お願いします」

エンシエントは知っている。この迫力を出す女性に逆らってはいけないと、ぶくぶく茶釜とやまいこでDNAに染み付けられている。

思わず敬語で答えると、エンシエントはそそくさとミラー・オウ・ゲート転移門の鏡が設置されている奥の部屋へと姿を消した。

後ろ手に閉めた部屋の中から届いた愛しい我が子の「くうううーん！」という悲哀が籠もった声に両手を合わせて成仏を祈ると、さっさと鏡に潜って、ナザリックの自

室へと帰還を果たしたのであった。

王都の高級街でもその屋敷は格が違っている。

有力貴族が軒を連ねる中でも、そんな貴族の別邸に劣らぬ程の屋敷構えをしていた。それだけならば何らおかしい事はない。有力貴族が所有しているならばの話である。その屋敷は貴族でもない個人の所有している屋敷だ。

麻薬御殿。公然の秘密だがこの屋敷の持ち主は王都を裏から牛耳る八本指の一本。麻薬部門の女主人の屋敷であった。

貴族でも好んで近寄らないような危険な屋敷に一人の使いが訪れたのは夜明け前の事だった。

「なんだい……全く、こんな朝っぱらから……美容の大敵だつてのに！　また、村でも焼かれたつてんじゃないだろうね。くそ、蒼の奴らめ」

朝も日が昇る前に起こされて、気怠げに二階の自室から降りてくる女性がいた。

歳はそれなりにいっているのだろう。やくすんだ色をした金髪を解れさせながら、退廃的な雰囲気醸しつつ階段を降りる。

起きたてだというのに、紫のアイシャドーとピンク色をした口紅を忘れない辺り、元娼婦上がりは未だ現役である。

「いえ……。それがどうやら六腕のゼロさんからの使いだそうで……。緊急だつてもんですから……」

「ゼロから？　またあの暴力バカが何か要求してきたんじやなけりやいいけどねえ」

屋敷の護衛で雇われている男は、年を取つてなお増したヒルマの色気に生唾を飲み込みながら、一枚の封筒を差し出した。

そうして封筒を開けて中身を見た瞬間に、ヒルマのその形の良い眉は顰められた。

「ふう……まったく。直ぐに出掛けるわ。護衛する人間を集められるだけ集めなさいな。警戒は最大だよ！　さっさとしな！」

先程までの気怠げな色を匂わせた女の顔ではなく、麻薬部門の主人としての顔に変わっているのを見て、護衛の男は顔色を変えた。

色だけで麻薬なんて危ない橋を渡ってきたわけではない。色事だけではなく暴力の匂いを漂わせる剣呑さがそこにはあった。

封筒には手紙も何も入っていない。空の封筒だ。だからこそ問題なのだ。

メッセージは中ではなく外にあった。

封筒に押された裏組織『八本指』のマーク、その指の一本が鋭いもので削り取られて

いた。

即ち、一部門が襲撃を受けて消滅したことを指す。

それから三十分もしない内に八本指が集まる会議場に各部門の長が集まっていた。

その数は七人、八人には一人足りない。

奴隷部門、黄金の姫と名高いラナー王女が、奴隷禁止政策を献策して、王が承諾して施策したために斜陽になりつつあった部門だ。

長の名前はコツコドルという。ヒルマは余りいい印象は持っていない。

女を売って春をひさいでいたヒルマとしては、そっちの客商売は非難をするつもりも、蔑むつもりもありはしない。

だが、コツコドルが好んで女を紹介していた客層が、暴力で女を痛めつける事が大好きなクズ揃いだ。

金のためなら女を廃人にしてもいいと思っているヒルマからしても、ゲス野郎と内心罵っていた。

そのコツコドルが長を務める奴隷部門が潰されたようだ。

全員がなぜここに集められたのか既に理解している。

一本だけ削られた指、それが指すのは奴隷部門であつたし、現に今この場には奴隷部門の長であるコツコドールの姿がないのだ。

「集まつて貰つたのは見ての通り、奴隷部門が何者かに襲撃を受けて、コツコドールが姿を消した」

「王国が動いたんじゃないやなくて？ 戦士団とかいう集団を持つてるじゃない」

ヒルマが可能性の一つとして、話に聞く王直属の戦士団を上げてみる。

その言葉に、窃盗部門の痩せぎすな男が、ボソボソとした覇気のない声で答えた。

「それはないな。手際が良すぎる。争つた形跡が驚く程に少ない。少数勢なら判らんが、それでもアダマシクラスの人間でも不可能だ」

窃盗部門の長故に室内を見聞した時の細やかな傷や破損を見て、そう判断を下した。

「噂のイジヤニーヤが関与してる可能性はねえのかあ？」

横合いからその手の裏の血生臭い繋がりを知る暗殺部門の男が口を出す。

その顔は半分以上が焼けてしまつて、ニヤけているようにも見えた。

「そういえば蒼の薔薇にそのイジヤなんてらつて暗殺者がいるんじゃないやなかつたかい？」

ヒルマは聞くとある冒険者から聞いた噂を口にする。

因みにその冒険者の男は既にこの世にいない為に真偽は確かめようがないが。

それに暗殺部門の長がしゃがれた声で否定する。

「ああ、確か双子の暗殺者だ。だが、あの小娘達だけじゃ無理だな。蒼の薔薇が全員でならなんとかなるが、あいつらの腕じゃあれ程痕跡が少なく済むはずがねえ」

腕を組んで話を聞いていた禿げた頭に入れ墨をした男は、鍛え上げられた筋肉の体で腕を組みつつ低い声を上げた。

「俺も見てみたが、言われなきや解らねえ程に血の量も少なく。壁も床も殆ど傷付いてなかった。こんな事は、ウチの六腕が総出でなら可能かもしれないが、奴隷部門の所にはうちの六腕の一人、幻魔のサキユロントが警備に付いていた。奴は強くはねえが幻術の腕ならピカ一だ。しかも臆病だから勝てねえと見たら、逃げに徹するだろう。幻術まで用いて逃げられたら俺ですら骨が折れる。下手な奴に捕まるはずがねえ」

「それでそのサキユロントは？」

「一緒に消えた。知る限り奴隷部門の人間が十数人と客数人。それに女共も消えてやがった」

「ふーん。逃げたんじゃなくて？　あまりにもやばい相手だったからさ」

ヒルマが挑発するように言った言葉に。ゼロと呼ばれる警備部門の長がギロリと睨みつけた。

殺気と呼ばれる物が、吹き上げてヒルマに当てられるが、ヒルマとて暴力と色と機微でのし上がってきた一部門の長である。

震えそうになる腕に爪を立てて、ゼロに流し目を送るように視線で返した。

「ふん！ 気の強い女だ。だが、それはねえ。あいつは消えていたが、あいつの武器は落ちていやがった。柄だけを残して溶けていたがな」

「なんだい？ だったら、犯人の中に魔法詠唱者がいるのは解つたね」
マジックキャスター

「かもしれないが、ミスリルで出来た剣を溶かす事のできる酸アシッド・ジャベリンの槍があればな。あれは魔法じゃねえ。六腕のデイベーノックにも見せたが、ありえねえと断言した」

「だ……だったら、なんだってんだい？」

ヒルマが少し怯えた声を上げた。

「さあな。得体のしれねえ奴等がこの王都に入ってきてやがる事は確かだ。そこでお前たちはこれからどうする？ うちを雇わねえか？」

「おめえさん。そう言つて他人のシノギを奪う心胆じやろうが、そうはいかんわい。わしんとこの賭場は暗殺のに依頼しとるからの！」

賭博部門の初老の男が、どこか抜け目ない顔でゼロを見つめる。

その閉じたように見える目は鋭く、ゼロを見定めていた。

博徒の長は、八本指の中でも人の心理を読む事に長けている。その眼を以てして、ゼロがこれを機に八本指全体を仕切ろうとしているのはミエミエだった。

下手をすればコツコドールの消えた件ですら、ゼロが仕組んだことじゃないかと睨ん

でいる。

「うちもいらん。専門は隠れ逃げることだからな。しばらくの間は地下に潜るとしよう……ヤサを持たぬネズミにしか出来んことだ」

窃盗部門の長は早々に危険を回避することを選ぶ。窃盗というだけあって、所定のアジトを持たないのが利点だ。

「ヒルマ。お前のところは どうする？ ただでさえ……蒼にやられて参つてんだろ？」
「やれやれ、舐められたもんだねえ。けどまあ、あなたの言うとおりさ。ここんところは正直、蒼には参つてた所でねえ。ここいらで守りよりも攻めに転じようか考えてたところさ。あんたはどうだい？ 報酬は今年の上がりの一割でさ」

「ふんっ！ しみつたれた奴め！ だが、お前に貸しを作るのも悪くはない。それにうちとしてもいつまでも奴等に幅を利かせるのも面白くないからな。乗つてやろう。暗殺のお前もどうだ？」

「構わねえ。イジャニーヤだかなんだか知らんが腕前とやらを見せてもらおうじゃねえかあ」

そこから場所をヒルマの屋敷へと変えると、暗殺部門の長と警備部門の長、そして麻薬部門の長は対蒼の薔薇に際して、同盟と襲撃の話し合いをしたのであった。

三十四話。蒼の薔薇の計略

助けた女の一人に、ナインズは記憶操作・コントロール・アムネジアを掛けてみたがMP消費の激しさに断念した。

近記憶の改竄かいざんほど、MPの消費は少なく。昔の記憶や強い記憶ほど消費が激しい事がわかった。

人間本来が持つ、精神抵抗マインド・レジストが強く働くのだとか。

今の所は下位精神レッサ・マインド・プロテクション防御のマジックアイテムを使用して精神の均衡を保っている状態だ。

本来は魔法抵抗を高めるという効果だが、PTSDにも効果があるのは新発見である。

一人を除き、助けた四人は帝国へと連れて行かせ、リハビリに帝国で店舗の売り子をやらせるつもりだ。

そこでマジックアイテムの補助なく生活が可能になってから村に移住するか。そのまま帝国で売り子をするかを選ばせる。

問題は残った一人にあった。

エンシエントは冒険者組合に出かける準備をしながら、傍に控えるセバスに聞いてみた。

「あの娘はまだ目覚めんか？」

最初に助けた女はあれから一度も目を覚ます事がなかった。

何らかの障害かこの世界特有の何かかと思つて、ナザリツクのペストーニヤも呼んでみた。

「はい。ペストーニヤにも見せてみましたが、体は健康であると、あとは本人の生きる気力次第だとのことですよ」

肉体は健康に戻す事は出来ても、魂が死んでしまつて居るのだ。

アンデッド
リビング・デッド
死人ではなく生きた死人といったところである。

「やれやれ、せつかく助けてやったのに生きる氣力を失うとはな。人間とは難儀なものだ。出来るだけ面倒を見てやれ。もしもそれでも死ぬならば、それまでの者であつたということだ」

「はい」

（所謂、廃人つてやつだな。命が尽きるより先に心が死ぬとは憐れだが、こればかりは魔法でもどうしようもない）

一抹の同情は無くはない。エンシエントは人が必死に生きる事を応援する気はあつても、生きる事を諦めた人間まで救う気はなかった。

死にたければ死ねばいい。生きたければ足掻け、少しでも力を貸してやるぐらいの気持ちでいる。

カルネ村の時もそうだった。もしも、仇を討つこともできないなら、躊躇いなく見捨てて実験に使っていたかもしれない。

「俺は少し冒険者組合に顔を出してくる。ルプーはどこだ？」

「はい。玄関ホールにて待っているかと存じます」

エンシエントは短く、そうかとだけ答えて玄関ホールへと向かう。そこにはルプーが直立不動で待っていた。

「お待ちしておりました。エンシエント様。冒険者組合に行く準備はできております！」

静かに慈母のような優しい笑みを浮かべる姿は、いつもの快活さは鳴りを潜めて、シスターの様なメイド服と相まって、敬虔なクレリックにも見える。

花が咲き誇る中で子供達と戯れでもしたら、聖女にも見えるだろう。

ユリの教育の賜物か。いたずら者の駄犬が血統書付きの高級犬に様変わりだ。

だから、エンシエントは成長した愛しい我が子にこう言つてあげるのだ。

「誰だ、おまえ？」

楚々としたルプーの努力は飼い主の容赦ない一言によって白紙に戻されたのであった。

「酷いです！　酷いですよ！　私がユリ姉様の体ば……調きよ……教育指導に耐えて頑張ったというのにあんまりです！」

「それは日頃の行いが悪いな。つか、お前はお前で俺の前では砕けた態度を取つてもいいが、空気読めつったろ？」

「くううん。それは確かに悪かったすけれども……」

「まあ、俺としては気負われた態度よりも、お前ぐらいがちょうどいいんだがな」
拗ねるルプーの態度に、頭を撫でてやりながら、冒険者組合へと向かう。

今日はルプーへのご褒美として王都の外へと連れ出すつもりだ。

一瞬昨日の予定の続き、蒼の薔薇に会いにゆこうかとも考えたのだが、向こうとて冒険者ならば夜ならともかく、昼ならば依頼を受けて留守にしているだろうと考えてい

た。

組合に入ると人々の視線が集中して、直後に受付嬢がこちらへと走り寄ってくる。

「エンシエントさんですよね？」

「ああ、依頼を受けに来たんだが、どうかしたのか？」

聞かれた事に答えると、受付嬢は露骨に安堵の表情を浮かべた。

「宿を引き払って場所を変えたなら教えておいてくださいよお。今朝、宿にお話に行ったら既に引き払ったって言われて大慌てだったんですからっ！」

「すまん。昨日、腰を落ち着ける為に屋敷を借り上げてな。今日はその報告にも来たのだが、入れ違いになってしまったようだ」

「い、いえ、その……そういう事なら致し方ないかと……こちらこそ申し訳ございません……」

「ところで、何か話があるんじゃないか？」

「そうでしたっ！ 組合長がお呼びなんです！」

解ったとエンシエントは軽く手を振ってから、勝手知ったるカウンターの奥へと進んでゆく。

室内からは組合長だけではない複数の気配が感じられた。

ノックをしようかと思つた瞬間には、中から声が掛けられた。

「開いてるよ。遠慮せずに入ってきたな」

ドアの向こうでいたはずらっぽく笑っている女性の姿が幻視できるようだ。

その声に軽く肩を竦めて、遠慮なくドアノブを回してドアを引いた。

中には案の定、組合長のアレーナが執務机に肘を突いて、その手の甲に顎を乗せてニヤニヤとイヤらしい笑みを浮かべていた。

組合長室にあった複数の気配の主も解った。

まず目に飛び込んできたのは筋肉に覆われた巨体をプレートメールに詰め込んだガラーランだ。

そして、一昨日の夜に出会ったイビルアイという仮面を付けた人物と、ティナというルプーに懐いていた少女、一見ではティナそっくりの少女が例の双子だろう。

すると、最後の一人にエンシエントは向き直った。

「初めまして、貴女が蒼の薔薇のリーダー。ラキユースさんでよろしいかな？ そちらのガラーランさんの世話になった。エンシエントという。こっちは仲間のルプーだ」

「初めまして、噂はかねがねガラーランから聞いておりますわ。私は蒼の薔薇のリーダーを務めます。ラキユース・アルベイン・デイル・アインドラ。長つたらしいからラキユースで構わないわ。貴族に籍はあっても、笠に着るつもりはないの」

「ああ、よろしく。ラキユースさん。ガラーランさんとイビルアイさん。それとティナ

さんだったな。先日は去り際の態度が悪くて済まなかった」

ラクユースからガガーランへと向き直ると、軽く頭を下げつつ、そう口にする。後ろでルプーが身動きする気配を感じたが後ろ手に抑えろと指示した。

「別にいいってことよ。なんか事情があつたんだろ？ 別にこつちじゃ気にしちやいねえよ。なあ？」

ガガーランは手を振って、気にするなと気持ちのいい笑みを向けてくる。そして、脇にいるイビルアイへと視線を向けると、ローブ姿の小柄な人物は微かに頷いて老婆にも少女にも聞こえる声で答えた。

「ああ、別にこつちは気にしてはいない。むしろ、うちのテイナのせいで気を悪くしたんじゃないかと思ったほどだ」

「…………イビルアイ？ それはどういう事？ 私は聞いていないんだけど…………」
「ベ…………別に鬼ボスは知る必要はない。何も問題は無い！」

エンシエントはその蒼の薔薇の様子を見てあいも変わらず仲の良い事だと微笑んだ。そんな、主の様子をあの日 of の事を思い出して、ルプーは心配そうに見つめる。

その視線に気付いたエンシエントはルプーの頭に手を置いた。

羨ましくはある。妬ましくもある。だが、希望が見えた今となつては些細なものだ。

だが、和やかな空気は手を打ち鳴らす乾いた音で霧散させられた。

「はいはい。じゃれ合いは他所でやっつくれ！ エンシエント。あんたに指名合同依頼だ」

「指名合同依頼？ 指名依頼はわかるが、合同依頼ってのがわからんのだが？」

「まあ、指名合同依頼ってのは名の通り、合同で指名依頼を果たしてもらおうって事さね」

アレーナは軽く肩を竦めながら、視線だけで蒼の薔薇を指す。

「アレーナさんここからは私が……。このリ・エステイーズ王国の北東に二日程も行ったところでギガントバジリスクを見たという報告が上がったの」

「ギガントバジリスク？ 貴方達アダマンタイト級の冒険者ならば狩れるのでは？」

ふと、ガガーランから聞いた世間話で何度か討伐した事を聞いたはずだ。

恐らくは合同ということは、この青の薔薇の面々ということだろう。

「そうなんだけど……うちは今、別の依頼を受けていて……蒼の薔薇は私とガガーランしか身動きが取れないのよ」

ラクユースの言葉に嘘は感じられなかった。だが、何かを隠している感じがする。

「二つ質問をいいか？ 一つ、俺とルプーで受けることは可能か？ 二つ拒否する権利はあるのか？」

エンシエントはどうかしらと目で問い掛けるラクユースから視線を切って、組合長の

アレーナを向いた。

そして指を一本ずつ立てて質問する。

「前者は不可能と言わざるを得ない。これはアタシがあんたの腕を信用するしないではなく、実績が無いからさね。後者は拒否する権利はある。いくらあんた宛の指名依頼とはいえ、今のミスリルの冒険者ならばあり得ない依頼だ。本来アダマンタイト級の依頼だからね」

アレーナは小さく息を吐きつつ答える。

その言葉を聞いて、エンシエントはラキユースへと向き直った。

「ラキユースさんにも質問いいか？」

「ええ、もちろんよ」

ラキユースに対しても二本の指を立てて質問をする。

「一つ、これは本来は蒼の薔薇のみで請け負う依頼か？ 二つ、これは何らかの試験なのか？」

エンシエントの言葉にガガーランとラキユースの表情が引き變った。

(やはりな……ならば、実質拒否権はないと見ていい)

「そ……そうね。本来ならばうちに向けられた依頼よ。それでも今は手が足りないのは本当の事よ。貴方への指名依頼は蒼の薔薇からの依頼になるわ。それと試験というの

も、その通りよ。ガガーランから貴方は既にアダマンタイト級以上の腕だと聞いているわ。だから、相応しいかどうかを見極めさせてもらいたいの」

少し顔を赤くしながらもちらりとガガーランに視線を向けて早口にまくしたてる。

その態度からも、元々嘘がつけない人間だとわかる。

「おいおい。そんな回りくどくいかなくてもよ。姫さんからは八本指の件を話して……」

「ガガーラン！ 駄目よ！ それ以上は！ 見極めてからでないで危険に晒せないのっ！」

少し頬を赤くしていたラキユースが、ガガーランの一言で、顔を少し青褪めさせて鋭く止めた。

（っ！ ……くそっ！ 先手先手を打ってくるか！）

「了解した。その合同指名依頼を受けよう。そのうえで俺を見極めるがいい」

エンシエントの言葉に、イビルアイはピクリと反応を返し、ラキユースとガガーランは露骨にホツとした表情を浮かべた。

「依頼料の件は組合長を信頼しよう。言葉からして急ぐのだろうか？」

「ええ、ギガントバジリスクが発見された場所はここからは二日は掛かるの。出来れば被害が出る前に討伐したいわ」

「そうだろうな。なら、一度戻って急いで準備をしよう。一時間後に組合で待ち合わせ
でいいか?」

「ええ! もちろんよ! お礼を言うわ」

ラキユースから掛けられた謝礼の声に、軽く手を上げるだけの返答を返すと、さつさと踵を返して組合長室から退出して、屋敷へと一度戻るために、急ぎ足で歩く。

「くそっ! 俺のせいだ!」

「エンシエント様……どうかなさったのですか?」

心配そうに後ろをついてきたルプーは、恐る恐る声を掛けた。

エンシエントは近くの路地に身を滑らせると、周囲の気配を探る。

辺りにはこちらを伺う気配は感じない。

それでも万が一を考えて、ルプーに指示して周囲に覗き見防止と盗聴防止の魔法を張らせた。

「恐らくは、俺達は既にマークされている」

「えっ!?! まさかっ!」

「そのまさかだ……。この国でも二組しかいないアダマントタイト級の冒険者から指名依

頼が来たのはなぜだと思う？」

「えっと、エンシエント様のお力を借りたくてでは無いのでしょうか？」

エンシエントはゆっくりと首を振って、ルプーの言葉を否定する。

「俺はこの街に来てから一度も依頼を受けていないんだぞ？ そんな人間の腕前などが借りたいと思う？ たとえエ・ランテルの功績があつたとしても、所詮は伝聞だ。恐らくは昨夜の八本指とかいう組織の件で何かを掴まれている可能性がある……」

「まさかっ!？」

「本当だ。その手段がどのようなものか解らないが、俺達の関与が疑われた。だが、確信を得てはいないので……故に無意識で見極めると言つたのだ」

それならば全ての辻褄が合うのだ。

この世界では強いと言つてもあの程度の雑魚に、最高位の冒険者が人の助けを必要とするはずがない。

それにあの名乗り方もそうだ。ラキユース・アルベイン・デイル・アインドラ……本人も貴族である事を敢えて匂わせている。

つまりはあの冒険者達を消したとしても、既に情報は冒険者組合だけでなく、この国の中枢、貴族に掴まれていることになる。逆に奴らを消せば、それはエンシエントが犯人だと示している。

「奴らを消しますか？」

「それをすれば、俺達だけでなく弟子として知られているモモンにまで累が及ぶ。俺達はこの国……否、今は隠れたプレイヤーからも目を付けられると言うことだ」

挙句に、あの嘘がつけなような武人建御雷に似ているガガーランが漏らした一言。

姫さんという単語と、八本指という組織名が的確に出てきたこと。それを慌ててリィダーが止めたという事実が物語っている。

エンシエントは必死に頭を働かせる。

こちらもなんとか八本指と呼ばれる裏組織と蒼の薔薇の関係性。敵対し合っているのか。それとも仲間なのか？

蒼の薔薇の背後にいる『姫』と呼ばれる。より上位の存在の確認をせねばならない。「先手を取られたが、これからだ。何とか挽回するぞ。八本指という組織と蒼の薔薇。そして『姫』とやらを匂わせた事を逆手に取ってやろう」

「エンシエント様……」

路地裏の暗がりでは不敵に微笑む男と、それをうっとり見つめる従者の姿があった。

エンシエントが立ち去った組合長室に、ラキユースの色が付きそうな吐息が漏れる。
イビルアイは肩を竦めていた。

「まさか……あんな綺麗な人が、この世に本当にいるなんてね。ガガーランが恋をするのもわかるわ……。それでも貴方に相応しいかしらね？」

「そんなんじやねえって言ってるんだろ！」

「隠すな。別に照れなくてもいいだろう？」

「安心していい。私達の趣味じゃないからガガーランを応援してやる」

「そして、傷心したルプーは私が頂く！」

ラキユースは優しく微笑みながら、ガガーランは見つめる。

イビルアイは珍しく弄られるままのガガーランの肩にもたれ詭からかうように声を弾ませている。

ティアと呼ばれる少女は、興味が無さそうに足をブラブラとさせて、ティナはさつきまでこの部屋に居たルプーを思い出して、何故か手をわきわきと動かしていた。

「もしも、腕が確かならラナーの力になってくれるかも知らないね。もちろん。貴方の恋の邪魔はするつもりはないわよ？」

「おまえらなあ——！」

既に組合から出て言ったエンシエントの耳には、ガガーランの怒号は届くことはな

かった。

それが幸運だったのか不幸だったのかは解らない。

三十五話。笑顔の仮面

エンシエント達四人は、組合で合流すると王都を出立した。

ギガントバジリスクが発見されたのは、王都から北東にあるリ・ボウロロープ領との境目だという。

街道沿いのモンスターを狩っていた冒険者グループが発見したそうだ。

命からがら逃げ帰った者達が組合に報告して、今回の指名依頼へと繋がった。

因みに依頼者は不在……否、この場合は国からの報酬のみとなるが、蒼の薔薇はそういう依頼を日頃から受けているそうだ。

その報酬額はアダマンタイトが普通に受ける依頼の半分程度でしかない。

発見されたという場所までの道程を、四人は笑顔を見せながら和やかな雰囲気ですんだ。

「ゴブリンやオーガなどといった物は、他の冒険者の為に狩ってませんが、流石にギガントバジリスクはオリハルコンかアダマンタイトしか倒せませんからね」

「高貴なる者の義務ノブレス・オブリージュというものかな？」

「というよりも、出来るからやる。出来る者がやるかといったところでしょうか？」

「力ある奴は弱い奴を守る。守られた奴も更に弱い奴を守る。そうすることであ世の中が良くなりやいいって事だ。結構なことじゃねえか！ なあ？」

街道にガガーランの阿々大笑が響く。

その姿を、ラキユースが優しく微笑み。ルプーは笑顔を浮かべつつ何処か胡乱げな表情を浮かべる。

「誰かが困っていれば助けるのは当たり前……か……」

進んで英雄のように行動する女性達を見ると、昔のたっち・みーを思い出す。

彼は英雄の体現者だった。弱きを助け強きをくじく。

「いい言葉ですね。どなたの言葉なんですか？」

「ああ、当たり前前の言葉だが、その当たり前前をきちんと口にできる人間、更には実践できる奴は少ねえ」

「俺が強く憧れて乗り越えようとした。俺の友……真の英雄の言葉ですよ……。彼はその言葉を常に口にしてその通りに行動してきた」

「いい……素晴らしいお友達ですね」

エンシエントの言葉に、ルプーは目をキラキラと輝かせて聞いている。至高の四十一人の話には、守護者は元よりナザリックの者は常に敬愛と敬意を持って拝聴する。

「だが……、今の彼がこの国を見た時に……いや、この世界を見たらどう思うだろうと考

えるとね」

「そりやおめえ……」

ガガーランは何かを口にしようとして言葉に出来ずに口籠る。

「この国の貴族派閥の事を仰ってるのかしら？」

「貴族派閥だとかはよくわからんが、王の無能さはよくわかる」

「それは……っ!？」

る

ガガーランは閉口して、ラキユースは口を抑えて周囲に視線を走らせる。

この国の実情を見ればよくわかる。優しい王なのだろう。

だが、何も決められぬ優しい王なら、圧政を布き民衆に革命を起こさせる程の暴君や暗君の方がマシだと言える。

短く見れば民衆にとっては災難だが、長い目で見ると犠牲は少なくすむ。

優しい王は中途半端に民を苦しめて、それでも憎めず真綿で首を絞めるように国を殺す。

「そのような言葉は謹んだ方がよろしいかと思えますわ。何処で誰に聞かれているのか解りませんもの……」

「いや、すまない……口が過ぎたな……」

「言いてえ事はなんとなくなるぜ？　だけどよお。一介の冒険者でしかねえ俺達にや何も出来ねえ」

「せめて……ラナーにもう少しの力があれば……いいえ、その力に私達が成れば良いのだけれども……」

ガガーランは半分諦めを、ラキュースは嘆きながら言葉を口にする。

その中から飛び出してきた言葉をエンシエントは聞き逃さなかった。

「ラナーさんという方はどのような方なのですか？」

「ああ、確かエンシエントさんとルプーさんは遠い異国から来られたのでしたね。ラナーとは恐れ多くも私が友人と呼ばせて頂いているラナー・テイエール・シャルドロン・ライル・ヴァイセルフ様。このリ・エステーゼ王国の第三王女であらせられる方なの……」

「その方も、貴女達と同じ考えを持たれる御方だと言うことですか？」

エンシエントは微かに首を傾げて問い掛け、それに対して彼女らは自分の事のように嬉しそうに語る。

「おおよ！　何度か会った事はあるが、頭も氣立てもいい。そして誰よりもこの国の事を憂いてる！」

「そうね。私も彼女の頭の良さにはいつも驚かされるもの……」

やれ一瞬で暗号を解いただとか。いくつかの献策をして、冒険者のモンスター討伐に国から報奨を出すように進言したのもラナー王女だとか。

エンシエントは内心で深く溜め息をついた。

予想以上に姫と呼ばれる存在が大きかった。

ようは組合で出た『姫』なる存在は言葉通りのお姫様な訳だ。

これでは迂闊に手が出せはしない。善政を布こうとする見目麗しい妙齡の姫を消す大義名分が思いつかない。

客観的に見て、どのような理由があろうとも害せば、他者からの視線は厳しいものになるだろう。それはいずれ、こちらへと呼ぶ仲間の視線も含めてである。

それからは他愛のない話に興じる。

従者のクライムという少年や王位継承一位のバカブロとかいう酷い名前の王子は、名前の通りに馬鹿だとか。第二王位継承者のザナックの方がまだとか。今のエンシエントにはどうでもいいが一応は心に留めておく。

だが、一つだけ心に引つ掛かるものを感じて、エンシエントは気になった事を聞いてみる。

「一つ聞きたいのだが、この国では女性もそれなりに政治に関与することが出来るのか？」

そうなのだ。話に聞いていれば頭が切れることはよくわかる。だからこそ、逆にわからない事も出てきたのだ。

「いいえ。この国は古い考えが多くて女性は常に下に見られているの。私もそんな貴族社会が窮屈で嫌になって飛び出したのよ。ラナーもいつも酷く言われているの……」

「なるほどな……」

確かに異常に頭が良い。いや、良すぎる。そして行動力が異常だ。

エンシエントは話の筋からクライムという少年に対して恋心を持っている事は確かなのだろうと思う。

そしてこの世界の貴族王族にとっては女とは結婚外交の道具でしかない。いや、求められていない。

(そんな女が嫁ぐ先はどこだ?)

必死に今まで上がってきた報告書の各国情勢を思い出す。

竜王国は女王が統治していて、未婚で子供も居ない。

聖王国もデミウルゴスの報告では女王統治で未婚だ。

しかも、この二国は未だ獣人や亜人と戦争中で国体すら拙い。

法国は宗教国家らしいから省くとして、評議国は不明な点が多い。亜人が多いという事から、比較的温厚な亜人達の議会政治と思われる。

ここも婚姻外交には使えない。残るは男子が適齡で未婚、そして絶対君主制の国といえば……

そこまで考えて愕然とする。

残つたのは帝国、現在進行形で戦争している国だ。

そこに姫を出すのは属国として決めた時のみ。では国内ではどうか？

頭が良く民思いで政治に口を出す上位者の姫……。王派閥と貴族派閥があるらしいが、両方とも嫁には決して貰えないだろう。

王派閥としては主君の姫君であり、その姫の発言は大きな力を持つことになる。

逆に貴族派閥は無下に扱う事も出来ずに、結婚した限りは貴族派に居続ける事も、王派閥に入る事も出来まい。

つまり、ラナーは誰とも結婚せずに済むのだ。

この考えに至ったときに、エンシエントはゾツとした。

そして自慢するように、ラキユースが口にしたラナーの素晴らしい献策の数々を考えると矛盾しか生まれない。

道路の整備に始まり、未亡人達の働き方改革。

孤兒院の設立から冒険者の報奨に至るまで……

一つ一つは確かに素晴らしい施政ではある。平時の時ならばさぞ、国を繁栄に導くも

のであるだろう。

民草の視線から見れば聖女に見える。だが、逆に貴族からの目線で見ればわかる。

こんな事をこんな時^{戦時中}に口にする女権力者は、貴族にはどれほどに煙たく感じる存在か？

「なるほど……。素晴らしい女性だな」

エンシエントの言葉に、嬉しそうに微笑むラキユースとガガーランを見て、エンシエントも微笑む。

とても人間らしい素晴らしい人間だと。

火を囲んで野営を行う。

流石はベテランのアダマンタイト冒険者だけあって、その手際は目を瞞るものがある。

対して、エンシエントはどうかというと、何も出来ない。何もすることがないということではない。

文字通り何も出来ないのだ。

リアルの世界ではアークロージー間は興行特権という物で移動制限は緩く、旅というものには多少慣れてはいるが、ここまで原始的なものは経験も知識としてもない。

何をどうしていいのかがまずわからない。

なおかつ、この世界でもナザリックを出たのですらつい先日で、直ぐに街の宿に泊まった。

野営など人生初の事である。

エンシエントは無駄にワクワクしていたが、現実には申し訳無さしか感じない。

「すまないな。この手の経験が殆どない……。本来ならば冒険者として後輩である俺が準備をせねばならないのだろう?」

「いや……。いいって気にすんなよ! 人間誰しも得手不得手つてもんがあるしな?」

「そうよ。私も慣れるまでは散々ガガーランやリグリットや叔父さんに迷惑を掛けたものだわ」

申し訳無さそうなエンシエントに、ガガーランは手を振って歯を見せて笑い、ラキユースは昔の自分を見ているように懐かしげに微笑む。

流星はアダマンタイトとして人間が出来ている。

「でもよ。そのナインズって人と旅をしてきたんだろ? その間は どうして たんだ?」

「ああ、いや……。それはな。実はその方は力のある魔法詠唱者だから、野営なんてしなく

ても、魔法で大概の事が出来てしまうんだ」

「うへえ、マジかよ！ そりやすげえ！」

「本当ね。それでも食事はどうしていたの？ 食事は流石に魔法ではどうしようもないと思うのだけれど？」

ラキュースは尤もな疑問を口にする。食事を必要としないナインズとエンシエントは言い訳を用意しておいた。

エンシエントはガントレットを外して指輪の嵌った手を見せる。

「この中指に嵌っている魔法の指輪は維持する指輪リシク・オプ・サス・メナスと言って、体に馴染ませるのに時間
は掛かるが、一度着用すると、飲食睡眠が不要になり、肉体疲労がなくなるんだ」

「なんだそりゃあ!？」

「そんな指輪が存在しているなんて……国宝級……いいえ、国にだって存在しないわ！」

焚き火を向こう側から覗き込むように、エンシエントの指に嵌った指輪を凝視する。

嘘だが嘘ではない。ナインズは元よりエンシエントもアンデッドで、飲食睡眠は疎か
疲労すら存在しない。

そんな存在は隠していても何れは不審に思われるだけだ。

モモンとして行動している時はナインズは人化している為に飲食も睡眠もできるが、
エンシエントは飲み物ともかく、食べるといふ行為は拷問に近いゆえに、このような

理由付けをしておいたのだ。

別にこの指輪でなくても良いのだが、この世界にも付与魔法探知ディテクト・エンチャントがある為に、本当にそういう効果の指輪を用意したのだ。

エンシエントは視線を恥ずかしながら、ガントレットを付け直した。

「ほおー。いいもんみせてもらったぜ！ その強さも納得だ」

「ええ。とても凄い効果のものよ。一つだけ言うと、それは人に簡単に見せてはいけないわ。人によっては殺してでも奪いたいと思われるマジックアイテムよ」

ラキユースは少し羨ましそうにながらも注意を促してくる。

「忠告に感謝する。野営を手伝えなかつた詫びとあってなんだが、夜の見張りは任せてもらおう。この指輪で寝る必要も疲れも感じないからな」

「流石にそれはなあ？ ラキユース……」

「ええ、申し訳がないわ」

「気遣いは嬉しいが、逆にこれを着けている間は寝る事ができんだ。だから、暇潰しに見張りは有り難いくらいだ」

指輪を着けた手を持ち上げて肩を竦める。

それに答えるように、ガガーランが後頭を搔いて申し訳なさそうにする。

「そうかあ？ だが、難儀なもんだな。寝れねえつてのもよお？」

「そうね。お言葉に甘えることにしましょう。ガガーラン。その分、私達は明日に控えている戦いを頑張りましょう」

少しだけ火勢が弱まった火に、ラキユースは、薪を放り込んだ。

「そういえば……二人の関係を聞いても？」

エンシエントとルプーの関係はガガーランからは凡そ聞いてはいた。

だが、二人と改めて話してみても、ラキユースは少しだけ違う感じがしたのだ。

二人の間の空気が、恋人同士のような甘いものではなく。男女関係とは違う。そう

……貴族で言う従者と主人の関係のように感じる。

主人からの心は近いが、従者からは遠慮が感じられた。

ラナーとクライムを見ているような気がする。

あの二人よりもこちらの方がルプーが気安い気がしないでもない。

「あー。ガガーランさんには悪いが嘘を吐いていた。ルプーは……俺の従者だ」

「はい。私はエンシエント様の恋人などといった大それた者ではないですわ」

二人はぼかんとエンシエントと真面目な顔になったルプーを見つめる。

「な……なんだって、そんなことを？」

「そ、そうだけ！ それなら最初からそう言ってくれりゃあー！」

「氏素性を怪しまれないためだな。男女二人の冒険者というならば嫉妬は受けるだろう

が不思議には思わないだろう？　だが、主人と従者であると言えばどうだ？」

主人が従者を連れて冒険者をしている。しかも、その二人は先日まで冒険者ではなかったと言えば、人は興味を唆そそられる。

あれはどこかの貴族か？　何者かと衆目を集めるだろう。

「蒼の薔薇のお二人を信用して話したのですから、内密にお願いする」

「あ、ああ。もちろん誰にも言わねえよ」

「私も約束をするわ。それにしても恋人ではなかったのね……」

しみじみとそう呟くと、ラキユースはエンシエントにバレないように、肘でガガーラの脇を突くのだった。

三十六話。美しき夜空と惨劇の村

パチリと薪が火の粉を跳ねさせた。夜の闇を螢に似た光が舞って宙に溶けて消える。地面に置かれた丸太に座り、エンシエントはそれを見つめ続けた。

ルプーは既にマントを下に敷いて横になっている。

エンシエントには考えがあつて、ルプーに寝たふりをさせていた。

空に舞い上がる火の粉を眼で追うと、夜空とそれを彩る星々がある。それは何度も何時間でも見上げ続けても飽きはしない。

仲間達が寝入ってから既に数時間経つが、モンスターの襲撃は疎か何も起きたりしない。

食事の前に暇潰しとエンシエントは言ったが、正確には暇潰しどころか夜を待ち遠しく感じていた。

日が沈みゆく残照が残る空とうつつすらと輪郭を露わにする月、満天の星空と星を侵食するように闇に雲が流れる。

そして夜が明けて光が全てを目覚めさせるような朝日、それら全てが見るたびに顔を変えて見せてくれる。

もしも、エンシエントが人間種で眠る必要があったなら、我が身を恨むであろうと思える光景が眼の前の世界には広がっていた。

「地の人は争い欲望に塗れ醜い……それでも世界は美しい」

エンシエントが昔、ブルー・プラネットから聞いた言葉を口にする、不意に後ろから起き上がる気配が感じられた。

「深い言葉ですね」

それは眠っているふりをしていたラクユースだった。

眠ったふりをしていたのは、エンシエントは解っていた。だからこそ、話し掛け易いように、ルプーに寝たふりをさせているのだ。

「昔、世界の美しさに恋をしていた男が口にした言葉だ」

「貴方もそのお友達も詩人ですね」

のそりと起き上がったラクユースは、伸びをして凝り固まった筋肉を伸ばす。

「眠ったふりをするなら、呼吸に気をつけたほうが良い。人は寝ている時の呼吸のリズムは一定だと思っているが、正確にはそこまで一定じゃない」

エンシエントは視線すら向かせずに、後ろを向いたまま、ラクユースへと忠告してやる。

ラクユースは一瞬だけ体をビクリと固まらせたが、苦笑するとエンシエントが座る丸

太へと、一人分ほどの距離を開けて座った。

「気付いてたんですね。でも、普通そういう指摘はしないものですよ?」

「そうか。次からは黙っておこう。それで話があるから起きてきたんだろ?」

エンシエントは空から一秒足りとも目を離したりしない。

空を見る事は日課だからだ。ナザリックに居た時もエ・ランテルに行った時も、王都に来た時も変わらない。

毎晩、変わらず暇さえあれば夜空を見上げる。

だが、興味を惹かれればそちらへと意識を向けることも吝かではない。

「え、あ。ええ……その、エンシエントさん。貴方は……えつと……どんな女性がタイプですか?」

ラクユースの一言に寝たふりをしているルプーは帽子の中の耳をピクリとさせた。

エンシエントは一瞬、横に座る女が何を言っている理解できずに、夜空から意識を手放していた。

「……はっ? えっ? それはどういう?」

「ああっ! ごめんなさいっ! 私は何を言っているんでしょうか?!」

「いや……それをこちらに聞かれてもな……」

自分が言った言葉に、自分で驚いてラクユースは、宙に飛び出させてしまった言葉を

掻き消そうとするようにバタバタと手を振り回す。

「女性のタイプか。考えたことがない。というよりその手の事に興味はない」

「……で、ですよねえー」

ラクユースは顔を真っ赤にして、深いため息を吐いた。

気がはやり過ぎた結果の言葉とはいえ、その手の事には経験値がゼロのラクユース村人レベルには難易度が高過ぎた。

（何言ってるのよっ!? 私、これじゃまるで私が興味あるみたいじゃない!）

「だが……まあ、強いて挙げるならば、一緒にいて楽しい奴かな?」

「見た目は気にしないと?」

「どんな絶世の美女も、どんな醜女も死んで朽ちりや一緒だろう。ならば、生きてる間にどれだけ面白可笑しいかしかが違いがない。心にもねえ事を口にして人の目を気にするような生き方をしてる奴には興味はない」

本当に興味が無さそうにぶつきらぼうにそう言い放つ。

言葉に嘘はないのだろう。自慢では無いがラクユースとて自分が人よりも容姿が優れていると自覚している。

ラナー王女とは比べられるものではないが、市井において黄金のラナーと蒼の薔薇のラクユースは王国でも二大美女だ。

そのラキユースがすぐ横に座っているというにも関わず、一瞬一瞥足りとも視線も興味も向けない。

エンシエントの目に映るのは一面の星空だけだ。

「達観されてるのですね……それを聞いて安心しました。貴方が人を見た目で判断しないような人で……」

「見た目の綺麗、汚いなんてくだらない。この空に比べれば皆汚くみえる」

「ふふ、あの月より綺麗という美辞を聞いた事はありませんが、空に比べて全て汚いと仰られる方は初めて見ます」

ラキユースは空を見上げて、心底可笑しくすくすくという笑い声を上げた。

その横ではエンシエントは、再び吸い込まれそうなほどに雄大な空だけへと意識を向けるのであった。

夜が明けて再びギガントバジリスクを探して北東へと街道沿いを進む。

そろそろ領境の村が見えてくるはずである。

冒険者組合が発見者の聞き取りを行った地点は既にこの付近のはずだ。

ラキユース達は一度、村に顔を出して話を聞いてから、その村を拠点に周囲一帯を捜索するつもりでいた。

街道から外れてかなり離れたところには森も見えて、森に入つてすぐの所で見たと報告を受けている。

「あの村ですね」

ラキユースが遙か遠くに見える村を指差す。

そこにはそれなりの石壁で覆われている村が見えてきた。

街道沿いということもあるのだろう。村の外壁としては立派なものだ。

森の賢王の縄張りだからといった理由で外壁も備えていない昔のカルネ村とは大違いである。

さらに壁の外には小麦畑が広がっていて、稲穂を垂れた麦が頭を垂れている。

エンシエントはそれを見て、少し違和感を覚えた。

早摘みの麦ならば既に収穫期に入っているはず、収穫前でも村人が大抵は鳥に荒らされぬように畑を巡回して、虫を取ったりしている時間帯である。にもかかわらず誰一人として姿が見えなかった。

「様子がおかしい。誰も畑に出てないんだが？」

「はあ!? 〃〃〃〃から見えてんのかよ!」

ガガーランの素つ頓狂な声上がる。目の上に庇ひさしを作るように手で覆い、目を凝らす
が明確にそこまで見えはしない。

普通の人間なら村の輪郭が朧気ながら見えてくるほど離れた距離でも、エンシエント
の優れた視力ははつきりと見ることが出来る。

「すまんが、先に行く。周囲を警戒しながら来てくれ！」

「あつ、ちよつと……エンシエントさん！」

「おいおい。どうせならみんなで رفتた方が……つて、まじかよ?！」

ラキユースとガガーランが止める間もなく、エンシエントは強く地面を踏みしめる
と、地を蹴つて一足で最高速へと達する。

エンシエントがいた場所には足型の穴が空いていたほどだ。

あつという間に残像だけを残して姿を消した。

「ありやなんなんだ? 英雄クラスつてのはあんなに常識外れたもんなのか?！」

「ガガーランが言つてた。竜人というのもあながち間違つていないのかもしれないわ
ね」

二人は人外地味たエンシエントの動きを見て、呆れたように溜息を吐くと、ようやく
ルプーの姿もないことに気付く。

いつの間にと思つたが、あの主従の事を深く考えるのはやめる事にした。

エンシエントが村に辿り着いた時、村人の姿が見えない理由がわかった。

開け放たれたままの外門と、街道からは見えなかったが、外壁は大きく破られて家が軒並み潰されてしまっている。

生き残りが戦った後か地面に少しだけ毒々しい色の血の跡が有り、その周囲の草花は枯れてしまっている。

そして、村の地面には苦悶の表情を浮かべている趣味の悪い石像の頭や手が転がっている。

「あー、全滅つすねえ」

「だろうな。恐らくは夜の間にも襲われたか？ 一部焼けた家はあつても大半は壊れてるだけだからな」

「そつすねえ。煮炊きしてたら火事になってるつすからね」

村をゆつくりと回る。その足取りには微かな緊張も感じられない。

エンシエントやルプーにとっては、都市一つ滅ぼす魔獣ですら少し大きい蜥蜴でしかない。

「酷いっ！ もう被害が出ていただなんてっ！」

「クソがつ！ 間に合わなかったってのかい！」

外門の方向から遅れてやってきたラキユースとガガーランの声が聞こえてきた。

村の中央、こうなる前は収穫祭やら集会やらを行っていたであろう拓けた広場があった。

本来は井戸を中心に広々とした場所には、家々の瓦礫と元は人であっただろう石像の欠片が散乱していた。

「ここにいたんですね。生き残りはいましたか?！」

「いや……恐らくはみんなこうなっちゃったんだろ？」

ラキユースの問い掛けにエンシエントは、近くに転がっていた石になった足を指差して、そう断言する。

生き残りは探すまでもなくいない。エンシエントの生命センス・ライフ・エッセンスを捉える瞳は村にラキユースとガガーラン、そしてルプーの三人しか生命を感じられない。

「ガガーランが家の瓦礫を見て回ってますけども、望みは薄いようですね。それにしても……」

「どうした?」

ラキユースは周囲を見回しながら首を傾げる。

「血の跡が無さ過ぎるのが気になります」

「血の跡？ ギガントバジリスクは石化の視線があつたはずだが？」

「はい。ですが家の中に居れば視線からは逃れられますから、もしも家に隠れていれば、石化ではなく普通に亡くなられる事になります」

エンシエントはその言葉に改めて潰された家やその周囲を見回しても血痕は見つけられなかった。

壁が破られた家付近からは微かな血臭が鼻に掛かる程度で、そこから以外は臭うことはなかった。

「なるほど……」

「ああ、それに焼けた所が少なすぎる。いくら夜更けや夜明け前でも壁が壊される音でもすりやあ、村人は松明を点ける筈だぜ」

潰れた家々を見回っていたガガーランが、気付いたことを口にしながら戻ってきた。

エンシエントはその目の付け所に、流星はアダマンタイト級のベテラン冒険者だなど改めて考えた。

「それと最悪な事がわかつた。多分だがこのギガントバジリスクは番つてやがる。大きさが違う足跡が二種類ありやがつた。ティアかティナでもいりやもう少し詳しくわかつたんだがなあ」

ラキユースはガガーランから告げられた言葉に絶句した。

魔物の生態は未だによくわかってはいない。特にギガントバジリスクはバジリスク種の上位種故に、さらに情報は少なくなる。

「ここから一番近い街は王都だけでも、来る時に会わなかったから向かったのはリ・ボウロロップ領かしら？」

「もしくは森に帰ったか？ それだったら予定通りなんだが、もうこの村が襲われて番つてるとすりゃ……これだけで済むたあ思えねえ」

「ガガーラン……足跡はどっちに続いているの？」

「んなもん。ティアかティナでも無けりゃわからねえよ。俺だつて一匹じゃないってわかる程度で、番いなのか群れなのかもわからねえ」

ラキユースとガガーランが頭を突き合わせて今後の方針を話し合う中で、エンシエントは足跡を見つめる。

確かに大小二種類の足跡はわかるが、野伏レンジャーではないエンシエントには、大きさ程度しかわからない。

「ここから近いのは王都なのはわかった。次に近いのは何処だ？」

「ん？ 次に近いのはリ・ボウロロップ領の街だ。この街道のずっと先にあるぜ？」

「なら、簡単だ。俺がそつちの街に行こう。蒼の薔薇の二人は王都に帰って、この事を知らせればいい」

「お、おい。そのどっちかとは限らねえんだぞ？　まだこの近くにいるかも知れねえし、森に戻ったのかもしれないえ」

ガガーランはエンシエントの言葉に慌ててそういう。

エンシエントとルプーの身を案じての事だ。少なくとも二匹か。もしくはそれ以上の群れが行動している可能性があるのだ。

もちろん、エンシエントとルプーの強さは信用してはいるが、それでも二体以上だとすると、ラキユースとガガーランの二人でも厳しい事になるのだ。

「いえ、それが最善ね。この村の周囲や森の中にいるのなら、後で狩り出せばいい。今優先すべきはこの事を知らせて防備を固めさせること、そうでしょ？」

「だったら、俺達がボウロロープ領に行つて、エンシエント達に王都へと戻つて貰うつてのは？」

ガガーランの言葉に、エンシエントは首を振りラキユースも表情を翳らせる。

「狩り出すとなると、双子の姉妹の力が必要になるだろう？　それに防備を固めるにしても顔が知られていない俺達よりも、アダマンタイト級冒険者の肩書があった方が、向こうも迅速に行動するはずだ」

「ええ……それに距離的には王都の方が近いわ。被害も考えると速さを求められるのは王都なのよ？」

「けどよおー！」

尚も言い募ろうとするガガーランを、エンシエントは手を上げて止める。

腰のポーチから一つの動物の像を取り出して差し出した。

スタチユー・オブ・アニマル・ウォーホース

「これは動物の像・戦闘馬という。これを使えば軍馬を召喚して騎乗できる。これ
でなるべく早く王都に知らせてくれ。俺達は走ってゆく」

「おい。そんな便利なものがあるなら、お前さんたちが使うべきもんだらう？」

エンシエントは頬を上げるだけの不敵な笑みを浮かべて、足をぱんつと叩いてみせる。

「俺達ならそんなものを使わない方が早く辿り着ける。それに俺達には人には知られたくない取っておきがあるからな」

「わかりました。有り難く使わせていただくわ」

「お、おい」

ラクユースは心配性な仲間へ鋭い視線を投げ掛ける。

「わかるでしょ？ 最善が何かを考えるとこれ以外ないのよ」

「……ちつ、わあつたよ！ でも、エンシエントよお。無茶すんじゃないぞ」

「まあ、それなりにやるつもりだから心配すんな」

それだけを言うのと、さっさと行けとばかりに来た道を指差した。

ラキユースは借りた動物の像・戦闘馬《スタチュー・オブ・アニマル・ウオーホース》を地面に放り投げると、地面が輝き光の中から真つ白な軍馬が姿を現した。

「では、二人共無理はしないでね。また無事に会いましょう」

「ああ、そのマジックアイテムを返して貰わんといけないしな」

ラキユースとエンシエントはお互いに顔を見合わせて笑い合うと、突き出してきたガガーランの拳に拳をぶつけて別れの挨拶をする。

ガキイイイインという効果音が響いて馬に乗り込もうしていたラキユースは慌てて馬から降りて、拳を合わせたガガーランも周囲を見回した。

合体技の二種類目が判明した瞬間であった。

「ああ、悪いっすねえ。武器を落としたみたいっすよ」

「びっくりさせねえでくれよー」

「本当に驚いたわ……では、またね」

ルプーはてへぺろとばかりに地面から聖ホーリーシンボル・アックス印 斧を拾い上げるフリをする。

ラキユース達二人は改めて軍馬に跨ると、通常の馬ではあり得ないほどの力強さで走り始めた。

村の門から外に出て、あつという間に馬蹄の音も聞こえなくなるほど遠くへと走り去った。

「すまん。助かった……」

「いえ、至高の御方をお助けするのが下僕の役目です！」

「いや……本当にありがとう……」

エンシエントは咄嗟に機転を利かせて誤魔化したルプーの頭を、感謝の気持ちも込めて撫でてやる。

その感触に頭を押し付けけるようにして、目を細めながら感触を堪能して、身体をふるふると微かに震わせる。

「さてと……このやり切れぬ思いを晴らしてやろう……っ！ 狩りをするぞ！ ルプー」

「うひひっ、待ってたっすよ。思いっきり楽しませて貰うっす！」

エンシエントとルプーはお互いに得物を抜くと、漸く監視の目を気にせず全力で動き始めた。

一息にその場から飛び上がり、村の外壁を飛び越えようと、人間の目では捉えられないうっすらとした尻尾を引き摺った跡を辿って、森の中へと分け入ってゆく。

ポウロロップ領の方向……街道から外れた森の中へと蜥蜴を追っていった。

三十七話。理不尽な強者

エンシエントとルプーは地面に付いた跡を追って走る。

無数の尻尾を引き摺った跡は、濃く残っているが一つの筋となっていた。

その筋の左右には大小無数の足跡が並行してついている。

勿論、尻尾の筋に並行して付いているものなのだから、ギガントバジリスクの足跡に間違いのないのだが、その付き方が異常に感じた。

足跡の規律良さは兵隊を思わせる。

「ギガントバジリスクとかいう魔獣の生態は知らんが、集団性を持つと統率されるのか？」

流石に全力で走ると、地面の跡を見逃しかねないので、駆け足の速度まで落としながらエンシエントはルプーに話しかける。

凶体の大きさから木々を薙ぎ倒して進んでもおかしくはないのだが、注意して歩いているようで驚くほど木々は倒されていない。

折れているのは下生えの茂みや低木だけなのだ。

「どうなんすかね？ アウラ様でしたら詳しいのではないかと……」

「ああ、だが。この程度でメッセージを飛ばすのもな。まあ、行ってみれば解るだろう」
尻尾の跡は森の奥へと続き更に三十分程追った場所にそれはあった。

人工的に開かれたとしか思えない程の不自然な空間だ。

半径三十メートルほどの円形に木々がへし折られ、中には大人の腕周りでも回りきれないほどの大木の跡もある。

そのどれもが切り開かれた物ではなく、根本から折られた物で、木が生えていた場所には木の根が掘り起こされでもして出来た窪みがあった。

その中心には一体のギガントバジリスクが丸まって眠っているように見える。

「やれやれ、回りにくい真似をする」

「どうしたつすか？」

「おそらく罫だろう。複数の足跡があつたのにいるのは一体だけ、すべての足跡はここで消えている。しかも、ご丁寧に見晴らしを良くして真ん中に一体だけだ。アウラの様なビーストマスターか何かはしらんがな」

「どうされますか？」

「なに……、村人を生贄にしてまで招待されたんだ。乗つてやろう」

エンシエント達が広場へと足を踏み入れると、一瞬だけ動揺したような雰囲気周囲の森から流れてきた。

「ふふん。運のない奴だ。蒼の薔薇に仕掛けた罠に入り込むとは、お前も囷として使つてやろう」

周囲に広がる森の中から、反響するように四方八方から声が聞こえてくる。

その男の声は、慇懃無礼な語り草で一方的に話しかけてきた。

「恥ずかしがり屋さんかな？ それとも臆病なだけかな？ 人に話し掛ける時は姿を見せてと習わなかったのか？」

「言つてくれる。だが、正直言つて私は臆病な程に慎重派なのでね。君に敬意を表して名前だけは名乗らせてもらおう。一人師団のクアイエッセとでも呼んでくれ給え。まあ、呼ぶ間は与えんがね」

広場の中央で丸くなつていたギガントバジリスクはのそりと身を起こす。

その体長は他のギガントバジリスクよりも遥かに巨大で、優に二十メートルはある。

名付けるならギガントバジリスク・ロードとでもいうべき威風を備えて、鎌首を擡もたげてエンシエントを見下ろしていた。

「これがお前の全てか？」

エンシエントは眼の前の巨大なギガントバジリスクを全く意に介さずに、周囲の森をぐるりと見回す。

「私のギガントバジリスクを前にして、それほどの虚勢を張れるとは余程の大物か愚か

者かね？ 並みのギガントバジリスクと思われるでは困るな。やれっ！」

クアイエツセの声が合図となって、ギガントバジリスクが瞳を妖しく輝かせる。

ギガントバジリスクの能力石化ベトリファイケーション・ゲイズの視線の微かな光が広がり、周囲一体の生きとし生けるものが石化する。

森の中から運の悪かった動物や虫が石化してゆく。ピシリピシリという乾いた音が響いた。

「ふむ。図体はデカくても能力自体は上昇するわけじゃないか？」

ギガントバジリスクを中心に即死確定のスキルが荒れ狂う中で、エンシエントは先程と変わらず平然とした態度で立っていた。

「なにっ!? そうか……貴様の後ろにいるクレリックアンチ・ベトリファイケーションに対 石 化を掛けてもらっていたな」

驚きの声の後に納得いったとばかりに的外れな事を言ってくるクアイエツセにエンシエントは、苦笑をもって返した。

「いや、普通に抵抗レジストしただけなんだがなあ」

やれやれとばかりに肩を竦める。エンシエントとしては、このギガントバジリスク一体が切り札とは思ってはいない。

アウラと同じようなピーストマスターならば、周囲の森に魔獣を配置するのが定石な

のだ。

しかし、エンシエントとルプーは周囲に注意を払ってはいるが、何者の気配も感じられない。

声の主ですら森に溶け込んでいるようで、正確な位置は掴めずにいる。

——グギャオウオオオオオオオオ！

自分の能力が通用しない事に苛ついたのか。ギガントバジリスクは焦れて鋭い爪の生えた前足を横薙ぎに振った。

ズドンという音と衝撃が周囲の木々を揺らす。

クアイエツセは森の中で息を潜めながら、その音に勝利を確信するが、ふとありえない事に気が付いて背中に汗が流れ落ちる。

ギガントバジリスクは横薙ぎに振り払ったのだ。振り下ろして避けられたのなら、地面へとぶつかり、このような音を立てよう。

だが、横に振り払った前足が何にぶつかれば、こんな重い音が響くというのか？
その答えはギガントバジリスクの手の中にあった。

エンシエントはありえない速度と重さで横薙ぎにされたギガントバジリスクの手を、片手を軽く上げただけで受け止めていたのだ。

あまりの衝撃にギガントバジリスク自慢の爪は全て折れて、鉤爪の様な指まであらぬ

方向を向いてしまっている。

「お手が出来るなんて、トカゲの癖に可愛げがあるじゃないか。だが、頭が高いな」

その言葉と含まれた雰囲気はギガントバジリスクはその本能に従って逃走をしようとしたが、全て遅かった。

エンシエントの姿は既に頭の少し上にあり、拳が握り込まれている。

一見すればそれは軽く小突いただけのようにも見えるだろう。

だが、倍するレベル差が齎す威力は、容易くギガントバジリスクの頭蓋骨を陥没させて、地面へと叩きつけるとさらにクレーターまで作り出した。

——ドゴンッ！

エンシエントと同じかそれ以上の大きさと重量を持つ頭部は半分以上が地面へとめり込んで、その姿は穴に必死に隠れようとしているトカゲにしか見えない。

「ば……化け物っ！」

あり得ない光景に散らしていた気配を戻してしまったクアイエッセの耳元に「見つけた……」という声が届いた。

「至高の御方にその罵倒は万死に値する！」

その声はクアイエッセの真後ろから聞こえた。

直後に襲いかかった衝撃に樹の上で身を潜めていたクアイエッセは、エンシエントの

近くへと殴り飛ばされていた。

「大治癒^ル！　すぐには殺さないわ。黽^{なぶ}つて黽^{なぶ}つて、死ぬ事が救いと感じるまで殺さない。お前如きが尊き御方を罵倒した事を永劫後悔させてやるっ！」

殴られて地面に叩きつけられ、瀕死になった体はルプーの魔法で一瞬で復元される。ルプーは地面へと羽のように軽やかに降り立つと、ゆつくりと狼が獲物が弱る事を楽しんでるように、口を薄く開けて牙を見せながら嗤う。

クアイエツセは理解した。自分が張った罠に掛かったモノが、獲物ではなく狩る者であつた事を、自分が獲物の立場になつてようやく理解した。

「さてっ！　待つてくれっ！　謝罪を……謝罪させてほしい。偉大な方とは知らずに罵倒をしたことを！　ペットをけしかけたことを謝罪をさせてほしいっ！」

喉の奥で低く唸りながら、恐怖を与える為にゆつくりと歩いていたルプーが、その言葉に足を止めた。

クアイエツセは冷や汗を流しながら許して貰えたことを安堵する。

だが、別にルプーはクアイエツセの言葉に足を止めた訳ではなかった。

クアイエツセの後ろ、すぐ近くに居た主人が待てをさせるように手を上げたからに過ぎない。

「ルプー。よくやった。だが、勝手に殺すな」

「はっ！」

クアイエツセが地面に腰を落としたまま後ろを振り返ると、眼の前には“死”がいた。

エンシエントの見た目は森に入ってきた時と変わらない。だが、その体から立ち上る濃密な気配がまるで違う。

クアイエツセとて漆黒聖典に名を連ねる者だ。

生き死にへ関わる多くの修羅場を潜ってきた。だからこそ明確に解る。眼の前にいる存在は隊長を超え、神殿の最奥にいる『あの方』番外席次をも超えた存在であると……

「これを問うのは二度目だ。あれがお前の全てだったのか？」

「ひっ！ いえ……そのっ！」

素手の一撃で手持ち最強のギガントバジリスクを殺した男の前に、緊張して口と舌が強張る。だが、そのまごつく姿にルプーは苛立たされた。

ルプーはその場で地面を足で踏み鳴らす。

「至高の御方の問いに、さっさと答えなさい！」

「ひう！ 全てではありませんっ！ まだ、色々とできます！ 貴方様のお役に立ってみせます！ だから、助けてください！」

生暖かい物が股間を濡らして地面に水溜りを作る。

恥も外聞もない。顔は涙と鼻水でボロボロにしながら命乞いをする。

今ならギガントバジリスクの小便で顔を洗わせられても、笑顔を振りまいて媚びるだろう。

「ほう。なら……そうだな。我が家へと招待してやろうか」

「……はっ？」

クアイエツセは何を言われているのか理解出来なかった。

元々は蒼の薔薇を消すつもりで派遣されて、ここで罨を張っていたのだ。

それもこれも陽光聖典が姿を消して、それを監視していた土の巫女が謎の爆死をした事が発端だ。

破滅の竜王の仕業かと漆黒聖典隊長を始め、巫女頭のカイレ老と漆黒聖典の大半を使つてトブの大森林の搜索を行った。

だが、トブの大森林は広大であり、森にはリザードマンやその他にも様々な亜人が住んでいることが確認された。

広範囲の搜索が不可能に近いと判断された。

亜人達の殲滅が先決だと決めた大神官様達が目を向けたのは、何かと邪魔をする蒼の薔薇を葬り去る事であった。

それを任されたのが隠密活動ができて対集団に長けた能力を持つ、一人師団の二つ名

を付けられた『クアイエツセ・ハゼイア・クインティア』なのだ。

この任に選ばれた時は誇らしく思った。特別感に酔い痴れ、死すら恐れる必要がないと思つた。

それは単なる勘違いだ。世の中には死が救いでしか無い事もある。刹那の内に殺されて、刹那に蘇らせられた今だからわかる事だ。

「返事はどうしたつすか？」

褐色肌の女が満面の笑みを浮かべて、スリットから覗く艶かしい脚を軽く振り上げるのを見た。

次の瞬間には……

——ゴキソツ！ ブチリソツ！

そんなに力が入っているようにも見えない踏み抜きで、容易く足の骨が砕かれて、細かい切れ目を残して足が千切れ飛ぶ。

「うっぎあああああつ！……はえ？」

「ヒーブル大治癒&レッサ・マインド・プロテクション下位精神防御。どうつすか？ 痛い？ 怖い？ それでも死ねない。それでも狂えない。うふふふ……。面白いでしょう？」

精神がボロボロになり、あと一步でショック死する所で、即座に掛けられる治癒と精神防御の魔法が、不幸にも死を遠ざけ心から狂気を遠ざけてゆく。

心底嬉しそうに甚いたぶ振る事を楽しむルプーをエンシエントは黙って見つめる。

信頼しているからだ。ルプーは間違っても殺すことは無いだろうと、それに「褒美をお預けにしていた事を思い出して、好きにやらせているのだ。」

「はい！ ご招待に預り光栄に思いますっ！」

「そうか。ならば、迎えに越させようか。とりあえずはナインズさんに頼むのは気が引けるし……そうだな。シャルティアが戻っていたか」

「ええー……ペた、いえ、シャルティア様でございますか？ 水晶もございますか？」

「よせよせ、一度使えばまた封入して貰わねばならんのだから、無駄に使う必要はない」
「では、すぐに連絡を……」

「構わんよ。お前はもう少しそいつで遊んでいろ。俺がメッセージを送る」

エンシエントの言葉を聞いて、心から嬉しそうに口を吊り上げて顔が笑み崩れる。

それはクアイエツセにしてみれば、死刑宣告よりも絶望を齎す言葉で、顔を青褪めさせて目に見えてガクガクと震える。

『シャルティアか？』

『はい。妾が愛しの神よ。何か御用でありますか？』

『今、大丈夫か？』

『はいっ！ 我が神の言葉に比べれば、どんな事も些事になりんす！ どうぞ、天上の音

「楽よりも澄んだ御声をお聞かせくださいませ！」

（いや……、神つて……いくらなんでも崇められ過ぎだろ……）

メッセージ越しに聞こえる心酔されたシャルティアの声に頭を抱えなくなつた。

『あ……ああ、すまんがレア物の現地ビーストテイマーを鹵獲したんだが、ナザリックに連れて行きたくてな。時間があればいいんだが、転移門ゲートで取りに……』

言葉も途中で、突然眼の前に転移門ゲートの穴が開くと、そこにはシャルティアがその身に纏う漆黒のポールガウンが汚れる事も厭わずに膝を付き臣下……否、不自然に盛り上がった胸の前に手を組み見上げ、まさに敬虔なる信徒の姿で跪いていた。

「貴方様の忠実にして敬虔なる信徒であるシャルティア・ブラッドフォールン。お呼びと聞き、急ぎ罷り越しました。ああ、愛しの我が神様あ。シャルティアはお会いしようございんしたあ」

「早ええーよ……。よく来てくれた……。シャルティアよ。感謝する」

素でツツコミを入れそうになるのを、ぐつと我慢してなるべく威厳ある姿で腕を組む。

「感謝などと勿体ない……。この身この魂そしてこの血も全ては我が神エンシェント様の物にございんすえ」

面と向かつて声を掛けられ、礼を言われた事に全身の力が一気に抜けてゆき、地面に

崩れ落ちそうになるのを寸前で我慢をする。

そして軽く鼻をスツツと動かすと、千切れ飛んだクアイエッセの足と、翩り続けられる姿を見て、ニンマリと笑顔を浮かべた。

「ああ、偉大なる至高の御方様……あの玩具も私にくださいんすの?」

「あれはまあ、今はルプーの玩具として許してやっているが、殺してはならないと厳命してある。とりあえずは第五階層の氷結牢獄に入れておけばいい。中々に面白いレアモノっほいからナインズさんが喜ぶだろう」

「まあっ! そうでありんしたか……。まあ、私はあの猫を貰えんしたし……。わかりんした。あの男は生かして入れておきんす」

「すまん。多忙な守護者であるお前をこのようになつたらん事で呼び出した。ご苦労だった」

そういつて思わず、エンシエントはルプーにするように、ヘッドドレス越しに頭を撫でる。

しかし、反応は劇的であった。頭に触れた瞬間には体に電撃を受けたように大きくビクリと跳ね上げさせて、一撫でする毎にビクンビクンと大きく体を震わせる。

エンシエントが手を離す頃には、目は軽く白目を向いて、舌を出してヨダレをだらし無く垂らしてボールガウンに染みを作っていた。

エンシエントの優れた鼻が、周囲に嗅いだことが殆どない甘い香りが漂い始めた事に気付いた。

「ふっ……くう……。なんとというご褒美……エンシエント様はイケない御方でありんすう……。撫でるだけで私をここまで到らせるなんて、恐ろしいテクニシャンでありんすえ……」

潤んだ瞳が段々と獲物を狩る野獣の目になり、もう少しで襲いかかろうと理性が消えかけた瞬間に、横合いから何かが飛んできてぶつかる。

「大治癒！ それを持って早くお帰り頂きたく思います。シャルティア様もエンシエント様もお忙しい身の上でありますからね」

飛んできたモノはシャルティアと別の理由で正気を失いつつあり、だらし無くヨダレを垂らすクアイエツセであった。

ぶつかった衝撃で、全身の骨が粉碎されるが、直後に飛んできた治癒の効果で、また瞬時に元に戻される。

「ちっ！ いくら偉大なる我が神の創造物であるルプスレギナ・ベータでも、守護者に対して失礼であらませんかえ？」

「至高の創造主様に欲情して襲いかかろうとする。ペタン血鬼……失礼、シャルティア様から御守りするの、番犬として当然かと存じます」

お互いに牙と牙を剥き出しにしあつて威嚇をする。

「兎戯は止めよ。シャルティアよ。速やかに指示された事を行え、そしてルプスレギナ・ベータよ。守護者はお前達と創造された格差はないとはいえ、仮にも上位者と位置づけられている。敬意を払え！」

「も……申し訳ございません！」

エンシエントの怒気が混じつた声に、二人共睨みあつていた事も忘れたように、直立不動になると綺麗に頭を同時に下げた。

その後、名残惜しそうに振り返りながらも、シャルティアは転移門ゲートを開いて、自失してしまっているクアイエッセを引き摺つてその中へと帰つていった。

「さて、この埋まつてる奴の目玉でもくり抜いて持ち帰るとしよう。それで討伐となるだろう。証明部位をくり抜いたら、強火で死体を焼いておけ。それで二匹いたか一匹だったかわからなくなる。小さい方は証明部位も全て潰した事にしよう」

「はっ！ 直ぐに証明部位を採取します！」

エンシエントはルプーがギガントバジリスクの頭を掘り出している間に、背中 of 戦斧を抜いて周辺の木々を無作為に切り倒したり、傷付けたりして戦いの跡を刻みつけて、地面にも振り下ろす。

ルプーはその間に証明部位をくり抜いて、死体に吹き上プロウアツプがる炎マフレイムを放つた。

激しく燃え上がる魔法の炎はギガントバジリスクの巨大な死体を包み込むと、熱風が吹き上がり、激しく風を巻き起こす。

炎に照らされた森は、原型が解らない程に荒れ果てていた。

三十八話。劍に生き、劍を振るう事だけが人生ではない。

時間は少し戻り、エンシエントが王都から旅立った頃、入れ違うように一人の男がロポロの姿で王都の街へとやってきた。

着ているシャツの至るところが破れ、無精髭を生やしたぼさぼさ髪の男は貧民街にいろような見窄らしい姿であったが、目は爛々と輝き、ゴロツキ程度では近寄ることすら出来ない雰囲気を醸し出している。

「あと……もう少しだ……」

男の顔には酷い疲れが見えていた。

それでも足を止めずに、なるべく巡回の兵士には見つからぬように人目を忍びながら高級住宅街を進む。

目指す場所は有名人故に知られた男の自宅だ。

適当に路地にたむろするゴロツキを締め上げれば簡単に教えてくれた。

そして、目的の場所は直ぐに見つかった。高級住宅街には不似合いな二階建ての質素な一軒家だ。

王城にもそれなりに近く、忠義厚い男らしい見目よりも実を求めた理想的な立地に

建っている。

男は目的の相手が宮仕えの身で有ることを考えて一瞬留守だろうかと思つたが、自分の有様を思い出して思い切りドアノッカーを鳴らした。

家の中には人の気配はなく、自嘲の笑みを浮かべて扉に背を向けた。

「我が家に何か御用かな」

不意に後ろから声を掛けられて振り返ると、四年前と変わらぬ。いや、昔よりも遙かに鍛え上げられ更に高みに登つたライバルがいた。

今の自分と比べて、その姿は自信に満ち溢れて威風堂々としている。

そこには記憶の中にある姿よりも洗練されていて覇気すら感じられた。

「すまん。ガゼフ・ストロノーフで間違いないか？」

「お前は……ブレイン……ブレイン・アングラウスか……」

「ああ、そうだ。四年前の御前試合で会つたつきりだな」

ブレインは久しぶりに会つた嘗てのライバルに気後れしてしまう。

それはガゼフとブレインが四年を過ごしてきた差を、どうしても意識させられてしまふからだ。

ブレインはガゼフと四年前の御前試合で決勝を争い、そして打ち負けた。

ブレインにとっての初めて明確な負けであつた。

圧倒的に負けていたなら剣を捨てる決意もできた。

だが、あと少し……ほんのあと少しの差がブレインを剣に固執させた。

及ばなかつたガゼフに勝ちたいという欲は、ただ勝ちたいという墮落へと変わり、安易な強さを求めるために弱者相手に勝ちを拾う哀れな人生へと転落をさせた。

「ストロノーフ……お前に頼みがある……」

ガゼフは非番で稽古をしていたのか微かに汗臭さを匂わせながら、無骨な顔に怪訝さを滲ませる。

「急にどうした？ 頼みによるが、出来る事なら聞こう」

相変わらずの無口ながらも人情の厚いガゼフに、ブレインは微かな苦笑を浮かべる。

そんな男にこれからとんでもない罪を背負わせようと言うのだから、自分は本当に救いがないと感じていた。

「お前に……真剣勝負を挑ませてくれっ！」

「理由を聞いても言つてはくれないのか？」

「すまん……。今は言えん……。頼む。受けてくれないか……」

少し柄に錆の浮いた刀を抜き放ち、ガゼフへと突きつけながら、申し訳なさそうに眉尻を下げた。

ガゼフは自分も不器用だが、眼の前の男も大概だなと、大きな溜息を吐いて、ブレイ

ンに背を向けた。

「何故だどうしてだとは聞かん。だが、勝負がついたら話してもらおうぞ?」

「ああ……本当にすまん」

ガゼフは愛用の剣を手に、ブレインにこつちにいい広さの空き地があるからこいと顎をしゃくる。

ブレインは抜いた刀を鞘へと納刀して後ろに続く。

眼の前に歩くのは、昔に及ばなかった背中だ。その背中は近いようで遠く。手が届きそうで届かない。

家からほど近い所にその広場はあった。

二人で立ち会いするには程よい広さと、人目に付かない遮蔽物に塞がれている隠れた訓練所といったところである。

ガゼフは非番の時に団員から気を使われず訓練するために、いつもここを利用してきた。

ここに人を連れてきたのは恐らくはブレインが初めてだ。

「ここでもいいか? 御前試合と違って観衆の一人もいないのは寂しいものだがな」

「いや、今の俺には観衆なんてものは重荷にしかならないから、むしろ助かる」

ブレインは卑下するようにそういって、自嘲の笑みを浮かべる。

その笑顔はとても儂く、ガゼフはその笑顔を何度も見た覚えがある。死を覚悟……いや、死を確信している男の眼だ。

少し前ならカルネという村でも、その眼を部下の顔に見た。恐らくあの時の自分も同じ瞳をしていることだろう。

だが、ガゼフはそれだけではない気がした。ブレインが浮かべる悲壮の笑みの中に、自罰的な何かが見える感じがするのだ。

「ブレイン……お前は どうして……？」

ガゼフは何故と問う気はなかったはずだ。

しかし、思わず問わずにはいられなかった。嘗ての友の……ライバルの余りの変わりよう。次に会った時は決着をつけようと約束した時との落差によってだ。

「俺達に言葉はいらないだろう？ 全ては剣の中で……それが俺達の流儀なはずだ」

「そう……だったな。俺も老いたと言うことか」

ブレインは腰から再び刀を抜き放つと、上段へと構える。

それに合わせるように、ガゼフも剣を抜くと上段へと構えた。

一刀最速、上段の構えはそう教えられる。

剣士ならば応用を考えて正眼に、死に挑む戦士は上段に、奇を銜^てうなら下段にと言われる。

「ブレインは初めて上段へと構えた。刀という刀劍の類の中では軽い部類のものには上段は向いていない。」

上段とは、劍の重さと己の膂力を以て最速にて斬り伏せるものだからだ。

ブレインがここに來た理由は、二つある。一つは己の弱き心を捻じ伏せるためだ。故に一刀必滅の上段へと構えたのだ。

「行くぞ」

「はいっ。」

ほんの短いやり取りを合図に互いに間合いを一気に詰める。

やはりというか、ガゼフの大劍の方が早くに振り下ろされる。

それを受けずに半身となつて紙一重で躲すと、ガゼフの懐に入つて、ブレインは敢えて劍を振らずに蹴りを繰り出した。

その蹴りを肘で受け流したガゼフの体を、振り下ろされたブレインの刀が襲う。

その時にはガゼフは大劍を引き戻して、ギリギリだが受けに間に合つた。代わりに今度はガゼフが前蹴りを放つ。

大木のような太い脚から繰り出された蹴りを受ければ容易く骨が折れるであろうが、その前には間合いから外へと飛び退いていた。

「ふっ。いきなり蹴りとはな。お前は劍に生きてるんじゃないのか？」

「俺は剣に生きる事を止めて、己に生きる事にしたからな。お前こそよく防いだものだ」
「綺麗な剣よりも泥臭い剣に生きてきたからな」

お互いに顔を見合わせながら笑い合う。

ブレインは初めて感じる戦いの楽しさに酔い、ガゼフは何も背負わなかった頃を懐かしみ痴れる。

不敵な笑みを浮かべ合いながら、似たような事を考えていた。

ガゼフは御前試合の後でブレインも誘ったが、仕えるのは柄じやないと断られた。もしもあの時に共に仕えることができたのなら、こんな楽しい時間がより高みに連れて行ってくれただろうと思う。

ブレインはもしも御前試合の後でガゼフと共に武者修行に出ていたら、こんな楽しみをもっと早くに知れたかもしれないと思う。

互いに立場やその後が違えども、いまこの時だけは心が一つになった。剣を交えられてよかったと。

一合二合と剣を重ねて火花を散らす。お互いにかすり傷や打ち身はあれども大きな怪我や動きを阻害するものはない。

だが、人間である二人には体力は有限で時間も限りがあった。

ここまで二人共、武技は使っていない。それは武技を使った勝負は一瞬でカタがつ

く事を熟知しているからだ。

「はあ……はあ……流石は王国最強の戦士だな。だが、これで決着をつけさせてもらう」
ブレインはそう言って刀を腰の鞘へと納刀する。

言葉とは裏腹に刀を納めたことに対して、ガゼフは怪訝な表情を浮かべるが、ブレインが腰を落として構える事で剣気が高まるのを感じて、武技だと理解できた。

「珍しい型だ。オリジナルか？」

「ああ、俺が練り上げたお前を倒すための武技だ」

「わかった。俺もお前のその礼に応えよう。『即応反射』『流水加速』……こいつ！」

ブレインは瞳を閉じて、己の応報おうほうを感じる。

ここに來た理由は二つある。二つ目は剣に己を詫びること。そして今まで無駄に殺してきた人達に対して詫びる。

所謂、己にケジメをつけに來たということだ。

ブレインは己の死を意識する。不思議とブレインの心が澄んでいた。

明鏡止水の心で、己の死を受け入れて、剣に向けた意地で柄を握り、その時を待つ……
のではなく。既に己を殺した男は、初めて待ちの剣ではなく。攻めるための剣を奮つた。

「剣気疾風、秘劍飛蛇とびかがち神！」

蛇のように卑屈な心で穴に籠もっていた男は穴を今こそ飛び出して、己の全てを掛けた一刀を振るう。

腰を落とす為にたわませていた脚に力を込めて、低く垂直に前へと飛び出した。

その周囲には神域と呼んでいる剣の結界を纏ったままに突っ込む。

そしてガゼフの体が円の中に触れた瞬間に、生涯最高とも言える一撃が抜き放たれていった。

一瞬が永遠にも思わされる時間の中で、ガゼフが御前試合で見せた心からの嬉しそうな顔を浮かべているのを見た。

ブレインもその時間の中で同じ笑みを浮かべて、ガゼフの言葉を聞いた。「六光連斬」と。

——ギギギキイイ……イン……

一撃にも関わらず、複数の剣戟の音が広場を埋め尽くして、刃が宙を舞った。

(負けた……か……)

ブレインは己の刃が宙を舞うのを見て、清々しい気持ちでいた。

完敗だ。全力を尽くした間違ひなく生涯最高の一撃だったと言える。

それはどんなマジックアイテムや薬で強化しても成し得ない心の一刀だ。

たとえ最強の装備を身に纏っていても、ブレインにはこれ以上の一撃など想像も出来

ない。そんな一撃であった。

しかし、それですらも届かなかった。自分が追っていた背中はこの度も離されてしまっていたのかと思うと、口惜しさよりも清々しさと馬鹿馬鹿しさが込み上げてくる。

そして、一撃で六連という驚異の攻撃を行う最後の一太刀を受けるべく身を捧げる。ガゼフは『流水加速』で高められた神経で、ブレインの行動を見守っていた。

まさか、恐ろしい程の殺気を放ちながら攻撃してくるとは思わずに、戦士の本能というべきもので、ガゼフは自身が持つ最大の武技を自然と解き放っていた。

だが、ブレインの持つ刀が折れ飛ぶのを見て、しまったと後悔した。

武技とは一連を以て行われる行動である。

命中精度や威力などはある程度の訓練で操作可能だが、体に覚え込ませた武技の動きを止める事は不可能に近い。

せめて、ブレインが防ぐか回避行動でも取れば、怪我はさせても致命傷には至らないだろうと考えたが、眼の前の男は襲いかかる刃に向かって逆に捧げるように身を乗り出してきたのだ。

(大馬鹿野郎がああつ！)

心で最大の罵倒をしながらも、思い通りにさせてなるものかと、必死に武技を止める。最高の威力を放つ攻撃を止めるのは、並大抵の事ではない。

武器は振るうことよりも止めることの方が至難を極めるのだ。振り下ろされる大剣と反対へと全力を込める。

腕が悲鳴を上げて筋肉が切れていく感触と痛みが加速されてゆつくりになった中で襲いかかってくる。

しかし、ガゼフは決して諦めない。死なせたくないから？ 殺したくないから？

否っ！ 彼がガゼフ・ストロノーフという男であるからだ。

「うおおおおおああああっ！」

戦士の咆哮が街に轟く。既に筋肉の大半はブチ切れて骨も砕けている。

腕のいたるところが内部から破裂するように裂けて血を吹き出させる。

そうして初めて愛剣は軌道を変えて、ブレインの横の地面を叩いた。

「かつはっあ……はあ……はあ……」

全身から汗が吹き出し、血の雫を地面へと落としながら荒く息を吐き整える。

危ない所であった。とつさにリグリットという古い友人から貰った指輪の効果を発揮させなければ、眼の前の良き剣友を失うところであった。

「な……なぜ……だ？」

「はあ……はあ……馬鹿、やろう！ 殺し合いじゃないんだぞっ！」

「お前もか……お前も俺を殺す価値がないと言うのか……」

ブレインは剣を杖のようにして辛うじて立つことが出来ているガゼフを、泣きそうな目で見上げる。

それは道に迷って、親とはぐれた幼子のようであった。

「殺す価値だとか。何を言っている？ お前は殺す価値がないのではない！ 生きる価値がある男だから殺さないのだ。お前に一体何があった？ アングラウス」

「俺に生きる価値がある？ そんなものゐるわけがないだろうっ!? 俺あぐんで人として……剣士として墮ちる所まで墮ちた俺に生きる価値なんて……。どうしてだ。どうして殺してくれない……」

「アングラウス……。お前に何があつたかは知らん！ だが、少し肩を貸せ。俺はもう一歩も歩く力が残っていないのだからな。それから飯にしよう！」

地面に臥せて泣き崩れていたブレインは、ガゼフの言葉に顔を上げた。

そこには少し疲れたような笑みを浮かべたガゼフが崩れ落ちてゆくところであった。

ズズツとスープを啜る。

一般家庭でよく作られる豆と芋のスープだが、それを口にしたブレインは美味いなど

感じた。

普通の食事をしたのはいつ以来なのか。思い出しても臍げにも思い出せない。

いつも硬い干し肉と岩みたいなパン。それに少量の味の薄いスープとワインぐらいだ。

他の団員はもつと良いものを食い、女も好き放題に嬲り物にしていたが、ブレインはそんなものに興味はなかった。

少なくとも分け前は全て溜め込み。マジックアイテムを買うために使うだけだった。自分にもまだ食事をして美味いと感じる人間性が残っていたことに苦笑を浮かべる。

「事情はわかった。お前のしてきたこともな……」

「ああ……だから、俺には生きる価値がない。強さを求めるなんて言葉で自分を誤魔化して、今までとんでもない罪を犯し続けてきた」

ブレインが『死を撒く剣団』のアジトから持ち出した物は、神刀を手に入れるまで使っていた古い刀と、冒険者が持っていた赤いポーションだけだ。

後は亡くなった者達の財産として、アジトの場所を衛兵に知らせて渡した。

その赤いポーションのお陰で、ガゼフの傷を癒すことができた。

「ふむ。確かに悪逆非道な輩に組していた。だが、お前自体は女に手を出しておらず、一般人には手を出していないのだろうか？」

「当たり前だ！ 人としてはそこまで墮ちるつもりはない。とはいえ、説得力はないな……事実、護衛に雇われていた冒険者達を手にかけて、そのせいで他の奴らに商人も殺される原因となったわけだしな……」

ブレインの言葉を聞きながら、ガゼフはワインを口にしながら空いている手で顎髭を一撫でする。

ガゼフとて別に聖人君子と言うわけではない。

現について最近もカルネ村で思い知らされたばかりだ。

戦士長だの……国に仕える者だとか立場はある。だからといって、それを他人に押し着せる愚かさも知っているし、何よりガゼフとして自分よりも才能があり、挫折を知ることでも大きく成長したブレインを死なせたくないのだ。

「しかし、その女達は救出して、死を撒く剣団のメンバーも殺したのだろうか？ それでチャラと言うわけにはいかんか？」

「お前らしくない。お前ならば情け容赦なく裁きに掛けるか、自らの手で裁くと思ったんだがな」

「ふつ、俺とて思う所が無い訳ではない。だが、お前の死を以て全てをチャラと言うのは違う気がするのだ。それに打算もある」

ブレインは自身が考えていたガゼフ・ストロノーフ像とは違う、良く言えば柔軟、悪

く言えば曲げた姿に驚きと興味が惹かれる。

「打算か？　そういう取引は嫌うと思つてたんだがな」

「お前は少し人を過分に見過ぎだ。俺とて人間で騎士ですらない男だぞ？　それなりに汚れている。思うことがあつてな？　実は先日……」

ガゼフはつい最近に起きた事を、ブレインに話すことにした。

貴族派閥の陰謀、それに対してなんら手を打つ事が出来ない立場ゆえの不便さ。

さらに王の御立場の弱さゆえの、民への不都合の見過ごし。

最近、ガゼフは時折考える事が多くなつた。

真に王をお支えするには、今の戦士長という立場を辞して陰ながら動いた方が良いのではないのかと。だが、既に王の御心の支えになっている自覚は恐れ多くも持つてゐる。

今辞めることは逆に王のお立場を弱め、御心を痛めるだけではないのかという危惧もある。

「だから、この帝国との戦争時期を控えた今は腕の立つ者は一人でも欲しいのだ」

「つまり、ストロノーフ。俺にお前の代わりとなつて陰で動いてほしいと言うのか？」

「そうだ。だが、無理強いするわけではない。どうしても自分を許せないと言うのなら、出頭することも止めない。だが、考えてくれんか？　死を以て償うのではなく、生きて

償う道を……。力ない民を救う事で贖罪とする道を考えてほしいのだ」

その後、二人は黙り込んだ。

劍で心を交わして、言葉でも語り尽くした。ならば、もうお互いに伝える事は何もな
く。あとは自分で決めることだ。

「わからん。わからんが。最後に振るった一刀の先を見てみたいと思っっているのも事実
なんだ……」

「では……っ！」

「とりあえずは帝国との戦争が終わり王が退位するまでだ。それまでお前に雇われよ
う。それまでに自分なりの答えを出したい。それまではこの命はお前に預ける」

ガゼフはその言葉に子供ののように喜んだ。迂闊にもワインをテーブルへと溢すほど
に、腰を浮かせて喜びを表現する。

「そうかつ！ そうか……アングラウス。お前に断られたらどうしようかと思つたぞ」
「ブレインだ。これからはブレインと呼んでくれ。戦士長」

「ふっ！ なら、俺もそんなかたっ苦しい肩書で呼ぶな。ガゼフでいい」
「これからよろしく。ガゼフ。所でさっきの話に出てきた赤い鎧の男だが……」

ワインを傾けつつ、ガゼフの話に出てきたエンシエントと名乗った赤い鎧の男の話に
思い当たる節があり、ブレインは聞いた。

そして、ガゼフの話にブレインがエンシエントと思われる男と出会った事を話すのはもう少しあとのことだ。

ガゼフの家は珍しく騒がしい夜を過ごす事になる。

深夜になっても語り尽くせぬ四年を埋めるために、ガゼフとブレインは夜を徹して語り合うのだった。

三十九話。武人と剣士

ギガントバジリスク討伐を終えて王都に凱旋してから五日、エンシエントの姿は戦士の訓練場にあつた。

眼前には二人の男が並んでいる。

討伐から帰還したエンシエントを出迎えたのは、警戒の中にあつた王都の防衛網だつた。

ギガントバジリスクを警戒されて駆り出された冒険者のみならず王国兵の姿もあつた。

冒険者組合で短いながらも見知つた顔の中に、久しぶりに見たのはガゼフだ。そしてそこに並んで立つ無精髭の男である。いつぞやの野盗の男だつた。

二言三言を交わし、後日の約束をつけて報告のために別れたのである。

そして、屋敷に訪れたガゼフとブレインを伴つて訓練場へとやってきたのだ。

二人と対峙していると、不意にガゼフが深々と頭を下げた。

「急な呼び出しを失礼をした。改めて、久しぶりですな。エンシエント殿。ゴール殿と

一緒ではないのですかな？」

「ナインズ様はカルネ村の近くに居を構えられた。故に暇を貰いこうして気楽な冒険者稼業をしている」

「左様でありましたか。さて、呼び出させて頂いたのは、このブレインの事ともう一つは極めて私的な事でしたな」

ブレインの事と言いながら、手を上げてガゼフは隣に立つ男を指した。

その手に促される様に、ブレインも深々と頭を下げる。

「久しぶりと言うほどの時が経ったように感じないが、あの時は世話になった……」

「確かに久しぶりとは言えんが、あの時の……少しは見える顔にはなったか」

「あんたは何も聞かないんだな。俺がここにいる理由だとか？」

ブレインの言葉に、エンシエントとしてはなんのことだかよくわからずに首を傾げてみせる。

「はて……」

「その……あれだ。最初にあつた時の職に関しての事というか立場というか……」

本気で首を傾げるエンシエントに、ブレインは周囲に目を向けながら、言い難そうに口籠るように続ける。

周囲には疎らに兵士が遠巻きにこちらを見つめている。迂闊にここに来るまで何を

していたかを知られる訳には行かずに言葉を濁した。

「ああ……そうか。そういうことか」

「待ってくれ。エンシエント殿！」

「どうでもいい」

「今のブレインは……はっ？」

心を入れ替えたブレインを擁護しようと、ガゼフは声を上げるが、エンシエントの一言に肩透かしを食らった。

「言葉通り。どうでもいい。ブレイン殿がどこで何をしてきたかなどは欠片も興味は湧かないし、忘れてしまった。昔と今が違うのは顔を見ればわかる」

「あ……ああ、あんたに会えたなら言おうと思ってたんだ。感謝するっ！ あの時……俺の目を覚まさせてくれて……」

「やはり人は面白いな……今のお前なら殺す価値は有りそうだ」

突然、笑顔で放たれた物騒な言葉に、ガゼフを始め周囲の兵士達も目を剥いてざわめく。

だが、一人だけは眼を見開いた後で笑い始めた。

殺すと言われた当のブレインが高らかに笑い始めた。

その^{まなじり}眺には涙が浮かんで、一粒だけ零れた。

「ははははははっ！　そうかつ！　そうか……。今の俺には殺す価値があるか……。ありがたいとうっ！」

周囲の兵士は意味が解らずにぼかんとした表情を浮かべ、ブレインの話を聞いていたガゼフだけは合点がいったのか。喜びが伝播したように満面の笑みを浮かべると、笑い続けるブレインの肩を叩いた。

「ブレイン殿の用事はこれか？　では、ガゼフ殿の用事は……。聞くまでもないか。場所とその姿を見ればわかる」

非番だと聞いていたのに、その身に纏うのは平時の服ではなく、動きやすさを重視したハーフプレートにバスタードソードを腰に漉すいている。明らかに戦うための装備だ。

「ふふっ、流石は話が早い。一手ご指南を頂きたいと思ひましてな」

「否やはない。寧ろ好ましく」

嬉しそうに腰の剣をがしやりと鳴らしたガゼフに、エンシエントも微かな笑みを返す。

強く在ろうとする姿には、種族や性別を超えて好ましさを覚える。

そこには建前に入る隙間はなく、剥き出しの衝動だけが存在するからだ。

「待て待て待てっ！　ガゼフ！　俺が先だと言う話だろうっ！」

しかし、二人の間にブレインが割って入った。

その腰には真新しい刀が吊るされていた。

ガゼフに折られた後で、武器屋を巡り手に入れた一品だ。

神刀には劣るが、ガゼフに折られた物よりかは幾分良い物が見つかった。

「うぬう……しかし、この流れに割って入るのは如何なものかと思うぞ？」

「待て！ お前がクジでと言い出して決めた事だろうっ!？」

「ぐっうう……仕方ない。お前に再戦したいという想いがあるのは知っているからな……」

二人のやり取りに思わず、エンシエントは吹き出してしまう。

余りにも懐かしい光景だ。よくエンシエントと武人建御雷もこうしてたち・みーとの勝負の順番で揉めたものだ。

「どうかされましたか？」

エンシエントが気付くと、揉めていた二人は吹き出した声に不思議そうにエンシエントを見つめていた。

「失礼した。昔を思い出してな。では、まずはブレイン殿との再戦と行こうか」

「ああ！ よろしく頼むっ！ 今度はあんたの背中の物を使わせてみせる」

「楽しみにしている」

二人の言葉に諦めが付いたのか、小さく溜息を吐くとガゼフは二人の邪魔にならない

様に後ろ向きに離れる。

ブレインもエンシエントと凡そ十メートルぐらい間合いを開けて、腰の刃をスラリと抜き放った。

その立ち姿の余分な力みや驕りの無さに、エンシエントは口を歪めるだけの笑みを浮かべる。

「抜かないのか？」

無手のままで立つエンシエントに、ブレインは怪訝な声を掛ける。

「使わせてみせると大言を吐いたんだ。それまでは無手でいよう。抜かせてみせろ！」

「くっ……くっくっくっ！ あんたの場合はそれが驕りじゃないから恐ろしい。では、遠慮はしない。あんたの背中の中の物を抜かせてみせる」

二人の言葉で準備は済んだと見てガゼフは腕を振り上げながら声を上げる。

「では……はじめっ！」

最初に動いたのはブレインだった。ようやく我が物になりつつある飛蛇神とびかがらの要領を使い、低く飛ぶように間合いを詰める。

そして間合いに入ると、下から掬い上げるように刃を振るう。

だが、意表を突いたと思った一撃も、エンシエントは苦もなく微妙に間合いを開けるだけで躲す。

(まさか……無手で相手をするととは思わなかった。止めるべきかとも思ったが、ブレインの言葉とエンシエント殿の態度を見れば、それほど地力の差があるという事なのだろう)

ガゼフは脇で初めて見るエンシエントの戦いを見定める為に目を凝らして、一瞬たりとも見逃すまいと睨み付ける。

今のブレインはガゼフから見て、久しぶりに会ったあの時よりも遥かに強くなっているとわかる。

しかも、あの時よりも気分の高揚からか動きが速く感じる。

(見切られている……か。低く入り下からの一撃は見極め辛いはず、だが、難なく体を後ろへとずらしただけで躲した)

自分と比べて、エンシエントの強さを測る。自分ならどう躲すかを考えた時に、躲す事など出来ないかと一瞬で判断を下す。

ガゼフならば、下からの掬い上げならば、寄って来る事すら嫌って牽制をするか。よしんば一撃を放たれても、剣で防いで横へと逸らすだろう。

ブレインは躲される事は最初から解っていて、そのまま体をぶつけるようにして、間合いを詰めて横薙ぎに刃を振るう。

しかし、懐は即ち無手の間合いだ。今度は間合いを離すのではなく、逆に密着しそう

なほどに詰めて、右手で向かってくる刃を握る手を押し留め、左手で相手の右肩に手を添えながら、ブレインの右肩を支点に身を横へと滑り込ませて、ブレインの背後へと身体を翻した。

「くっ！」

「奇手は相手の意表を突いてこそ、振りは間合いの外から振り入るべし。武器の基本は如何に自分の得意とする間合いに引き込むかだ。それじゃ背中の得物は使えんな」
「くそっ！　ならばこれはどうだ！」

ブレインは振り返りざまに袈裟に切り下ろすが、半身となったエンシエントは容易く躲す。

ブレインは即座に刀を手元へと引き戻すと、エンシエントの喉元に向かつて突きを放った。

それを見て、焦ったのは脇で見守っていたガゼフだ。

明らかに殺す為の一撃であり、半身で躲した即座の最速の突きに躲せるはずはないと読んだ。

だが、その心配は杞憂に終わる。

突き出された刀を、エンシエントは手を添える様に横へと軽く押して、首の横へと流したのだ。

「いい覚悟。いい殺気だ。思い切りもいい。危なく一撃を貰いそうになった」

ブレインは大きくその場を飛び退いて間合いを再び開ける。

「ちっ！ よく言うぜ。あんたは全て見えてただろうが……」

「すまん。それがレベル差というものだ。お遊戯はこれ位にしたらどうだ？ 奥の手を持つてるんだろう？」

エンシエントは対峙してブレインを正しく評価している。この程度ではないと、どこか力を隠して様子を伺っているようにしか見えないのだ。

「そんな大層なものじゃないさ。ちよつとした隠し芸みたいなものだからな」
「ほう。そりや楽しみだ」

不敵な笑みを浮かべると、すつと腰を落として、刀を慣れた手付きで納刀する。

「ご満足いただけりゃいいんだが……。能力向上。能力超向上。流水加速……」

ブレインはこの数日、ガゼフとの特訓の末に能力をさらに高めることに成功していた。

代わりに、武技として編み出した領域までは使えなくなつた。

（だが、それがいい。それでいい。知つた気になる領域など不要。斬りたい者は目の前にある。ならば、その事だけに集中すればいい）

深く息を吸い込み。目の前にいる強大な相手を見つめる。

赤い鎧姿で背には巨大な戦斧。遙か高み。強さという一点に於いては天上人。武に於いては雲の上に過ぎてブレインの矮小な身では見ることにすら敵わない。

「くくっ……確かに満足させてくれそうだな」

エンシエントは散歩のような気軽さで足を踏み出す。

背中の戦斧を抜きたい衝動に駆られる。それはブレインを脅威と見た為ではない。賞賛のために。よくぞ。この短期間にここまで磨き直したと讃える為にだ。

だが、見るまではそれは出来ない。それはここまで己を磨き直したブレインに対して礼を失することになる。

一流の剣士にのみ解る明確な線引き、それは俗に死線という。

此処から先は死線の域という手前で一度だけ足を止めてから、ゆつくりとした足取りで線を越えてゆく。

ブレインは死線の手前で足を止めたことがエンシエントの礼の表れと感じ取り、思わず笑みが溢れる。

それも一瞬のことだ。次の瞬間には刀を鞘から抜き放っていた。

「神速二段、クビキタチシレン軌絶四連」

それは一筋の光、星の瞬き程の速度で振るわれる四連撃は寸分違わぬ軌跡を描いて振り抜かれる。金属を擦り合わせたような歪な音が訓練場に響き渡った。

とか……」

エンシエントは半ばから折れたブレインの刀を見つめる。

ブレインは大切そうにその刀を納刀すると、優しくポンと叩いた。

「いや、この刀があればこそその一撃だった……。満足だっ！」

「そうだな。ならば、その刀は打ち直して脇差とすればいい。お前には褒美としてこれ

をやろう」

インフイニティ・ハヴァアサック
無限背負い袋に手を突っ込むと、周囲の人間がギョツとして、ブレインとガゼフも眼

を見開いた。

「え……エンシエント殿。それは？」

インフイニティ・ハヴァアサック
「無限背負い袋という。まあ、大仰な名前だが限界がある只のマジックアイテムだ。そ

れより……有った」

虚空に突っ込んだ手を引き抜くと一本の刀が握られていた。

それは赤漆色の鞘に収まった一本の刀だ。

柄は黒糸で組まれた握りとなっており、鐔は菱形で複雑な紋章を刻まれている。

抜いてもいいないが、なんとも艶のある色香を匂わせる雰囲気纏っている。

「……これを……俺にか？」

「褒美だと言ったろう。名をあまのはばきり天羽々斬剣と言う」

恭しく頂くように受け取ると、眼の前にスラリと半分だけ抜き放つ。

それは黒い刀身の刀であった。刃紋は重花じゅうかちょうじ丁字でまるで稲穂を模したように綺麗な刃紋を描いていた。

夢遊病に掛かったように、無意識に全てを鞘から抜き放っていた。

その刀身が水に濡らしたばかりのように、艶やかと神々しさが溢れ出ている。

「これは……こんなものを頂けないっ！ これはとんでもない代物だ」

それは嘗て一度だけ見た妖刀を思わせる色香と妖しさを纏っている。

ブレインは数々の刀を見てきた身だから解る。これは自分には過ぎる代物だ。

「勘違いするな。今のブレイン殿には過ぎた物だ。だから、その剣を御せる心を鍛えろ。

御せない時にはその刃はお前を断つ刃となるだろう」

預言者のように厳かに言うその言葉には嘘は無いように感じる。

ブレインは刃に映る自分の顔を見つめる。なんとも自信無げな顔付きを見て、自分の顔を殴りつけていた。

そして、再び刃に映る自分の顔を見つめると、少しはマシな顔付きとなった自分を見てから納刀する。

羽根の様に軽い刀がズッシリと重く感じる。

その刀を腰に佩いてから、深々とその場で頭を下げた。

「感謝する。そして貴方とこの刀に誓おう。決してこの刀に恥じぬ人間で有り続けると！」

「期待している。ブレイン・アングラウス」

エンシエントは満足気に頷いて返し、地面に涙の染みを作り続けるブレインを周囲の兵士は感動するようにつめて、ガゼフは友の姿に誇らしげに笑み崩れるのであった。

新たな英雄の誕生を祝うかのように、訓練所の空気は陽だまりを思わせる暖かさを感ぜさせる。

「やはり、貴方は私の見込んだ通りの御仁で有った！ 俺からも感謝させてくれ」
「構わないとも。さて……次はガゼフ殿であつたかな？」

ガゼフはブレインへと近付き肩を叩いて、無言で褒め称える。気の置けない友には言葉は必要がない。寧ろ無粋となるのだろう。

エンシエントはそんな二人を見て目を細める。

そして、戦斧を背中にしまうと、ガゼフを見つめる。

「俺にもまだ抜いては貰えんか……」

「当然だ。侮辱する気はないが、ことう言うのがブレイン殿に対する礼だからな。王国最強の剣よ。俺の刃を抜かせてみせろ」

「ふふっ……是非もないっ！」

二人の間にぴりりとした空気が流れる。

ブレインは既に先程までガゼフが居た位置まで下がっていた。

張り詰める緊張の中でエンシエントとガゼフは好戦的な笑みを互いに浮かべ合うのだった。

四十話。戦士長と黄金の姫

ガゼフは愛用のバスタードソードを構えて、じつとりした汗を額に浮かべる。

立ち会ってからほとんど時間は経っていない。

ただ、眼前に立つ。それだけでこれほどの圧力が感じられるとは思わなかった。

(よく、ブレインはこれに向かつて行けたものだ)

先程まで見事な立ち会いを見せた友を想う。

眼の前の男は悪く言えば無防備、良く言えば自然体だ。だが、一分の隙すら見当たらない。

「どうしたんだ？ 来ないのか？」

「ふつ、貴方程の相手に迂闊な事は出来んからな」

ガゼフの言葉にエンシエントの眉がピクリと反応する。

自然体に立つエンシエントに対して、ガゼフは剣を上段に構えてジリジリと間合いを測る。

突然、ガゼフは構えを上段から中段……俗に言う正眼に構えて深く息を吸った。

「武技……急所感知」

切っ先にエンシエントの体を捉えて、武技で攻めどころを探す。

（弱点、隙。共になしか……まったく。これで無手だと言うのだから……。ふっ、ままよな）

ガゼフの気配が明確に変わった事をエンシエントは感じ取って、頬を吊り上げて手招きをするように、手を持ち上げて指だけを曲げる。

「征くぞっ！」

「来いっ！」

五歩ほど離れた位置に立ち、覇気を溢れ出させるガゼフは、全身の筋肉に力を漲らせる。

ハーフプレートが内からの筋肉の圧力でギシリと歪な音を立てた。

周囲の戦士団員達も初めて見るガゼフの本気の圧力に喉を鳴らした。

その音が合図になったわけではないだろうが、五歩の距離を一気に詰める。

右脇の後ろに振り被られたバスタードソードが、エンシエントが間合いに入るなり、とんでもない膂力で振り抜かれた。

「……ふっ！」

エンシエントは胴を薙ぐように振るわれた剣に、前蹴りを放つ様に足を盾にすると、

足の裏に剣が触れると同時に、そこを支点に前のめりとなり、剣の上を一回転して躲す。ガゼフの手には抵抗感という手応えがあり、しかし僅かに抑えられた程度の圧力で衝撃とは言えないほど。

つまりはガゼフが剣を振る速度に合わせて足を曲げ、その剣の威力のほぼすべてを受け流し、体を回転させる力にのみ転換したということだ。

その技量にガゼフは驚愕を露わにする。

「うおおおおおっ！ 武技、即応反射！」

ガゼフはいまだ勢いの残る剣で流された体を武技で無理矢理に立ち直らせると、斜め後ろで無防備な背中を見せているエンシエントに向かつて袈裟に切り下ろした。

だが、その一太刀ですらも後ろに目があるかのように体を捻り、肘でバスタードソードを押し上げるように逸らしてくると反転しながら、剣の下を潜って躲される。

今度は殆ど抵抗も感じないままに逸らされて、長大なバスタードソードは地面を掠めるように振り抜かれた。

（何という技量かつ！ 隙がない所ではないぞ。その気ならば俺の体を拳で打つことも出来たであろうにつ！）

遊ばれている。そうとしか感じられない。

まるで大人と子供の戦いだ。ガゼフは全力で剣を振っているにも関わらず、エンシエ

ントはただ触れるだけで全て逸らして躲している。

ガゼフの剣技が鈍いわけではない。一撃目から全力で、二撃目に至っては切り返しての勢いの付いた鋭い剣戟だ。それですらも触れるだけで流しきる技量はまさに神業としかいえない。

「どうした？ 王国最強の剣……。王国を守る剣はそんなものかっ！」

エンシエントの挑発の言葉に、周囲の兵士がざわめきだして、ガゼフは奥歯を噛み締める。

「ぐう！ 返す言葉もないな。ならば、今の俺が持つ本気の剣を見ていただくっ！」

エンシエントは軽く飛ぶだけで、先程と同じだけの間合いを空ける。

「見せてみる。お前は戦士か。狗か？」

「俺は王国の剣、王の盾……。戦気梱封、戦鬼の肉体、竜王の精神、精霊の祝福。おとおお

おとおおおお！」

ガゼフは普段は殆ど使うことの無い本気の武技を発動する。戦鬼の肉体は肉体を潜在レベルで強化して、竜王の精神で何事にも動じない、不動の精神を手にいれる。精霊の祝福は魔法抵抗力を極限まで高めてくれる。

そして、これほどの強化を施さねば、これから放つ武技には耐えられはしないのだ。

「おとおおおおっ！ 武技いい、戦神の雷槌いい！」

雷という現象がある。古来より雷とは神鳴りと呼ばれ、神の咆哮、神が天を鳴らしている、と言われていた。

その一撃は唯の一撃ではなかった。刃が音を置き去りにして、まるで雷が地に落ちたような破裂音を鳴らし、空気を引き裂いて振り下ろされた。

常人では目に映すことも出来ぬ一撃、ガゼフが今出せる全力の一撃である。

だが……

「……足りないな……」

目にも留まらぬ攻撃を振るいながら、ガゼフは刹那にその言葉を確かに聞いた。

振り下ろされる先にエンシエントは無防備に立つ。

(ぐうっ！…このままではっ！)

しかし、その刃はエンシエントに届く事はなかった。

当たると思われた寸前に、エンシエントは片手を上げて受け止めていたのだ。

次の瞬間には、背中の戦斧が抜き放たれて、ガゼフの首筋に押し当てられていた。

しかし、ガゼフが握る剣もまたエンシエントの首筋に押し当てられて止まっている。

この攻防の全ては刹那の事であり、周囲の兵士には戦士長が剣を振るい、気がつけば刃を突きつけあっている姿しか確認することは出来まい。

「流星は王国戦士長殿だ。俺と相打ちとはな」

「……これは……エンシエント殿、一体何を？」

ガゼフとしては意味がわからない。防がれたと思った時には、自分の首筋に戦斧が押し当てられて、自身の防がれた剣はいつのまにかエンシエントの首筋で止まっている。

エンシエントの戦斧が首筋に押し当てられた瞬間も気付けなければ、抜き放った瞬間ですら見る事も出来なかったのだ。

「おお……流石は我らが戦士長殿だっ！」

兵士達が口々に戦士長を讃えながら近付いてくるのを一瞥し、エンシエントは戦斧を背に仕舞った。

「では、俺はこれで失礼する。今日は良い一日を過ごせたことを感謝しよう」

エンシエントは未だに何が何やらわからずに呆然とするガゼフに向かって軽く頭を下げると、踵を返して背を向けて訓練場の出口へと向かった。

ブレインはそんなエンシエントの後を追う。

「待ってくれっ！ エンシエントさん」

「何だ？ ブレイン殿」

出口付近で足を止めたエンシエントは、ゆっくりと振り返る

その顔には明確な落胆と瞳の奥には微かな寂しさが浮かんでいた。

「あ……いや、あの立ち会いは……」

エンシエントは首を小さく振ってそれ以上の言葉を止めさせる。

「彼は王国戦士長であったというだけだ。あれは立ち会いではなく、単なる試合でしかない」

それだけを呟くように残すと、エンシエントは再びブレインに背を向けて訓練所を後にした。そして振り返ることもなく去るのであった。

それから少しして、団員達も既に各々の任務や訓練に戻った訓練場に、ガゼフは地面に剣を突き立てドカリと座り込んでいた。

その眉間には深い皺が刻まれている。見る者が見ればその姿に芸術性すら見出したかもしれない。題名はきつと『苦悩する戦士』であろう。

それほどに剥き出しの地面に座るガゼフの雰囲気は重いものだ。

近寄りが見たい雰囲気醸し出すガゼフに、察してなお近寄る影があった。

ブレイン・アングラウスである。

「ガゼフ……一体何があつたんだ……？」

「……わからん……。俺は何かとんでもない失礼をしたのだろうか？」

ブレインは何が起きているのか理解できずに、あの時に相対していたガゼフに問い掛

ける。

しかし、当の本人ですら何が起こったのか理解できないでいたのだ。ガゼフにしてみれば完全に己の負けであった。

戦斧が抜かれるまでもなく。エンシエントはガゼフが出せる最大最強の一撃を片手で防いで見せたのだ。

あの時の一言が頭から離れない。

——…足りないな……

勘違いかとも思ったが、その声はとても無機質なもので、とても寂しいものに感じられたのだ。

「あの男は去り際にこう言っていた。お前は戦士長であったと。それとこれは立ち会いじゃなく試合でしかないとな。思い当たることがあるか？」

ブレインはエンシエントから聞いた去り際の言葉をそのままに伝えた。

その言葉を聞いたガゼフは、暫くは地面を睨み付けるように黙っていたが不意に顔を上げた。

「俺は……あの人を侮ってしまったのか……」

「なんだ？ 何かわかったか？」

あの時、ガゼフはエンシエントの頭に吸い込まれるように振り下ろされる自身の剣

に、不意に力を抜いた。

このままでは殺してしまうと思っただのだ。それは常より自分よりも弱者を相手にしてきた故のこと、ここぞと言う所で怪我をさせないようにと気を使ってしまうのだ。

「……何という失礼を働いたのだ……俺は……」

「何を考えているかわからんが、そこまで気にする事はないと思うぞ。あの人はお前の立場を理解した上で、試合と言っただのだ。命のやり取りではなく、力を試す試合だとな」
「だが……その上で失望させた事には違いあるまい……事実、俺は命のやり取りという意識はなかった。寧ろ胸を借りるつもりであった。ブレイン、お前はどうか？」

「俺は……そうだな。お前に誤魔化したところかどうかどうしようもないな。素直に言うとか殺すつもりで斬り掛かった……そうでもない俺があつた男に勝てる目は……。いや、これは言い訳だな。正直に言うとか殺すだの生きるだのすらどうでもいいと感じたよ。ただ、あの男に俺の全てをぶつけない。その上でどこまで通じるか試したいという認めさせたいという気持ちしかなかった……」

ブレインはそう言いながら気恥ずかしげに、頬を掻いた。

ようは子供のようになつたと言っているのだ。

その言葉を聞いて、ガゼフは微かに頭を上げてブレインを見つめると、喉奥でくつくと笑い声を上げた。

ガゼフはブレインの言葉を聞いて、素直に羨ましいと思ったのだ。

どこまでも真つ直ぐで嘘のないこの男が羨ましいと感じてしまった。

ガゼフはどうしても死に際の事を考えてしまう。

死を恐れるのではない。死を受け入れたうえで死に場所は王を守って、国のためでないといけないと思ってしまうのだ。

その結果、自分の命であるはずのものは、即ち王国戦士長の命であったのだ。

(ああ、なるほど……俺はもう王国戦士長ではないのだな……)

エンシエントはそれを見抜いた上で、国のためではない命のやり取りを忌避したガゼフに、落胆したのだと理解することができた。

「やれやれ……肩書きというものがまた一つ重くなってしまったな」

「お前が望んだことだろうに……お前は忠義を選んだのだろうか？　ならば、お前は生涯

王国戦士長であるべきだ」

「ブレインまで酷いことを言う……。少し付き合え。今だけは自分を鍛え直したい気分なんだ」

「せっかく頂いた刀の最初の使い道がお前の憂さ晴らしとはな。泣けてくるぜ。だがまあ、お前にも刀を折られた借りを返さねえとな！」

その日は遅くまで訓練場で、剣戟の音が鳴り響いていたという。

ラナー王女は紅茶を飲みながら歓談に興じるフリをする。フリと言っても別に生返事をしているわけではない。

きちんと話を聞いた上で、相手の話に興味を示したり、振られた話題に対してきちんと返事をする。

「それでそのエンシエントさんがギガントバジリスクを討伐して事無きを得たのよ」

まるで自分の事のように嬉しげに語るラクユースに対して、胸の前で手を合わせて燥はしゃぐ少女は、見た目だけならば天使のような女性だ。

「まあ、凄いのね！ その冒険者の方は。……それでも村に被害が出たのでしょ……？ 大半の村人は避難していたといつても、中には家族を失った方もいらつしやるでしょうし……」

最初に楽しげに声を上げはしたが、不意に胸が痛むとばかりに、テーブルに置かれた

紅茶に視線を落として目を伏せる。

蒼の薔薇のラキユース。ラナーにとって唯一の友達にして、唯一の自由に使う事の出来る駒だ。

「ラナー様……」

そんな悲しむ演技をするラナーの直ぐ傍に立つ、まだ年若い見習い騎士という出で立ちの少年が心配そうに声を掛ける。

「大丈夫よ。クライム。私はただもう少し私に力があつて、街道の巡回を御父様に強く言えていればと思つちやつて……駄目な主でごめんなさいね？」

「駄目な主だなどどっ！ 私にとつてラナー様はお優しく素晴らしい主とっています！」

心配する近習の若騎士に、儂げに自嘲の笑みを零す美しき姫君。まるで英雄譚に出てきそうな一場面だ。

だが、こんな時ですらラナー・ティエル・シャルドロン・ライル・ヴァイセルフ。リ・エステイーゼ王国第三王女は決して思考を止めない。

止められないと言うべきか。

ラナーは生まれた時から異形であつた。

人が何を考え、どう口にするのか？ そこにどんな意図が含まれてドス黒い野望や欲

望が隠されているのか。

それらが生まれた時から理解できてしまっていた。一般において多重並列思考マルチタスクと呼ばれるものである。

一般のそれは言葉通りに並列して思考しているわけではない。

素早く交互の思考切り替えを行うことにより、複数の思考をしている様に感じるだけだ。

だが、ラナーは違った。言葉通りの意味、複数の思考を連続して同時に処理することができた。

教師に教えを請えば三日で教師を超えた。文学、算学、音楽、礼法、法律、歴史。そのどれもが三日後には教えていない所まで理解してしまっていた。

それは教科の製作者がもつ趣味嗜好や規則性を掴み。次はこうなると簡単に予測してしまっているからだ。

意地悪な法律の教師は、本当に理解しているか聞いてみたことがあった。

しかし、ラナーは国内法から貴族院の法、帝国法まで諳んじてみせた上に、画期的な法の改正案すら出してみせた。

もちろん、その画期的な法は教師の保身から握り潰されてしまったが。

その驚異的な頭脳があればこそ、王国の未来も人の下らなさも、全て理解出来てしま

う。

……ラナーはそれらを僅か五歳迄の間に理解してしまったのである。

この人の生の無意味さに……。それからラナーは生きる為の活動を止めた。明日を生きる為に食事をする無意味さ。自分を理解できぬ人と会話する無意味さ。誰かのために思考する事の無意味さ。

それでも思考は止まらない。止まってはくれない。

ラナーは生きる事を止めた。何もなければ一ヶ月足らずで緩やかな死を得られていてだろう。

親を失い薄汚い路地にて無感情に存在していたクライムという糧がなければ。

クライムの無垢な瞳に映る自分。思考を止めてしまったクライムの中にいる自分。それらを見つけないければ、ここにこうして生きてはいない。

故にクライムはラナーにとって生きる全てであり、ラナーはクライムにとって生きる全てとなった。

だからこそ、今日も演じる。クライムが欲するラナー王女という存在を……。黄金のラナーを演じ続ける。

「それにしても、そのエンシエント様という方はどれぐらい凄い方なのですか？」

冒険者のことに関しては興味はあれども無知なクライムは、エンシエントの凄さが解

らずに素直に聞いてみる。

「そうね。伝説の十三英雄に近い……いいえ、匹敵するんじゃないかしら？」

「それほどなのですかっ!？」

「それはそうよ。持ち帰ってきた証明部位を見せてもらったけれども、普通のギガントバジリスクよりも遥かに大きく二倍以上はあったわ。私もそれがギガントバジリスクじゃなくドラゴンの瞳ではないかと疑ったほどだもの」

「でも、蒼の薔薇の皆さんでも倒す事が出来るんですよね？」

クライムが知る最強の冒険者は蒼の薔薇のパーティーだと信じた上での事だ。

この方達でも同じ事が出来るだろうと思っている。

「蒼の薔薇の皆でなら可能よ。と言いたいけれども厳しいわ。だって、異常個体だけでも手に余るのに、それが一体だけでなく普通サイズのギガントバジリスクとの群れだったんですもの……」

エンシエントが帰還してから既に五日経っている。

証明部位は一对だけであつたが、現場を確認するために急遽オリハルコンのチームが調査に派遣された。

主に調査をメインとする盗賊、シーフ野伏と森司祭に魔法詠唱者で構成されているパーティーだ。モンスターの調査にはラキユースも信用を置いているチームだ。

そのチームが持ち帰った情報は驚くべきものであった。

足跡から推定されたのは情報通り二十メートル超えのギガントバジリスクが一体、それと通常ギガントバジリスク二体の存在。

現場には至る所にクレーターが出来上がり、森林の木々はなぎ倒されて、刃の跡が至る所に付いていたそうさ。

「その方は新たなアダマンタイト級の冒険者になられたのでしょうか？」

「流石はラナーね。耳が早いわ」

「メイドが騒いでいたわ。なんでも凄く整った顔立ちで、紅い鎧と合わせて真紅の貴公子とか言っていたわね」

ラナーは可愛らしく顎に手を当てて思い出すように、視線を宙に彷徨わせる。

しかし、思考は全く別の方向へと向いていた。

ラナーに取ってクライム以外の人間は二種類に分けられる。

敵か味方かではない。利用出来るか出来ないか。全てはそこに集約される。

利用出来るとなれば、相手に対して友にも愛される王女でも演じてみせる。だが、利用出来ない障害だと判断したならばありとあらゆる手段を以て潰しにゆくだろう。

たとえばそれが血を分けた親兄妹、友達と思ってくれているラクユースが相手であろうともだ。

「真紅の貴公子ですか……。一度見てみたいです！」

「そうね。赤い鎧もいいけれども、私が一番好きなのは純白の鎧を着た騎士様よ？　ク
ライム……」

「ら……。ラナー様……。それは一体……」

潤んだ瞳を純白の騎士鎧を纏ったクライムへと向けて、はにかむ様にして微笑んだ。

見つめ合う二人に向けて、席を同じくするラキュースはまた始まったと嘆息をして紅茶を口にする。

この主従のこんな甘いやり取りは今に始まったことではない。放っておけばいつまでも桃色の空間が広がっていることだろう。

だからこそ、ラキュースは話題を変えた。本題はこつちではなく別の件なのだ。

「はいはい。二人の甘い青春はあとにして頂戴な。ラナーを少しだけ借りるわよ。ク
ライム」

「あ……。甘い青春などっつ！」

「も……。もう！　ラキュースったら、そうね。また二人つきの時に……。ね？」

「ラナー様までっ！」

ラキュースのからかいにラナーは一瞬だけだが目に剣呑な光を浮かべて即座に消し去り、いつもの友人に向ける笑顔を浮かべる。

クライムはそんなラナーの様子には毛の先ほども気付かず、ラキユースの冷やかしたにただ慌てるばかりだ。

「それでね。八本指の事なのだけれども、どうも様子がおかしいのよ。数日前に裏の娼館が何者かに潰されてから、全く動きがなくなつたわ。黒粉ライラですら売買が見えなくなつた」

「ええ、それは私も以前にラキユースから聞いて考えてみたのだけれども、私の推測でよければ……」

「ラナーの推測ほど正しいものはないから聞かせて貰えるかしら？」

ラキユースは心から信頼する友達の言葉を姿勢を正して聴く体勢を取る。

ラナーは考え事を纏めるように思案顔で、白魚のような嫺やかな指先を顎に当ててから言葉にする。

「その拠点には争つた跡は殆どなかったのよね？」

「ええ。まるで人間だけが姿を消したみたい、中に囚われているはずの女性達も消えていたそうよ」

ラキユースはティアとティナが調べた事を纏めた物をラナーへと差し出す。

「ふうーん。中に血の跡は殆ど無く、外にある血痕の方が多め。周囲の人は呻き声を微かに聞いたけども悲鳴はなし。これらのことから突発的な事だと思わ。計画的では

ないと思う」

「それは……どうして?」

「外の血痕が多く残っているのは突発的に不測の何かが起こった。だから、外に多くの血痕が残ってる。そしてこれを行った人は相当な自信を持っているわね。上位権力を持つか、もしくは権力ですら意に介さない何かを持つ。……それはこの血痕が隠滅されていないことからわかる」

無意識にラナーは椅子から立ち上がると、ティアとティナの調査書類を手に、こつりこつりと足音を鳴らしながら考え込み始める。

「八本指の組織を狙ったものには無い。即ち八本指の事を知らない最近この王都へとやってきた人物。最初の事件は入口で起きた。その後で中が襲撃されている。行動は突発的に情動的……そうね」

「なにかわかったのかしら?」

「いくつかの推理は成り立つわ。まず、間違いなく八本指が地下に潜ったのはこの娼館が発端ね。そしてこの娼館を襲ったのは、恐らく……正義の味方かしら?」

「ほえっ? 正義の味方?」

ラナーの口から飛び出た単語に、ラキュースは困惑を隠せずに素つ頓狂な声を上げる。

普段見せたことのないそんな顔に、ラナーはクスクスと笑みを浮かべる。

「恐らくは偶々……そう、偶々そこをその正義の味方が通りかかった。そこで何かを見たか聞いた。廃棄される女性か。もつと酷いなかか？ それが許せず^{マジックキャスト}にこの襲撃となった。恐らくは少なくとも二人から五人の少数。一人は魔法詠唱者は確実ね。それと王都の法にも明るくない」

「そこまでわかるものなの!？」

「ええ、この報告書からはそうとしか読み取れないもの……。それからその行動が法に触れるか否かを考えずに、自身の正義のような損得を抜いた気分的に動いてる」

「だから……正義の味方……なのね」

（そう……正義の味方……だからこそ、妙薬にも劇毒にもなりかねない……どうにか先に見つけられないかしら……）

内心でそう計算する。損得抜きで動くという事は抜いづらい事この上ないが、上手く使えば有能な味方になってくれるということだ。

ラナーは心の内で考えながら、紅茶で濡れた唇を舌で舐める。

正義とは物事の一面性でしかない。スレイン法国のように未来の大局の為に、罪もない亜人を殺す正義もあれば、皇帝の様に無能を血で廃して、国民に笑顔を取り戻させる正義もある。

それらは犠牲になる側からしてみれば悪でしかない。

ラナーはだからこそ大義さえ与えてやればいいと考えている。

逆に、ラキユースは英雄に憧れはしても現実を知っている。

犠牲を出さずに全ての人に幸福と笑顔を齎せるとは夢にも思っていない。

それでも……もし、他に……と考えると、その手の正義を為すのは二の足を踏んでしまう。

故に極端な行動を取らせにくいのだ……例えば邪魔な貴族を消させるといった法を考えない行動等である。

だが、ラナーとしてもラキユースはまだ利用価値が多くある。故に……

「ラキユースも身の回りに気をつけて頂戴ね」

「どういう意味かしら？」

「恐らくだけでも今の八本指の静けさは嵐の前触れのような気がするの。八本指がここまで大きな被害を受けたのは初めてのことでしょう？ 彼等としては何としても犯人を探し出そうとするはず……その中にはきつと……」

ラナーはそう言ってから心配そうに友達の顔を見つめる。

その瞳がわかるでしょうと言っている気がする。

「安心して、これでも私はアダマンタイト級冒険者、蒼の薔薇のラキユースなんだから、

八本指が相手でも勝って見せるわ。でも、心配してくれてありがとう！」

「そんな……お礼なんて止めて頂戴……私はここで心配する事位しか出来ないのだから……」

小さく溜息をつきながら憂い顔をみせて、卑下するように首をゆるゆると振った。

「ラナー様……大丈夫ですよ。ラクユース様を始め、蒼の薔薇の皆様は素晴らしい腕の冒険者様なのですから！」

「ああ、私のクライム。私が頼れるのはラクユース達と貴方だけよ……」

また始まった主従が行う愛の劇場に、ラクユースは砂糖は入れていないはずなのに、酷く甘く感じる紅茶に胸焼けをする思いであった。

流石のラナーも、ラクユースも思いもしなかった。

今まさに王宮からかなり離れた戦士団の訓練場では当のエンシエントと戦士長達が立ち会いを行っていた事を、そしていつもの日課にクライムが行っていれば、真紅の英雄と出会っていた事を……